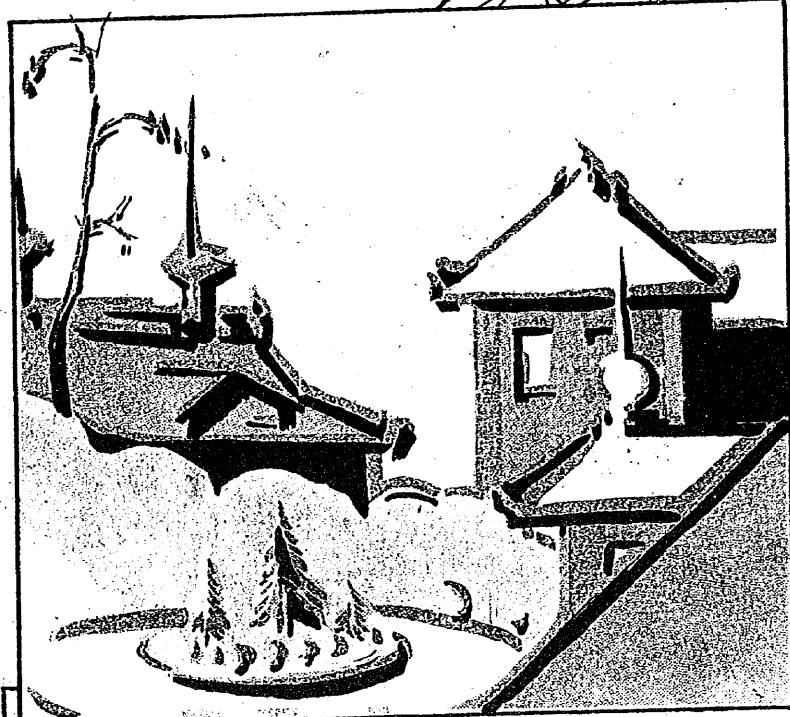


我等

2594



KMS

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

L276.6
廿

御親閱記念號

我等

第四號

埼玉縣立熊谷中學校友會

様 37. 5. 27

1478
熊谷中学校
金二五〇〇円
我等二三四号
三册
橋本書店
千代田区神田神保町325
電話 265 -- 3837

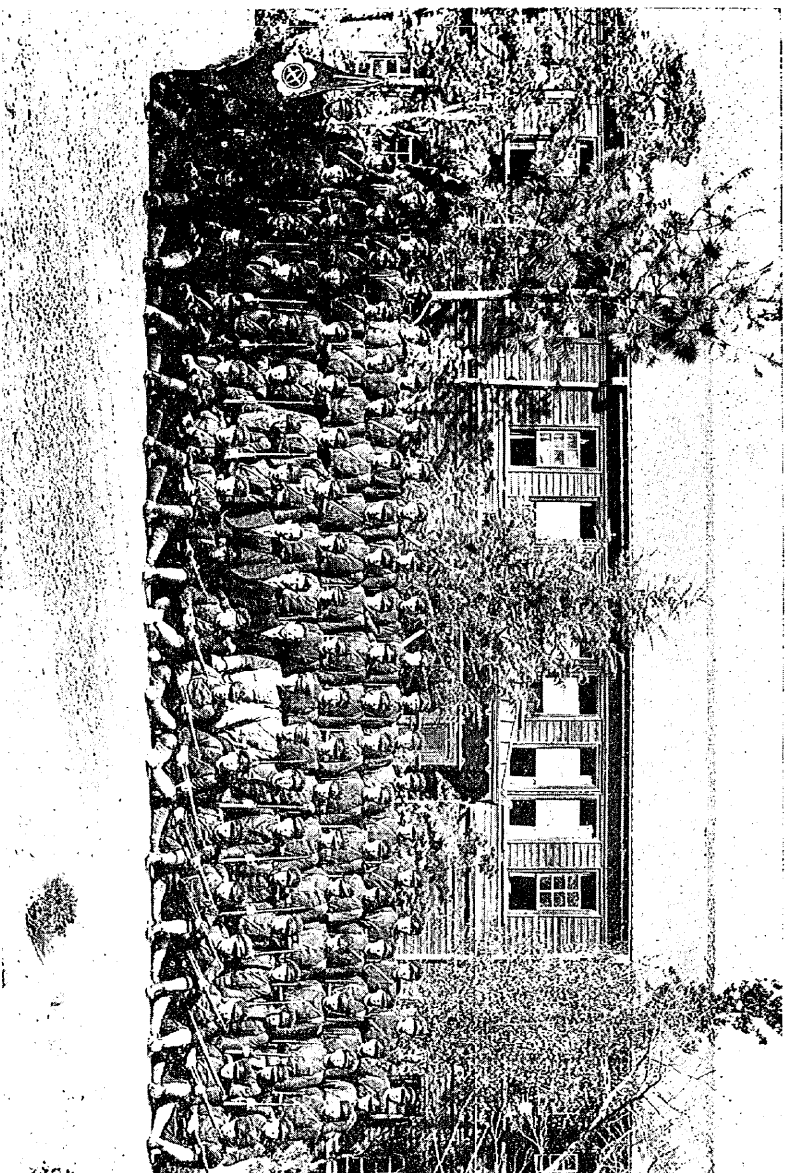


我等第四號目次（昭和九年度）

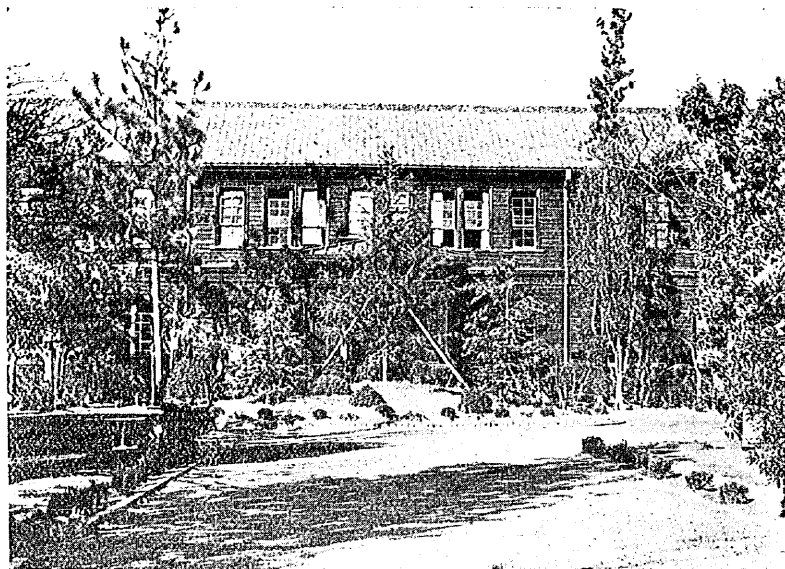
御親閲・奉送迎について	岡田嘉一	一
御親閲を仰ぎて	岡田嘉一	二
御親閲・奉送迎記事	岡田嘉一	四
車廻竣工式	川邊岩太郎	六
土岐先生謝恩會記事	淺見利雄	六
滿鮮北支視察旅行（講演）	岡田嘉一	二六
記念出版の理論	大和久伊平	二六
帝美だより	長谷川宏	四〇
文藝		四〇
短文・短歌・俳句・詩・短篇		四〇
校報		二八
學校記事・職員現住所調・昭和九年度上級學校入學者		二八
部報		二六
圖書部・野球部・水泳部・蹴球部・籠球部・柔道部・庭球部・競技部・劍道部・收支決算報告		二六
行事		二六
兵營見學・野外宿泊・體育大會・登山・修學旅行		二六
編輯後記		二六



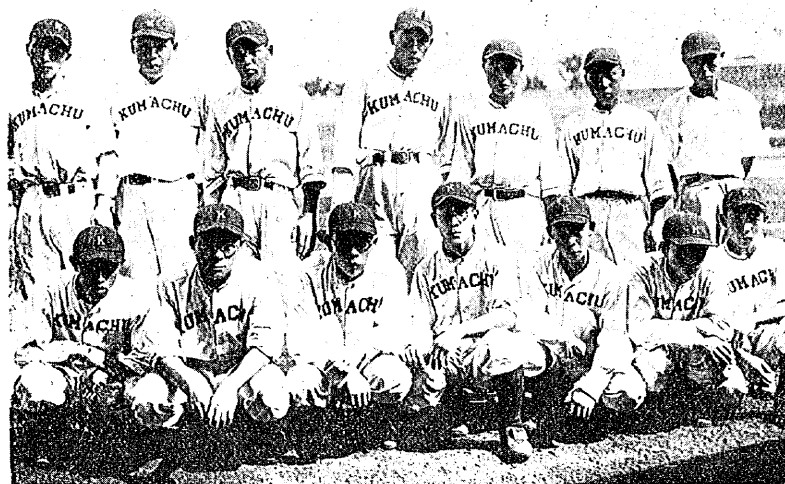
土岐先生



御 観 閱 拜 受 記 念



車 廂



部 球 野

昭和九年十一月十一日より同十三日まで、群馬・栃木・埼玉三縣にわたる地域に於て陸軍大演習は舉行された。

大元帥陛下におかせられては、前橋市群馬縣廳内の大本營に行幸、この大演習を御統監遊ばされ、さうして十四日の觀兵式には親しく御閱兵遊ばされた。

わが熊谷中學校職員生徒は、十一月十日及び同十八日、熊谷驛に於ける奉送迎に際しては、龍顔をまのあたり拜し奉るを得たと同時に、職員五名五年生九十二名は、十一月十七日、高崎市乗附練兵場に於て、群馬・埼玉・栃木・茨城・新潟・長野六縣にわたる御親閱拜受團體の一部隊として、御親閱を拜受すべく、十六日より十八日まで同地に天幕露營を行つた。一方、職員二名、御親閱をお受けしない残りの五年生三十五名も當日御親閱參列團體として高崎に赴いた。

又十一月十八日御還幸途上、縣下大宮の氷川神社御親拜の際は、四年生一同は職員四名と共にこの地に於て御迎へ申し上げた。尙當日浦和市の埼玉縣廳に行幸の砌、天覽に供すべく、我々からは、生徒の手になつた習字、圖畫、手工各々二品づゝを呈出したことも特筆されなければならない。これらの選ばれた生徒たちの氏名を記しておく。

習字	二年	石川喜重	一年	清水芳朗
圖畫	五年	堀口明	四年	輝元徳道
手工	五年	高橋輝長、飯野正也、川崎信仁	合作、四年	鶴田千壽

これら御親閱拜受、奉送迎に關する詳細な感激の記事は次に掲げる。

御親閱。奉送迎について

御親閲を仰ぎて

岡 田 嘉 一

昭和九年十一月十七日。本校としては實に第二回目の御親閲拜受の光榮に浴した榮譽此の上も無い日であります。

當日は誠に天氣晴朗で翠り濃き大空には一片の雲影さへ止めて居りません。午後二時三十分劇院たる喇叭の音に高崎乗附練兵場は瑞氣溢れて空氣は一層澄み渡つたやうに感じました。全員最敬禮の裡に 陛下は臨御しまして玉座に立たせられました。分列行進開始より奉唱終了に至るまで四十分微動だもあらせられません。「頭右」の號令で御前を通過する青年生徒學生に對しては一々舉手の禮を賜はりました。其の御仁慈深き大御心神々しき御姿。私は思はず胸が一杯になり涙は滂沱と

して頬に傳はつたのであります。

御親閲を拜受する教職員生徒學生の其の顔も一樣に涙に濡れて居るやう見受けられました。

此の涙。此の感激の涙。これこそ我々日本人が皇室に對して懷き奉る至情の發露であります。

日本精神と云ふ言葉は學者によつて色々の解釋がありませう。けれども其の中心をなす原理は唯一つであります。我々が 皇室の御榮を同時に我が國の繁榮であると信じて絶對無限の赤誠を皇室に捧ぐる純一無雜の精神と思ふのであります。

一旦緩急ある時に一死以て君國に盡す精神も平時に於て至誠職務に忠實なる精神も智徳を磨いて人格の完成に努力する精神も皆此の國民的信仰が根本であります。

五年生諸君は元より、全校一千の生徒諸君は或は熊谷驛に或は大宮町に 陛下を奉送迎申し上げて親しく龍顏を拜するの光榮を有したのであります。實に本年は本校全部の職員生徒の喜びの年であります。

我々は永遠に此の光榮を記念すると共に益々身心を鍊磨して御國の爲めに役立つ人となるやう心掛けねばなりません。

聖駕を迎へ奉りて

十一月十日、何とも言はれぬ、肌のひきしまるやうな風に心身とみに爽かになつた。一點の雲もなく、やがて登らんとする朝日に東天は紅になつてをる。實に快い朝だ。やがて赤城・秩父等の山々はくつきりと照し出されて爽快此の上もない。宜なるかな、今日ぞ 大元帥陛下、北關東に於ける特別大演習御統監の爲宮城を御進發あらせられ、大本營の前橋市へ向はせられ本縣熊谷驛を御通過遊ばされる日である。

登校の時踏切を通ると、踏切の遮斷機は塗替へられて色鮮やかだ。線路の砂利は清く掃かれて筋目も正しい。あゝ、この線路の上を畏くも一天萬乗の天子が通り遊ばされるのだ。あゝ、この砂利・この枕木・この鐵路に心あらば今日の光榮に感泣するであらう。

平常は「靴が汚ない」と先生から叱られたり、又仲間の者からは「奴が靴を磨いてくると天氣が變る」等と言はれてゐる者もちゃんと磨いて來てゐた。

午後一時頃熊谷驛につくともう構内は奉迎者で一杯であつた。フロックを着た人や紋服を着た人が行つたり來たりしてゐた。所定の位置について只管お召列車をお待ちしてゐた。生れて始

我等の胸は何と言つてよいか。たゞと目頭が熱くなつてあたりが霞んでくるのみだつた。

列車は徐々に進行して、はや 陛下は拜せられぬまでになつても、何だか何處までも慕ひ申したいやうな感に打たれて、汽關車の音もかすかになり行くも、その音に追ひすがるやうに耳をすませた。「直レ」の號令で初めて我に返つて頭を復した。最敬禮の號令がかゝつてから何秒か、つたか、何分たつたか、又何時間過ぎたか、少しもわからなかつた。時間も場所も全てを超越して日本人のみが持つ尊嚴の氣に打たれたのだつた。

萬國に冠たる我が日本の國に生れてこの 聖天子を戴く我等の幸福感をしみ／＼と感じた。同時にこの 聖天子の御命のまに／＼我等は一意専心大御心を體し、粉骨碎身只只勵むべきである。これ以外に 陛下の御恩の萬分の一でも御報ひ申し上げる法もないのだ。かうした心地が長く／＼そして今も私の心を支配してゐる。我等にとつては永久に心に刻みつけられてゐる尊き／＼十一月十日。(四丁、黒田健次)

設 營 隊

一、集合

四
めて拜するお召列車は、と胸もそぞろだ。聖駕奉迎の豫行演習を二時と御召列車の十五分前の指導車との二回行つた。いよ／＼あと十分。あと五分。何だか胸がわく／＼するやうな、これこそ本當に何とも言はれぬ氣持が一刻一刻と深きに深きを加へて行つてその最高潮に達した時「氣ヲ付ケ」の聲が凜として響く、や否や水を打つたやうにし／＼として、嚴肅さの流れがひた／＼と天をも地をも包んだ。「脱帽」の號令が響いた頃、御召列車の響きがゴーツと響いて來た。最敬禮をしてゐる時、何も外に考へる事はなかつた。全くの無心な心、純粹になりきつた心だつた。といふ事も其の時は考へないでゐたのだが「直レ」の聲に頭を上げて、向けると、御機關車の先に翻る日章旗が先づ目に入つて何とも言へぬ氣持になつた。指導車よりもつと立派な機關車の後に立派な客車が続いてゐた。それ等には黒い服を着た高官らしい人達が乗つてゐた。よくは分らなかつたが五輛目あたりだつたらうか、金色燦然たる御紋章の御召列車を拜しまつた。晩秋の日光に照りはえて、眩きばかり、何とも言へぬ莊嚴な氣が脈々と全身を駆けめぐる。あゝその時、あゝその時、畏れ多くも、一天萬乗の 聖天子、窓際近くお進みになり而も起立遊ばされ、而も我等草莽の民草の方を親しくお向きになつてをられるではないか。恭しく、御麗はしき龍顔を拜しまつて、自己の存在も何もかも「切わからなくなつた。

吾々熊中設營部隊は、一行五名吉野先生の引率の下に、初めて擔ふ背囊の肩を壓するも嬉しく、元氣一杯にて十一月十五日午前八時卅一分熊谷驛の下り列車にて高崎に向つた。

赤城、榛名を間近く仰ぐと間も無く「高崎イ／＼」の驛夫の呼ぶ聲に驚いて下車した。驛の構内は、客少く、極めて静かであつたが、明日、明後日の雜沓が思ひやられて、しみ／＼と廣い構内を見渡した。驛前に三四十分休憩した後、正十時に埼玉縣の學生の設營隊全部約卅名一緒になつて、二列縱隊となり、集合豫定地の片岡小學校へ向つたのであつた。

途中高崎十五聯隊内を縦斷したが、武動鏗々當聯隊の歴史を想ひ出して、古色蒼然たる兵舎に對し、思はず頭の下る思ひがした。營庭では明後日の郷軍御親閱の準備に忙殺されて居た。屹度聖駕の通らせ給ふ路であらう、一間幅位に長く營庭の眞中に向つて砂を敷いて居た。其の先の方では御座所となるらしい箱様の臺を作つて居、又左の土丘の蔭からは、君ヶ代の練習喇叭が嘹々として響いて居た。案内役に立つて居られた某校の教官の語る所に依ると、この營庭は以前の練兵場であつて、乗附練兵場は以前の實彈射擊場だつたといふ事である。

坂を下り烏川に掛る橋を渡つて乗附練兵場に出ると、ここでは吾々の御親閱の準備をして居た。左に片岡小學校が見えた。小春日和の薄曇りの日の光は軟かく練兵場に漲り、肩に喰ひ込

む背囊の重みに、一同じつとりと汗ばみ片岡小學校を目指して進む。

練兵場に隣接した田圃は皆野營地に充てられたらしく、「群馬縣第〇大隊第〇中隊野營地」と書かれた立札が、處々に見られた。片岡小學校に着いたのは約十一時頃であつたが、受附終了後直ちに、晝食とした。晝食中も野營用の釜や炭の運搬自動車は往來が頻りであつた。

正午に再び整列し、愈々野營地に向ふ。

二、作業

設營地は小學校前の田圃であつた、東側を通る道路は、高崎市より高崎市の南西に蒲團着て寝たる姿の觀音山にある、岩清水觀音に通づる道にして、本日より明朝に掛けてその祭禮なる由、善男善女が數多行き交ふてゐた。南側は桑原、石原の部落であつて、西はやはり田が續き埼玉の第二大隊等の野營地、北は道路を隔て、片岡小學校である。こゝにて背囊を下し銃と共に側の家の縁側に置いて貰ふ。給養、庶務、設營の三組に分れ給養は第一、第二炊事場へと去つた。第一炊事場は第一第二中隊の炊事場であつて、第二炊事場は第三第四中隊の炊事場である。次いで庶務數名も去り設營隊のみあとへ残つた。この間、晝食をして居た頃より冷い風を前觸れに、怪しくなつて來た空は遂に降り初めて了つてゐた。風も激しく冷たい。

設營隊の教官連は十人内外、盛に風雨中に議論して定まらなかつたが、約卅分にして、初めて繩を持って、と吾々に命じたので一同ホツとした。併しながら其後もなか／＼進捗せず議論する場合が多かつたので、吾々設營隊の一人欠伸して曰く、「軍人は頭で物事を考へず、口で考へる氣になつてゐる。」と。

斯くして漸く、三時半には敷地區分が終り各中隊毎の作業に移る事が出來た。吾々は第三中隊で熊農の竹谷大尉の指揮の下に、熊中の三名、崎商川工の各一名、計五名の作業兵で行つた吾中隊は幕舎は二列に作り、第一列に四舎、第二列に三舎の豫定であつたが、地形の關係上、第一列に三舎、第二列に四舎とするの餘儀無きに至つた。而して區分作業は比較的速かに終つたが、次いで天幕、竹束、炭等の運搬をした。これは非常に骨の折れる勞働であつた。約二時間にして、どうやら終つた時は既に一同綿の如く疲れて居た。

時に五時半、既にあたりに夕暗濃く、風雨止んで居た故稍寒さは穩かとなつてゐたが、依然として寒い事は變りはなかつた次いで今晚から明朝に掛けての不寝番の時間割が發表された。大體に於て第一炊事場の者が早く、第二炊事場の者が遅く立つやうであつた。

三、作業終りて

設營隊、第一日の作業を全く終つて今晚の宿を、屋根の下、

疊の上に與へられたのをせめてもの慰めに、綿の如く疲れし身體に、肩を嚙む背囊を擔つて、第二炊事場へ向つたのは、最早夕暗立こめて、祭禮の夜の灯がはつきりと、美はしく並んで見える頃であつた。第二炊事場、それは中農と見らるゝ農家であつて、子供が澤山居たが、割合に靜かな家だつた。

二ツ三ツ出された火鉢を、三四人で圍んで、家から持參の辨當を食べた。冷い辨當は、身を心から冷え切らせて了ふ。

岩清水觀音が祭禮故、特に六時半より八時半迄の自由行動を許された。一同夜食に元氣づいてか、三々五々して參詣に出で第二炊事場は七時迄には殆ど出拂つて了つた、吾々五名も他校の者二名と共に、岩清水觀音に參詣した。人出は相當であつたが、地元の參詣人の得意氣に語る所に依ると、「これでも今年は少いんですよ、大演習があつたからでせう。でも、もつと遅くなれば、まだまだ人は出ますよ。この祭は夜通しですからね。」との事であつた。兎に角階段の多いのには驚いた。何百段、何千段だか分らぬ。それから觀音山上に近頃建立された忠靈塔の傍より見渡した、高崎市の夜景、光の海は特に印象を深くした。山を下りて參道の兩側に並ぶ夜店をひやかし、高崎市街の一部を散歩し、炊事場に歸り着いたのは、八時廿分であつた。八時卅分には全部揃ひ、皆就寝の仕度をして居た。

四、不寝番

支給された夜具は、掛蒲團だか、敷蒲團だか分らぬ様なのが二人につき一枚づつ。一同これが反對に一人につき二枚づつならばなあ、と苦笑し合ふ。併し九時迄には殆ど皆顔の上に帽子を載せて、電燈の光を避けて横になつて了つた。六疊と八疊の間へゴロ寝だ。僕も二時半から三時不寝番に立たねばならぬので、腰塚と一つの蒲團に寝る。風がスー／＼入つて來るやうでゾク／＼寒い。連も眠れさうにも思へぬ。それに知らぬ土地へ來、知らぬ人達と寝るので神経が昂ぶつてか、ちつとも睡氣が出ぬ。それに僕の頭の上に火燵があつて、そこにこの家の婆さんが暖まりながら、ちつとも靜かにしてゐる事が無いので、ガタゴトと五月蠅くて仕様が無い。茶を飲む音迄がいやに耳を衝く、眠れぬ儘に神経がイラ／＼して來る。又寒さの爲にも却て寝てゐるのが苦痛だ……。

それでも何時の間にか眼蓋が重くなつて來た。十一時の柱時計を聞いて眠らうとあせる。どうしても眠れぬ。熊谷の事、實家の事があれこれと頭に浮ぶ。所で、明日皆がやつて來る、と思ふと堪らなく明日が待遠しい。今頃は皆は……。

「次の不寝番交替だぞ！」

不寝番の呼聲に忽ち瞑想を破られる。幾時だらう？時計を見ると十二時一寸前だ。「次の不寝番誰ですか？交替ですよ。」不寝番は再び言ふ。多くの者は起き上つて、顔を見合はせ、誰々ぢ

や無い、誰々ぢやないか、と騒ぐ誰だかさつぱり分らぬ。(アツ！さうだ、風間だ、屹度)ふとさう思ひ付いた僕は、奥の間の八畳へ聲を掛ける。「おい、風間ぢやないか、十二時からだぜ」「ウー、俺かア！風間が睡さうな聲で返事した。彼奴眠つて居たのだな。ふと羨望的な感情になる。起きて武裝してゐるらしい。今一人誰か分つたら、直ぐ来るやうに言つて下さい。」

去る。風間も縁側の方から出たらしい。皆再び横になる。

(風間は一人でこの寒いのに、あの廣い原の真中で不寝番せねばならぬのか。辛からうな……相手は誰だらう。酷い奴だ……。さうだ、僕と一緒に立つてやらうかな。どうせこゝに寝たつて眠れないんだ。同じ事だから立つてやらう。さう思つて僕は起き出して武裝した。「風間と一緒に不寝番に立つんだ、どうせ眠れないから。」と言ふと、腰塚の向ふから細田が「さうか、御苦勞だなあ。」と言ふ。銃を持たずに「ぢや行つて来るぜ。」と言つて外へ出る。やはり外の方が寒さが身に滲みる。併し繕やかな晩だ。靴音が馬鹿に響く。本通りは未だ人通りは相當ある。勿論夜店も出て居た。本通りから田圃道へ入り、不寝小屋の提灯を目當に行く。側に懐中電燈が動いてゐる。風間だらう。近づいて聲を掛けたら「誰だッ淺見かア……。」と風間の聲だ。「一人だと思つて應援に来たんだ。」と言ひながら、天幕の中を見ると、誰か寝てゐるらしい。「何だ、誰か居るんぢやないか。」と言

ふと「うん、第一炊事場の者なんだ。第一炊事場の方は相當待遇が酷いらしいぜ。皆、不平満々なんだから。」フフ……と笑ふ相當、不平を言つたらしい。天幕の中には炭火がカン／＼熾してゐる。それに毛布や藁で成程暖かさうだ。

左の隅に寝て居た者が、起き上つて僕を見て「不寝番なんですか?。」といふ。「え、風間の相手が分らなかつたものですか?。」さうですか……そこに何かありますから食べませんか。火の側の簾の上に成程紙の袋があつた。「有難う、でも一寸廻つて来ませう。」と言つて天幕を出る。風間と二人で約百米も離れた處にある俵の巡察をする。晝間の儘で一向異常が無いので引返す。本道を通る参詣人の影は未だ絶えない。確かもう零時半だらう。若者五六人流行歌を放歌しつゝ、通る。にぎやかだ。

風間は次の不寝番を呼びに去る。卅分交代だ。僕は次の不寝番が来るのを待つて、炊事場へなどは歸らずに、天幕の中に入つて横になる。

五、天幕の團欒

併し、結局は眠れず一同起き出し、炭火の周圍に集まつて、あとから来た不寝番等も仲間入りして座談會となつて了つた。埼玉縣の多くの中等學校を網羅して居たので、話題はそれからそれへと移つて盡きず、苦笑、哄笑、爆笑、相繼ぎ、なごやかな團欒の中に時の経つのも忘れ、氣がついた時は、既に四時を

過ぎて居た斯くして設營隊の一夜は朗らかに、明けて了つた。

六、本隊来る

六時前に食事終つた吾々は、再び六時半には昨日の作業場へ集合した。今日は本隊が来るといふので一同元氣附いた。各中隊毎に、天幕、竹、樽、バケツ、其他の配分、運搬、それが終つて今度は便所の穴掘りだ、深さ八十糎にはなか／＼掘れぬ。巾狭く、深くといふ條件である。併し、この仕事、半ばにして本隊の野營地に入り來れるを見る事が出來た。何だか世が明けたやうな氣持だつた。(五乙、淺見利雄)

野營及び御親閲の記

あゝ、待ちに待つた御親閲は愈々明後日十七日となつたのだ。この日まで我々は準備に準備を重ね、二度も豫行演習を行つて、充分に自信を持ち、用意萬端整へて學校から歸つた。あくれば十六日、朝の霜風もなんのその、學校に七時までに集合し、武裝と／＼のへ、先生方に送られて、意氣揚々と我が校門をあとにした。

熊谷驛發八時四十六分の汽車にゆられる事五十三分、我々は校旗を先頭に高崎停車場に着く。獅子吼ゆる驛前歡迎門をくぐ

り徒歩にて片岡小學校に着き、ここに整列、目的地たる高崎市南方我々野營地に向ふ。

あゝ、何と壯觀ではないか。廣々とした田圃には既に何十組の天幕は張り渡され、今夜及び明晩野營の準備である。

ここで埼玉縣中等學生の野營編制を受け、我々熊中生は、第三中隊として指定された野營地に向ふ。既に來てゐた設營隊の者や又先生の指揮を受けて三組に分れ幕舎構築である。午前十一時頃に食事をなし、午後四時頃までには完全に終る。

天幕は二十四枚を一組として、編み合せてこしらへ、この中に藁を敷き俵を並べて寝るのださうである。そして中央に三四所の火鉢を拵へて、炭を起せるやうにした。

午後四時、縣本部長より、野營及び明日の御親閲に關して注意があり、午後五時夕食である。だん／＼夕闇の迫る頃、我等の中隊長石井大尉から野營上の注意があり各テントに入る。これより以前に近衛師團の森少將閣下が御出でになり、野營地視察をなす。又朝香宮殿下が野營地視察に御出でになられた。

かくして夜が迫つて來るにつれて愈々寒くなつて來る。天幕の中には炭を起して暖かくして置く。言ひ忘れたが、熊中生は七十二人が第一第二幕舎に入り、殘部の者が熊農の方へ加はつたのであつた。

午後六時、片岡小學校庭に於て戸山學校軍樂隊の奏樂の軍樂

の夕が催されたので、各學校別になつて聴きに行く。これも終り暮合に歸り午後九時日夕點呼があり、以後は不寝番の骨折により安心して寝に就く。

明くれば十七日、午前六時起床ラツパが勢よく響きここに我々はね起きて洗面を行ふべく、一小隊揃つて、約一千米位の所に在る烏川に向つて駐足である。寒いのを我慢して行けば、せなかは汗ばんであたたかくなる。ここで顔を洗ふのか？我々はなさけなく思つたが仕方がない。それ程橋の下の手前側は清潔ではなかつた。ここで洗面して、再び我々は駆け足だ。

歸れば國旗掲揚式である。練兵場に向つて君が代二唱、最敬礼を行ふ。練兵場高く朝日に匂ふ日章旗は翻翻とひるがへる。

あゝ見よ、今日の御親閲を祝福するのだ。赤城風榛名嵐の常ださうであるこの地は、今日一陣の雲もなく、そよ風さへない日本晴である。唯メーンマスト高くそびゆる日章旗がひるがへるのみ。それは赤き日の丸を遠方の人にも拜ませるやう動いて居るのであらう。

午前八時頃までには仕度も終り、今日の晝食榮養パンの配給を受け、一同又銃線に整列し、後縣下中等學生は一所へと集合す。ここで各々御親閲隊の編制を行ひ、左より四列づゝ別れて練兵場へと向ふ。見よ埼玉縣青年の意氣を。延々長蛇の如き我が埼玉縣青年は意氣揚々と霜どけ道を行く。

九時頃までには廣々とした練兵場に到着した。待ちに待つた御親閲は今日なのだ。「萬歳！」かうさけびたくて仕方がない。背囊に缺點はないか、服裝は正しいか、こみはついてゐないか練兵場に整列した我々はここで暫らく休憩。

十時過ぎだつたであらうか、かうしてゐる間に拜受者は悉く集り軍樂隊の行進曲に合はせて豫行を行つた。我々が學校で練習した時と比較すると格段の差であつた。全くかく立派に出来るのは實に我々が日本人であり、ここに大和魂があるからである。僕等はいかう考へて、午後行はれる御親閲こそは全力を盡して實行しようと思つたのであつた。豫行が終り、晝食をすまし、しばらくして各集團はもとの位置に整列する。

午後二時十六分頃だつた思はれる。高崎の空を振はせる轟然たる煙火の音、これこそかしこくも練兵場への 陛下行幸の合圖である。一同一齊に不動の姿勢、ラツパ一聲、軍樂隊の君が代奏樂の始まるや、全集團悉く捧げ銃をして 陛下を御迎へ奉る奏で終りて我々は集團長の「右向け右」の號令に勇往邁進、天地も砕けよとばかりの歩調を以て行進を起す。二度向きを替へて日章旗近く来る。玉座近く到れば、集團長の號令一下、おそれ多くも龍顔を拜す。陛下には龍顔いとうるはしく、御すこやかなる御様子を拜し奉りて、一同目ぶたの暑くなるのを感じた。このときにあたりてかしこくも 陛下におかせられては、我々

の分列に對されて一一舉手の御答禮を賜はる。全員感涙にむせんではつきりと龍顔を拜し奉ることさへ出来ない位だつた。以て玉座の御前を通り過ぎ、二度左に向きを替へて以前の位置に到る。

かくして他縣の分列も終り、全部整列しここに奉唱隊の合唱君が代合唱、最後の萬歳三唱、これで式は全く終了し、陛下には還御遊さる。

式終るや、右の方にあたりパツと飛び立つ鳩の群、今日の御親閲を御祝ひ申していづこへか飛び去る。ああ御親閲は終つたのだ。

これから各中隊に散解して自分の野營地に歸る。午後四時頃野營地に着けば、そろ／＼夕闇の迫る頃となつて、我々は今夕の飯盒炊事の準備をなす。忙しい中に御飯は煮えた。食事も終る。

今晩は御親閲感激の夕なのである。七時頃には時々とさえ渡る月光の下に、我々熊中生は第一、第二テント前に集り、中隊長殿より許されて、校歌應援歌合唱である。焚き火の周圍に圓陣をつくつて歌ふ我々の顔は赤く照つて、熊中校歌は前方觀音山に響かんばかりに、高崎の南、我々の野營地に響きわたつたこれに和して歌ふ他の學校、野營地は俄然元氣づいて、御親閲感激の夕にふさはしきものがあつた。

午後九時日夕點呼も終り、今晩は第三中隊の野營地警戒の任務に當つた。翌朝午前二時三時、殘月の觀音山に入らんとする仄かな月を眺める頃、三叉路に立つて、榛名嵐、赤城嵐を頼に感じつゝ、歩哨の任務に就いたのも永久に忘れられぬ思ひ出となるであらう。三時四時五時、大地は冷え霜置く野營地にあかつきは到来し、午前六時起床ラツパの一聲にはね起きる。

烏川への駆け足、日章旗掲揚、朝食、點呼、太陽は東の空に輝き初めた。

仕度をととのへ縣下の學生、青訓生等は一箇所へ集合し、幹部の方から、昨日御親閲拜受の喜びの言葉をいただき、又我々の覺悟を御話し下され野營終了の挨拶があつた。

十一月十八日、午前中は幕舎のとりかたづけを行ふ。今まで野營地一面にひろがつてゐた天幕はとり除かれ、これが野營地のあとかとも思はれる位の整然さだ。十二時前に終つた。

あゝこれで野營は完全に終つたのだ。ここで希望者は前方觀音山に上り、觀音様を拜し、忠靈塔を拜みて歸る。各學校別になり、野營を離れ、獅子吼ゆる驛前歡迎門をあとにしたのは十八日午後二時頃だつたであらうか。(五甲、井上梅作)

御親閱參列の記

十一月十七日早朝より秋空高く澄み渡つて君の行幸を祝ふが如く思はれた。參列部隊は午前七時驛前に集合、服裝を檢査して後構内に入場、待つ間もなく汽車はホームにすべり入る。③とはられた車輛の前半に乗り込む。車中で御親閱の状況を想像しながら胸を躍らす。

八時五十六分、汽車は高崎驛に吸ひ込まれる。一齊に降車した各團體は、各々定められた出口へと向ひ、プラットホームは一時非常に交錯し、迷ひさうだ。

「熊谷中學校」と書かれた旗の後のについて、(ロ)の出口から驛を抜け出し、眞直に大通りを進む。

進行中に整列して、通りの突當りから左へ折れ、集合地片岡小學校に向ふ。

道路は水を打ち掃き清められてゐる。御車の御通りになる爲であらう。

なだらかな坂を下りて烏川に掛つてゐる聖石橋を渡り、片岡小學校に着く。

此處で、十時半迄休息した後、御親閱舉行地に向ふ。御親閱舉行場は高崎聯隊の練兵場である。

御迎へ奉る。

君が代の奏樂も止むと、なほれの號令が傳はる。除に頭を上げれば、早や 陛下は着御あらせられ玉座に凛々しい御姿を拜す。

直に分列式は開始される。群馬縣部隊を最初として、軍樂隊の奏する行進曲に歩調を合せて威風堂々大地を踏みつけ見るからに氣持よく行進は続けられる。かしこくも 陛下には、一部隊毎に答禮を賜はり、親しく御觀察あらせらる。參列部隊の者も皆自ら分列部隊に加はつてゐる心持を以て陪觀する。約四萬人の分列に少しの御動きもなされず御親閱なされる御姿、唯神としか思はれない。

分列終りて後、奉唱隊は謹んで奉迎歌を御唱ひ申し上げ一同心から君の御幸を御迎へ奉る。

奉迎歌終りて後全部隊によつて國歌、君が代を二唱す。歌聲の響は天地に満ちて、莊嚴の氣は空にたゞよふ、陛下は未だ不動の御姿勢にあらせらる。

群馬縣知事の發聲によつて萬歳を三唱す。

萬歳の聲が薄く濃く耳の奥で鳴り響いて一瞬無我の地に足を踏み入れた時、最敬禮の號令が掛る。再び頭を低く垂れて感激の情胸にせまる。なほれの合圖に頭を上げて感激の涙にうるんだ目を以て正に還御あらせられる御車に注目する。

式場に着いて見ると、早や其處には御親閱拜受團體、奉唱隊及び參列部隊の者等整列してゐて、人で埋つてゐる。練兵場の中央高く掲げられた、日の丸大國旗は、秋晴の空を流れる微風に、ひらひらと翻つて、四邊一面に輝く。

ふと、國旗の下に目を轉ずると、其處には純白の布で覆はれた高臺が安置されて居る。玉座だ、玉座と氣が着いて、目を見張る。玉座は二段に分けられ其の高さは約三米に近く見える。午前十一時頃から分列式の豫行が開始される。約五十分にして練習行進が済むと皆其場に折敷をして晝飯を取る。

少憩の後、午後一時半頃再び始めの整列位置に集合する。

參列部隊は、御親閱拜受部隊と比較すれば、遙に玉座から離れてゐるが、その精神に於ては何等拜受部隊と變る所はなく、陛下は吾等も御親閱なされるのであると信じて、邪念を取り去り敬虔の念を心に抱いて臨御を御待ち申上ぐる。

二時十五分式場の一隅より打上げられた花火は、豊然と轟き臨御の近づくのを知らせる。

二時半再び打出された花火の音の遙に消え去る間もなく、軍樂隊の奏する君が代の調の間より、御車は音もなく式場に入らせ給ふ。

提げ銃の號令に拜受團體は一齊に提銃注目をする。それと同時に最敬禮の號令によつて、參列部隊は頭を低く垂れて心から

還御せられて後再び今迄の事を考へて見て我自身此くも尊き國に生れ出でたる事の幸ひを思ひ又感謝せざるを得なかつた。式終り一同玉座の近くに行つて 陛下の御姿を再び腦裡に浮べ奉る。

式場を出て熊中野營地を巡覽し、高崎聯隊の忠魂碑の立つてゐる觀音山に登る。頂上に來りて忠魂碑を拜し、又眼下の眺めに勇壯の氣を味ひて下山す、午後七時大混雑の中を高崎驛に入り、同二十五分出發歸還の途に着く。(五丙、上杉公男)

聖上陛下を大宮驛に迎へ奉るの記

十一月十日 聖上陛下大演習御統監の爲群馬縣前橋に聖駕を御進め遊ばされる御當熊谷驛にて御英姿を五年四年及び三年生の一部は拜しまつる光榮を得たのである。我々は 聖上陛下の御尊姿を拜し奉り心は感激に滿ち溢れ、我々の血は等しく大和民族として結ばれてゐるといふ誇りに躍り立つたのである。我々四年生は更に今般十一月十八日、大宮驛頭に於て 聖上陛下を御奉迎申上げる光榮に浴することが出来たのは重々しくの感激と光榮の極みである。

十一月十六日第六時限我等四年生一同は御奉迎の際の服裝を整へるべく服裝検査を行ひ、又當日の指揮者、丸山先生より種々當日に於ける御注意を受け、身心を整へ、清めて、只管當日を御待ち申した。十一月十八日の朝空は快く晴れ、朝焼の瑞雲が軽く動いて居る様は今日の行幸をお祝ひ申上げるかのやうで、實に清き輝かしき朝であつた。

我々四年生は午前六時三十分熊谷驛に集合し、校旗を白根君が奉持して、七時三十二分の臨時列車にて大宮に向つた。午前八時二十分大宮驛に着いて見るともはや常々とは異つた氣、奉迎の空氣が満ち／＼て居るのが感ぜられた。驛の塔には交叉させて立てた日章旗が翻り、驛前には綠門が立てられ、その頂には三本の日章旗が着けられ、太字で「奉迎」と大きく記されてゐる。驛前は奉迎者で埋められ、服裝を正した人々が此處彼處に動いてゐる。憲兵は威儀を正して驛前に御警備申上げてゐる。皆の人々は敬虔の念に湧き立つてゐるのが知られる。各戸には日章旗が掲げられ、紅白の幔幕が戸毎に並び、二階といふ二階は皆閉され殆んど凡ての家ではカーテンが引いてある。

我等は丸山先生の指揮の下に定められたる場所につく。其處は紅白の繩を以て張り繞られ、すつかり掃き清められて、一點の塵も無い。驛前大通には警察署の自動車、新聞社の自動車、奉迎者の自動車等が一時ひつきりなしに通る。

この時空はもはや一點の雲も無く青きに青く綺麗に澄み渡つてゐる。晩秋の氣は澄んで一層我等の身心を緊張させる。沿道の家では床の土の上に敷物を敷いて家族の者が姿勢を正して座し、右方の中仙道に面して第三十六銀行の前には高齡者が筵の上にかしこまり、その後には警官が列を正して居る。我等も之等の人もひと時はひと時と静まり返る。

十時三十分御召車になる車が供奉の數臺の自動車と共に右方の辻を左に折れてゆるやかに驛に向つて進んで行つた。もうすぐだ。聖上陛下御奉迎の氣分が漸く濃くなり我人共に固唾をのむ。

十時五十五分、御奉迎の煙火が鳴り響いた。已に奉迎者は不動の姿勢を取つてゐる。これこそ眞に水を打つたやうなと云ふべきだらう。と、自動車の輕やかなエンヂンの音が静寂の中を獨り快く響き出した。一種森嚴の氣が四邊に立竝めた。唯聞ゆるものは人々の胸のとゞろきとこのエンヂンの音のみである。

その時遠くで禮の號令が響いた。次々に號令が掛かる。丸山先生の禮の號令も掛かつた。我等は一齊に最敬禮をする。直れの號令で我等は一齊に頭を元の位置に戻し左に向け。聖上陛下に對し奉つて感激に打戦いて目迎目送を行ふ。最前端的車より三番目、兩側に二臺後側に一臺のサイドカーが護衛申上げて御召車は音も無く緩やかに御通りになつてゐる。陛下に於かせら

れては御召車より畏れ多くも我等に對して御會釋を御賜りになられてゐるではないか。我等はこの瞬間實に筆舌にも盡し難き有難き崇嚴なそして嚴肅な何と云はうか日本人のみが持つ感激に打たれた。萬乘至尊の御身を以て畏れ多くも我等に對して御會釋を賜り下されたのである。只、只、我等は大和民族であるといふ感激が心の底から迸り出た。この感激の中を御召車は次第に御進みになつて辻を右へ御曲りになられた。斯くして本日、聖上陛下御奉迎の事も終りを告げ、約三十分の後大宮氷川神社に向ひ、陛下御親拜の御後を拜し、聖壽の萬歳を祈つた正午氷川神社に着いて晝食を取り、午後二時五十五分の臨時列車に乗り、三時四十六分熊谷驛に着いた。かく我等四年生は無事本日、天皇陛下御奉迎の任を果たした事を天に謝し解散した。

(四乙、室田進)

車廻竣工式

五乙川邊岩太郎

一六

昭和九年六月十八日午前十一時三十五分、我等は丸山先生の指揮の下に、車廻前に弧狀に集り、竣工式を挙げた。此の日青雲棚引き、晩春の陽光輝き渡り、本館の雀は互に、我等の慶びをことほぐ心と、その記念としての努力と熱により豫定より一ヶ月も早く完成したこの事業の竣工を祝つてゐるかの様だつた。

校長先生はかの真中の強く正しく明るき我等の校訓を象徴せるかの如きヒマラヤシイダの前に立たれて式辭を述べられた。昨年十二月二十三日、皇太子殿下御降誕奉祝記念として三事業を計畫した。其の一は已に完成し、其の三は本校の改築の氣運濃き關係上先般話せし如く、在米國の原口氏からの寄贈金により、其の基金としては十分なるも其の位置は決定出來ず、従つて此れが工事に取りかかり得ないのであります。其の二の車廻は、二月二十二日起工式を舉げて以來、御慶事を壽ぐ諸君の赤心は絶大なる勞となり、斯くも早き今日竣工式を舉げる事が出來たのであります。

諸君の此の事業に費した時間は非常なものです。又移植した樹木も非常な数です。この中で唯一本の檜の木のみが未だ葉を出さないが、これも所謂未知数であります。我等の心に感應してか天の恵み彌深く、移植せんとしては慈雨來り、移植を終へては又慈雨來り、殆ど水をやつた事無くして斯くの如く生々としてゐるのであります。チエンブロックを使用したのも其の一原因でもあります。――と。

辭終つて各組正副組長一年は各週番が生徒代表として校長先生の後に隨つて、この車廻を一周すれば、全生徒は一齊に拍手を送つた。かうして我等熊中生一千名は言ふに言はれぬ、我等の力によつて成つた事業車廻の竣工式の氣持を味つた。式後、その場で麥湯、教室で煎餅の御馳走があつた。

皇太子殿下御降誕奉祝事業精算書

收入の部		支出の部	
一金五百貳圓九拾五錢也	内譯	一金壹百九拾五圓七拾五錢也	カケヤ二ヶ代
一金四百拾貳圓參拾五錢也		一金參圓九拾五錢也	麥湯起工式當日
一金九拾圓六拾錢也		一金四拾八錢也	晒一反
		一金參拾錢也	手袋
		一金貳圓貳拾五錢也	植木移轉用臺其他
		一金六圓參拾錢也	砂利篩
		一金五拾圓也	土代
		一金五圓也	チエンブロック損料
		一金參圓七拾錢也	寫眞用ヒルム代
		一金壹圓五拾錢也	棕櫚繩
		一金八拾錢也	トタン製桶及ノート代
		一金貳圓參拾八錢也	麻絲
			唐、鉄
			材木代福島材木店
			片ヅル
			ヒマラヤシイダ外
			高麗芝其他
			セメント代
			砂利及砂
			人夫賃
			雜費
			殘餘
			以上

土岐先生謝恩會記事

五 乙 淺 見 利 雄

吾々五年生にとつて在校中の最後の開校記念日たる、第三十九回開校記念日は、本校に滿三十年も勤続せられし恩師、土岐先生の謝恩會が行はれて、非常に意義あるものとなつたのは喜ばしい。

思へば吾々は入學最初の開校記念日に於て、やはり本校開校以來の先生だつたと言ふ、伊藤先生の謝恩會に參列し、復本日のこの會に臨み得た事は何かしら不思議な感に打たれる。

この日天候はドンヨリと曇つて居て、時々雨。朝八時十分より、一同講堂に入り、里見先生が校長先生の代理をなされて、開校記念式が嚴肅に行はれた。開校記念式終了が九時數分前、一年生退場、其他會場整理並びに準備に約十分を費し、謝恩會開會を待つばかりとなつたのは九時七、八分だつた。

吾々に會ふ舊い先輩の誰もが、必ず先づ第一に問ふ土岐先生。そして吾々がその瞬間、強く熊中の榮ある傳統の歴史の中の自己を、認識せしめられて、深い感激にむせぶあの土岐先生。或意味に於ては、熊中の先輩と後輩との楔たる、土岐先生の御顔が間も無くこの會場へ、御見えになるのだ。吾々の注意は一樣に、講堂の後方の入口にそ、がれた。と、ドアに近い附近が俄にざわめいた。さては？と思つて後ろを振り返る。コツ／＼と、靴音のみ聞え初めた。だん／＼近づいて來た。チラホラ、里見先生の姿が見えたと思ふ間も無く、僕の眼には、あの懐かしい土岐先生の童顔が映じた。後に六、七名の先輩の方々が續かれた。僕は擬と先生の御姿を見送つて、ホツとした。何とは無しに熱いものを胸に覺えた。行列は前の席についたらしい。ふと見ると、前の者の黒い頭の間に、かすかに土岐先生の餘り毛も見えぬ頭が見えてゐた。腰は掛けられぬらしい。間も無く、里見先生の開會の辭。感激こめられて……………。

次いで卒業生代表、西田さんの登壇、眼鏡を掛けた恰幅の良い方だ。原稿を前に擴げられて、先づ最初に流暢な、美しい聲で

本日の良き日を選んで會を開催し得た事と、それに臨み得た事の光榮を述べて一同に呼び掛け、次第に本論に入る。

「今日の熊谷中學の榮を致したのは、代々の教師の方々の御努力に依る事は勿論であります、特に土岐先生の御熱心なる教育に依るものであります。土岐先生の吾が熊中に及ぼせる力は、實に偉大なるものであります……（場内靜肅。寂として聲無し。西田さん續ける）……山崎闇齋先生は、男子たる事と、貧困なる事とは最大の幸福である、と説かれましたが、この點は土岐先生もよく仰つた事でありました。即ち歴史を回顧して見ますに、男子でなければ天下に覇を唱へる事は出来ません。成程、女傑も、歴史には相當見えますが、それも男子に比較致しますと、ホンの僅かに過ぎません。又貧困も多くの偉人を生み出してゐます。豊大閣、家康等は其の例の最たるものであります。……………」

學生時代は徒らに平和ではなりません。常に非常時にあるが如き努力と、決心とを以て、如何なる艱難をも、忍耐し、堪忍せねばなりません。これは歴史の明らかに物語つてゐる處であつて、又土岐先生の御講義の主眼とせられし處でありました。」土岐先生より修得せられし事に依つて、吾等後輩を誠しめんとするが如き西田さんの辯は、是に一段落告げて、ホツとしてコツプの水を飲む。

僕は今更ながら土岐先生の御講義の中に、西田さんの言と一致する點の、多々あるのに氣が付いた。例へばチムール、成吉利干、又たとひその精神と手段とには圓滿を缺いて居たとは言へ、英雄的霸氣に當んだ豪壯無双の項羽等の事は特に詳しく講義なされた。即ち彼等英雄の苦心とその精神とを説いて、幾分なりとも吾々の心に、内的潛能力を養成されようとなされたのだ。

西田さんはコツプを置き、續いて自分の學生時代の、歴史課についての逸話を語られた。

「私の中學二年の時、その當時、私は非常に歴史が得意で、他の學課は何でも、歴史だけは誰にも負けぬ自信を持つて居たのであります（一學期の私の通信箋に、思ひ掛け無くも歴史の點が丁と附いて來たのであります）。一同擦つたい氣持、其の當時私は紅顔の美少年でありましたが（一同爆笑）これは餘り自分の答案が立派に出来過ぎたので、先生がカンニングぢやないかとでも誤解したのぢやあるまいか、等と思つてどうしてもそれが信ぜられなかつたのであります。又その時分、私は友達から學課について問はれて「ウン……………ウン、サウダ……………ウン（身振り面白かりし故一同爆笑）などと頷く組で、あつたやうな、なかつたやうな仲間でした。（一同相續いて爆笑）それ故確かに誤解されてゐるに違ひ無いと自分で斷定してしひ、それを『十四歳

の時が復来るか。」と言ふ徳川頼宣の様な悲壯の感に浸つて、口惜しがつたものでした。」
 等とユーモアたつぷりの口振りで一同を相次いで笑はせて、今度は非常に親しい打溶けた先輩の態度を示して呉れた。後方に居たので僕には分らなかつたが、土岐先生が、どんな御顔をして居られたか見度いものだつた。一同固唾を飲んで、次の結末に充分の好奇心を唆られて、耳を傾けた。

「而うしてこの事件の結末は、新學期が初まり私が家庭の事情で餘儀無く寄宿舎生活を送つた頃です。或友達と三人で、當時舎監をして居られた土岐先生の舎監室へ好奇心に驅られて忍び込んだものでした。アチコチをキョロ／＼見廻して珍らしがつた後、ふと机の上を見ると土岐先生のエンマ帳がありました。三人の紅顔の美少年は一樣に眼を輝かせ、ひそかに領き合つて悪いとは知りつゝも、恐は／＼そのエンマ帳を覗きました。三人の眼は同時にエンマ帳に吸ひつけられました。『呀ッ！彼奴はあんなに威張つて居る癖にこんな點が悪い。』彼奴は……だ。『やつ！彼奴は丁だ！』とか何とか、色々見て行く中に、遂々私のが見つかりました。諸君！その瞬間、私は私の丁が九十八點の丁なる事を知つたのであります。恐らく九十八點の丁を貰つたのは私一人でせう。それ故、私は依然として歴史は私が一番良く出来るのだと思ひ、鼻高々、極めて朗らかなものでした。（一同も亦朗らかに哄笑）この手違ひは屹度、事務の寫し違ひに相違ないと思ひます。」

だから諸君！諸君の通信箋に丁とか戊とかがあつたら、それは皆事務の手違ひであると、思つてよろしいと思ひます。」
 ユーモアからユーモアに、一同を笑はせ續けた。特に最後の意見には一同腹を抱へて笑つた。西田さんの辯論は嚴然たる訓誡より、漫談的な口調に變じ、次いで結論に入り、吾等の心に強いノ／＼感動を與えた。

「明智光秀は敗れたが故に、不忠臣と言はれ、叛逆徒と譏られたが、若し勝つて、天下を治め得たならば、必ずや信長の覇業の完成者として、又日本の恩人として仰がれた事と思ひます。石田三成にしても關ヶ原の合戦に勝ち、豊臣氏をして、この衰運を恢復せしめたならば、變な噂も立てられず、却つて大忠臣として、大和心の譽を永遠に傳へる良い題材となつたに違ひ無いと思ひます。同じ様に、徳川時代初期、中期に於ける豊臣家の恢復を計つた遺臣にしても、勝つて官軍、負ければ賊の運命に在つたのを、敗れて賊となつて了つたのであります。吾々は勝たねばなりません。吾々は、何に於ても飽く迄勝たねばなりません。（コップの水を飲む）又、我々が二千六百年の歴史を回顧する時、そこに深い／＼人生の妙味を知り得るのであります。」

す。即ち、若い中の成功や、安樂は、老いて後の失敗と苦との因であるといふ事です。要するに潜成力の必要を痛感せられます。そこに最後の勝利があるのであります。この事は、土岐先生の講義の中に、特に強調せられて居た處であります。

偕、是に私は熊中精神といふものについて言つて見度いと思ひます。……（西田さん鋭く一同を見廻す。一同息を殺す）私は斯う思ひます、それは戰鬪的精神だ、奮闘的精神だ。我々は凡ゆる事に於て勝たねばなりません。運動に於ても、學問に於ても、絶對に他校の追隨を許さぬといふ強い自信が無くてはなりません。それには力強い潜成力の養成が必要であります。これが開校以來輝かしき傳統を維持し得た熊中生のモットーだつたのであります。そしてこれこそ、土岐先生の歴史の根本を流れる精神に依つて、育てられて來たのであります。

先生の教育は、ともすると中等教育の陥り易い弊たる、知育のみを主眼とする教育では無かつたのであります。先生は情、意の圓滿なる養成に、粉骨して勵まれたのであります。これは私が本校入學以來不動の方針であつて、只熊中の爲に盡されて來られたのであります。」

吾々は先輩代々傳はつて來た熊中魂の如何なるものかを諒解し得、且つ其の間に於ける土岐先生の偉大な存在に關目せしめられたのである。而して吾々に最も深い感激と教訓とを與へたのは、次の瞬間だつた。

「……庶はくば先生、益々御自愛せられて、これより後も、末永く私達の良き指導者となつてゐて下さい。私はこの壇を降りるに當りまして、心から先生の御幸福を御祈り申し上げます。又これは先生の御教へを受けた卒業生並に在校生の齊しく心から御祈りしてゐるところでございます……。」

といふ意味の事を丁寧に先生に向つて述べられてゐる西田さんの姿を見た時、僕は思はず眼蓋に熱いものを感じざるを得なかつた。恩師を思ふこの熱情、これこそ如何なる雄辯にも勝る熊中精神の現はれである。外に對する戰鬪的精神も内に對しては、師第一丸となつた、溫い情愛だつたのだ。西田さんの仰有つた熊中魂、それは西田さんの示して呉れた師を思ふ熱情に依つて初めて輝きを發するのである。吾々はより一層樂しい家族を形造つて行かう。そこにこそ、外に對する燃えるやうな戰鬪的精神が強められて行くのだ。縣下隨一、天下隨一の彼岸は迫つてゐる。

西田さんの降壇後僕が深い感激に浸つてあれを思ひ、これと思ひしてゐる間に、前の方では謝恩品並に謝恩金の贈呈が行はれ

たらしい。あとで聞けば本日、大久保先生の描かれた、土岐先生の肖像畫の額と、先輩より集まりし謝恩金若干が土岐先生に贈られたさうだ。又土岐先生から本校に對しても、柱時計(教員室の南側の壁に掛けてある)其他を寄贈された由。屹度、土岐先生の精神は未長く、セコンドの音に依つて吾等後輩の胸に何物かを暗示して行くであらう。

次いで里見先生が登壇せられて、土岐先生謝恩會に關する毛利氏の祝電を読み上げられた。

「ド キセンセイノケンザ イライノル。」

因に毛利氏は本校第十一回卒業生で、現在名古屋で視學官をして居られる由。

次いで吾々の壇上に見た人は、あの懐かしい、土岐先生であつた。和服姿で、顔色は以前より少し黒くなられたかと思ふ位で大層御健康らしく見えた。先づ丁寧に御辭儀せられた。僕は嘗て、軍人勅諭發布記念日に、ラヂオで東郷元帥の演説を聞いた時のやうに、一語も聞き漏さじと耳を傾けた。併し初めの中は御聲が低くて、後方に居た僕には、はつきり聞きとれなかつたが、本日の謝恩會開催に就いての御禮と、謝恩品並に謝恩金に就いての御禮の言葉だつたらしい。次いで御聲も幾分高くなつたので處々が聞えて來た。

「……私は三月にお暇を戴きまして……豫期して居なかつた本日の私に對する謝恩會に、望む事の出來ました事は、此の上も無い光榮と存じます。……豫期して居なかつただけに、餘計嬉しく思つて居ります……。」

例の寂のある、かすれたやうな聲は、時として大きく、時として小さく、僕の耳を衝いた。

「……私の永く御世話に成つたと言ふ事は、決して身體が丈夫だからといふのでございませんでした。現に、私は弱い方で常に藥を飲む習慣がついて居たので、慣れて了つて藥を飲むのが餘り厭ではございませんでした。そして「良く厭がらずに藥を飲む。」と家人に賞められて居た事を覚えて居ます。それならばどうして、斯迄永く御世話に成つたかと申しますと、はつきりは分り兼ねますが、先づ第一に家庭の事情からぢや無いかと思ひます。

私には別に實家がございしますが、私は常に實家を離れて一人でこちらに居りました。妻子とも離れた淋しい孤獨の生活をして参りました。又家庭の事情でさうしなければならなかつたのでございします。聲愁然として低し……そして自分で自分を縛つたやうな生活をして参りました。それ故家に居ても一人ですから、身體の具合が少し位悪くとも無理に學校へ出て参りました。

た。又、さうしますと不思議に身體も治つて了ふのでした。私の最も苦しめられたのは皮膚病でございましたが、これには約二十年間苦しみ續けました……。」

要するに私が皆さんに御注意申上げ度い事は健康第一といふ事でございします。昔からよく、馬鹿でも達者が良い、と申しますが、全く其の通りだと思ひます。併し私には別にこれと言つて健康方法を申し上げる事は出来ませんが……。又私に取つてよかつたのは、絶対に商賣替しなかつたといふ事ではないかと思ふのでございします。私は別に前途に光明は認めて居りませんでした。只偶然與へられた職務に就いて居た迄です。他に良い職業があるからと言つて、別にそれに職業を替へようと思はず、唯單に、この學校が私にとつて居心地が良かったから、ずっと居續けた迄でございします……。是に私が注意申上げ度いのは、如何に他の職業が、景氣が良いからと言つても、決して自らの職を抛つてそれに就かうと思つてはならぬ、といふ事でございします。前途ある諸君は、自らの職業をしつかりと定めてそれに就職し、決して替へないやうせねばなりません。この事は私の過去を顧みて、つくぐと申上げる事でございします。」場内寂として聲無し。土岐先生の言なればこそ、この感銘。

「次に、人間は趣味がなければならぬと思ひます。是も世の中で、よく言はれてゐる事です、確かにさうだと思ひます、實は私もその通り趣味に生きて参りました。私はこの趣味を持つて居たからこそ、あの何の光明も認めて居らなかつた生活に堪えて來られたのでございします。私にはこの趣味が生活の全部でありました。

その私の趣味は二つありましたが、その一つは歴史でございました。歴史でも特に幕末の歴史が大好きでございました。殊に知つては居なかつたが好きだつたのです……。」

僕は宜なる哉と思つた。これだ、土岐先生の教育が、熊中精神の養成の上に與かつて大いなる力があつた所以は。維新を成さんとする時代の精神こそ、眞に現代日本の要求する所だ。それこそ戰鬪的精神に充滿してゐる筈だ。而も尙且つ、内に對しては一致團結する温情愛の發露してゐる筈だ。然らざれば、あの明治維新を決行、完成せしめた大潜勢力の養成し得らるべき筈が無さう。

「次に、私の他の一つの趣味は徒步旅行する事でした。歩く事は直接に大自然に接する事が出來、浩然の氣が養はれ、健康に

も良いから大變良い事だと思ひます。それで錢が掛りません。(一同苦笑) 私には錢の掛る趣味は駄目ですから、歴史と徒歩旅行とは私に最も適した趣味でございました。

私が今度こゝをお暇を戴くに就きまして或卒業生が私の身體を大變心配して呉れて、『多く、先生といふものは學校を止めると病氣に罹り易いものです。屹度今迄の規則立つた生活が急に變り、且つ氣が弛むからでせう。あの伊藤先生だつてさうでした。ですから先生は是非ともそんな事の無いやうに注意して下さい。』と言ひましたが、私にはこれといふ養生も出来ませんから、唯この歩く事に依つて健康法を續け度いと思ひます。又、私の身體にはこれが最も適してゐると思ひます……………」

この他に一つ私のやつて参りました主義として、自分の身の廻りのものを成可く簡單にするといふ事がございます。即ち身の廻りのものは一切一品づゝで済ませるといふ事です。洋服も一着、着物も一枚、帽子一個、襦衣も一枚といふのです。(一同笑ふ) それ故私の部屋には、全く餘分の物はありません。本當に入用の品きりでございます。さうした生活をして私はこの卅ヶ年と言ふ永い間、本校に御世話になつて参つたのでございます……………」

凝つと考へながら、ポツ／＼と語られて行く先生の清いと言ふより淋しい、而も先生が最も先生自身の運命に適應してゐたといふ生活(それは眞に教育者らしい)は痛く我々の心を感動させた。一同の眼は寂しいやうな同情的の感傷の中に涙含んで居た。先生のあのユーモアをさへ含むと思はれるやうな講義の中にも、神聖な犯し難い迫力を有つて居たのも、斯うした生活の中の先生を豫想すれば決して偶然では無かつたのを知る事が出来る。先生は謙遜せられて家庭の爲に斯うした生活を送られたと仰有つた併しそれは即ち西田さんの仰有られた如く、熊中精神建設の爲に一身を犠牲にされたのだ。少し位身體の具合が悪くとも不思議に學校へ出ると治つて了ふと仰有つた言葉が明らかに之を物語つてゐる。先生は確かに熊中の爲に、吾國家の爲に偉大なる功績を残したと言へよう。今や先生は隱退されたとしても、先生の教へを遵奉する熊中卒業生の偉業は必ずや後日、先生の斯の如き偉大なる犠牲的教育に報ひ得ることと思ふ。現代日本の切望するところの第二の維新は必ずや吾が土岐先生の教へ子たる吾々の手に依つて完成されて行くであらう。土岐先生の生涯は、確かに外面的には淋しかつた。併し實質的にはどうして淋しい空虚なものだつたと言へよう。第二の日本の建設者を養成せんとする潑刺たる野望は、先生の心奥深く燃え續けてゐたのだ。先生の今迄の生活こそ眞に充實した意義あるものだつたのだ。あの若々しい御顔が、思ふ存分自己の義務を成し終つたと言ふやうな、意

味深い安らかな笑を浮べてゐるのを見ても、先生は決して心の底から淋しい生活を送つて來られたのでは無いことが分る。今や先生は人事を盡して天命を待つ境地にあるのだ。安心立命の心境に居られるのだ。そして唯、凝つと吾々教へ子達の行末を見詰めて居られるのだ。

「色々取り止めも無いことを、長時間……………」

と挨拶されて丁寧に禮をされて降壇された。我々は淡い哀愁感に浸りながら、心から先生の幸を祈つて頭を下げた。次いで里見先生の閉會の辭があり以上を以て本日の謝恩會を終つたのであつた。

滿鮮北支視察旅行 (講演)

岡 田 嘉 一

これから約一月にわたつての視察旅行中に、見た事聞いた事をお話し致します。

今回の旅行は、少くとも内地から遠く隔つた大陸に渡つたことが、私に對しては珍らしいことでありました。集合地は釜山、日は昭和九年の九月九日でありましたが私共は若し天候が悪くなつては、と一船早く九月八日午前十時に下の關から船に乗り込みました。併しこの時天候は險惡で朝鮮沿岸は警戒を要すと言ふ氣象警報が出てゐました。

私は航海は始めて、ありましたので、始めから船酔に對して注意して居りました。それで船に入ると共に直ぐ寝て了ひました午後三時頃になると、風は愈々激しく波は高くなつて來ました。併し寝てゐると船の動揺も餘り感ぜず、少しも酔ひません。午後六時頃汽笛のけたゝましい響きに飛び起きて外へ出て見たら、もう釜山に來てゐました。この様な状態で極めて無事に着いたのであります。その日は釜山に泊りました。

翌朝團長馬上孝太郎氏の話に依りますと、後の船が暴風雨の爲めに出なかつたと言ふので、我々先著六十餘名は先づ汽車で、京城迄行つて、そこで落合ふことになりました。

さて、私は初めて朝鮮を見たのでありますが、釜山に於いては少しも内地と變つてゐる所を感じません。第一に建築の様式、第二に街の商賣の體裁、第三に内地の日本語が通用することは、全く海を渡つて朝鮮に來た感じがしなかつたのであります。それから汽車に乗つて行くに随ひだん／＼と朝鮮の家屋が見え出したので、始めて朝鮮のやうな感じがした次第であります。その頃は洛東江は汎濫して居り、沿岸には一杯朝鮮の人々が居りました。もつともこの人達は汎濫に遇つて、逃げて來た爲であつたのでせうか、全く簡素な家でありました。四本の柱を建て周りには藁を引き廻し、屋根は亜鉛板が載せてあるだけ、家財道具と云つたら鍋、釜ぐらゐのものでありませう。生活の簡單なものには誠に憐れみと同情に堪へないものがあります。

以前に朝鮮の山は皆禿山だと聞いて居りましたが、今では皆植樹が良く出來てゐて、禿山などは少しもありませんでした。又道路は實に立派なもので、汽車沿線の道の兩側にはポプラがすつと植えてありました。それに田の畔にもポプラが澤山植えてありました。全く爲政者の努力があり／＼と見え、我等同胞の益々發展して行くのを見て喜んだのであります。

道行く鮮人を注視すると概ね白い服を着て居る、白い上衣、白い袴、主に其の上に外套位な膝に達する白い衣を着て居る、それが朝鮮人の男子だ。女子も亦白衣を好む様であるが、スカートが長く上衣は短かい、鮮人の語るところを聞けば、何時の代か喪に服すること續けて三回乃ち九ヶ年間もの長い間の眞白な着物を着てゐたので、ついその習慣が附いて了つたのだのとあります。が、元より其の眞偽は明らかではありません。兎に角、如何にも緩慢な不活潑な退歩的な服裝に見えるが、習慣の力は強い。當局者は白は汚れ易いから青色か何か着色したものを奨励して居ることではありますが、深く浸み込んだ風慣は、人工的の力ではどうして／＼なかなか退けることは出來ない。

京城に着いて私達は備前屋と言ふ宿に泊りました。十日の朝七時頃漸く遅れた團隊が到着致しました。

第一に京城に於いて心を清め、無事任務遂行を祈願する爲に朝鮮神宮に参拜致しました。朝鮮神宮は、天照大神と明治天皇をお祭りしてありまして、官幣大社であります。神域は崇高で京城市は一眸の下に集まり、風光亦絶佳であります。一行は神前鳥居前の廣場から三十餘臺の自動車に分乗して、會場たる京城大學に向つたのであります。

この大學は齋藤總督時代水野鎮太郎博士計劃の下に生れ出たものださうであります。ドイツはアルサスローレンを取るや、直に其の地に大學を設置して同地國民から非常な感謝を受け、偉大なる効果を挙げ得たのでした。

新領土朝鮮に於ては自由思想に基く教育要望の熱が盛んになりつゝありました。この時に當つて、二千萬の民を收容する朝鮮に少くとも一つの大學を設置するは、我が國の政治の明朗さを示す所以であると博士は主張したとのことであります。

元來、朝鮮人は理科は得意で無く、且つ又、良家の子弟で好學の念旺盛なる者は學つて、奉天、上海、北京等外國の大學に遊學する風を生じますので、京城大學は文科と法科とが置かれたのであります。而して、今や著々として成績を挙げつゝ、あります眞に水野博士の遠見には敬意を抱かすには居られません。

現在朝鮮に於いて學んだ者は、少しも思想上に危險性が無く、反つて東京に行つた者の方が危險があるのだと言ふことであり

ますが、深く考ふべきこと、思ひます。實際朝鮮統治をうまく行ふには、外國に居る朝鮮人をうまく治めることが必要であります。

彼の朝鮮獨立運動の起つたのは、上海、ウラヂホ等に居た人々が、後から糸を引いてゐたことです。彼の日韓合併は、爲政者の綿密周到なる注意と計劃の下に一兵に暇らずして全く平和の中に行はれたのでありますが、之れに快からざる人々は外國に走つたのであります。大正八年民族運動起るや、遼東の火の如く傳波し、一時中止せるも、アングーカールメントは容易に止むこと無く遂に學校經營の困難となり、鮮人を容る、學校に於いては始終ストライキに悩まされたのであります。所が、滿洲事變以後之がびつたりと無くなつたさうです。彼等は母國である我が國の眞に強大なることの必要を痛感するものであります。

次に宮殿を見ました。實に立派で、朱や、緑の色々が程良く調和されて居り、結構壯麗、榮華の跡を偲び得ますけれど、概ね規模小で色彩濃厚、支那文化其の儘の模造で、獨創の點に乏しきを見ましたけれど、兎に角、昔は、朝鮮にも偉大なる文化があつたことを感じました。

平壤では、大正十三年卒業の清水賢一君、が學務課長をして居たので大層都合が良かった。先づ平壤神社に参拜し、七星門、牡丹臺、乙密臺、箕子陵を參觀して、文祿、日清の古戦場を訪ね、老杉鬱蒼たる中にある建物に刻された無數の彈痕を見て、當時の激戦の様子が想像せられます。

平壤附近には石炭が豊富にあります。殊に無煙炭が豊富であります。それ故に此の石炭を利用したならば、色々の方面に於て發達致しませう。

又北鮮には千古不拔の大森林があります。又各地に金が非常に多くある、併し乍ら費用がかかるので、餘り取らないのださうであります。ところが宇垣總督が我々に講演したときに此の金の問題について次の如く申されました。五圓の金を取るのに六圓の費用がかかるから、之を發掘しないと言ふのは宜しくない。成程六圓か、るからと言つても、その金は日本に残るものである。言はゞ民をうるほすものであるから宜しく採取すべきである。と。まことにものともな言葉であります。此の朝鮮の金を充分に利用するならば、我が國は金の問題に關しては少しも困ることはないだらうとのことであります。

又汽車の上から見ると沿線地帯に一面に綿が植えてあります。現在朝鮮では盛んに綿の栽培を獎勵して居ります、この勢で進

んで行つたならば、將來、外國から莫大の綿花を買はずに済むやうになるであらうとのことです。又朝鮮地方は、緬羊飼育地域としてすこぶる有望であるとの事です。

斯の如く朝鮮の前途は洋々たるものがあります。宇垣閣下の御講話によりますと、半島の天地は明朗快活であり、民心は存外素直であり、精神は益々緊張し、生活は安定し、積弊は漸次改善せられ、産業は日を追つて復興し、將來の大發展を約束づけられて居ることです。私共は汽車の窓から眺めたものを土臺とし、立派な方々の御講話から推測して誠に皮層的な觀察ではあります。朝鮮の統治は成功した。と思ひます。

朝鮮はかくて終りまして、鴨綠江を渡り、安東に入りました。丁度午後九時でありましたが、此處で時計を八時に遅らせました。聞けば二三日前此町を匪賊が襲來したさうです。滿洲乗り込みの第一夜からこんな話は餘り有り難くない、一時我々仲間此の話題が賑はひましたが、時間が來て汽車は出發しました。一同寢臺の人となり、グツスリ寢込みました。

安東から奉天に到着したのは翌朝七時頃でした。奉天は人口今や四十萬を突破せんとして居り、我が内地人は約二萬五千人許り、朝鮮人は一千人位であります。ポーツマス條約の結果我が國が露國から繼承した鐵道附屬地は、面積約四百萬坪、大體に於て長方形をなし、鐵道から西は工業地、東は市街で秩序正しい直角形式の街衢をなして居ります。

我々一行は分宿致しまして、私共十七人は大丸旅館に宿泊することになりました。

八時にバスに分乗致しまして、奉天市内見物を始めました。先づ城内へ入りました。此所は支那人の街で、何となく陰鬱な暗い氣分のする街でありました。事變前は排日の空氣が盛んで、ウツカリすると、支那人から石など投げつけられる様な危険もあつたといふ事がありますが、今はバスで悠々たるものです。

そのまゝ例の北大營を見學致しました。面積百五十萬坪で實に廣々として居ります。昭和六年九月十八日例の柳條溝の鐵道爆破に依つて、日支が戦端を開いてより、此の目をさへざるものもなき廣茫たる原野に於て、戦つた我が軍の苦戦の程が推測出来ます。隠れ場所も無い此の戦場に於て、而かも我が皇軍の戦士の意氣は旺んで、僅かに二名の戦死者を出したのみであるのに、敵軍では、我が手に埋葬したものだけでも三百二十に達して居ることです。

奉天といふ所は實にほこりがひどい。此所で兼ねて用意して居たマスクをかけました。

私は前から支那人は金銭のみ貴んで、道徳心が無いものだと思つて居りました。而るに此所に只一つ同善堂といふものがあります。此れは日清戦争の際、平壤の戦で、勇敢な戦死を遂げた彼の名將左寶貴が私財を投出して建てたものであります。之は全く慈善的なものであります。先づ中に拾兒收容所があります。其所には「拾兒をするものは此處へ来るべし」と貼紙がしてあつて、拾ひ上げた子供は保母の養育を受けて、一定年に達すると、學校に入れて教育をし、頭の良いものは上級學校へ入れて勉強させ、他の者には夫々職業を與へてくれるとのことです。又無料の産婦病院もあります。生活力の無い妊婦を收容して、無事に出産させるのであります。

支那の中にも、かくの如き施設があるのを始めて知つて感心致しました。

奉天の北方に北陵といふ所があります。此れは清の太宗皇帝の御陵であります。其の規模の宏大なのに先づ驚いてしまひました。松頼絶えざる静寂の奥津城に、碧巖、黄巖を支ふる朱塗りの柱。極彩目を眩らす斗拱、虹梁。さては彫刻。其の配合の妙現代の科學に照して一分の誤も無いと言はれて居る幾何學的對稱。誠に當時の文化を物語つて居ります。

時に九月十三日。乃木將軍が自刃なされた日であります。私は此所に將軍が露軍を追散らした當時を偲びまして、感慨無量でありました。

其れから他の事ははぶきますが、我々は此所から下つて關東州へ入りました。

丁度高粱の時期でありまして、正に實らんとて居ります。滿洲の原野は廣々として、まことに平らな如でありまして、一物のさへざるものとてありません。地平線は正に高粱の果であります。高粱は鐵道沿線千米以内へは植えさせません。

午前十一時頃鞍山に到着致しました。此所から電車で大孤山に向ひました。大孤山は高さ二百米、長さ千米の全山鐵礦からなつて居ります。此所の鐵石は三十五。六パーセントしか含んで居りません。五〇%以上の含有量が無ければ採掘は損であるとの事でありまして。其所で日本人は色々考へまして、梅根式選鋼法を用ゐることにした。それは液體酸素で鐵石を崩して之を粉にし、更に熱を加へて八百度位にし、之を磨つて粉となし、之れを水に流して鐵分を磁石を用ゐてすひつけるといふ方法であります。此所には選礦所がありますが、之は世界有數なものであります。

其の晩は湯崗子といふ溫泉旅館へ泊りました。宿屋は對翠閣といふので、部屋は非常に綺麗でありましたが、庭を見ると草は

茫々と生えて居ります。所謂支那式と云ふのでありませう。

翌日大連へ入りました。大連は世界有數の港であつて、滿洲の豊富な種々の物産を運び出す所でありまして。日露戦争以前は小さな僅か數十戸に過ぎない所であつたのが今やかくの如くであります。先づ忠靈塔に參拜致しました。此所は我が兵士が大連に上陸して第一歩に參拜する所であります。次に旅順港を見ました。思つたよりも小さな所で、此れが彼の要害堅固な要塞地であつたのかと思ひました。

二〇三高地へ登りましたが、旅順の全景は一瞬の中に收められます。頂上に於て、つぶさに戦績を聞いた時は、東雞冠山堡壘の占領に於ける激戦と共に、皇軍の將卒が全く身命を賭した、勇猛果敢の行動、日本魂から迸り出した火の出る様な戦況に對して敬虔の念に打たれて、首は自ら下り、涙は自ら湧出したのであります。

水師營も見學致しました。庭に一本棗の木のある、彈丸のあと夥しき舊跡を見て、千古の名將乃木將軍とステツセル將軍の對談を偲び、誠に感慨無量でありました。

奉天に再び歸つて、更に撫順炭坑を見學致しました。其の最も有名なのは彼の露天掘であります。この話は大概諸君は聞いて居りますので、省略致しますが、其の採掘坑の跡がパナマ運河の三倍にもなつてゐるさうであります。其の偉大さが分りませう。横に聳える三角山の麓こそ、去る一昨年九月二十日に、匪賊の襲來に逢つた、本校先輩である採炭所長渡邊君が亡くなられた所でありまして。誠に感涙に咽びました。

當時の話聞きますのに、夜九時頃楊柏堡附近に匪賊が襲來したとの話が出たとの事ですが、渡邊君は他の人が止めるのも聞かず、役所から勇敢にも自動車で三角山麓に行き、自動車を下りると共に、匪賊の爲に、つき殺されて、全身十七箇所の槍傷を受けて、あへなき最後を遂げたとの事であります。渡邊寛一郎君の爲に、遙かに敬意を表しつゝ、無限の感に打たれて、此の地を去りました。

翌日新京へ入京致しました。新京は滿洲國の帝都であります。事變一年前の昭和五年は九萬の人口しかかつたのが、現在は人口十五萬の大都會であります。將來の都市計畫としましては百萬を目的として居りましたが、さしあたり、五十萬を目標に進んでゐることとあります。

九月二十日午前八時を期して、康德皇帝に拜謁をたまはりました。此所で聞いた事であります。満洲軍である靖安軍の兵士には剣をつらせないとす。つらせると賣つてしまふのださうです。満洲國は満洲民族三千萬民衆の要望に依つて生れ出たものであります。我が國の力が與つてゐることは申す迄ありません。聞けば満洲國の統帥權は我が關東軍にあるのださうです。しかし満洲國は立派な獨立國であります。それ故に、朝鮮の様に、我々は考へるべきではありません。此れを併合しようなど、思つてはいけません。將來之をしつかりと守護して行き、東洋平和の爲に、王道樂土を此の地に敷き、更に世界平和に資する覺悟が必要であります。

新京以北は北鐵であります。此の車體は實に不快である。全く彼等ロシア人の個人主義を表して居るものである。何しろ一くぎりの箱の中へ、六人づゝ入れる様になつて居り、中から錠が落される様に出來て居る。

その日は丁度海軍の練習艦隊が、我々と同じ汽車に乗り合せましたので、飛行機八十臺が翼を並べてハルビンまで飛んだ。あたかも我々を歡迎するかの様で愉快になつてしまひました。

ハルビンに着いて、直ちに沖、横川兩志士の碑に參拜致しました。

ハルビンは人口四〇萬の大市街であります。流石に國際都市の名にそむかず、市街殷賑を極めて居ります。云ふまでも無く露國の勢力は無く、満洲國の治權下にあります。此所では本校第十一回卒業生國分醫學博士が喜んで歡迎してくれました。尙此所には大正十一年卒業の田島仲君も居ります。國分君は現在滿鐵病院長であり、堂々たるものであります。我々一行の事に就ては彼の地の新聞が非常に歡迎してくれて、銘々の姓名や宿泊所まで報道したので、何處に居ても知れたのです。その時はハルビンでは市内だけでも匪賊が三十名許居るだらうとの事でした。夜は危険なので、誰でも一人では外へ出てあるきません。

翌日午前十一時、ハルビンを立つて、新京に向ひましたが、生憎此の汽車には、日本の護衛兵が乗つて居らず、新京の少しこちらに、匪賊の巢窟があるといふ事は、前々から聞いて居りましたが、丁度仲秋名月の前の晩であつたので、大きな月が東の空から暗々と上つて、彼の大原野を照らし初めましたときは、其の壯觀に我を忘れて眺め入る中に、新京へついでしまつた様な譯であります。

一體北滿の道路は非常に悪い。大抵馬車は五頭立てで、漸く此の惡路を通行する様な有様であります。之を朝鮮の道路などに

較べたら、比較にならない。こゝに文化は道路より始まると痛感致しました。

新京に於て一同解散致しました。

我々は五十一名の團體となつて、北平に向ひました。團長は浦中の今井校長でありましたので、私には大變都合良くありました。

途中を總て省略して直ちに北平の話に移ります。北平はさすがに、支那の昔の都であります。人口百二十萬、大廈高樓軒を並べて居ります。

私達はかねてから、さだめし此所は、排日氣分の濃厚な所と想像して居りました。運悪くすれば、頭の一つや二つはなぐられ、位位事はあるだらうと覺悟してゐました。所が豫想は反對で非常な親日的であります。元より我が國の威力に對する親日で、所謂重壓に對する親日であります。私は我が國威が徹底的に北支に及んで居る事を見て、我が國に生れ出た誇を感じると共に國は強くなければならぬと切實に感じました。

北平から天津に至る、北方の或一線を劃して、萬里の長城に至る地域は、則ち戰區であります。之れは熱河戰の時に日支協定になつた停戰區域であります。凡そ我が九州位の面積を有し、此處は領土は支那の領土でも、支那の治權の及ばない所で、どちらかと言へば、我が國の威令の方がよりよく徹底する處であります。

北平内の宮殿、天壇等各地を參觀致しまして、その建築の優大、壯麗、其の規模の宏大なるには唯々驚くの外ありません。乾隆皇帝の建立したと云はれる玉泉山に於ける大理石の塔。更に玉泉山の全貌、或ひは萬壽山の全景。何億の財を投じた事でありませうか。

彼の有名なる丁汝昌が、軍艦の建造費として國民の膏血をしぼつて貯藏した、六千萬圓の金は、西太后の隱居所として、萬壽山諸建築物の修繕費に使用し盡されたと云ふ事であります。

爲政者は一般國民と城壁を高く設けて、交通を遮斷し、享樂に耽つて、國防を忘れたるの感があります。支那今日の情況眞に宜なりと云ふ可きであります。

貨幣制度も極めて紊亂して居る様に思はれました。賻錢賻札が非常に多い。初めての旅客は之に對しても一苦勞であります。

其の外同じ一圓の銀貨でも、質によつて或は一圓に或は八十錢にしか通用しないものがあります。銅貨の如きに至つては、其の計算が難多で私など良くだまされたものであります。

天津に於いては、守備隊司令官梅津中將に御目に懸りまして、其の參謀酒井大佐から一場の講演を承りました。時間の都合上一切を省いて、其の一節だけを諸君に御傳へ致します。

支那人は實に金錢に對して、執著深く、殆ど身命と何れかと疑はるゝ位の感じがするとの事であります。例へば上海の或渡船場で、一つの船に餘り多數乗り込んだ爲に、其の船が顛覆した事があるさうです。さうすると其の船を目懸けて、四方から船頭が集つて来て、溺れる人に救ひの竿を差し出して居る。然るに其の際に於て指を二本とか三本とか出して、手數料の取引をして居る。而も將に溺れんとする人は、水中に於て猶且つ指の少なき所を見定めて其の手に救を求めるといふ事でもあります。

或は嘗て大總統たる印綬を帯びた黎元洪が、今ではセメント會社のマネージャーをして居るさうであります。其の黎元洪がチップの分け前から、ボーイと掴み合ひの喧嘩をしてゐたことを、酒井大佐が見受けたこともあるとの事です。

猶又一般支那人は國家と云ふ概念無く、誰が支配者にならうとも、自分等の都合の良いものならば安んじて居る國民であります。窃盜は非常に多く、白晝仲上にある人が後から帽子を盗まれたと云ふ珍談もあります。時々匪賊の襲來を受けて生命財産の危険に曝されることもあります。國家の秩序が成立せず、屢々國內に動亂が起つて、その都度に、多少に拘らず災害を受けるのであります。支那人が國家意識を失ひつゝあることも亦故ありと云ふべきであります。

思ふて我が國を見ますと、私共は如何に恵まれて居ることでありませうか。

我が皇室におかせられては、畏くも極めて御質素に渡らせられて、深く國民を愛撫せられて居られます。我が國に彼の紫禁城とか、玉泉山、萬壽山に相當する金殿玉樓の無いと云ふ所が、我が皇室の有難い所と存じます。

三千年來私共の血液の中に傳つた、尊皇愛國の至誠は決して偶然ではありません。

例へ僅かに膝を容るゝに安んずる小屋に起居しても、絶対に生命財産は安全であります。

凡そ宇宙に生存する程の人が、寸時も無くて濟ませられない空氣の有難さを忘れて居るものであります。廣大無邊の親の御恩を打ち忘れて、他人から得た一握りの米の飯に隨喜の涙を流すものがあります。

一度眼を支那に走らして我が國を振り返つた時に諸君は、我が國の有難さをしみじみと感ずるであります。而も非常時の響きは我れ等に益々警戒を與ふるものであります。諸君が眞に日本精神に生きて、質實剛健の意氣に躍動する時に、我が國は愈々強く、所有難關を突破し得るものと存じます。

速記者 講演部委員

五	丙	高橋	暉良
五	乙	川邊	岩太郎
五	丙	青木	正夫

記念出版の理論

大和久伊平

内藤博士、狩野博士、岡倉氏及び最近のものとしては佐々木信綱博士などの古稀祝、還暦祝、或は退職記念等のために、日本にも記念出版なるものが近頃續々現はれるやうになつた。一體この記念出版とは何時何處に始り、如何にして發達したか？即ち記念出版の理論といつたやうなものをこれから書いて見たいと思ふ。

日本語では簡単に記念出版といふが、英語ではこれを Homage volume Studies Anniversary papers. 獨語では Festschrift Festsche. 佛語では Melanges と云ふ。

記念出版の目的としては前にも述べた通り大體ある學者の古稀、還暦、在職の年數、研究の完成等を祝福し頌德する意味で、廣く世間の學者名士等より各々の研究論文を募り、これをもつて纂集するものである。種類としては文學、言語學、自然科學、哲學、經濟學、歴史學、法律學その他いろいろあるが、こゝでは便宜上文學及び言語學方面よりの記念出版を論じて見たい。

(一) 記念出版の地理的分布

記念出版の分布を地理的に見ることは同時にその國々の國民性をも示すものであると思ふ。先づ今までに出版せられた總數はモーレー表に依れば百四十有餘で、その中獨、墮ですでに八十三種を占めてゐる。更に國別に見ると、(一九三四年七月現在)

獨逸 五七 佛國 一六 米國 二〇 伊太利 五 英國 二 北歐諸國 五

右の割合は獨逸國民が如何に謝恩心と好學心に富んでゐるかを物語ると同時に、英國に於て驚くほど僅少なのは極端に個人主な國民性を如實に現してゐるといひ得る。

(二) 記念出版の歴史的發達

東洋に於ては早くから所謂人倫五常の道が啓け従つて君臣子弟の關係も厚く、この種の出版も比較的はやくから發達してゐたらしい。彼の論語も孔子の歿後その弟子たちが、恩師の遺言を集めたものである意味に於ての記念出版であるがこの記念出版の起原なり發達なりを學術的に取扱つたものは古今を通じて東洋にはない。今これを調べようにも上野圖書館や日比谷圖書館で探してこの方面に於ける確かな研究書がない。止を得ず歐米に於けるこの種の研究によることにする。

歐米の研究によると多少の議論はあるが、一八七九年に獨逸のゲツチンゲン大學でのヘルマン・ザウツペユの古稀祝記念出版が最初であるといはれてゐる。獨逸のゲツチンゲンはこれより十五年以前に既にこの種のものととしてリトシエリがある主張してゐるが、この説はともかくとして、この頃より年を逐うて盛になり數を増して來たことは事實である。モーレー氏の研究によると一八八〇年から一八八九年に至る約十年間に五、一八九〇年から一八九九までに二十一、一九〇〇年から一九〇九年までに三十、一九〇九年から一九一九年までに三十五、一九一九年から一九三〇年までには四十、といつた數で記念出版が世に現はれた。この統計によつても記念出版は加速度的に増加してゐるのが如實にうかゞはれると思ふ。記念出版は又數が増加するにつれて嚴然たる一學科となりつゝある傾向を帯びて來たのである。

(三) 記念出版の編輯の形式

いやしくも記念出版と名づけられて世に公にされた本は、その表紙を開くと殆ど約束したやうに「彼の知人或は門弟、同僚より何々教授、何々博士に獻上す」といふきまり文句で始つてゐる。中には「世界の崇拜者及門弟より彼に獻す」など記された毛色の變つたものもある。イスパニヤの大歴史家ラモン、カザアル博士の古稀祝記念出版がこの例である。この他種々の種類にわたり、色々の題目を見つけて纂集されるが、こゝに不思議な現象としては、何事にかても世界一をモットーとし奇抜をよるこぶ米國が、この記念出版に對しては保守主義をとつて平々凡々な題目の下に出版してゐることである。

(四) 記念出版をされる學者とその出版の時期

記念出版をされる學者は之を從來の例に徴して見るに、その殆ど全部が大學、専門學校に關係を有する、即ち大學、専門學校の教授たるか又はかつて教授たりしかの學者に限られてゐる事實を發見する。従つてこの種の學者以外には如何に大學者であつ

ても未だかつてがゝる計畫を受けた學者はない。エヂソンにせよ、マルコニーにせよ、彼等の偉大な學者たることは何人も是認せざるを得ないに拘らず、この恩典に浴してゐない。理由は他なし、彼等の何れもが大學、専門學校に何等の關係を有せざる爲である。これを思へば「記念出版は實は第二流學者の浴する恩典であり、學校教師の机上の裝飾にすぎず」とパウエル、マイヤー教授のいつた言もうなづけるやうに思はれる。

次にこの出版の時期であるが前期百三十有餘種の中、還暦祝の三十二、古稀祝の三十三を最高とし八十才の祝の四、七十五、六十五、五十、五十才などの祝が各々二種宛ある。記念出版は歐米では六十才即ち還暦祝が中心となつてゐるやうである。その他在職年限の記念出版では廿五年在職の祝が一番多く、次で卅年記念、短きは十年などの例も稀にある。彼の M. Mellet の如きこの例である。この好對照ともいふべきは米國ハーバート大學ギリシヤ語教授グドーン博士の在職四十一ヶ年の記念出版でこれなどは非常な長年月の方であらう。記念出版の時期が主に還暦祝とか、在職祝などに限られてゐるため、この記念出版を受ける人は主に老人が多い。又然あるべきだが彼のイスパニヤのペラヨ教授は年僅か四十三で在職二十年記念の出版をされた。これなどは實に世界中この方面での最年少者であらう。

歐米に於ては教授の退職記念の出版は少い。又歐米に於ては記念出版をされる學者中偉大な人は甚だ僅少で殆どなしというてもいふ現象がある。この原因を考へて見るに、洋の東西を問はず其の偉大な學者は常に非社會的で消極的であり従つて華々しく知人門弟同僚などに擔ぎ上げられるのを欲しないといふのが主なものではないかと考へられる。有名なパウエル、マイヤ博士は記念出版の寄稿を懇望されても、決して之に應ぜず、又知人門弟より記念出版をして獻ぜんとしても固く辭したといふことである。伊太利のフロチエドヴィデオ、英國のフリツモリス、ケリーなどもこの類の人であらう。

以上論じて來たことより、記念出版の缺點ともいふべきを擧げると(1)敬虔にして崇高なるべきこの記念出版が往々無價値で献上された學者に却つて不愉快な感を抱かしめるものがあること。(2)記念出版が屢々その時の義理一片に編輯されるので、圖書として貧弱な内容なるもの多きこと。(3)寄稿者がある種の虚榮から廣く世界中に求めるので、印刷に間に合はず、従つて裝訂上不體裁なもの往々見受けられること。

(五)記念出版の倫理。

記念出版に種々の缺點あるを發見する以上、記念出版の倫理とか、道德とかの必要が自然に生じて來よう。今これらを概括すると、(1)記念出版を捧げられた學者は、是非自己の専攻學科については全世界の偉大なる先覺者として、自他共に許すだけの資格を條件とする。(2)彼は又偉大な學者たると同時に老練なる教育者たるを要す。(3)以上の條件を満足せしむるが爲に是非とも年齢六〇才を越えたることを要す。現に佛國の如きは六十五才を以つてこの條件となすときいてゐる。(4)その寄稿者は自己の門下同僚を主とし、他に求むるならば必ず同じ専門又は同好の士たるべきこと。單なる朋友知人等は絶対にさくべきこと。(5)編輯にあつては權威ある論文のみを撰擇すべきこと。(6)出版物の量は普通一冊三、又は四〇〇頁とし、四五冊にて完成するを限度とす。(7)出版の費用は私費或は所屬學校の出費によるのであるが、それは何れにてもその場合に應じ、その出版は商人の手を経るよりは、所屬學校の出版部に任ずる穩當とす。以上の諸點を充しても尙缺點あることはまぬがれないであらうが、それは人間業の常としていたし方なきことで尙一その研究に俟つのである。

記念出版につきいさゝか書いて見たので不徹底であるが、これも他日の大成を期してゐるのである。

帝美なより

四〇

長谷川 宏

秋が深まると昨年の今頃を思ひ出す。私はその頃校友会報の終りにある駄文を書いてゐた。それを思ひ出すと私は厚顔を恥ぢずによくあんなものを書いたと、他人事の様に見えるのである。考へてみると居ても立つても居られない様な焦燥に駆られるのである。感情的なものを嫌つて居ながら、さも自分の文章がすさまじいものの如くに感情的であつたのである。單にあの文は私のセンチメンタリズムに過ぎない。單なるロマンチックな興奮に過ぎない。あれではメモにすらならないのである。

これだけ云ふと既に前文の辯解は済んだつもりである。あまりにあつけないけれども、あれだけの長さのつまらない意味を評し去ればそれだけに盡きる。これだけではつまらない何の價値もない。この上に立つて少しく訂正とでもいつた——今の自分の意見を述べて誤りを正してみたいし、缺けてる點を補つてみたい。あの文は感情的であることに共通する初頭にばかり力を入れ過ぎて終へ行くに倦いてしまつて尻きれトンボみたいに全體の權衡がとれない。全體の力のつり合ひが取れてゐなければ飛べないのである。トンボが飛べずに川端の草に止つてゐるだけではトンボそのものの生命の鼓動は聞かれない。單なる情緒は草の葉に下つたトンボによつて

醸し出されはするかもしれないが、トンボが食欲を満足させその神から與へられた生命を發揮するのは大空を飛ぶことである。いくら翅が強くとも、翅を動かす筋肉が強からうとも身體の全體がすり合ひよくコンボーズされてゐなかつたならロダンにはなつてもブルデルにはならない。印象派にはなつてもセザンヌにはならない。いくら大空を飛び交ふトンボが人間の如き心は持たないとして彼等は無意味に飛んでゐるのではない。況や空の青さに陶醉しセンチメンタルな思ひにふけてゐるのでもなく、一部の人達がすぐ考へる様な不道德的と修身の先生に叱られる様なそんなことでもない。其處に道徳も因習も法律も動かすことの出来ぬ眞實がある。その眞實のあるがまゝの姿を掴み、その姿のもつ有機的なコンストルクションを見つけ出し表現するところに我々の仕事があり生活がある。こんな意味で我々の生活の一端であるべきこの一文も母校への通信として、最もよく我々の生活をあらはすことの出来るものとして、役に立つであらうと思ふ。

昨年の文の如くこの文も、私の望むところの立場で終始できないに違ひない。私の希望はいつも私の仕事より高いものであるからである。といつてこの希望は理想主義といはれるものでありたくない。私は無から有が生れ出るとは少しも考

へてゐないから。

これではまだ不十分だけれど藝術家の立場にも觸れ得たと思ふ。そこで私は藝術は心のなぐさめであり娛樂であるが如く考へてゐる人のその考へを絶対に間違つてると云ひきる。少くともなぐさめ等いふものではない。我々は深刻な人間の姿自然の姿におち氣を奮ひ、嚴肅にこそなれ決して樂しみなぞ感ずることは出来ないものである。こゝに藝術と大衆物の大判然たる區別があり得ると思ふ。直木三十五の死は文壇の大関候のとさへ云はれた。それは彼が大家作家であつたがためであり、藝術家であつたがためであるかどうかはわからない。私が前文を書くにあつて非常に感情的であつたといふ外にまだ二三のわざわひ——とりたてて、云へば限りなくあるがまづさし當つて——私自身の持つてゐるペダンチックなものと以前から間違つて覺えてゐた先入意識といふやつがその優なるものであらう。

知りもしないのに知つたふりをする知つたかぶりである。知つてゐても云はなくてもよいのに云つてみたい。何か人の知らない様な事を知つたかぶりをすることは私の如き凡人にとつて優越感を抱かせるものである。そして後でいつても後悔してゐるのである。二五分の一の勾配だとかウンダバアルだとか今でも意味がわからないのである。ウンダバアルといふのは多分伊太利語か佛蘭西語のワンダフルの意味であらうと、この語を知つた本の中から解釋できる。前者は輕井澤へ下りた道路工事の技手から車中で聞いたのであつて、それをそのまゝ借用したのであつて思ひ乍らその意味を調べてみてない。變な翻譯口調を使つてみたこと等はその頃

讀んだばかりであつた宮坂勝氏の諸文の影響するところであつたらうし、處々で演説みたいにみえを切つたりしてゐるところも又それ等の影響と私自身の新らしがつてみた處なのである。

最後に私はこの點を重大なものとして考へてみたい。我々が今まで學校で教はつて來た歴史的事實について、其等がどれだけ眞實を眞實としてゐることを拒んで、あまりにも歪ませて述べゐることである。眞實は我々に生きてゆくべき道を明示し暗示してくれるものである。決して我々はそれを知つたからと墮落して生活意欲を失つてしまふ等々のことは有り得ない。と考へるよりはそれを書いた人が何故か、この様にまで教へ込まねばならぬとしたのか誠にいぶかしいことである。例へば弓削道鏡とか菅原道實とかその善惡と判斷をつけられてしまつた人、その行為等もその反對者、共に藤原氏によつて作されたからくりひつかかつてしまつたに過ぎない。一つの行為、一人の人間を述べる際にも、それ一つの姿を見ないでその時代の空氣、人々の思想程度、政治經濟の狀態、眞實に對しての認識程度、あらゆる方面から考察してみなければならぬことを痛感する。ありのまゝに述べないで無理にも一つの型で押し込めて見せることは我々青年をマナーリズムへ導き入れる大なる罪惡であつて現代の青年一般に於けるが如き行きつまりの傾向は徒らに悲憤の涙を流してはならぬと積極的に覺らぬ道はないと考へたい。過去の事についてくどくど述べても始まらない事だ。で之は之迄でこゝで打切つて次へすゝみたい。

昨年五月關西で来て来たものに對する考は、當時と今では大變なへだたりの感じはしても根本的に間違つては居なかつた氣のするのうれしい氣もするのである。それはこの學校へ来て繪を描いてゐて、美術史をやつてゐて、泌々そんな氣もしてゐる。これは先日帝展をみ、續いて博物館に開催されてゐた古樂面展を見、又昨夜飛鳥園の東洋美術寫眞展をみて、ます／＼その感を強くした。澤山の古樂面、殊に伎樂面、又は百濟觀音や中宮寺の如意輪觀音、興福寺の十六弟子八部衆の寫眞をみた時に、もう一度この原稿を書く前に奈良へ行つてみたくなつた。そして今の考へが此等の偉大な藝術の前にして搖がなかつたならどんなにか嬉しいことだらうと考へてもみた。とにかくこの原稿を書く前にもう一度眼のあたりに見て来て書いたのでなくては、この文は意味をなさなない様に思ふが止むを得ず寫眞を見ながら書きすゝめて行きたい。一寸斷つておくけれど帝展をみたといふことは伎樂面に對照させるためにであつて帝展をすばらしいものだと思ふのではない。おそらくあんまりつまらないものはない。いつかの東京日日新聞で文藝批評家にまでこき下されてゐた。こんなつまらないものが文壇にあつたらどんな雜誌屋だつて原稿を引きうけてくれない。この點で文壇はまだ畫壇より上だ。なんて云はれてそれで帝展の畫家共は口惜しがりではない。彼等は飯のために畫もわからない審査員などいふ老朽物にこびてゐるだけである。少し物臭さを氣をつけたら飯を喰ふ道か外にあるのを忘れて。おそらく帝展なんてつまらないものはないと私が云ふのは、私が帝國美術學校の生徒だから妙な反感から

云ふのであると思はれては困る。誰でも畫のわかる人に聞いてみ給へ。あまり駄文を長びかせて御迷惑をかけても困るから、法隆寺中門の仁王と東大寺南大門の仁王とのこの二つを前文に對して少しばかり書いてみたい。日本ならず東洋の藝術の西洋のそれと異なる點は意動向と行との別れる點、即ち展開點の問題である。西洋の態度は意動向と行動とが等しい長さとして置かるべきものであるに對して東洋のそれは意動向がいちぢるしく進んで行動の中にまで入つて來てゐる。といふのは展開點がいちぢるしく行動の側へよつて居り、意動向が行動より長さを表はしてみると長いわけになる。それは西洋のそれは描きつゝ作りつゝ推敲し得るといふ意向の量イコール行動の量といふことが出来るが、後者にあつてはかうでないことは今更論するまでもないことである。古に於ては西洋も東洋も態度に於て手法に於て似かよつてゐた。日本畫に於ても不透明性の繪具を胡粉で以て盛り上げるが如きは油畫の如き手法である。然るに紙や繪具のこの手法に不便な點を改めないで日本畫はその缺點をます／＼大にするが如き方向へ進んで來た。といふのは東西自然に對する立場を異にして來たことである。あちらでは自然を一定の場所に立つて眺めるといふ如き立場で描き、作つて居り、東洋では自然の中に遊ぶといふ氣持であらゆる方向から自然をみて描いてゐるのである。こゝで藝術のもつ幅の問題に大なる異性のものであり我にあつては行動性の用器畫でかくことの出來ない遠近法が發達して來たのである。この定着と行動の違ひによつて、面としてのものをみるのと線としてのものを表現す

るのこの二つの方法に別れたのである。そして面はプランで塗られることを欲求し、線は筆で墨でひかれることを欲求する。この事は繪畫の例であるが、繪畫のみならず東西兩洋文化の違ひはこゝに根があるであらう。

勿論これは彫刻でも言ひ得る。ミケランジェロと運慶の兩者を比較する如きは、この根本相反する二者の比較は成りたないといふ云へるかも知れないが、少くともこの二方法といふのは單に方法であつて、何を表現すべきかといふ目的となるものとの問題で藝術をみるのが正しいとするならば論なく比較出来るものではあるが、運慶湛慶作のこの仁王は各部分々々を多數の職人が分業で仕上げた工藝的手法の發達によつて作られたもので僅か二十日間ぐらゐで（日數はたしかでない）作り上げられたものであることを誰かから聞いたことがあるし、私も又日本彫刻中の逸品であると思ふし、何しろこの二者を並べて論するだけの素養の私にないことは明白である。とかくこの二者はパロツクなものとしての共通點を持つてゐることは確かだ。

日本の彫刻史は飛鳥時代に初まつて鎌倉時代で終る。飛鳥以前のものは考古學の範圍であり、鎌倉以後のものは工藝の範圍である。明治以後の彫刻は未だ現在のまゝでは――將來はこの限りでないが――未知數と云ひ得るし又、今私の云つてゐる彫刻史へ入れない。そこで飛鳥時代に朝鮮を経て六朝式の手法が傳はり日本彫刻のアルカイックが初まるのである。これは鎌倉時代に至ると技巧の熟練その極に達して此處にパロツクの時代となり、ばつたりと火は消え落ちてしまふわけである。

此處であたかも法隆寺の仁王は和銅四年の作といはれて居り白鳳時代として云へるものであらうし、東大寺のは鎌倉時代であつてアルカイックとパロツクにあたるしこの二者を比較して考へることは、なか／＼興深い問題である。

東洋の繪畫に於ては昔から近世に至るに従つて線に速力がついてくるといふことが云へる。室町時代の雪舟の繪をみると禿筆を用ひて非常な重壓を以て畫卷を終始してゐる。私は天の橋立圖や山水長卷をみて、殊に後者は雪舟の全神身をこめて引いたと思はれる重壓をみることに出来る。これが江戸時代に至り探幽や應舉、蕪村等になると重さが減じて、いちぢるしく速さが増大してゐる。應舉や蕪村は既に禿筆は使用しなかつたし、應舉は筆に速をつけるためには繪を横にして描いた部分もあると云はれる。蕪村の筆は長くて細い羊の毛であつたといはれてゐる。こんなことが彫刻にも言へる。この二つを比較して後者は前者に比して線の速力の度がはなはだしく異なるのを感じられる、と同時に重さに於ても之が云ひ得られる。

法隆寺の仁王は向つて右、東方のが赤色であつて左方、西側のものは黒色である。共に塑像であり修理の回数も多かつた様であるが、黒色の方が割合當時の面影を偲ばしむるものではないかと思ふ。私はこの黒色の方が好ましく感ずる。この仁王は五重塔内の塑像と同年代のものであり、塔と金堂の裳階もこれと同年代であるとのことである。塔内の塑像と塔の裳階と、金堂の壁畫もこの時代の作であれば、それと堂の裳階と共に何等か關係があるとも考へられる。塑像や壁畫の保存の爲に裳階がつけられたとの説があるが、二者共に初層

は扉の他は壁か或ひは連子窓であるからこんな關係からこの説を裏がき出来るかも知れないが、これについて深く考へてみたこともないし、よく實地にみた後でないといふことは云へない。美術史的なことは繪を描くのと違つて又むづかしいものである。到底私には満足出来る様なことはどうも書けない。

藝術の表現について一寸考へてみる。劇で云つたなら體中を眞赤に染めて舞臺中血の海にしてのたうち廻る死の表現よりも舞臺裏で一發の銃聲をひびかせてその死を表現する方法をとつた方がより藝術的である。兩手をあげて絶叫し身もたえするアメリカ映畫の女より、我子の亡靈を、ちよつとふりかへつて見るだけの梅若の母の方がどれだけ我々を満足させるか。前者でないといふ大衆をうならせることは出来ぬがしかし一點に他のすべてを含まして、その幅のある一點をよりよく生かすのが藝術の表現である。そのことをこの仁王へ持つて來てあてはめてみる。

私が東大寺の仁王にベストの若しくはグッド・ツの讃辭を授けたことは先づ第一にこの點である。もう一度奈良に行つて確かめて安心出來たらうれいことである。寫眞の比較では判然と云ひ切れ得ぬかもしれぬ。第二には私が歴史の教科書にとらわれたといふ先入意識である。歴史の本には之の寫眞が掲載されてあつて相當な讃辭がかゝつてあつた。第三に云ひたい。人によると全々運慶や其の他鎌倉時代の彫刻をつまらぬものとしてしまふ人がゐるけれど、私はその事はある點までうなづけてもなかつた。いゝ處があると思ふ。我々學生にとつては法隆寺のものと同じ位に學ばねばならぬ點が

多くあると思ふ。東大寺の仁王は前者に比して非常なスピディな感じがすることは總ての點から比較し得られるだらうが正面からみると彫刻は側面も背面もあるけれども、これ等は前面からのみ見られることを豫想して作られてゐるのであらうし、門の中にあるので側面からは見るよしもないし側面の寫眞も私は持つてゐない。全身のプロポーションに於て後者はいちぢるしく頭部が體に比して大である。纏つてゐる天衣の曲線を兩者比較してみてもよくわかるであらう。盛り上つた筋肉と筋肉との線の連結、腰に纏つた衣の皺や衣文の線の速力、土と木といふ素材の違いから来るが、さうでなく顔し出される速い感と重い感との異りは此等のものの比較にもあると考へてさしつかへあるまい。私は判然と申し上げてみると東大寺のよりも法隆寺中門の仁王の方が好きであるといふことである。

前の時に鑑みて今度はこの原稿を一晚で書いてしまつた。説明が不十分であつたり、書きたいことも書き落してあつたりしてこれではよく書けつことはない。が田原先生には此方からお願ひしたことはあるし、日限にまでと思つて急いだりあまり枚數を多くしないでと先生に云はれたこと等考へて不十分だけれどこのくらゐで止めにしたい。法隆寺についてもつと書きたいけれど又奈良を見て來て後でないと心細い。日本の畫壇はこれからどうなるか知らぬ。だかいゝ意味で白鳳時代へかへらねばならぬのでないかと思ふ。新聞になぞよく出てるバルザックにかへれといふ言葉みたい。飛鳥末期から白鳳へかけての彫刻は實にすばらしいと思ふ。百濟

觀音、中宮寺如意輪觀音、藥師寺本尊、或ひは聖觀音等とすばらしいものである。日本藝術史の中で、否世界のその中で、第一列に並ばせらる此等である。法隆寺の五重塔内の塑像の坐像なども忘れることの出来ないものである。とにかく白鳳時代はすべてに於て生氣發らつとして人間が皆動いてゐた。萬葉集でも白鳳の歌を除いたらその生氣を失つてしまふだらう。壬申の亂といひ、あらゆる方面に生氣滿ち々々て我々祖先は自己の感情に目覺めて居つた。はたして今の時代に我々の目覺めねばならぬことは何であらうか。少くともそれは鎌倉の彫刻でなく、もつとアルカイックな心から出發しなければいけないと思ふ。

我々青年が學校から世の中へ進出した時に何かしら清新なもつと眠つてゐる部分へつき込みたい。そこにこそ青年日本の飛躍の姿がある。と、かう云つてこの稿を結びたい。

一九三四、一一、一〇

藝文

短文・短歌・俳句・詩・短篇

短文

小品

曙の空 五甲 新井 利雄

鶏鳴競ひて曙をつげる頃、曉の氣配がひた／＼と迫ってきた。あゝ眞黒な國境の連山がちり／＼と高潔清純な肌を表してきた。霜枯れた木の葉が暗い陰をのこしてひら／＼と散る。天地は寂として音もない。お、曙だ！静々と茜さす黎明の空の美しさ氣高き。そしてそれに配する發達たる、紫雲壯嚴といはんか崇高幽玄といはんか始と筆舌に現し得ない美であ

落日の空

それは燦然と輝く金縷に優美なる刺繍を配したる織物である。夕焼の空の美しさは少年時代の思ひ出と共に永久に自分の念頭からは去らないのであらう。あの落日こそ我等に言ひ知れぬ神秘感を抱かしめ、俗事を超脱した聖人の知くに思はせる。時たちて漆の様な眞暗な夜、中空高く明滅する恒星の集ひ、牽牛織女の二星を

我が人生觀

五甲 原 一郎

人生は不可解と云ふか、然り人生は不可解也。然れども人生自ら道あらざる可らず。道とは何ぞや、必然に人の歩まざる可らざるの人生過程也。人は何かなれば生くるや。唯生れしが故に生くるのみ。然も生くる以上は何等かの意義を發見し、價值を認識せざるべからず。

宇宙は有機體にして常に向上し進歩する人間の使命は何ぞ。此の大宇宙の一契機たるにあり。我々の人生の意義は、人生無上の道は、要するに向上の二字中に盡く。己の向上か「全世界の向上」かに於て。それは自己の完成を意味し、自己の深き反省精進を意味する。幸福と光りと眞理とを云ひ、宇宙の完成を指す。

若し人生から「よりよき」なる語を引去れ。其處に何等の光明の存するぞ。英雄も偉人も學者もなく、崇高なる人格も、雄大なる思想もなく、文明もなく、個人の進歩満足快樂なく、世は遂に光明と勤勉とを失ひて、腐敗墮落の死界となり去る。

我々は人間として生れ落つるや、向上の彼岸を目指して來た、例へそれが無意識であらうと。向上のみ人生の終局點であり、人生の光明である。然して、自己の完成はそのまゝに、宇宙の完成であり宇宙を悟つた時己は完成する。我々は唯

向上の努力に人生をみ、自己の完成に生を知る。

我々は、向上の途上に、失敗を恐れ、結果に迷ふを要しない。其處には最善の道がある。信ずる所に従つて、汝のベストを盡せ。その失敗は向上の一階段なり結果せるものは進歩の一成層なり。努力に失敗はない、ベストに悔悟はない。恐怖すべき何ものもない。

彼は、尊き生を終るであらう。彼は人をして怠惰より立たしめ、人をして努力の何たるかを知らしめ、人をして人生の眞を悟らしめ、彼の生命は不滅である。彼は或は、人に何をも與へなかつたであらう、然し、彼が此の天地宇宙の無限なる中に、大きく投入せる無音の生命力が無かつたと、誰が言ひ得よう。

名月の由來

五甲 松崎 久
一月(January)ジェーナス(Janus)は

前と後とに二つの顔を有した不思議な神様であつた。そして左手にはいつも鍵が握られて居た。ローマの人々は此の神を初めと終の神様としてあがめた。それ故に何か事を起せばそれがうまく終りを告げる様にとこの神様に願ふのが常だつた彼は又天を守る門番でもあつた。それだから彼等は彼等の門や入口をも守つてくれる神であると信じた。そしてジェーナスの神殿には十二の扉が付いて居た。過去を振り返り未來を考へる年の初此の月に、この前と後を見る事の出来る神の名を取つて付けた事は宜べなるかなと言ふべきである。

二月(February)二月はフェブラ(Febur)と呼ばれるローマの潔めの式の名から來たものである。従つて二月は一年中の最も清淨なる月を意味する。

三月(March)「恐怖」と「奔放」なる二頭の馬に鞭當て、戰車を驅る軍神があつた彼の矛先はきらめき、鐵は打ち鳴り、兜

には常に陽が輝いてゐた。彼とは戦ひの神マルス(Mars)である。然し彼は單なる戦ひの神であるばかりでなく、日常茶飯事の願ひ事も聞き入れ、又特に雨乞ひの神でもあつた。

ローマの兵士達は戦に臨む前には必ず籠の鳥をマルスに捧げて、鳥に餌を與へ鳥がその餌をついばめば勝ちで拒めば負であるとして戦ひの占ひとした。三月はこの神の名より來りしものである。

四月(April)ヒールリル(April)は春を告げる天子の名である。丁度佐保姫といつた様に。そしてその意味は「開く人」である。この月は全ての者が生れ、芽ぐむ月である。ローマ人はこの月が來ると、「物皆開く」と言つて喜んだ。故にこの天使の名をこの月の名としたのである。

五月(May)アトラスは地球を支へて居る神であつて、七人の姫を持つてゐた。この七人の内の一人のメーア(Meria)が五月の月名に呼ばれてゐる。

そしてこの七人の姫はジュピターの手に依り空の一隅に集められて星となつてゐる。昂宿の星がそれである。然し七つ目の星は見えない。何故なれば彼女一人は結婚したがその結婚に依り夫は永久に石運びの運命にをかれた。彼女はそれを悲しんで常に顔をかくしてゐるからである。

六月(June)六月はジュノー(Juno)の名から生れたとも言ひ又、ジュニウス(Junius)の名から生れたとも言はれてゐる。ジュノーは神々の父デュービターの妻で常に孔雀の車に乗り廻して居る嫉妬深い美しい神である。ジュニウスは傲慢で氣位の高い男——いづれにせよ、六月にふさはしい性格の持主ではないか。

七月(July)七月はジュリアス、シーザーが自らの名を月の名としたのである。昔の曆は今の曆と違つて一年は今の三月から始つて二月に終る様な繰り方だつたが彼シーザーは之を一月から繰る様に改め

たが、七月はクインティリス(五番目の月)と呼ばれてゐて、月と季節がうまく一致しないので彼は己の名を取つて七月の呼び名としたのである。

八月(August)この月も昔はセクステイルス(六番目の月)と呼ばれて居た。然し七月にシーザーの名を用ひたからしてローマの人々はこの月の名をアウグスタスの名を用ひる様にしたのである。そして七月が卅一あつて八月が卅日であつては不公平であるとして二月の一日を削つて八月も卅一日とした。故に七月八月だけは月の月名である。

九月(September)セプテムバアは七つの意味である。前述の如く三月から曆の始つた時代にはこの月は七番目の月であつた。それが一月から始る様になつて九番目の月となつたが七月八月の呼び名が變へられたにも拘らず誰も九月の呼び名を變へる者が無かつたので、その儘今でも九月を表す月名に用ひられて居るのであ

る。

十月(October)十月のオクトはOctavation等の語から見て解る如く八月を表すのである。八番目の月である事をしてそれが十月の呼び名である事は九月の場合と同様である。

十一月(November)ノープは葡語に於てはNineの意である。即ちノベンバーは九番目の月の意である事その他は全く前と同様である。

十二月(December)デイセンバーは十の意である。然して十二月の月名である事は九月以後の月と同様である。

今迄述べた月名の由來を見ると、八月までは神の名か偉人の名を月名としてゐるのに九月以後は單に數字の名——しかもそれ等が違つた數字の名で呼ばれてゐるのは何と面白いではないか。

尙以上の内に表れてゐる如く、現今の太陽曆は實にローマ時代より傳つたものである。勿論此の間には改良訂正はあつ

たであらう事は明白である。がしかし一體このローマ曆はどうして作られたか？之は實にローマ曆は單なる輸入品であつて、原産地はエジプトである。どうしてエジプトからローマに傳つたか、此の答は明白である。史上有名なシーザーのエジプト遠征の土産である。従つてシーザーの名が曆の中に取入れられてある事も合點が行かれる事であらう。(一部「曆の研究」より)

心を以て撃て

五甲 大木 義夫

家康公は『臆病なる者の修養鍛錬を経たるは、生れながらにして膽勇の氣象ある者に愈れり。』と天稟より努力の愈れるを、經驗上から喝破してゐる。剣道も同様で生れながら器用なる者より不器用で努力した者が大成するやうである。剣道に『眼を以て知る勿れ、手を以て撃つ勿れ、心を以て撃て』との教へがある。眼

を以て知り、手を以て撃つまでは技なりこれ迄は器用で出来るが、心を以て撃つに至つては技を離れて心の問題である。所謂無念無想の境涯に悟入して初めて出来るものと信ずる。

剣道の最後の目的は死を諦めるのである。即ち大悟徹底して初めてその目的に到達する。道場内の竹刀打ちだけでは、百年修行するとも道の蘊奥を極めることは不可能であらう。

すべからず、大死一番朝鍛夕錬これ努力すべきである。

善 惡

五乙 小澤 允

善惡の區別をつける事は非常に困難な事である。我々の祖先はこの善惡の判斷に悩まれて、どれ程この區別をする方法を得んと欲したのであらう。基督教、佛教、其他の多くの宗教は畢竟するにこの要求に應じたもので、それに關聯せる根

本的精神といふものは、善惡の區別を明瞭ならしめてそれによりて迷へる民を指導せんとしたものに過ぎぬであらう。

人類がこの世に現出した最初には、この問題に對する何等の思想、觀念をも有して居なかつたと同様に、幼き時にはこの善惡の區別は全く立たないのであらう例へば他人の菓子を取つて食べても決して悪いと思はず、或は座敷で小便をしても平氣なのはこの様な條件に基づくのであらう。若しもそれをその儘にして置けば、自覺する迄には人間に於ける過去の歴史に於けるものと同じくどの位か、るか知れぬから、先づ第一に父母が之に關して根本的智識を與へなければならぬ。

小學校に入り道德教育を教授されてそこに徹底せる基礎知識を與へられ、更に進んで中等學校へ入ると、更に進んだ道德的方面を學ぶのである。併し中小兩學校に於てされる課程はその根本に於てそ

の善惡の區別を判然せしむるの一事にある。

人は小學校を出て、中學校に於ける課程を経て、卒業し社會に出たりするとすべてが一人前になつた氣分になつて、善惡の區別などはすつかり解つた様な氣でゐるものが相當多くゐるやうに、思はれるが、併しさうではないのである。人のこれに對する思考は時の経過を追うて無限に進歩發達し、死に到るまで殆どその停滞がないのである。

法律といふものを考へて見ると、それは善惡を判斷するために設けられた單なる定義にすぎないであらう。又それは或問題に關しての一基礎をつつたに過ぎない。

併しかくの如き法律が出來ると、知情意を有する人間として善惡を區別するに一定の理にあてはめてしまふわけには行かぬのである。

此の如く人間が地球上に現出して、先

紅葉

五乙 吉田 章祿

野の花と新に刈つた草とが、香を放つて満天地が一種いひしれないのび／＼としたその美觀はすでにさつて、木といふ木は風露に染められて、或は黄となり、或は紅となり、淡紅となり、褐色となり、褐色となつた。すでに樹として楓でないものはなく山々峰々皆紅錦を張つて、爛

々として觀客を驚かす。霜葉は映えでる様な紅を吐いて其の美其のあでやかさといふものは、春の花にも勝つてゐる。

奥山に入れば山の樹立の繁つた中に、や、葉黄ばみたるもの打交りたるは、錦とはまことに此を言ふのであらう。

山路に落ちては錦の毛氈を敷き、溪の水の上に浮べば、水はあたかも此と戯れる如く、又流れて石にふれ又流れて亂れて衝きあたり、つひには何處ともなく流れさつてしまふ。峯より落ちて來る山風に、紅葉は繽紛として落花の如くに舞ひあるひは雪の如く飄つて、あたかも火の亂るるが様である。風吹く毎に錦は裂けて空にちり、或は谷にしづんでしまふ。今や輝く夕日の光を受けて、満山の紅葉からくれなゐの色にほふてゐる。

或る日の彼

五乙 原口 治郎

彼はぼんやり病室から戸外を眺めた。

静かな小春日和の朝だ。縁側の金盞の水が日光に反射してガラス障子越に室内に入つて、美麗な波紋を映じてゐる。遊絲越に見える土手の上を牛車が通る。突然、柱時計が八時を打つた。彼は時計が鳴るのを念入りに英語で數へた、一年生が發音の練習でもする口調で。時計がゆつくり鳴るのだからさうするより仕方がない。「エイト」と數へ終ると可笑しい氣分になつて思はず微笑した。

實際、長い休學の單調な生活は彼を辛いやりは寧ろ飽き／＼させた。友を考へた、元氣で毎日登校出來る友を羨ましく思つた。授業時間の光景を頭の中に描いた、さうして更にこんな事も考へた。子規は多分病苦の時は自分よりずっと苦しかつたに違ひない、文學的才能ある子規はこの苦痛を巧に俳句なり和歌なりに表したに違ひない。

さうして枕頭のノートに一句作つて見た。

病床の日和に刻む古時計

彼は半ば無意識に枕頭の藥壺を見た。昨夜濁つてゐたのが今朝は透き通つて見える。「あ、藥を飲む頃だな」彼はさう思ふと知らず識らず嫌な氣持になる感じがした、味覺があつた嫌な藥を思はせた、飲み終つても味は舌を中々去らぬ。

仕方なしに壺を取出した。上下左右に振つた、壺の中は再び昨夜の様に白濁となつた。さうして底に沈澱した白い藥物は流動の實驗の時の様に壺の中をぐる／＼廻つた。數回これを行つた、さうして彼は側のお盆の上に置いた。

壺には彼の顔がゆがんだ様に映つてゐる。中では大きな泡が左右の小さな泡をする／＼と呑んでゐる、さうして最後にははねて消える。彼はこの現象を好奇心にかられて見た。分子の作用かなと思つて物理的に解決して見た。又無理無態に歴史社會にもあてはめて見た。勢力家が數多の者を征服して竟には勢力があり

すぎ油断して内亂で自滅する。彼はそんな考へで壘を見つめた。

遅刻

五乙 塚越 貢

「右者某月某日自轉車故障之爲遅刻致候間此段及御届中候也」と云ふ様なものを自分は一體三年の終り頃から、何度父や兄の筆を勞し、幾度學級主任に差出しただらうか。遅刻を一つの罪惡の如く考へてゐた一年生頃、遅刻から受ける恥しさを痛感した二年生頃、それを餘り氣にしくなつた三年生の頃、遅刻の常習犯視せられ「朝禮は遅刻の安全辨である。」などの料簡達ひを起した四年生の頃、修學旅行に遅刻するが如き失態を爲した五年の始め頃。さうした眞面目から生意氣へ、さうくしさと變遷して來た自分の遅刻への考へ。考へ様に依つては、それは萬事に對する自分の心の現れの一つに過ぎないのである。

我々自轉車通學者の遅刻の大半は概ね自轉車の故障、殊にタイヤのパンクに依るのである。それは、少しの廢坊や其の他は距離の都合上、間に合ひ得るけれども、一旦故障を起すと一寸と手間取るから遅刻を餘儀なくせられるのである。

少し早目に家を出る。悠々ベタルを踏んで街道を行くこと二里半、朝の清い空氣の中をトラックが揺れて行く、三輪車が静かなあたりに、快い爆音を立て、來る。自轉車通學者の長閑な、爽かな朝なのである。突然足の下で妙音、次にドロドロガタ／＼と身體に響く。南無三、パンクだ。その瞬間一種不可解の思ひになる。そも一時、直ぐに自轉車屋が心に浮かぶ。石原まであと半道、一番近い玉井の自轉車屋へ戻つて十町。自轉車はよくこんな處で故障を起すものである。そしてこんな場合、決して後へ戻らない。少し遠くても今までの方向へ行く。諦めと自轉車への忌々しさとで、力なく歩き出す。

五二

列を作つて來る小學生達の目迎目送と、解り切つた質問を受けて好い加減馬鹿らしくなる。馬鹿らしさが嵩じて「タイヤが何うならうが、かまふものか、自轉車屋まで乗つてやれ。」と言ふことになる。しかしドロ／＼のガタ／＼で五六米行かぬ内に、不憫さも手傳つてまた歩き出す。學生を滿載したバスが埃を浴びせて行く同級生、下級生、女學生等の顔が今日許りは妙にすましてゐて、全く顔に障る。空のリヤカーが妙に人をせき立たせる様な音をたて、追ひ抜く。「おい、石原迄俺と自轉車を頼む。」と云ひたくなる。

やつと着いた自轉車屋。小僧が又馬鹿に丁寧である。ラヂオがガン／＼鳴る。聖典講義など何うでもよい早い所を頼む。「又今日も遅刻か」さう思ふと憂鬱になる。「遅刻も斯う度重ると、己の信用に關係する。級友の信用を失ふ。善意に解する人と、野次の好材料と思ふ人とある。」斯くする内に「御待遠様。」と出來あが

る。金十錢を拂つて、やれやれと乗る。しかし何時もと別段變らぬ自分の自轉車である。

ひっそりした校門に入る。大聲を上げてゐる一年の眼が一齊に自分を見る。鈴木先生の講義をドア越しに聞いて階段を上る。この場合決して急がない。一歩一歩ゆつくり登る。そして冬ならば外套の整列した、冷え／＼とした廊下を、夏ならば開け放された窓から他のクラスの人の眼が自分の背を射るであらうが、大股に悠然と歩く。ドアの前で一寸と躊躇して、又ゆつくり入る。一瞬全室の目が自分集中して「又か。」と云ふ様に散る。

「自轉車がパンクしまして……。」それさへ今では言はないですまして貰ふ時がある。

立志

五丙 成澤 辰雄

豹は死して皮を留む、人は死して名を

留む。

我々若人は自立自尊の策を立て前途社會の活動を期し、偉名を竹帛に垂れしめんと期せざるものはない。青年は天真爛漫として一生の蕾であり、又この青年時代こそ眞に立志の時代でもある。もし自分が富貴顯榮の家に生れ、錦衣美食に慢心を起して榮華に日を暮し、遂に墮落して遊惰となり、生爲無能の生涯を送り、又自分が貧賤に生れて、汲々として日夜飲食にのみ追はれ、己が境遇の果敢なきを嘆きて、遂に自暴自棄におちいつてしまふ様なことがあるならば誠に悲む可きである。

いかなる人々といへども五十年のはかなき生涯を悠々閑々として、泥上に化するを欲するものがあらうか。今の青年時代を失ひて後、再び志を立つる時期はないのである。嗚呼、頼もしきは青年であり、望あるは青年である。

我々は質實剛健、強く、明るく、正し

く、の校訓を以て、己が志す所の目的に披山蓋世の意氣を以て進み、他日社會に出て、獨立獨歩の精神を養成し、浮世の大浪をけ破り、嶄然として社會に頭角を顯すべき覺悟が必要である。今の我が國の盛衰はひとへに、我等青年の志氣如何に關してゐるのである。我々の任務は重大である。然して今非常時である。どうして奮勵努力せずして國家の爲に盡さず空しく醉生夢死してよいであらうか。我々は苦痛を忍び、艱難をこらへ、刻苦勵精せば何事でも出來ないものはない。もし志を立てず、艱難をせず、徒らに、高大なる望みを起さば、それは夢であり、想像に過ぎないものである。然して、それは「木に縁つて魚を求むる」に異ならずして、立志の道は、努力、耐忍に外ならないのである。

男兒立志出鄉關。學若不成死不還。埋骨豈惟墳墓地。人間到處有青山。

晩秋の落葉

五丙 森田 貞二

日の暮れるのが早くなつて、太陽が傾く頃、紅い西の空に薄黒い雲が漂うて、奥深い空のバランスを保つとき、そこには静かな夕べの模様が鮮かに映し出されてゐる。来る日も来る日も暮れて、いつか見た西の空に淡青く死の如き冷たさをもつて秩父の山々が連つてゐる。すぐ近くの木立にも、うね／＼と続く丘にも晩秋から冬へのしるしが明らかに、はみ出してゐる。

散歩の足もとに亂れる干草にも、今は限りなき晩秋の榮が見えて、それがやがて凋落の姿と化して行くのである。枯葎の幹に巻きついて固くなつて死んでゐる蔓草も、弱々しく葉柄まで染まつた「ぬるで」の葉も、みな萎み行く運命に自ら投じて行く様に、夕陽に燃えてゐる。すーつと木枯が過ぎると、多くの木々

は、おびえる如く、うち震へて、その雑音を一層あはれに傳へる。それは丁度彼等の最後のうめき、此の世への別離を惜しむもののやうに、又淋しませこらへるすゝり泣きのやうに聞える。

さら／＼……うら淋しい葉音に、はら／＼と幾枚かの紅葉が地に落ちる。さうして大地が色どられて行く度に、木々の瘦せた骨格が天空に向つて投げ出されて行く。静かな沈黙の野に、夕靄がこめて一帯が暗くなる頃、静寂は更に天空からも訪れて来る。小さな星がきらりと、ほころび、やがて空には黄金の花が咲き亂れる。

さーつと青い光を残して流星が飛んだ。その影に慕はれてか、又一つ長く飛んだ。自然の生んだ夜、自然の養育した天體は今見事に成長して、安らかな、静けさの中に夢見てゐるのである。しかし、此の何物かに呪はれた様な静けさも町の燈に照らし出されると一變して、さうは忙

しき人生の騒音が絶えず躍つてゐる。自動車サイレン、電車の輪立ちの音が、白く硬いアスファルトの道を、町の屋根々々の上を、覆ひかぶせる如く浸み込んで来る。

人の創造して行く力は、静かな自然を引き裂いて行く。

暮れては又暮れる淋しい秋の自然、うら枯れた白い穂すゝきが、ゆら／＼して其の根本から秋は去らうとしてゐる。紅葉の影には、既に秘められた冬の姿がのぞいてゐる。凋落の秋、静寂の秋には、人の心も、その渦巻きの中に引き込まれる。物悲しき晩秋の姿なることよ。

然し永遠なる凋落では無い。やがては芽ぐむ春、そして香ふ青葉の夏、かうした青春への準備なのだ。凋落はやがて繁茂への道程なのだ。此の姿無くしては、あの血の躍る様な力、みなぎつた日は来ないのだ。

又してもポプラの木が、黄色い葉をひ

らりと落した。

開元通寶

五丙 川崎 愼仁

久しぶりに得意の冥想にふけらんものと古財布をさかさにはたくと支那錢が五つ六つ踊り出て机の上に鏗然となる。予は開元通寶を一枚とつて遠く一千二百年の古を偲ばんため瞑目する。時は秋の夜長、ともし火がゆらりと動く。

一千二百年の昔、大唐の都長安は、當時世界の文化の中心地であつた。碁盤の目の如き大道には波斯の寶石商も、大食の商人も、日本の留學生も、花の如く群れ又往來してゐたことであらう。長安の都も、奈良の都の如く春の都であつた。天竺の僧侶の梵唄きこえ、胡笳の聲もきこえたに違ひない。國富み兵強く、長城は無用の長物に等しく、強兵は幾度か長城を越えて胡地へ去つた。遠く吐蕃の地までも服し、天下は上下こぞつて太平を

謳歌し、貴公子達は肥馬にまたがつて闊歩してゐた。遙か終南山にかすみたなびき、詩人は歌ひ且盛に酔うた。孟子曰く入りては則法家拂士無く出でては則敵國外患なきものは國恒に亡ぶと。太平の春は長くなかつた。何處も同じく小人どもは盛に陸梁した。榮華は必衰の前兆であるから太平は嵐の前のしづけさにしかすぎない。祿山の率ゐる十五萬の兵は疾風より早く落陽を抜き長驅して長安についた。太平の春に酔へる天下は之に抗すべくもなく玄宗皇帝も西の方蜀の地へ蒙塵せねばならなかつた。花の如き長安の都も一朝にして荒れ去り人影も稀となつてしまつた。天寶の惡政は玄宗一人のみの罪ではない。天下の罪であつた。詩人悲歌して曰く、國破れて山河在り、城春にして草木深しと。疾風勁草を知るとか。千歳の後備夫を立たしむるに足る忠臣張巡許遠は睢陽城に顔真卿は平原に顔杲卿は常山によつて兵を擧げたが、總くづれ

の唐は復すべくもなかつた。あはれ四百餘州の山河はただ賊兵の蹂躪するにまかせるのみであつた。昨日まで朝にありて得意の士も、今日はあてもなく江湖の間にさすらひ、悲しみを詩に託するだけであつた。

曆はうつて千二百、唐亡び、五代忽ち起り忽ち亡び、宋元明清と幾たびか革命の哀史はくりかへされた。一榮一落は春秋。歴史はくりかへされてつきない。詩人に涙の乾くひまさへ與へない。劍をとつての征服は眞の征服ではない。九州の土を屈服せしめた始皇の業も、始皇死して三年忽ち楚人の亡ぼすところとなつた全歐の天地を馬足にかけし奈翁も絶海の孤島に憂死して、只多くの小人輩にもてはやされるのみ。首陽山の薇をとりて死したる義人と始皇といづれぞ。一簞の食一瓢の飲に足れりとせる賢者と奈翁といづれぞ。英雄も死しては三尺の墓穴に入りて餘りあり。死は永生である。靈は不

滅である。青史は亡びても菩提樹下に大悟徹底せる聖者の教は天地と共に無限に輝きて失せない。

予の冥想は雲の如く、次から次へと湧きてつぎない。開元通寶の裏にあるのは楊貴妃の爪の跡とか。驪山宮の歌舞はなほ思はる。古銭は欄檻である。古銭は狂人の友である。予にとつてのみ古銭は古くして新しく無限の眞理を物語つてくれる。その錆はさながら千歳の榮枯盛衰を語つてゐる。弱きものは常に亡び、驕るものはつねに亡んだ。然して強きものは常に勝つた。秋の夜は更け、弦月芽え、嵐は兩戸をゆすつてやまない。

詩興

五丙 菅間 壽一

爽やかで健康な秋の今宵。

いとも美しき、虫の音の交響樂を聞き乍ら、私は全身に月光を浴びて、夜の暗黒の中の偉大なる抱擁力そのものである

大地に立ち、恍惚として自らの心の清々しさが強く意識される。この大自然の中に溶けいる様な純心の鼓動よ、その情熱の輝きよ、私は今こそ神前にひざまづいて恥ぢぬ清浄な氣持で、偉大なる大地の囁きを聞いてゐる。夜の更けるに従つて静寂が虫の聲音を強調してゐる。月光はいよ／＼芽え、樹々は蹴く大空に伸びてゐる。そして清純な大地と大空とが黙々の中に雅詩をつくる。

私はこの偉大な詩の爲に全く何も云ひ得なかつた。無言のまゝでこの豊かな詩情を胸の奥迄吸ひ込まうとする。私の全身は全く俗的なものから引離されて自然の清朗の中に躍動する。そして偉大な詩が大地から大空に朗詠されるのを一心に聴きとらうとする。嗚呼、美しき夜の世界よ、私はいつ迄もこの典雅な詩に酔つてゐたい。人生そのものが全く新しき光明を得たやうに私はほゝゑんだ。

平和

五六

五丙 矢島 政雄

「衣食ありて禮節を知る」とか。日夜食を求めつつ危険に侵される人に自然の美平和が得られようか、斯くの如き時には個人は生きんとする本能のみを有する。努力し生活の基礎を固め自然の美を有せ、人生の美を發揮せよ、而して眞の平和を作り出さん。

田園の趣

四甲 三浦佐久治

四邊の草木の葉も色づき、紺色の赤城山より吹下す風もめつきり冷くなり、あたりは何時しか凋落の秋となつた。稲は黄金の波を湛へて今しも百姓の刈入を待つて居る。百姓達は朝晩の寒さを押し切つて彼等の收穫に勢出してゐる。鋤をかつぎ頬かむりをし、背中を圓くして田畑に急ぐ。又夕を告げる暮六つに稲束を馬

の背に載せたり、家内一同で楽しく家路に辿る風景は實に田舎のほゝゑましき好風景である。晩秋の夕は、紺色に澄み渡つた空に高く上つた月が芽えた光を投じその下に木枯に吹かれた残葉がかさかさと落ち散るのが人間と自然の接觸を見せに居る。日差のよい柄枝に止まつて朗らかに鳴いてはついと去る小鳥の影、淡紫色の空をひらひらと迷ひ飛ぶ一、二の「カウモリ」の姿も實に趣味深い。迫つた青闇の中にほんのり明るく見える農家の障子が、時々「ぽー」と赤く人影を大きくゆらめかすのは、多分家内一同で爐を取圍んで焚火してゐるのであらう。そして其處には屹度祖母が孫に昔話を聞かせてゐるのだ。月は益々高く昇り、殆ど葉の落ち切つた庭の柿の木に光を流し大地に大きな影を畫いてゐる。三つ四つ残りの枯葉が、ゆらゆらと揺いでゐる影も亦一種の面白味がある。物皆ひっそりした中を月が芽え渡り田畑や收穫の仕事の後の農

家の庭等に輝いてゐるのを便所の歸りに見て、又唯一人で畫の間出來なかつた宿題を机に向つて考へてゐる折、吹き来る風が戸をがたがた音をさせる。驚ろいて再び窓を開けると明月は依然として變らず輝いてゐる。そして其の時つんと稲穂の香が高くなる。この香、此の趣。田園にたまらない愛着を起させる。

自學自習

四乙 田村 精一

刀劍と云はれた場合我々は直ちに日本刀を思ひ浮べる。見るだけでさへ肌を栗立たせる様な、正宗、村正等といふ名刀を思ひ出す。此の日本刀こそ世界にその比なく、現在の科學の力を以つてしても作り得ない超科學的なものである。之等を如何にして我が偉大なる先輩は製作したか。之一にその人の腕にあつた。人格にあつたのだ。勿論刀を作る手ほどきは他の弟子と同様に受けたのに違ひない。

がその後に於ける自ら味得する迄の研究が此の如き日本刀を作らせたのだ。研究心の多少如何が正宗ともなり又鈍刀ともなつたのだ。

我々は日々學校で學んでゐる。先生から學問を授けられてゐる。が我々は只授けられるだけでよいだらうか。勿論それでは向上發展は望めない。我々は常にそれを基礎として廣く自ら學ばねばならぬ。進んで先生から學を受け熱烈な自學自習の精神を以つて學ばねば大成は期し得られない。受けるだけでは鈍刀同然であるが攪まざる研究心を以つて突進せばやがては正宗ともなることが出来るのである。大成との境は自學自習の精神如何であるが如何に良く切れる刀でも作つた人の精神に邪な考へがあつては、刀として尙ぶべき威嚴が備らぬ。秋月の如き、名刀と呼ばれる刀を見た時には自づと頭の下るのを覚える。何故だらう。思ふにその人達は高い人格者だつたのだ。そしてそ

の製作に當つては、齋戒沐浴神に祈り眞剣な氣持をもつて、一撃にも心をこめて作つた結果、その人の人格その人の眞剣さが刀に打込まれたその爲であらう。我等が學を學ぶ場合に於ても、徒に學にのみ志すべきではない。人格の修養も共に心掛けるべきである。さすればやがては人の上に立つ事が出来、自學自習の目的を達成することが出来るのに違ひない。併し何と云つても第一は學問である。

人格は、常に正しい心を持つてゐれば自づと學問の進むにつれて具るものである。少くとも私はさう信ずる。それ故我々は研究心を奮ひ起し深淵なる學の世界に一分たりとも餘計に食ひ込み、國家有爲の青年として、僅と雖も此の世界を改良し自己の足跡を半ペーヂなりとも青史の上に止めたいものである。

——九月二十八日(金)——

アンタレス

四乙 根岸仲次郎
「下に、赤いのがスコルピオのアンタレス。遠方の仕掛火花を思はせるやうな星座を指しながら、興深く語ってくれる友の言葉は何んだか震へてゐるやうだ。地平線近く眞紅に燃えてゐる星は、色形、明るさ、隣り、あらゆる可憐さを閃めかしてゐる。それにあたりは、時々杜絶える蟲の聲の間に、静かな小川のせ、らきが斷續する。」

この静寂に嘯くやうな低い、だが力の籠つた友の星の話。加へて、兄から教はつたと云ふ神話。これでは、又今夜も友の星夜禮讃が長くなりさうだぞ、とよく思つたものだ。

長い休暇を終へると、間もなく、友の病氣となり、あのアンタレスの氣味の悪い程眞紅な色が、南の地平線遠く消えてしまふと、友の死と、全く連續的なこの突發事件に茫然としてしまつた。そして當時、自分にはどうしても彼の死が信ぜ

られなかつた。あんなに、體をしてゐたのに、又、釣に、泳ぎに、山に、何時も一緒だつたのに等と、丈夫だつた時の事が一度にこみ上げてきて、自然と目がうるほふのだつた。

さうだ。あのアンタレスが友を攫つて逃げてしまつたのだ。でなければ、彼は死んで憧れのアンタレスの所へ飛んで行つたんだと、そんな氣さへしてならなかつた。

こんな事があつてから三年後の今尙、秋の聲を聞き、アンタレスが南の地平線にその姿をあらはすと、屹度逝ける友を思ひ出す。

夏休み、アンタレス、友。この三つが無氣味な鎖で連續されたまゝ、私の脳髓に深く深く、喰ひ入つてゐて、離れさうもない。

そして思ふ。あのアンタレスの無氣味な眞紅色の瞬きこそ、友の總てと一致してはゐないかと。

秋

四乙 倉澤 茂

當番も済んだ後だつたので大部分の者は歸つてしまひ、わづかに運動場や道場から人の聲が聞えるのみであつた。落葉にとりかこまれた静かになつた校門を出て、ぼつ／＼と歸途についた。今日一日の事などを思ひうかべ、いつしか自分の將來の事を考へて何とはなしに不安を覺えた。

ふと氣がつくと蝗が今にも沈まうとしてゐる日光を斜にうけて、パチン／＼と東ねられた稻の上を飛んでゐた。一匹がかばんに飛上つた。手をのばして捕へようとしても逃げようともしない。手にとつて見ると瘦せおとろへて夏の元氣もどこへやら、で翅などは枯死した草葉の様になつてゐる。

ちよつと行くと石垣のすこしある所に來た。黒い三角の頭がちよつと見えた。

鎌切だ。そつと石を投げて見た。ちよつと頭を引つこまただけでこれも逃げようとはしない。虫までも秋をしみ／＼と知つてゐるのだ。さう思ふと一層寂しく不安になつた。

道端の一軒屋の所まで來た。取残された柿の木の下には二つ三つの柿が西日を受けて輝いてゐる。其の下にグリヤの下葉のかれたのが最後の花と思はれるやうなさびしいが鮮やかな花を一つ咲かせてゐる。側の黄色くなつた芝が西日にくつきりと輪廓づけられてゐる。それ等あたりにはそぐはない程實に美しい色彩だつた。然し秋のみが與へるさびしさがさへ／＼と見えるやうだ。だが植物には春が待つてゐる。そして再び青い芽を出し花を咲かせるであらう。それに反して虫等はいや人間は。こんなことを考へてやるせない心に驅られた。日の短い秋は次第に暮れて行つた。

言語

四丙 淺井 進

生物の進歩に隨ひ、その生活は次第に組織立つた秩序ある共同生活となる。斯くの如くなつた世に言語がなかつたら、一日たりとも生活して行けない。

實際吾々は言語を除外して、人間としての生活を考へることは出来ない。言語があればこそ、社會はより意義深く、より平和に、圓滑に眞の社會として、存在し得るものである。社會の一員たる我々は、各自の思想、意志を言語により發表し、それにより他との交換をするのである。

又言語は思想を表象する役だけで、一見思想に従屬して居るもの、やうであるが、反つて思想は言語の方によつて、進歩し發展するものである。即言語と、思想とは、非常に緊密な關係を保ちつゝ、あるものである。

又一個人の思想として、それ自身だけでは、餘り大した進歩も發展も見られないが、一度他の人の思想の刺激を受け、暗示を與へられると、それがすばらしい展開を示すものである。かくしてお互に刺激し合ひ、暗示し合つて、今日の哲學、宗教、藝術、科學等今日の麗しい、文化を築き上げたのである。この相互間に於ける、刺激、暗示の媒介をなすものが、實に言語であると云ふ事實を想ふ時、我々は言語の絶大なる力に驚歎せずにはゐられない。

この意味に於て、若し言語の與へられて居ない世界があるならば、その世界は眞の意味に於ける社會は存立せず、哲學、宗教、藝術、科學等一切の文化の華は咲くことなく、而もその世界は、永久に原始時代から脱することが出来ない。

常識と學問

四丙 中根 敬一

常識とは一言にして言ふならば、人として通常纏へて置かねばならぬ所の事理に對する理解力を言ふのである。随つて常識があると言ふからには、世間一般の人情にも通じて居らねばならぬし、普通の事なら何を話されてもそれを理解出来ねばならぬ。

若し人にして常識なくして世に處せんとするならば、それは船を陸に漕ぎ、自轉車で太平洋を乗切らんとするのと同じである。船を陸に漕ぐ等と言ふと大變滑稽でもあり、又無鐵砲である様に思はれるが、實際常識のない人は他人から見ると斯の如くも無鐵砲に見えるものである。そしてそれ等の人は隨處で失敗を繰り返し、人との間も不和となり、延いては人生の落伍者と迄なつて了ふのである。加之これ等の人はこの間實に悲惨な道程を辿らねばならぬのである。

斯の如く見てくるならば、吾人にとつて常識と言ふものがいかに必要である

かり、退けられて了ふのである。苟も社會的動物である以上人間として世の中から相手にされない、即ち精神上全く孤獨の位置に置かれる程つらい事はない。

吾人にとつて常識が必要な事は前述の通りであるが、學問に於ては寸時も缺く事が出来ないものである。常識なき學問は非常に盲目的である。それは燈臺にも譬へられる。成程常識がなくとも學問をすれば學問をしない人に較べるとずつと色々な事にも通じ先の事迄分るかもしれない併しさういふ人に限つて足許の事が丸で眞暗である。従つて色々な手達も往々やり出すのである。之と反對に學問なき常識と言ふ事も亦考へられない。常識に對する學問と言ふものは丁度家を建てる際の土臺石の様なものである。土臺石が確固として設置される事によつて始めて高樓、玉樓も建てられるのである。常識に於ても、學問と言ふ土臺石を設立し、それへ見聞、讀書、經驗等を積み事によつ

か、いかに重要な役割を演ずるものであるかと言ふ事が分る。

又學問とはいかなる事を意味するものであるかと言ふ事は誰でも知つてゐる事で説明を要しないが、強いて解釋するならば、自分の知らない事を學び、疑はしい事を問ふて自分のものとする事、即ち見聞によつて物事を習ひ覺える事である。學問の目的は大ざつばに言ふならば人間として必要な事を總て人に習得せしめるにある。そして一旦修得せられたる學問は、その人の足となつてその人をして處世の大道に邁歩せしめるのである。故に學問なき人は、人間としての要素を缺き、随つて完全な人間とは言はれないのである。彼等は世の中から相手にされない。些少な事ではあるが一例を擧げて見るならば、學問なき人は新聞や書物も讀めぬし、手紙を書く事も出来ないし、又他人が一寸學問的な話をするとならなくなつて了ふ。従つて益々世の中から遠ざ

て始めて立派な常識ある人間となる事が出来るのである。

されば常識と學問とは一體不離のものであつて、決して別個のものとしては考へられないのである。故に吾人は學問と相俟つて、出來得る限り常識を啓め、一方此の常識を杖ともして益々學問を勵まなければならぬ。學問を伴つたる常識又常識を伴つたる學問こそ、處世上に於て吾人の唯一の、そして最も頼み得る先導者となつてくれるであらう。

秋の朝夕

四丁 青木 武雄

一、朝

やつと寢床を離れて庭に出るとひんやりと體に觸れる空氣が寒い。昨夜の風は忘れたかのやうに止んで、先き程までびゆう／＼と唸つてゐた枯木の枝が微動だにしない。風に吹き集められた落葉は道の角、庭の隅、と彼方此方に重り合つて

がさとも云ない。靜な朝だ。青々と澄んだ空に綿を浮かせたやうな柔かい雲が黄金色に輝いて、葉のない梢に眞赤な柿が二つ三つ朝日に映えて一入紅を増して見える。雀の鳴き聲も靜だ、西に光を失したつた月が物淋しい。

二、夕

秋の暮れやすい日は西山に傾いて、白い雲は眞赤に、黒い雲は紫に、美しく西の空を焼いて、木の影が長く庭にうつり其れが次第に伸びて淡くなつて遂に失せる頃、やがて東からは夕闇が次第々々迫つて来る。

子供達の快活な遊びの聲も散つて、子守唄が長く／＼夕靄の中を傳はつて来る腰に鎌をはさんだ農夫が一日の勞をも忘れて豊作を語りながら田圃の小徑を歸る其の後は今まで黄金に敷きつめられてゐた廣野が泥田と化して黒い土を見せて居る。家々の竈から昇る煙は細長く眞直に昇つてゆく、空には研ぎ澄した鎌のや

うな月が輝き初める。薄い靄の中にこんもりと茂つた森、其の森の中から燈火が一つほのかに浮かんで東洋風な静けさ、柔らかなさを見せて居る。

成績

四丁 長島 英一

彼は夕日のまばゆく照つてゐる野中の一本道を、うら淋しい氣持に驅られ乍ら獨り家へ急いだ。今日彼は學校で行はれた模擬試験を受けた。そして頼りない自分の心を、頭腦を、あの模擬試験に於て一層如實に感じたのである。といふのは彼は問題が配布された時、それは數學であつたが、ほんとうの試験場へ出た時の氣持でそれに當らうと考へた。そして問題を手にして始めから終り迄一通り意味をとり乍ら讀んで見た。併し大して難しいことはなさうだと思つたので比較的に易しさうなのから手を付けて見た。けれども悲しいことにはその問題は彼には到底

底解けさうにもなかつた。彼は又他の問題に手を付けたが矢張りそれも解けなかつた。彼は少しあせり出したが、それが模擬試験であるといふことが幾分か彼を安心させた。結局一題も解決し得なかつたのである。彼はしみ／＼と自分の學力のないのを落膽し、且恥ぢた。

彼は今中學四年であつて、來年三月には高等學校を受験しようとする者である。必勝の意氣に燃えて、そして勉強しようと思ひ掛つてはゐるのであるが、今日迄勉強らしい勉強もせず、に過して來た。時將に十一月である、高校受験迄にはあと三四ヶ月しかない。今こそ頑張りをはかるのに絶好の機會だ、大いに頑張らうと、彼ははつきりと心に決するのであつた。

既に日は暮れか、つてゐる、冷い北風が時々頬を撫でる。人通りは殆どない。彼は平靜な心を取り戻して再び我が學力のあまりにもないことを歎いた。あの模

六二

擬試験の成績は恐らく零點であらう。これで三月迄に高校突破の實力が付くであらうか。入試に於ては數學の點がすべてを決することは明かであるから、自分の今の學力では完全に振り落されることはきまつてゐる、とたまらないいら／＼しさに驅られるのであつた。そして時々／＼と見える民家の灯に何だか言ひやうのない悲哀を感じるのであつた。

夜の航海

三甲 吉田 幸富

『ピリピリ』と云ふ船長の出帆合圖の笛につれて、船員の笛の音が一聲にあちこちに起る。と『ボー』と一聲汽笛の鳴るのと同時に、チャブ／＼／＼ザ／＼と云ふスクリュウの活動が開始される。船は今や靈岸島の岩壁を立ち去らんとして居る。もう眞暗だ。時計を見ると丁度十時。市内の家々の白い電氣と、汽船發着所の屋根に在る赤、白、青の電燈が船に

揺られた小波に寫つてとても美しい。小さな船或ひは一千噸位の大きな船、それ等が停つてゐる靈岸島の港を後にして今日さす大島に邁進せんとしてゐる。僕は今年の夏休みを利用して、従兄と一しよに大島に行き下田を経由して沼津に船の旅に立つたのである。やがて船は今まで錨をあげた時のゆる／＼した速力を一變して、忽ち全速力を出した。内海だから少しも揺れない。だから非常に愉快だ。

右舷に來て餘り遠くない品川や大森等の街の燈火が波に映るのを見つ、「早く明日になればよいがなあ！」などと思つた。ふと空を見上げると小さな星が晴れ切つた眞夏の夜空に輝いて居る。そして尙其時嬉しかつたのは細い三日月が夜空から僕達を照してゐる、尙又其の月が波の間に細長く輝いてゐるから。來る前に『夜の航海の第一の面白い事は彼方の陸地から照す眞白な美しい光と、空に輝く月が波に寫つてきら／＼としてゐる事

だ』と云ふ事を聞いて居たからだ。そして今度は品川の沖にある燈臺の光に送られて、尙々南に進む。全く燈臺の光は美しく、そして何と云ふ懐しいものだらう。暗い夜、或ひは風雨の夜、どんな夜でも相變らず今の私達の様な船上の人々の安全を第一として居るあの燈臺の光は、全く懐しく、そして有難いものであると云ふ事が初めてはつきりと頭の中にきざみ込れた。

此の日はとても込んで居て僕達は寢る處もない位である。又一等室を買い取つたと思つて午後早く氣船發着所にやつて來たか、賣切れになつて了つて其の上三等室も一ぱいで入つて寢る事が出来ない。私達の居る後甲板では出帆の時から蓄音機のスピークする音楽を聞きながら人々は輪投げや其の他様々の遊びにふけてゐる。又唯一人で口笛を吹いてゐるもの、遠く彼方に見える陸地を見てゐるものもあり、手すりにもたれて空をながめて居

るものもある。僕はデッキのベンチの上で少し横になつて見た。しかし仲々眠むれない。だがとう／＼寝つて、一時間位たつただらうか、目がさめた。又起きてあちこち歩き廻つた。船尾の下の方で船體の揺れるのを防ぐ爲に大きな『こま』の様なものが廻轉して居るのださうでゴ／＼と云ふ大きな音が足もとから聞える。もう餘程來たと見えて段々と波も高くなり船も上下に少々揺れて來た。三浦半島の東端の觀音崎の燈臺も遠くに見え初めた。と前に遠くから輝かしいサーチライトを照しながら進んで來る驅逐艦の様なものを見た。それは非常に速力が早く見る／＼近くなつて、五六百米位の離れた所を行き過ぎた。尙それはどん／＼北に向つて進んで行く。多分驅逐艦が横須賀の母港に歸る途中なのだらう。其の他幾度も、汽船や運送船それから小さな引船と或ひは遠く、或ひは近くすれちがつたザ／＼ザザザ／＼と云ふ波のしぶきの

六三

音も大きくなり、その音と共に船はや、上下に揺られるのが甚しくなつた。手すりに持たれながら下を向いて居ると、とてもするとしづきが口に入る事がある。

遂に観音崎の燈臺の光が僕達の乗つてゐる菊丸（一、三〇〇屯）を照らし出したとてもまぶしい程強い光だ。この燈臺の照らすのが一回轉するの位どの位か、つたか忘れて了つたが何でも十五六秒位かゝつたと思つた。それから劍崎や三浦半島の南端の城ヶ島の燈臺の光に送られてとう／＼外海に出た。今度は尙揺れる。三等室に入つて少し休んで又デツキに出て來た。もう何處にも陸は見えない、否陸の町の燈火が見えない。何だか恐ろしい様な變な氣持になつて來た。しかしその時でも僕の心を面白く愉快にして呉れたのは空に輝く細い三日月だつた。三日月は何處までも僕達の後について來て安全にさゝやかな銀の光を送つて呉れたそして又デツトのベンチに腰を下して、う

つとりとして夜の明けるのを待つた。

東の空が白んだ。船は依然全速力で走つてゐる。大波小波を二つに割つて、その上をどん／＼走つて行く。嬉しい／＼目ざす大島の風早の燈台の光が船の前方に見えた。餘り明るくはないが僕はそれを見た時は非常に嬉しかつた。とう／＼陸地が見えた。段々と明るさは増して、大島の様子が幾分はつきりと見え出される。小高く三原山の麓に、愛宕山や大の丸山等の起伏したのが見えるが三原山は雲に包まれて見えない。彼方に電燈のついてゐる一部落がある。「あれが元村だよ」と云ふ従兄の説明と共に段々と近づいて船は「ボーボー」と二度又汽笛を鳴らした遂に午前四時機關はその活動を停止した前の合圖の汽笛を待つて居た元村の小さなボン／＼蒸氣が二艘勢よく大波にもまねながら僕達の菊丸見させて突進して來た。船は人々の重さによつて左に傾いたそれは向ひに來た小蒸氣船に乗りうつら

んが爲或ひはそれを見る爲に人々が左舷に來たからである。僕は一しよに來た従兄の田島さんと共に小さなボン／＼蒸氣に船員に助けられながら乗りうつつた。そしてとう／＼元村に上陸した。出發後六時間遂に／＼目ざす大島の地を踏む事が出來た。

母

三甲 小此木英信

晝食の時間主任のN先生が教室に入つて來られた。皆一齊に注目した。皆辨當を持つて來たらうね。『はい。』君は何故持つて來ないのだね？こらつ。』パンを食べて居た私に言つて來られた。

「はつ」全身が急に熱くなつて思はず聲が出なくなつた。『母が今日は起きるのが遅れたから』パンでも買つて食べな』と言つたからです。『よし今度は辨當を持つて來い。』と言はれたなり出て、行かれて了つた。

私は未だ胸の高なりが止まない。いきなり、パンを机の中に投げ込んで運動場に飛び出した。

罪を犯した恐ろしさ！私はどつかり芝生の上に腰を下した。誰も居ない。悪い事をした。今朝切角母に拵へて貰つた辨當を、氣に入らぬと投げ出して來て了つたんだ。

俺は何と弱虫なんだろう。思ひ切つて白狀して了へばよかつたのに、母に對して犯した心の罪、自分の心の弱さが次から次へ涙となつて頬をぬらした。學校が終はると一目散に校門を飛び出した。

併し何だか今日の自分の家は恐しく見えた。ふらりと家に入つて行くと、母は「今日は早かつたね。」とにこ／＼顔で俺を迎へてくれた。白狀してわびよう。』と心に迫られたが、とても言ひ出す事など出來なかつた……。

その夜は恐ろしさに、まんじりともせず蒲團をにぎつた儘、天井を見つめて、

小さくふるへて居た。

「よしわびよう。私は決心した。

十一時の時計の音が響いた。そつと母の室の唐紙を開いた。母は三つになる弟を抱いて、深く眠つてゐるぢつと弟の顔を見つめた、何だかまぶたが熱くなつた。無邪氣に母に抱かれて、子守歌を歌つて寝かされた時も、あつたらうになあ！

私は幾度か小さな聲で「母さん／＼。」と言つて見た。私の聲はふるへて室に響いた。眠つて居る母は、起きようはづがない。思ひきつて「母さん。」と叫んだ。母はじ／＼と見つめて居たが「何だいお前今時分？」びつくりしたらしい。私はすっかり打ちあけた。母は笑ひながら「い、よ／＼寒いだらう早くおやすみ。」と言つた。心が急にはれ／＼しくなつた。

布團の中へ入つたが、一層泣けて仕方がない。私はその夜は、深い追憶に耽つた。

母！母といふものは、何と俺等

の心の中に偉大な權威を持つて居るものだらう。

中學を出ても、大學を卒業しても、俺等が心から泣かされるのは、母だ。心から泣いて呉れるのも母だ。笑つて呉れるのも母だ、生みの母だ。

母にどんなに怒られても、又母に泣きすが、又その泣きすがる子を抱いてやるのが眞の母だ。

他人からいくら馬鹿にされても、可愛くて／＼ならぬのが母の心なのである。

孟子が「至誠而不動者未之有也。」とか言はれた。人を心から心かすものは、やはり眞心であり熱である。この誠の心の持主が心に對する母なのだ。

逝く秋

三乙 秋山 孝

薄曇りの晩秋の黄昏、獨り淋しく路上を歩む。肌冷き風は路上を一掃してゆく道端の木立は黄色く染つた葉がまばらに

裸になつた梢から灰色に曇つた天が覗いてゐる。枝に淋しげに残つて居た木の葉も秋氣に誘はれるやうに、はら／＼と地面に散つて行く。そしてカサカサと微かな、勞れた様な、淋しい音を立てて、黄色い地面を埋めて行く。歩み行く道の端は落葉が深くなまり、路上を吹きまくられてはら／＼と轉けて行く木の葉は淋しい去り逝く秋を想はせる。逝く秋は淋しい。身にしみる寒さの中に心に寂寥たるわびしさが湧いて来る。遠い世界を覗いてゐる様な秋の水の底や、村中の路に、屋根に、家の廻りに落葉が沈黙する。

晩秋の地は落葉の底に靜かに眠つてゐる。晩秋は寂々寥々とした靜寂の中にある。此の靜寂の底に落葉が淋しい音を立てて散る。

カサリ…………ガサリ…………。

此の音は晩秋の天地の靜かさを破つて萬物の心に響く。その音に華やかなる夢は永久に飛去り、人間にハツと瞬間に耳

をそば立たしめるのだ。

想へば春は陽炎と共に若葉と萌え出で夏は緑したたる青葉と飾り、やがて錦の紅葉と誇りし榮華は早や夢となり、今はその冷き骸を横たへて、永き眠りにつかうとして地面に黙してゐるのだ。

その運命は……その永久の嚴肅を想はせる。

カサリ……。カサリ……。……落葉！冷たい、恐しい冬の足音が耳もとにせまる。永久に死を想はせるやうな冬の足音が……。

梢を渡る風が去る秋を弔ふが如く、慰むが如く、梢高く吠えて過ぎて行く。木の葉が散る。逝く秋は淋しい。

不可能

三甲 齋藤 春雄

ナポレオンは云つた「不能と云ふ語は唯愚人の辭書にあり」と。彼は此の信念

此の自信とを以つて殆んど全歐洲を征服し忽にして佛國皇帝となつた。

然し！私は全くそうだとは思はない。何故ならば我々は賢人でもない、偉人でもない、況やナポレオンの如き不出世の英雄でもない、彼の獨將モルトケが嘗つて人に語つて曰く「人生の事業、七割は運命にして三割は意志なり」と。

さうだ！人生は運命だ、大楠公が湊川で敗れたのも豊太閤があれだけに出世したのも運命と云ふ力が大いに與つて力ある事であらう。

かくの如く我々は天恵の運命を如何にもする事は出来ない、すぐさま偉人となる事も出来ぬ相談であらう。我々は古人の云へる如く人事を盡くして天命を待つべきである。我々は與へられた事に對して全力をつくして行ふ。技倆つたなくして成功せずと云へどもすこしも悔ゆる事はない。それだけの決心覺悟があるのだ彼の隆盛は空しく城山の露と消へたけれ

ど誰が彼を不忠不義の臣と云ふ者があらうナポレオンは自ら不可能はないと云ひかぶつて居たけれどワーテルローの一戦にウエリントンを破りかねプロシヤ軍に

虚をつかれ一敗地に塗れ再び立つ事の出来なくなつた所以は、實に彼は己の力を信じすぎ敵を侮つた爲であらうか、不出世のナポレオンもその自分の貫徹を許されずして運命の下には屈服せざるを得なかつたのである。彼すら然り、況んや我々凡人は常に無數の不可能を有している唯我々は最善をつくしてその道に進むのが義務であり任務である、然る後天の指命を待つべきである。

東北凶作地に贈る

三甲 福田 千尋

今年の氣候は梅雨時から、降るべき時降らないで、暑くなるべき時ならないでしまりのないものであつた。此の様なしまりの無い事は、萬物の靈長たる人間に

於ても善くない事であるから、まして天候如きものに於ては……。

東北地方凶作の原因は、大體前に述べた如く、天候が軌道を外れたからである。東北地方冷害の慘狀は、さき頃から新聞に書かれ出して來たから、次第次第に東北以外の人々に知られて來たが、眞に凶作の恐怖が分らない。本當に味はつたら、どんなに凄しいものであるかは分るだらう。東北以外の人々に見せたいものだこんな凄しいものが此頃になつて、新聞に報ぜられたのである。世間の先端を切るべき新聞がおそいのであるから、況や世間に於てをやである。おそいと思ふ。山の埋木ちやあるまいし、人類道徳上の問題が埋れて居てよいものか。事の起る前に豫め用意しておくのが必要だと思ふ今度の事は、前々から東北は凶作になるだらうと云ふことは、科學を誇る日本に於て、又天候から推して歴然と分つて來る事だらう。

又世間と交通しない山村さへある様な東北に於て、交通が至つて不便である事は常識として分つて居る所である。故に今頃騒ぎ出したのでは、飢の東北に我等の慰問品が到着するには、相當な時間を経要する。彼等の飢は一刻／＼に進んで行くのである。一刻後れば、一刻の中に或ひは飢死する者がないとも限らない。實に彼等は飢死の道をさまつて居るのだ。だから時を争ふ場合である。同胞を救ふか、殺すかの人類道徳上の重大問題である。だから豫め用意しておけば、こんな事にならなかつたらう。

一體人間は豫め用意をすると思ふことには、案外鈍感である。一度その慘狀を見せつけられると、あゝ可愛想だと同情心を寄せるそして喜捨金を爲すが、それが事の起る前に出來たらと思ふ。一旦事が起きて同情金を爲すこと善い事だが、今度のは時を争ふ場合であるから、あまり感心出來ない。

今年の天候から推して、何故もう少し早く新聞は大きく東北地方の危機を報道しなかつたらう。寄附を募らなかつたらう。報道の早きを、又新を尊ぶ新聞社が何故競つて報道しなかつたらう。これでは新聞の名に恥ぢないだらうか。これが本當の實のもち腐れである。ひどい目にあつたのが東北人である。本當に死と争つて居るのだ、命懸けだ。下等な動物だつて食しない物を食して居るのだ。人間の生活をして居ないのである。東北以西の人々は白米を食して居る。同じ人間で同じ權利を持つた人間にこうも差が出来たのか。我が同胞を救へと叫びたい、東北の人々よ、我々の手後れを水と流して我々の慰問品を氣持よく受け取つて貰ひたい。

運命

三甲 板根 茂

或る田舎家に柿の木が一本有りました。

其の柿の木はその家の祖父に依つて、本當に小さい時に植ゑられたものだつた。數年後、植ゑた人は死去した。翌年其の木は幾つかの實をつけた。それは甘い柿であつた。やがて冬が訪れ、春が過ぎて夏が来て、次に秋が来た。今度は昨年よりも非常に多く、數へきれない程澤山つけた。これも前年に劣らず甘かつた。爲に其の家の人を始め、その柿を食べた人に賞められた。

其の後、一ケ年は夢の如くに經過して、温い日の輝く秋が再び、此の田舎を訪れた。隣近所の柿の木と同様に、又其の木にも實が生つた。然し去年よりも少い感があつた。熟した頃、家人が今年も多分甘いであらうと考へ乍らもぎ取り、食べを見た。其の人は顔をしかめた。實は柿が澁かつたのだ。外の物も澁かつた。何れを食べても澁かつた。甘い物は一つも無かつた。其の家では仕方なく、吊し柿にした。然し意外！意外！何たる運命の

戲か。一昨年、昨年の柿は實に甘かつた。然し次年のは澁い。あゝ！運命の大變化。昨年は喜ばれた柿の木も、翌年は邪魔物扱ひの憂き目に遭ふとは！

既にして葉が枯れ落ちて、草木眠る冬が来た。雪が降つても掃つて貰へず、嫌な思をした。其の後若葉萌え出る春となつた。其の家の主は植木職に依頼して、傳統の甘味を有する柿の木の枝を、接いで貰つた。そうして其の木は切り口にこもを巻かれる運命になつた。然し乍ら青葉茂る夏が来て、大雷雨に打たれても、或は秋の初の暴風に横なぐりされても折れ又は枯れること無く、外來の若い枝を成長させて、數年後には、又實が生つた。それは前より大きく、甘い物だつた。かくして此の柿の木は再び喜ばれる運命となつた。

あゝ！人間社會亦是の如し。先年迄は百萬長者を誇つた人も、或は貴族として榮譽を有つてゐた人も、僅數年間に零落

するあり。此れも皆運命の戲なのだ。然し運命は開拓し得る。世の中の好運に恵まれんとする者、自力で開拓せよ！。なし得るのであるから！。而して全力を盡し、其の上は運に任せ！。

熊谷の誇り

三乙 三田 雅彦

我が熊谷市は埼玉縣北部平野の最大都市である。風蕭々しく通る櫻堤を南に。清らかな荒川の流れも近き我等が熊谷。今は屋根また屋根、桑畑また桑畑、そして夏は青蟲を敷いた様に、秋は實り豊かな田の打続く懐しき熊谷。

熊谷の名が天下に鳴り響いたのは勿論直實公の武勇からである。或る傳説によると熊谷一帯は到る處老木が茂り晝でも暗い様な森であつたり、草茫々として身を隠す程の原野が續き人家も稀れで其の上荒熊が人里に出て荒すので直實公の父直貞が若年の身でその荒熊を一太刀で仕

止めたのでその勇名が一時に上つた。そこで直貞の武勇を記念する爲にこの地を熊谷と呼び直貞も熊谷と名乗る様になつたと傳へられてゐる。

我等の直實公遊いて茲に七百年、剛勇にして正直なその人格は關東武士の鑑として永く郷土の崇敬の的となつたばかりでなく國史の華として今日に仰がれてゐる。

山河の姿程人の心の奥に深く入り込むものはなからう。故郷のゆかしさは先づその故郷を飾る山河によつて印象づけられるものだ。

熊谷の地は關東平野の中にあるから、その地域内にはこれと云ふ山もないが、朝夕の窓に眺めて市民の心を養つてゆく自然としての山々は數多い。空を仰いで黄昏の堤の上に立つ時、ふり仰ぐ眼に映るは關東地方の西北境を飾る山々の英姿である。先づ眼に親しいのは秩父連山である。畏くも秩父宮殿下に縁りの名を持

つて、埼玉の地から忘れ得ないものが秩父の山々である。其の外榛名山、赤城山等の英姿が望まれる。

かくの如き熊谷の發達をふりかへつて見るとそこには我々の先人の大なる努力が存してゐる。關東武士の血を承けた熊谷人の長き奮闘がある。剛健に、口こそ下手ではあるが萬人の敵をも怖れない熊谷直實公の偉大さを現代に生かして生活態度を打立てると共に、笛の音に美を感じ人生のあはれに涙をそ、ぐ純潔にしてうるほひ深きその心を學んでこそ將來日本の本國を背負ひ立ち、ます／＼神國日本の名を世界に輝かすことが出来るであらう。武士道を現代生活に生かすことこそ我等中學生の任務ではなからうか。

晩秋の感情

三乙 高柳 守雄

變り易い晩秋の空に現はれる星の瞬きも移り氣な頃である。遠い彼方から流れ

て来た薄もやの中に、夕暮時の土星の光は青い壯麗な光を示めしてゐる、と思ふ中に、やがて訪ずれる重い夜の氣配の中に、靜づかに彼方へ西の端に沈んで行つた。するとまもなく美しい傳統に語られるアンドロメダの星雲が見る見る中に、麗はしい燦やかな翼を揚げ始めるのだその豊かな翼の中に幾千年の傳説をひめて。

自分は夕暮時になると庭に出て空を仰ぐのが常だつた。そして色々な事を思ひ浮べるのだつた。

流れに浮ぶ木の葉の消へて、又流れ行くやうに、我々は人生の廣野をさまよつてゐるのだ。全てが喜を求めて、常に生活の變遷を希望する——。人の心に何時も残る憧憬や苦悶は、此の事を最も原始的に、そして強烈な色彩のもとに表はしたものでないか。

我等は常に感情の渦巻を満たさん爲に憧を追ふのである。然しながら我等は屢

々廣い人生に於て、自己を見失なつて、深い傷手をおはなければならぬ。自分も過去に於て、幾度か、自己の姿を見失つて、なげいた事だらう。いたまじき、すぎし日の思出、そんな過去の己を思ふほど、あはれな淋しさはあるまい。

ふと我にかへれば、自分は何時しか、過去の空に落ちこんでゐた。仰ふげは美しい星空には、一陣の風がまき起り、黒くそそり立つた梢を渡つて、空漠な音を立ててゐる。

故郷の秋色

三乙 吉野 諭吉

野に、山に、空に、紅葉に、秋の深まり行くのが感じられる。秋、秋、秋こそは四季の中で最も美しい、そして清らかな時である。

遠い山は澄み切つた青空にくつきりと聳えて見え、近くの田圃には一面に黄金の波が立つ。吾が村も、もうすつかり

七〇

秋色に包まれてしまつた。村全體が秋の澄み切つた大氣を靜に呼吸してゐるかの様だ。木の葉はもうすつかり紅葉してしまつた。黄に、赤に、樺色に何と美しい眺めであらう。あのお寺の銀杏もすつかり黄色になつてしまつて、澄み切つた青空にすつくと屹立してゐる。

ふとけた、まじい百舌鳥の聲に振り返へつて見ると、大きな櫟の頂でびく／＼と尾を振つてゐた。百舌鳥の聲は殊更に秋を深からしめると共に、私は何とも言へない健やかさを覚えるのである。澄み切つた大空には時々小鳥の大群が渡る。大空の果から果まで響き渡る様な羽音を立て、見る／＼彼方の森陰に吸ひ込まれてしまふ。これから何處の天地へ渡つて行くのやら、彼等の行末を思ひやるのも、秋のさびしみの一つだ。

田圃を見渡すと、稲の收穫が忙しい。黄色い田も一日一日と減つて行く。農夫は山の様に荷車に稲束を積んで行く。時

には彼等の脊にいなごが一匹ちつと止つてゐるのを見受ける事がある。彼等も稲が刈取られるのと一緒に、みんな果敢に命を終るのだらう。秋のさびしさは此處にも存する。秋の日はつるべおとしに暮れて、赤い夕日が西山に沈んで行く頃の村の景色、夕日の美は實に美しい。紅葉した葉は更に美しく、輝き映え、空にはいつしか赤い雲がたなびいて、萬物みな黄金色に輝き渡るのである。飛び交ふ秋とんぼの群に送られて、いつしか太陽も西山に見えなくなる頃には街道を震はせて、遊覽自動車も幾臺も、幾臺も歸つて来る。紅葉狩りにでも行つた人々であらう。

さや／＼と秋風が吹き出すと樺の葉や柿の葉がひら／＼と散つて行く。あゝ故郷の秋の夕暮である。

夕釣り

三乙 内野 甲二

日光は雲間より、暖い慈愛に満ちた光を下界へ浴びせて居る。良い日だ、時々ふどの中の魚がびく／＼音を立て、泳いで居る。小川の淵の柳の影が水面にうつ／＼と居る。水面はどこまでも青くすみ渡つて居る。何とも云へぬ奥深い不可思議な力、只呆然として水草の間に赤いうきを見つめて居るだけだ。のんびりとした氣持、暖い日光を脊に浴びて眠くなるやうだ、其の時今迄靜かだつた水面のうきが、びく／＼と動いた。小さな波紋が出来た、はつと我にかへると、うきは本の通りにかへつて居た。只波紋だけが水草をゆるがせながら廣がつて行つた。水草に止つて居たせんと蜻蛉が驚いて逃げた。引いたな！心がひきしまるのをおぼへた。波紋が兩岸へ達した時、水面は本の靜かさに歸つた。其の時四方はいくらか暗くなつて来た。西の空が真赤だ、夕焼だ！亦明日も天氣だらう。十二三ぐらいの子供が大きな籠を背負つて不相應の鎌を持

つて上手に草を刈つて居る。向ふの森も四面の桑畑も、早や浅い露に包まれて居る。そろ／＼歸らうと思つた時、向ふ淵の柳の中から一羽の鳥が飛び立つた。尾長らしかつた。其の時うきがぐ／＼と沈んだ、此の時とばかり竿を上げれば重みのある手工合、ぐ／＼と水面に引き上げれば夕日に映えて一匹の魚が銀色の腹を見せてびく／＼跳ねてゐる。此の時の愉快さ嬉しさは魚取りのみが感ずる所だ。ふごに入れて竿を肩にかついで野道を歸途についた。空に蝙蝠が二三飛んで行く。向ふの蘆葦の家から白いうつすらとした煙が上つて居た。

秩父の神社佛閣についで

三丙 山野邊啓一

千古の神秘を湛えた幾多の峽谷と幽邃つきるところを知らぬ原生林に覆はれる高嶺の脈にかこまれた秩父の仙境は一面

に亦聖地としての面目が昔から躍如たるものがあります。その代表的なものには「秩父の三社」即ち寶登山神社、秩父神社、三峯神社であります。寺には西國と並び稱せらる卅四番の札所があり、又太陽寺が有ります。春秋には全國から聖地の洗禮を求むる巡禮、信者が十數萬、秩父の山野を訪れます。

三社の一たる寶登山神社には神日本磐余彥命、火彥靈神火山祇命を祀り火防の神社であります。又奥社へ行き山頂展望の雄大は好く調和してゐて散策には最も良い所が有ります。

次に國幣社秩父神社は秩父町の中央に鎮座して秩父郡の守護神となつて居ります。祭神は八意思兼命、知々夫彥命、素戔命、大國主命の四柱を祀り、古より開運の神として聞えて居ります。社殿は徳川家康公によつて中興造營され、これを飾る幾多の彫刻が社殿をとりまいて居ります。中でも本殿の龍と虎は左甚五郎の

作と傳へられて居ります。龍は鎖で縛つてありますが、それは龍が毎晩近所の沼へ行き、水を飲みに行くのを或人が見たと云ふので大變なさわざとなり今でも鎖で縛つて置くのだと傳へられて居ります。又此の神社の祭日、十二月三日の夜は關東に比類がないと云ふ程の美しさであります。

次に三峯神社は社殿の位置海拔四千尺近くの高い所に在つて御本社には伊弉諾尊、伊弉冊尊を祀り、古くから盜難、火除の神として、信徒數十萬を全國にもつて春から夏にかけて此等信徒團體の參拜者で賑あひます。同社を中心としての散策は展望臺、植物園を初めとし奥之宮の鎮座する妙法岳又は大日向山太陽寺等廻るのも愉快な事でありました。太陽寺は畠山重忠公御生誕の地といはれ創立は後嵯峨帝の第二皇子で佛國齋僧大師といはれたそうです。

太陽寺に宿れば夏でも蚊帳はいらず、

盜難の恐れもない山の中の一軒家なのであたりはしんとして何の音も致しませんが。電燈も見なくランプで暮して居ります。又重忠公が御産れになつた部屋や刀等もあります又卅四ヶ所の札所には春になると此の觀音靈場に大慈悲を求める巡禮者が鈴の音を鳴らしながら山を越へ、川を渡り、次から次へと札所を參拜する眞白な姿が澤山見られます。

秋景色

三丙 權田龍太郎

喧ましい蟬の鳴聲も何時しか消えうせて、甲高い小鳥の群の騒がしさにあたり景色が取巻かれた。疲れた頭を休めようと障子を開けて外を眺めた。はてなコバルト色の大空が高く聳え眞白い綿の様なちぎれ雲が二三ツ浮いて居た。「キーキー」と甲高い百舌の鳴聲があたりの静かさを破つて彼方の柿の木から飛び去つた。隙間もない程に飛びかふ赤蜻蛉

の群も宛然ら我々の天下が來たのだと言はぬ許りに楽しさうに見えた。

自分は餘りの氣持よさに何時しか家を出て、近くの田圃へ出て見た。見渡す限り黄色にとざされた一面の遠くはなれた森の杉は薄霧の爲にかすんで居た。足もとの川の水は何所迄も澄んで川底の小石迄も手に取る様に美しく見えた。住みなれた、見なれた此の故郷の景色が一見別世界の様に思はれてならなかつた。凸凹の曲りくねつた野道をすん／＼進んで行つた。傍からガタ／＼と思ひがけない調子はづれの異様な音がした、同時に恰も驟雨の襲つたかの様に小鳥の群が逃げのを見た、振り返つて見ると、これはた團扇がさびた石油罐の中に吊してあつて、風の吹く度毎にガタ／＼と音をたてるのだつた。あゝこれは案山子の代りだなと大へん興味深く感じ、その罐が實に此の秋の景色に調和の取れた物に見えて言ひ知れぬ秋の嬉しさや、美しさを益々深く

感じさせた。西に片向いた夕陽は次第に紅い色をまして、西の山へ近づいて行く。年はたてども變らぬ此の秋の景色、紅！紅！あの木の葉も、その桑の木も、彼方の人家の壁も、總てが眞紅だ！嘗ては眼も覺める許りの緑だつた、あらゆる木々の葉が、今は夕陽にも劣らぬ眞紅だ！この様な美しい景色にあふ事の出来る自分が幸福に思はれた。あたりは刻一刻暗黒を増した。何だか、此の世の中の移り變りが、我々人生のそれに似かよつて居る様だ。あの華やかな人生、四季の春が過ぎ去つて、夏になり、秋になり、やがては木枯しの吹き荒ぶ冬が來るのである。一刻をも休む事の無い此の世の中、それを支配する自然世界にも亦休みは與へられぬ。此の中に生活を續ける我々にも全く一時をも油斷すべき時はないのだ、何だか秋の景色からかけへだつた、變な文句に入つた。然し、秋の季節は我々の心をして、此の様な深い考へにふけらせる

清澄寺行

三丙 金子兜太

急なカーブをしつゝ、自動車は登つて行く。緑の森、緑の山が眼前に擴がり、蒼い海が遠く見える。

清澄山一里——町の急坂は餘程、なれた運轉手でないで登れぬ程の曲りくねつた途で、一曲りする毎に、身體がガタン／＼と、反對側に傾き、其の度に、自分も父も妹も、そして同乗の紳士二人も、まるで踊つて居る様に跳ね上る。

でも途中で、數人の清澄寺詣での日蓮教の登山者を抜いて、やつと終點の茶屋

の前に着いた時は、まったく救はれた氣で、汗をふき／＼車より下りた。
「此れから後、六丁お歩きになれればお寺です。運轉手は氣どつた聲で我々に告げた。」

迂餘曲折の途は、それでも木の階段が出来て居て登りよかつた。その沿道の岩壁には、彫刻が無暗にしてある、多分登山者の書いたものだらう。その中の「東市府立二中生徒」等と、長々と彫まれたのを見ると、何んとなしに、なつかしく成る。

岩壁の間を通り過ると、傾斜して、茅屋が並び立つて居る中を通る。どの家もどの家も養雞をしてゐるらしく、雞小屋が各家に見える。そして人を恐れぬ雞が人が通るのも平氣で道の中を歩き廻つて餌を求めて居る、平和そのもの、姿だ沿道の家が賣店に變つて、赤い樓門が見えて來た。それを潜つて、石壘みを渡り、拜殿の前に立ち眞心込めて頭を垂れ

もどつて境内を歩けば、鬱然たる樹木は頭上を蔽ひ、とり分け老杉の太木は、曇れる空をつらぬき立つて、此處旭が森は晝なを暗き有様だ。そして、適麗なる森林の美と、自づと頭垂る、神嚴なる、氣は心にせまり、芭蕉の句に現れてゐる「寂」の感じが心を打ち、邪氣は自然と身を去り、清々しい氣持になつた。

何事のおはしますかは知らねども、恭なさに涙こぼして伊勢大廟の前に頷ぐいた西行法師の敬虔な心に、自分は今初めてなつたのだ。

「高サ六十丈、周圍五丈七尺」と書かれた御神木の前に立つてあくまで高き幹を見上げつ、そのしめ張り廻はされた樹肌を撫せて、父子三人は驚歎の目を見張つた。そしてふと見ればかたへには百日紅の小さき姿が目について、大なる杉と小なる百日紅の對照に言ひ知れぬ趣を感じた。

森中を、猶も行き、第一展望所のベン

チに腰掛けて眺望すれば、青き讃峯は晴れやらぬ空の下に重り合ひ、その彼方に激瀉として水波の動く海が鈍く光つて見え、行人に旅でなくては味ひ得ぬ、恍惚たる氣持と歡喜とを感ぜしめた。

展望所より、やゝ上つて行けば、彼の大日蓮の銅像がある。

凝と、太平洋の荒海原を睨みすへ、珠數押しもんで念ずる御姿に、思はず打たれる強い信念の力を感じて、その偉大なる立姿の前に立つて、しばし見入れば、何處からともなく南無妙法蓮華經と讀經の聲が、或は高く、或は低く、一つに強く、一つに弱く、旭が森の靜寂を破つて耳朶に響いた、そして父子三人は果然と何時までも何時までも、此の澄んだ清い氣分の中に折から降り來たりし木の間にも細雨に濡るゝも忘れて佇立してゐた。

流れ

三丙 石坂謹之助

道の右手には、道に沿うて一條の小溝があつた。道が大きく曲れば、溝もそれについて大きく曲つた。その中を水は流れて行き、流れて來るのだつた。雜木山の裾、柿の木の下、馬屋の横手、藪の下、桐畑、片隅にぼつかり大きな百合や葵を咲かせた農家の庭などを通つて。

中六尺程のこのみぞ、實際は田へ水を引くためのものであつたけれども、遠い山間から來た川上の水を眞直ぐに引いたものだけに、その美しさは谷川といひたいやうな氣がする。青葉をとほして、降りそゞ日の光がそれを一層にさう思はせた。へどろの赤土をさらして、さらし盡くして何の濁りも立たずに淺く走つてゆく水は、時々物にさまたげられて、ざら／＼と柄になく大きく光つたり、さうかと思ふと、ちりめんのしわのやうにこまかに、或は小さくびく／＼とひきつけるやうに光つたりするのであつた。又その小さな、ひらめきが、魚の鱗のやう

に重り合つてゐるところもあつた。涼しい風が低く吹いて、水の面をすべる時には、そこは、一寸の間、細長い銀箔のやうに見えた。すゝきだの、あの物を訴へるやうな悲しげな白い小さい花を、もうとつくに失つた野茨の、一かたまりの草むらだの、その外名もない、然しそれ／＼の花や實を持つてゐる草や、灌木が、溝の兩側から茂り合ひ、かぶさるかゝると水はそれらの草のトンネルをくゞつた。そしてそれらの影を黒く涼しく浮かべてはゆら／＼流れ去つた。

池田城を思ひて

三丁 設樂 源藏

埼玉縣児玉郡青柳村に池田城有り。戰國時代には到る所に小さな城が有つたさうで中でも有名なのは何と言つても高崎城だらう。次は御嶽山に有つた御嶽城。次は此に書かんとする池田城で有る。池田城は埼玉縣二ノ宮金嶺神社から、程遠

からぬ、池田と云へる所に有る。平地に有る城故に堅固とは云へないが、城の水は今尙滿々とたゝへられて居り、深さ一丈餘の所も有る。何所より來て、何所に行き水かは知らねども常に美しく清い水だ。上からのぞくと眞青である。壕の堤上には樺の木がづらりと列んで植ゑられて居る。所々に柳も混り、和やかな葉を風に翻がえして居る。

城内は二町四方程、小さな森や林、丘等も有る。家來も城内に住んで居たさうだが今は木小屋と變り夥しく荒廢して居る。然し庭は昔のまゝで、枝振りの良い松が澤山ある。

現在の主人の、おぢいさんと言ふのが松本左京と云ふて仲々氣の氣かぬ人だつたらしい。

此のおぢいさんがかの歴史に名高い天下分目の戦に出陣したのださうで、手勢五、六十人を引き連れて、高崎、御嶽の殿様と一緒に家康公のもとに參じたが功

三丁 宮崎 利秀

上野驛についてから、自分達熊中チー
ムの選手は、福永先生につれられて大日
本青年會館へと急いだ。先輩の小久保さ
んや、コーチの阿部さんに會ひ、途中で
三臺の圓卓を待つてゐた。大路を通る圓
卓は客をのせて、急しうに砂塵を残し
て通り過ぎる。空車はなか／＼見あたら
ない。漸くにして、空車が來たので早速
乗りこんだ。圓卓は其の中に頻繁な街か
ら脱け出て、空氣の清淨な神宮の外苑を
走つてゐた。見渡す限り、滑かなアスフ
アルトの道を分けて行く自動車先の歩
いて行く人影も點々として美しい。周圍
の翠綠滴るばかりな外苑の植込みの向ふ
に球場の外壁が見えはじめて、やがて青
年會館に到着した。運轉手に六拾錢渡し
て中に入つた。

三階の三〇二號室に泊まる事になつた
隣の室に浦中の野球部がとまつてゐたの
で、同縣出の自然、兩選手の間には親し

無くして世に知られなかつた。無理もな
い、たつた五六十人の家來では何うする
事も出来ないだらうし、非常に小さな城
なんだから。

此の時甚兵衛と云ふ旗持の男が有つた
少しぬけた方なので、敵と味方の區別が
つかず高崎の殿様の旗を持つたま、敵の
眞只中に飛び込んでしまつた。元來旗持
は主人の側に常につき添て居るものでな
いで「それ高崎を討たせるな」とばかり他の
旗本等が敵を追ひ散らしたので、甚兵衛
さん家康の前に召出された。「何なりとも
望は無いが」家康は、にこ／＼として、
云はれた。甚兵衛さん煙にまかれ「何も
御座んしね」と答へたと……。公は一層
喜ばれ「何か云つて見よ」と云はれた。「わ
しらが村は税を収めるのが困るのでそい
つをゆるして下せまし」甚兵衛の言で村
は二年税を免ぜられたとか。

この池田城には家寶として狩野古法眼
元信の筆になつた支那人物の三幅對が有

全關東中等野球大會
記(於青年會館)

る。現在では桐の箱にをさめられて大切
にしまつて有る。たま／＼縣知事閣下が
此の事を聞いて見に來られたとか。
此より餘り離れて居ない御嶽山に有る
御嶽城は現在には跡に御嶽神社が祀られて
人々は參詣に行く。此所に名高い鏡石と
て地面に見えて居る面だけで疊八疊敷も
の大石が有る。全面すべ／＼として鏡の
様に光る面がある。
此れが斜に高崎城を映すのだと言ふ傳
説の多い石である。
世は變り、時代は移つて昭和の大御代
となりし今日。壕の水は満々とたゝえら
れてゐるが、堤の櫓の木は年とともに切
倒され残り少なくなつてしまつた。あ、
榎木は何を語る……。
懷古すれば淡い昔の夢として池田城は
眼前に髣髴としてたゞよふ。

みが生じて來た。到着したばかりの中は
勝手が解らず、神奈川商工の室にはいろ
うとした事もあつた。先輩の今村、高木
さんも來てゐる。暫く休んでから、浴衣
を着て屋上に出て見た。涼しい風が撫る
浦中の磯貝も來てゐて、何事か高らかに
話してゐた。時々アスファルトの青い街
路を圓卓がなめる様に塵一つない道ばた
の芝の間を走つて行く。眼路を轉じて東
の方を見ると、屏風の様に默然と立つた
神宮球場の外野の右翼觀覽席が見えてゐ
る。西の方は見渡す限り深い木立で、果
は幽かにかすんで涼しさうだ。屋上の階
段を上つてもつと高く上つて、四方を眺
めると、東の方に競技場が、ひらつた
く見える。青い紺碧の空に眞白な雲が浮
び、其の間から眞夏を通りこした太陽が
残暑を残して、ジリ／＼と照らしてゐる
三〇二號室にもどつて窓から下を見下す
と、時々地下の喫茶部から若い女が顔を
だす。

何時しか森嚴な外苑にも夜のとなりが
深くたれてゐた。廣い東京の騒音も夢の
様に遠のいて、ひっそりしてゐる。屋上
に出た時、何所かで、サイレンがなつて
ゐた。火事に相違ないが廣い東京だ。ず
つと見る所、少しも眼につかない。淡い
月影が屋上のコンクリートの上に影を残
す。夜の東京の青い火、赤い火、あちら
こちらに照しだされる美麗なネオンサイ
ン。星の光も薄らいで、北斗七星だけが
北方の空を飾つてゐる。ひや／＼する風
が波打つ朝晩の涼しさは「秋が招いてゐ
る」とでも言ひたい様である。家に歸れ
ばコホロギが鳴いてるけれども、此所で
は鳴いてゐない。折から聯隊でラッパの
練習をはじめた。最初は面白く思つて聞
いたが、だん／＼耳障りになつて來た。
明後日試合するので、今夜と明晩はゆつ
くり休まねばならないが、四聯隊のラッ
パ練習で、やかましいので中々眠れなか
つた。

今夜は夕食前、地下の浴場に行き、食
堂で夕飯をすまして後一時間半位で皆床
に就いてゐた。ラッパはまだやまない。
消燈した室内に、東天に上つた月が清い
影を投げて趣が盡きぬ。ラッパの響がだ
ん／＼遠のいたと思つてゐる中に、何時
か深い眠に落ちて行つた。(二十日)
何時間かたつて、ラッパの響で眼がさ
めた。窓の硝子越しに濃い霧がまいてゐ
た。陽光もさしてゐない。眠つたので
起きる勇氣もなく、そのまゝ横になり、
周圍の微かな聲に誘れてまた暫く眠つた
今度起きた時は、もう鈴木、今井、今村
さん等の者はガヤ／＼話をしてゐた。窓
から陽光がさしこんで暑い。起きろ／＼
とでも言ふかの様に。手拭をもち洗面所
に行き顔を洗つた。此の時はもう霧がす
つかりはれて、コバルト色の空が覗いて
ゐた。
それから一時間後は、ユニホームを着
て僕達は圓卓に揺られてゐた。入場式は

九時。八時十分頃まで、丁度一時間位戸塚球場で練習した。阿部さん、小久保先輩も来てくれた。戸塚球場は周囲のネットが高い為かさまうに見えたが、ボールを打つて見るとあまり遠くに行かない兄貴の言つた通り廣いと思つた。

愈々入場式である。僕達熊中チームは浦中の隣りに埼玉縣と赤く書いた旗をもつて整列して、桐生中を先頭に順々に球場にはいつた。しつとりと程よくしめつた球場を、サク／＼と踏みしめて、中堅後方に整列して國旗掲揚式を行つた。静々と代表校主將の手によつて揚げられる日章旗は紺碧の空にひら／＼輝き、見事な緊張裡に式が終り、後退して、グアイアモンドに並んだ。諸々の主催者代表の訓辭あつて後、桐生中學小林主將の見事な宣誓の辭があり、僕は退場した。

最初の試合、茨城工業對早稲田實業戦兩軍の練習終了後、プレイボール。茨工のトップ打者、松田文相の老腕をもつて

くりだされる力一ぱいの、大きなゆるい弧を描いて来るニヤボールを、クルリと空振して試合開始。早くも關東中等野球戦の幕は斬つて落されたのである。

徒歩の通學

三丁 腰塚 炳

もう知らぬ間に、三年の永い間あの悪い、ぬかる一里ばかりの細道を通學したのだ。

僕は或る時は學校の歸り途などに全く歩いて通學するのが、疲れていやだと思ふ事もあつたが、然し時々徒歩の通學が非常に朗で楽しいと考へる事がある。其れは實際に朝早く家を出て、ぼつ／＼と歩いて行く氣持善さ、春は菜の花の咲き芳ふ岡を通つて行く氣持よさ、又青々とした麥の葉浪、そして其の上空に、かすかに見えて雲雀が朗な聲で歌つて居る様、又小學校の惡戯小供の麥笛の音を聞くのも氣持が善い。夏は途の中程にある

八幡神社の大きな木影に、青葉の間を吹く涼風を受けながら、三四人の學友と共に色々と話し合ふ楽しさ其れは疲れきつた足が神社の木陰に着いた時は全く家に歸つた様な氣がする。秋は又、途中の林の紅葉も遠くに見える家の圍りの樺の紅葉の景色も、抜きん出た梢に小鷹の甲高い鳴き聲も自分の疲れた足を元氣づけてくれる。又稻の黄色い穂浪も、田の端で二三人の小供が歌を唱ひながらいなごを取つて居る様も、心の元氣を引き起し、氣持が自然と朗になる景色である。

冬は葉の無い枯木に鳥が寒々と、淋しさうに一聲二聲鳴く聲も足の疲れを忘れさせるかとも思はれ、雪の日等は朝早くまだ誰の足跡も無い眞白な雪の道を、さく／＼と歩き白い雪の春の花よりも優る様な景色を眺めながら、口笛を吹いて學校へ向つて行く氣持等は、例へば無いたく、又あの強い、烈しい冷い西風に向つて行くのも、心身を健全にしてくれるかとも

思はれる。そして非常に飽きた時には、本を取り出して歩きながら大聲で讀んで行くと、道の曲り角等で知り合ひの人と逢ふ事等もあつて非常に恥かしい事もあるが、此れも又一つの面白い事でもある。此の様な四季折々の楽しい景色を味合ふ事の出来るのは自轉車や汽車で通學する者には知る事は出来ないであらうと思はれて、自分の徒歩の通學が痛切に楽しく思はれる、そして又此の徒歩の通學は後に中學時代の思ひ出の一つとなる事であらう。

國難に對する我等の覺悟

三丁 中村 一男

我が日本の國難。一體國難とは何の事を言つてゐるのか。滿洲、上海兩事變はその一端である。戰爭的對支關係、それ國難の一端である。眞の國難、それこそ平和の戦だ。國內の精神的不安だ。平和

の戦とは、それは、各國經濟ブロックの成立に伴ふ貿易の障礙である。國內に於ける精神的不安とは、勿論、言ふまでもなく、國民のあらゆる階級に、そつと魔の手を延す恐るべきあの赤化思想である。この二つこそ、光輝ある我が母國の前途に、一抹の暗影を投げる眞の國難とも言ふべきものではなからうか。

「國難を打破せよ。」とは誰かが叫ぶ聲である。然し、いくら大聲を擧げて國難は逃げては行かぬ。徒らに「國難打破」を叫ぶよりも、事に處して何を行ふかといふ事に考へを走らせよ。事に處して何を行ふか！此處に於て我等は一考せねばならぬ。

先づ第一に行ふべきは何か。それこそ各が己の本分を盡す事である。農夫、商人等々、己の職業を熱を以てやる事が第一である。

あの豊臣秀吉は、信長に仕へた足輕時代から「己の本分を盡す。」といふ事をモ

ットーとして進んだ。草履取なら草履取の本分を盡し、足輕なら足輕の本分を盡す。そうして偉くなる事よりも、足輕といふ役の中で最も役に立つ人間になる事を心懸けた。そうなるにはどうするか。即ち、それは足輕としての本分を盡す事である。その本分を盡すことによつて、足輕の中での第一等者になる。なほよく勉める。さうすれば、次に來るべき物は、當然昇進である。彼秀吉はこうして終に關白、太政大臣とまで出世したのだ英雄秀吉の「己の本分を盡す。」といふモットーこそ、現代、非常時の我々が眞に従ふべき尊い言葉ではなからうか。

農夫がその職業の本分を盡せば、畠肥え食物は増し、食料上の不安はやがては一掃されるであらう。

商人がその本分を盡せば、家は富む。即ち國家が富むのである。

いづれの職業に於ても、各人がその本分を盡せば、その仕事は發展する。こう

秋

二甲 岩田 四郎

もはや晩秋だ。朝夕は大分寒い。いつもの通り朝早く起きて庭へ出ると、もう四方で陸稻かなにかこいでゐる。あの齒ざれのい、機械の音は近くでは「グウン／＼」遠くでは「クウン／＼」といふやうに、朝の冷たい空気を振動してきこえて来る。

空を仰げば一點の雲もない大空の、眞たゞ中に夜明の月はひとり淋しくぼつねんとして、その青い光で大地を薄青く照らしてゐる。全くなんとも言へない氣持がする。その中に足の方から入ってくる冷たい風を思はず感じた。それから顔を洗はうと思つて洗面器に水を満し洗はうとすると、さつきの月は水の中にもその半身をうつして居る。ほんとによくうつてゐるので、上を眺めてゐる様だ。しばらく見入つてそれから中へ手を突

〇

つばめ。つばめ。

春の訪れと共に第一に頭に浮ぶものはつばめだ。みるからに輕快さうな、身の引きしまつた、小さな身體で街に、野に飛ぶのを見ると、又地に、水面にすれ／＼にとぶ姿を見ると、自分もあのやうに飛んでみたいなあと、しみじみ感じたあのつばめ、あのつばめが長い旅路の所爲か、何となく弱々しさを思はせるやうな身體をして、この間街に姿を現した。ともう此頃では、旅路の勞れもすっかり癒えたか、元氣な姿を我々の目の前に現してゐる。

日もだん／＼暖かになつて、やがては初夏の候とならうとする。木々の緑が日増に目につくやうになつた。

校庭では選手が宿題を葬らんと考へる僕等も勉強に精を出さう。春に溺れずに

して國民全體一致團結して事を行へば經濟的恐慌も何のその忽ちにしてこれを退けることが出来る。こうして、國民全體が各自の仕事に精勵し、更に國民間の大なる溝である民族間の相反目を止めて、互に融和し、共に國難に當れば「國難打破」もさほど困難な事ではあるまい。

春 二 題

二甲 山本 一雄

春だ。春だ。

寒い北風の吹いた、白銀のやうな雪の降つた、冬も去つて、暖かな希望に満ちた春がやつて来た。

室外の授業もだん／＼多くなつて来て晴れて小さな、大きな雲の浮んだ青い大空の下で、どことなく寒さを感じしめるやうな風を、身に受けて、先生と共に働き、又休む時、僕は自然と朗らかになつてくる。

込むと、月は細かく散つて、水面にたゞよふ。水は相當冷たい。やがて朝飯を食べ終つて机に向つたが、冷たくて中々手が出ない。

障子を開けて前方を眺めると、一葉も無い大きな柿の木には十數個の實だけのこつて、その實は朝の弱い日光を眞横からあびて色づいた體を、なほ一そう美しくしてゐる。その前方の畠では、麥を蒔く人達が大聲で話をしてゐるので、それが手にとる様にきこえる。又軒にすれ／＼に生えてゐるひばの木には、二三四匹の雀がやかましく騒ぎながら、時々縁側まで下りて来る。畠の桑の木にはかた／＼と鳴く鳥がある。その中にだん／＼暖くなつてきたので、おばあさんや猫もはひ出して来る。

晩秋の日は短かい、はや夕方だ、家々の軒から煙が出るころになると、子供達は一そりやかましく騒ぐそれがあたりが靜かであるからまつたくよくきこえる。

日暮も間近になると西の方は「すつ」と明くなつて黒紫の色をした富士山は、その雄姿をはつきりうかばせる。鳥は我家へ歸る。柿の葉で一ぱいになつてゐる植木場には、二三輪のコスモスの花が名残を留めてゐる。

涙

二甲 三友 茂

すつかり晴れた日曜に、母にすゝめられるがままに家を出た。さうしてあてもなく歩きながら荒川に來た。たまに歩いたので、すつかり疲れ、砂地に眞圓く残つた草地の上に「どつか」と腰を下して大きな欠伸をした。さうしてあほ向けに寝てしまつた。

すつかり晴れ渡つた空を時々流れる雲始の内は唯何の考も無く見てゐたが、段々大きな雲から小さな雲に變つて行くにつれて何と無く淋しくなつて來た。その淋しさが段々大きくなるにつれて、今迄

に歩み來つた過去の事が何もかも皆淋しくもあれば、又悲しく、人間の薄情な、さうして嘘一杯で生活して行く人々を悲しく思つた。自分を考へないで――。

いつしか赤味を帯びて弱々しくなつた太陽の光を受けた私の頬は金色に光つたであらう、涙が、一層悲しさを増すと共に、私の頬全體が弱々しい夕日を浴びてゐた。

暮れてゆく荒川の原、サラ／＼と寒い音を立てて、流れてゆく水、殘燐をあびた水が白く光るのを見た。

笑

二乙 木村 茂

しと／＼と小雨が降つてゐた。家の中はさながら夕方様の暗かつた。

氣持の悪い、そして寝むつたい様な日であつた。正面の柱時計を見るとぽんやりとかすんだ中に薄く浮んでゐて、まだ二時を打つた許りである。母は新聞を讀

んでゐた。僕は何をしようと思つても氣がむかすぽんやりと寝そべつて天井のしみを眺めてゐた。弟は廊下でぶつ／＼と獨言を言ひながら玩具をいぢつてゐた。

「今日は……」突如玄關に聲が起つた。はつとして僕はバネの様に飛び起きた。母が新聞から目をはなして「ハイ」と返事をしながら立つて行つた。建具屋さんです、御苦勞様！」笑ひながら言ふ母の聲、つまらない氣持ちに一つの明るさを見出した僕は同じく玄關へ出て行つた。「ねずみいらずが出来ましたから持つて参ります。」建具屋さんが言つた。静寂を破られた家の中は急に明るくなつた。弟もかけて来た。「母ちゃん誰？」弟が上目づかひに母に尋ねた。「建具屋のをぢやんがね、ねずみいらずを持つて来てくれるんだよ。」と母の返事を聞いた弟は大發見でもした様な顔で僕に言つた。「兄ちゃん、ねずみ入れるもんだつて！」瞬間母と僕はこるげる様に笑つて仕舞つた。

アハ……アハ……と何時迄も笑ひはとまりさうもなかつた。弟の此の偉大なる一言によつて室内は明るい／＼空氣が満ちて、皆の顔も申し合はせた様に明るくなつた。笑！笑の力は實に偉大だ。

朝

二乙 關根福之助

「カンカンカン。」鉦の音と共に讀經の聲が靜かに聞えてくる。大師堂からだ。賽銭函の金具がきら／＼輝いて、秋の日の暖かそうに當つてゐる縁側の向うに、同じ様な白い火鉢が三つ日にひかつてゐる。鉦の音はその奥の眞暗な中から出てくるらしい。

急に騒がしい聲を聞いたので正面を見ると、九つ位の女の子が四人、肩からかけたカバンを左手で持つてかけてきた。そして大師堂の垣根を入つて賽銭函の前まで行つた。併し一番後から来た一人は垣根の所で止つて、皆のすることを見て

ゐるらしかつた。賽銭函の前の三人は鰻口の繩と一緒に手をかけながら「お婆さん、おがみにきたよ」と言ふと、鉦の音は急に止まり「そうかい、良い子だね、よくおがんで行きな。」と、やさしそうな老婆の聲が聞えたが、その聲が終らぬうちに三人の「うん」といふ言葉と共に、鰻口のしびれるやうな音が二三回ならされた。そして三人は薄汚い手をあはせ、頭をさげて、ちよつとの間おがんでゐたが、右の端にゐた一人が、黒い鈍間をうな中にどこかするところがある顔を急に僕の方に向けて、につと笑つた。併しすぐにその笑つてゐる顔は、垣根の處に立つてエプロンの裾をいぢつてゐる一人の方にむけられた。此の時僕は、此の笑つてゐる顔に對して、佛の御前に手をあはせてゐる清淨でなければならぬ時に笑つた此の顔に對して、何か憤に似たやうな感じを抱かれずにはゐられなかつた。

やがて三人はおがみ終つて「お婆さん

お賽銭もらつたら、又おがみにくるよ」と言つて、垣根の外にかけ出した。此の時あの笑つた顔が、手であかだらけの髪の毛をのけながら、鈍間な、するするな目で僕を見た。又四人とも、左手でカバンをかかへてかけて行く。

堂の中から、又鉦の音がしはじめた。

此の間、すこし鉦の音がしなかつたのは堂守のお婆さんが、鉦をたたく手を休めて、眼鏡の奥から女の子のなすことを見てゐたのかもしれない。鰻口の繩はまだゆれてゐて、暖かそうな縁側へ曲線の影を落す。コスモスの花は此の間の大風の爲か、大抵横にたはれてゐながらも、今のうちにと互にその美を競ふてゐる。垣根にしばつた孔法大師といふ旗は、雨風にさらされて、薄黒くなり、その半分は傍の木にからまつて、おもひ出したやうに、はた／＼となつてゐる。隣の測候所の風速計も靜かにまはつてゐる。東の方には、刈りとられた畦や、尙刈りつゝあ

る百姓の働く有様を見た。その向ふに、野を越え、圃を越えて、尖つた青くかすんだ山々がそびえてゐるのが見えた。

僕はいつのまにか、あの笑つた顔に對する憤も消えて、靜かに歩を學校に向つてゐた。

月

二乙 岩淵 義章

秋の涼風はすーとすだれをゆらめかす軒の風鈴が虫聲のやうにかほそくなつてゐる。今日は十五夜である。カーテンの影から洩れる月影が淡く机を照した。連日の雨ぐもが晴れて、暴風の過ぎ去つたあとは深山の様に靜かである。その淋しさの中にさん／＼と死の冷魂の様な清い月が上つてゐる。月！月！月！あゝその月は、天地萬物を一つに包んでしまつて幸、不幸の悲しくなるにつけうれしくなるにつけその心を月に訴へて、常に自分の心を慰めたと月雪花の一節に書いてあ

る。月の光！それは僕等の慰安である感傷的な對象である。

打ち向ふ月は一つの影ながら

とかつては古人が歌つたのだ。昔公も月夜の晩に清淨な光を浴びて、すぎ去つた自分のはかない運命を顧みて詩を造つたといふことである。秋だ！肅々とした蒼ざらである。そのそれから月の光が庭一面に覗いて小波の立つ小さい水たまりに散りこぼれた。

別れ

二丙 青柳 芳造

七月の末も近づいた廿五日、僕は使ひから歸つて来た。ちよいと床の間の方を見ると、きれいに包んだ贈物があつた。姓名を見ると荻野常次郎としてあつた。どうして持つて来て下さつたのだと聞くと、荻野君は大連の家へもらはれて行くので、最後のお別れのおしるしだと云ふ

僕は驚いて外に出て荻野君の家へ行つて見た。荻野君は外に出て居つた。さうしてうつむいてうち沈んで居た。僕が近づいたのを知ると、荻野君は顔を上げて笑つたが、其の笑の中には悲しさうな、そして僕に對してむりに笑顔を作つたと云ふ様子が見えた。其の目は赤く涙で光つて居た。之から遠く大連に行つた後の父母兄弟の事を思つて、泣けて來たのであらうか。僕が行つたので顔を上げたもの、又荻野君は思ひにふけて行つた。

そして荻野君の肩がかすかにふるへて居た。その様子を見た時には、思はず僕も目頭のあつくなるのを覺えた。僕は最後にきつと向うへ着いたら手紙をくれと何回も云つた。自動車は來た。荻野君は車上の人となつた。そして僕等に對して何回も「なごりおしさに」「さよなら」を云つた。自動車がほこりの中に消えて行くのを僕等はいつまでも「其の場に立ちつくして見送つた。」

自動車は消え去つた。僕等が力なく家にもどらうとした時に荻野君の弟が子守りにおぶさつてなにも知らずにすや／＼と眠つて居るのはいぢらしかつた。僕は心から荻野君の途上無事ならん事を祈つた。それから二日して荻野君のお母さんが「無事大連へ着いた」と云ふ電報を持つて僕の家へ知らせに來た。

水泳戦術

二丙 丸山 惇

僕の家から小學校までは約一軒位しかない。その往復の途中、小さな小川がある。夏の暑い時分の學校歸り、僕達は、着物の下に袍をかくして泳ぐのである。兩親からは、學校歸りになど決して泳いではならないと固く禁じられてゐた。だが腕白盛りのその頃に取つて、夏の暑い日の水泳位は、烈しい誘惑はないのである。泳がないつもりで居ても、川の所まで來て、すきとほるやうな清い水の

流れを見ると、つい誘惑に負けて、裸になつてとびこんでしまふ。何喰はぬ顔をして家に歸へると母は僕の顔を見て「また、泳いで來たね。」と云ふ。「い、え」隠したつて、ちゃんとわかる「どうして」「顔に書いてあるから。」といはれて、あはて、顔を撫で、見ても、追つかないのである。水泳をした證據には鼻の頭がきら／＼光つてゐるのである。

それが分つた僕は新しい戦術を考へた泳ぐだけ泳いで、上つて、着物を着ると友達に頼んで、往來の土埃りを顔に吹きつけてもらふのである。顔を埃りまみれにして、さも／＼暑い中を、埃りにまみれて歸つて來たやうな風を装うて、兩親の目をごまかしたが、終ひにはそれも見破られてしまつた。

「どうも困つた奴だ」と、とう／＼父は僕の隣のところに認をおして「これでもし消えて歸つて來たら、水泳をしたのだから」と、言ひ渡した。

さすがの僕も、困つてしまつた。それだけでなく夏の暑い時である。汗が流れたり、着物でこすれたりして、若し消えるやうなことがあると、水泳をしなくても、冤罪で叱られなければならない。僕はびく／＼しながら、時々、臍の上の所をそつと覗いて見なければならなかつた

が、僕はとう／＼うまい工夫を考へた。母の鏡臺から、そつと油を盗み出し、それを膏藥のやうにして、認をおされた上にはりつけたのである。平氣で水泳をして歸つて、その膏藥をはがして父に見せると、なんと認の跡は今おした様に鮮かに残つてゐるのである。

海のクレーン 秩父丸の出帆

二丁 小島祿一郎

僕が父と秩父丸の出帆を見物に出かけたのは忘れもせぬ八月十三日午前十一時のことであつた。東横電車にて横濱驛を

降りて、外人向の商店のあるウェルカム辨天通を過ぎ銀行街を通りぬけて、縣廳を右に見て税關の新らしき大門をくぐる。そして四號岸壁へ。

最早日本一の優秀船たる秩父丸は壹萬七千八百噸の雄大な姿を横たへて、海のクレーンとして少しも恥づるところがない。父は住友の横濱支店管理の出張所が船内にあるのでその帳簿を調べてから池田さんと三人で食堂へ行き定食を食べ、晝食をすます。食後にお酒が出た。僕は食後にお酒が出るなんて變だなあと思つた。それから池田さんに船内を案内してもらふ。池田さんは此の船に二年間も居るのでよく御存知だ。船客の三分の一或はもつと多いかもしれない外人が居るこれはアメリカが禁酒國であつたので日本船に乗るとお酒が飲めるからださうだそれでやうやく食後のお酒が合點がついた。一等船室と二等船室はとても涼しくてサービスがよい。圖書室、プール、

テニスコート、ピンボン室何でも完備して居る。三越の賣店もあつた。三等船室は賃金が安いだけにとても暑く暑い。煙突も見た。此れは實に大きく二十五人でいなく位ださうだ。間もなくドラが鳴るので食堂へ行つて三時のお菓子を食べて懷しの秩父丸を出る。

三時になつた。ドラがジャン／＼けた、ましく鳴りひびいた。見送人は見物人は皆叫ぶ、七色のテープは見送人と船客とにつながれた。僕も出張所主任の伊藤さんや池田さんに元氣よくテープを投げた。何千何萬否何十萬とも知れぬテープは船出の人と見送人との心と心をつないで居るのだ。やがて三時十分出帆五分前の汽笛が大きく鳴り響いた。ふと左右を見ると僕は絶叫してしまつた。全くきれいだ。

十五分出帆の大汽笛は見送人の心を焦らだせた。船はする／＼と進んで行く。テープはどん／＼延ばされて行く。も一

つ汽笛が鳴った。それは秩父丸が又船客が懐しの日本へのお別れの音であり言葉である。やがて海のクレーン秩父丸は親しき見送人、そして見物人を後にして一段のスピードを加へて彼方の地平線へ消えて行く。あの船客をのせてあの太平洋を横断して一路アメリカへアメリカへと遠のいて行くのであつた。

千五百米競走

二丁 原田 文雄

「二年の千五百米に出る者は、機械係の前に集合。」の聲に「いよ／＼僕の番か」と身震ひをして、上着や白ツボンをぬぎ軽い姿となり、友達の「頑張れ／＼」の聲に送られて、丁組の選手堀、三橋の兩君と共に、機械係の裏の草の上に腰を下し、他の選手の来るのを待った。

其の中に小松原君や菅谷君が大きな體を現し、僕に「原田、どうせ一番にはなれないのだから、仲よく一緒に駆けよう

な。」と冗談らしく言つた。皆自信があるらしくびん／＼して居た。「運動場に出ろ」の係員の聲に緊張し、ぶる／＼ふるへた。その中に出席をとつたが、去年の海軍記念日に一等をとつた大熊君及び、外の早い者が若干工合が悪くて出られないのが力強かつた。かん／＼に照る太陽にんだか頭がいたみ、のどがかはき、又、小便も出たかつた。しかし、おいてきぼりにされてはと心配して、外に出て行かなかつた。まだ時間があるから休んで居れ」の聲にやつと腰を下したが、しばらく後に、大熊君等の出場を見て心細く思つた。丁組の席からの「がんばれ／＼」の聲に、「何くそ」一番になつて見せるぞ」と腕を振り廻して見せた。「途中からやめるとなぐるぞ。」と係員がどなつて居た。

僕等は笑ひながら「ドン。」と云ふピストルの音に駆け出した。僕等は元氣一ぱいで一團になつて一生懸命に駆けた。「頑張れ／＼」の應援に勇みながら、一回二

回とまはり、三回になると、なんだか足がだるくなつたのを覚え、初めの一團とだん／＼はなれて行く様な氣がした。まだ後から、他の一團が駆けつけて来るのだ。油断は出来ない、一生懸命に駆け、又競技部員が叫ぶ。「後三回だ、二回だ。」の應援にはげまされるが、ます／＼おくれしてしまひ、とう／＼せり合ひながら、後の一團にぬかれてしまひ、後を振り返りながら、ラストだとなつかりしてしまつた。誰が應援して呉れるのだから「原田々々」と叫ぶ聲がする。六回目だつたか「一番が後に近づいて居るぞ。」の聲に振り返る間もなく、僕と一緒に駆けけるはずの菅谷が「はつはつ。」と息をしながら僕をぬいて行つた。續いて後の一團にもぬかれた。此の時、僕が一番の様に見えたのか「それ／＼」一番々々。」と云ひ、又、小學校選手席から「おい眼鏡、しつかりしな等」の叫ぶのが聞えた。此の言葉に「それなら自分で駆けて見ろ。」と叫んでやり

たい位に思つた。

かすかにピストルの音を聞いた時、來賓席に見て來て居る父や弟が、此れを見て、どんなにがつかりするだらうと思ひながら、薄く笑ひながら皆の後から、夢中に決勝點に駆け込んだ。さうして柔道場にだらりとおつか／＼つてしまつた。この時、僕は皆に一廻りおくれで居るのだと云ふ事がわかつた。それに僕とよい勝負であつた齋藤君が一人で駆け居るではないか。恐らく一番ラストに思はれたであらう。しかし駆け居る事のあまり好きでもないし、又、駆けた事もない僕が、此の千三百米を駆けきる事の出來たのは大變うれしかつた。しかし去年の海軍記念日の日はとても調子よく、する／＼と駆け居る事が出來たのにどうしたのだらういや、練習だ。千五百米を駆けると知つて居りながら、一月前からでも練習して置かなかつたのが、負けた大きな原因だ此の様な事を思つて居る間に何時の間に

來たか、去年の體育大會に、一等をとつた堀君が、元氣なさうに僕の側で「俺と、三橋や、俺の方が早かつたいなあ。それなのに三橋は、六等の旗を持つて行つてしまつた。」と云つて居る。僕はたゞ點の方に影響しなければ、と心配で堀君の言葉には、たゞ「うん／＼。」と答へて居るばかりであつた。

六等までの者が思ひ／＼の旗をおし立て、賞品係の方へ行く姿をうらめしさうに眺めた後、「そろ／＼行かう」とはづかしさうに歩いて、自分の席に歸つて行つた。なんだか、まだ、足がいたい。三、四番にはなつて見せると云つた友達の前には、何だか行きづらかつた。

行く秋

一甲 内田 潔

秋も漸く深くなつて、冷たい風がざわ／＼と樹々の梢を動かす度に、紅や黄色の葉が枝を離れて、かさり／＼と地面に

落ちる。松の緑と楓の紅が美しい繪のやうに調和してゐるが、楓はもう脆くも散りかけて赤い涙を落すやうである。春にあの賑はしく青葉の茂つてゐた櫻も、五月節句時分には大きな葉が活々してゐた柏もまた若葉を摘まれても尚めき／＼と後から芽を出した茶の木も今は皆秋の淋しさを裝つて、昔を夢みてゐる。松の緑は今も變らないが春の緑の滴るやうな趣は見えない。

太陽が西に傾くと、紅の雪は波のやうに、鱗のやうに、黄色をちりばめたやうに、美しい油繪を窓硝子に映してゐる。そここの家々からは夕餉を炊く白い煙が立昇る。白い雪をいだいた日光連山も夕べの空に浸込んでその姿は見えなくならうとしてゐる。

風ははたと止んだ。地面には落葉が重なり合つてゐて、今朝掃いた庭の掃のあとも見えない。樺色になつた青桐の葉が

ばつさりと一つ落ちた、續いて、小さい
櫻の葉がひら／＼と二つ三つ暮れ行く秋
の形見とばかりに軽く舞ひながら散つて
ゐる。

秋

一乙 大關 清一

晴々としたすが／＼しく心地よい日の
午後、秋色まさに酣な河原の諸方を散歩
して、思ふまゝに恵まれた秋日の清純
な大氣を呼吸した。幸福な收獲を興へる
實りの秋も夕暮を迎へる。紫匂ふ秩父山
脈は峯々の間に、一塊の白雲を湧立たせ
川向ふの村は農家の前景にふさはしい黄
金色の稲や、鈴なりに熟した柿でわが世
の秋を彩どつてゐる。

川の流は澄切つて冷やかに、秋水の趣
も格別である。今宵は此のせゝらぎに、
天高き月影が寫り碎けるであらう。砂丘
一面に生えた赤褐色の雜草中に、一二本
有る灌木を、黄色の實赤い葉の蔓草が纏

絡してゐる。夕日が紅の片雲を抜け、其
の光が松林にさし込んで、幹の半面や根
本の芝草を黄色く染めた。たくましい人
も肥えた山羊も朗な傳書鳩も可愛らしい
草花も、すべての物が一樣に照し出され
て今正に黄色に彩どられ、弱々しくも鋭
い落日に川原松山公園の景色は、一しほ
秋深い感に打たれたと云つて好い。

残燠ほのかに川原小徑の兩側には、風
情いと懐しく優美を競ふコスモスの紅白
の花、此處を先途と咲亂れて宛も浮かれ
出た様な姿を十二分に發揮して、呼べば
應へんとするのだらうか。

やがて此所彼所ともあたり全體が暗に
掩はれ、肌寒い夜風を感じる頃、對岸の
樹木も黙々と、今日の別れを告げる時、
燈火がち／＼見え初めれば人生にも一
段と秋思をそゝる。

平和な秋よ、また来る年も何處のはて
まで實を結べと歌ひながら、家路に急い
だ。

秋は過ぎ行く

一乙 鵜飼 香吉

楽しい秋は過ぎ、寒い冬がおとづれて
きた。

夜露の間に／＼、嬉しさうに夜露に喉
をうるほしつゝ、鳴く蟲の聲もいつの間
に消去り、唯遠く南へ／＼と飛去る鳥の
群が時々空中に圓を畫きつゝ、飛去つて行
く。

校庭には今にも枯れさうな榎の木の葉
が強くあるひは弱く風の吹くまゝに揺れ
てゐる。

軒を並べてゐる町の屋根にいつばい霜
が立ちこめてゐる頃は田圃の中に一人淋
しさうに佇んでゐる案山子を見受けた。

馬屋には白息をはきながら「ヒヒン」と
鳴く馬の聲も何となく淋しさうに僕の耳
に聴えてくる。

時々冷い冬の風が僕の顔を撫でてゆ
く。秋は我が時なりと誇り顔に咲いて

秋の夜の會話

一乙 堀越善之助

僕は書齋にとちこもつて、父を待つ爲
に勉強にふけて居た。晩秋の空にはも
う夜のとりりがかゝつて居て小雨さへも
降つて居る夜であつた。隣の縣道には湯
歸らしい人が手拭をかたに掛けて世間話
をしながら歸つて行く。そんな事等を見
ながら勉強して居たが、しばらくすると

そんな事など目に入らなくなつた。
幾時間かたつて階下でにぎやかな、さ
はがしい會話が始まつた。父が歸つたの
だと云ふ事にすぐ氣がついた、と同時に
ほかの人の聲がして居るのに感づいた。

勉強の手はたと止んだ。僕の足は自然
かの様に階下に向つて進んだ。
階下には父始め母、妹達が火ばちの邊
に集どうて會話ににぎはつて居る。僕も
座した。父のそばには従兄弟でも叔父の
やうに年の違ふ正ちゃんにこゝ僕

かた秋花も今は唯一本の本でその上に雪
の降りかゝつてゐる様はさながら白木の
やうである。
冬といふとすぐ田舎の貧しい家の中で
ゐろりの廻りに集る人を思ひ浮べると一
段と淋しさをはる何れも皆冬の淋しさ
を物語つてゐる様に見受けられた。
「早く冬が過ぎてくれ」と僕等は皆白い
息をはきながらつぶやいてゐるであらう

武藏野の秋

一乙 清水 洪

夕陽が赤々と秩父の連山を照し餘韻を
なほ荒川の堤へ送る頃、私は武藏野の一
邊に立ちてしみじみと、秋をあぢはつて
見たのである。

足下ところがる野菊の一輪が、精一ば
いにはりきつて身もちぎれよとばかりに
大きな花を咲かしてゐた。これを見た時
私の心はおどつた。それは夏の中もう色
々の花は咲き落ちてしまつた。だがこの

野菊は寒くなる秋をものともせず、大き
な花を咲かした。このやうに「寒くなる
秋をものともせず」といふ所が男子の氣
象にあつてゐるのを見た時、私の心もこ
のやうであれと祈るのだつた。
上を見ると秋の空はどこまでもすみ渡
つてゐる。其の中を赤とんぼがすい／＼
と流れて行く。うすい羽が夕日にあたつ
てきら／＼と光る。とんぼの群はどこま
でも續いていつた。

横はと見ると稲田である。風がふく度
に穂が波をうつてさ／＼とゆれる。そ
の度にちよ／＼と、雀が中天にうかぶ
そして又、少したつと降りて来て、實を
たべてゐる。私は面白さに、いや、稲が
むだにならない爲にと思つてそばの鳴子
をがら／＼と引いた。とたんにさつと、
雀は數匹飛び出した。彼等は西の空に向
つて……。

それを私はどこまでも見送つた。

顔を見ながら笑つて居る。

今年二年生になる妹は正ちゃんのおそばに座してしきりと聲を立てゝ本を読んで居る。下の妹達はわけのわからぬ歌を大聲に歌ひ等しながら父と正ちゃんのおまはりをかけまはつて居る。にぎやかな會話であつた。しかし僕だけは明日學校がある爲にその會話を後に淋しい二階の床に夢路をたどつて行かねばならなかつた。階下からは未だにぎやかな歌聲、かけまわる音等入亂れて聞えて来る。

休暇中の一

一丙 長谷川 金一

癢かしい夏の夜は明けて輝やかしき太陽は、ほのぼのと昇り初めた。

雀はさへづりて我を起すが如く、怠の心は我が起きるのを、さへざる如くです。だるい心を勵まして起上り井戸端へと向つた。顔を洗へば今朝のすがすがしさが初めて感じられる。涼しき風に送られ

て井戸端を去つた。

朝飯がすんでから父と弟と三人にて東京に行く支度をした。支度もすめば手に物持ちて驛へ……ぴーといふ汽笛の音と共に車上の人となりし僕等は一路東京へと向つた。

x x x

元氣なそしてにぎやかな、かたらひをしながら十二里半の路を走つて東京大井に着いた。それより自動車で上神明町へ「あつ、よくきたね」「よくきましたね」きげんよい聲に迎へられて自動車よりおりた。

九時すぎの太陽は、かん／＼とやきつくやうにあたりを一ぱいに、射し、圓タクやバスの音にぎはしく、さすが東京市と名のつくだけあり、ふつうの町とは一段の相違がある。

白い湯氣がわきの格子より出てゐる。店はせまいが煮物、つけものが一ぱいにきれいにそしうまさうに並べてある、

九〇

表面の大きな花も美しい。

父の後についてお勝手にきた。こゝでは正ちゃんや姉さんが汗をばつぽと出しながら一生懸命になつて、うづら豆やこぶ巻を煮てゐる。父が「おいよく働くな」と聲をかけると正ちゃんはこちらをむいてにっこり笑つた。

そこを通りぬけて奥の静かな室に入つた。父はたいそうつかれたらしく來るとすぐごろりと横になつてねむつてしまつた。茶や豆を姉がもつてきた。

「金ちゃん、向ふの方へ遊びに行かうよ。」弟の信男が僕の肩をぽんとたたいて言つた。「よし。」快諾した僕はさつさとアスファルトの往來へ出で右の方へ向ふと直ちに隣の天プラ屋のかたく閉した戸の手前の紙に目がとまつた。「信こい。」と二人で近よつてよんで見た。

「永々と營業仕候當店も此炎熱鐵をもとかす夏にては皆様に新鮮な品を差上る事もかなひ難く候。かくの如きなれば夏

中この店を閉さしあの秋風吹く九月の末になりませば再度開業仕候故この段惡しからず願上候。」と達筆にてかいてありました。

じり／＼とする目の爲あつくてたへられない。「信、鴻巣の町より、にぎやかだなあ」あさすが東京だけあるよ。」と語りながら戻りかけた。赤い廣告用の旗が南風に吹かれてひら／＼してゐる。多くの人のいきかい、人の話し聲等は一見鴻巣の十夜の時のやうだ。

弟とかへつて夏休の宿題を一通りやつて時計を見たら十二時半あわてて奥へいつたら皆ごはんはすんでゐた。

食後、父より若い時の苦心の話等してもらひ、弟と共に晝ねをし、それよりあれやこれやと遊んで一日を楽しくすごした。

休暇中の一

一丙 竹田 博

「おー。」と云ふ呼聲に後をふりかへると、近頃友達になつた片貝村の高嶺君だ。にこ／＼笑ひながらかけてくるのがよく解る。白い齒がよくやけた顔から覗いてる。足を止めて、僕は高嶺君を待つた。すぐ追ひついた。體が強いのか少しもつかれた様もない。

「海へ行くんだらう。一しよに行かうよ。」

と高嶺君が言つて僕と一しよに兩側にこんもり茂つた大樹の道を波の音を聞きながら、海の方へと向つた。

通つてきた道を少し右へ曲ると一面の沙濱だ。大きな波、小さい波、それに入り交つて小供等の笑顔、浮輪を授ける者、取りくらをする者、西瓜取りをしてゐるもの、砂に體を埋めて嬉しがつてゐる者だんだら染の日傘もあれば、おとし穴もあり、砂山もあつて、中々のにぎはいだそして楽しさである。

僕はかけだした。高嶺君も一しよに……

……

昨日着物をぬいた所へきて裸になると急にきいた事のない鐘が鳴り出した。不思議に思つてゐると、高嶺君が「あれは飯の仕度だよ。」と教へてくれた。海で取つてきた魚で食事をするのである。濱に上げてある漁舟の横を通つて海に入ると、やゝ深い所に高嶺君の弟の三郎君が泳いでゐる。

「あそこまで平で行かう。」と彼が言つた。平といふのは平泳ぎの事である。

「うん。」とうなづくと、一しよに二人は泳いでゐた。

波が日に照らされてきら／＼光る、得意の平で進んで行くと、いきなり大きな波がおしよせてきた。うまくやればわけなくくゞつて行けるが、下手をすればからい海水をがぶりとやる。この前失敗したことがあるので僕はくぐつた。波が頭

の上をすー／＼とこして行くのがよくわかる。うまうまと思つた。しばらくして、首をだして高嶺君はと見れば影形もない。どうしたのかと思つてゐると、やゝ少したつて波の上に顔を顯した。

「大分息がつくな。」と云へば

「なにこれしきの事。」と答へる。大さうさつぱりしてゐる。その中に三郎君も氣がついたのか、拔手で僕の方へ引きかへしてきた。三人が顔を合せると、又につこり笑つた。片貝へきてから未だ二週位である。早くも良い友達ができたのは、僕には大へんうれしかつた。

濱では、實探しても始まつたのか、前にも増した人出にぎやかさである。

「おい、僕らも行かうよ。」

といつて濱をめぐり泳いで行つた。晝の海は一しきり楽しくにぎやかである。

秋

一丁 新堀 健兒

秋風が吹いて来て彼岸が過ぎると、秋は急速度に更けて行く。蟋蟀の聲は益々更け行く秋を讃美するが如く聴え、野も山も益々黄ばんで来る。そして僕の友達も此等の秋の情景を文章や詩や歌や俳句に書く。僕はそれ等の作品を読んで何時も不満足である。それは餘りにセンチメンタルであるからである。僕は秋の情景はそんな病的なものではないと信ずる。否もつと／＼健全で晴朗なものである筈である。

センチメンタルな歌人の歌を読んだり冬を人生の死に聯想させて、秋の情景を描くから、秋をそんな病的なものにするのではあるまいか？ そんな肺病患者か神經衰弱のやうな秋が何處にあるか？ 天はあくまで高く蒼海の如く秩父、日光の連山は、その雄姿を益々明瞭に現はし雁は中空を飛來し、月は益々其の美を發揮し、吹く風は木犀の香を送り、田の稻

は實つて黄金の穂を垂れ、柿、柚、石榴

の實は熟して日光に鮮やかに映えてゐるなど、皆健全な生氣ある成實の情景である。何處にも病的なセンチメンタルのところはないではないか？

然り！僕はあくまで秋は病的な「あはれ」のものでなく、然も健全な生氣ある晴朗なものであると主張したい。

秋

一丁 小林 謙一

秋の夕暮、それはなんとも名狀し難い寂しい美しい景色ではなからうか、あの廣いそして盡きる所を知らない關東の平野に、或は東北の山村に、秋の日の沈んで行く景色は人をして恍惚とせしめるのに十分であらう。

私は嘗て幼時叔母の郷里なる上州に秋を送つた事もあるが、夕方にもなれば家々の窓からは白い煙が立ち上る。そして白い霧のやうなものがあたりをたちこめ

て来る。それと同時にいつもその雄姿を關東の平野に誇つてゐる赤城の山に日が照り映る。そのやうな景色は今でも私の頭のどこかに深く印象づけられてゐる。

私はミレーの落穂拾の繪が好きだ、廣い、そしてはるか彼方に細く帯のやうに連なつてゐる緑の森、空は青く、彼方此方に白い雲が浮いてゐる。向ふの方に、赤い屋根の家が並んでゐる、そして馬に稻をつんでゐる人がゐる、近くに三人の人が腰をまげて落ちた穂を拾つてゐる。そのやうな繪であるが、私はいつもその繪を見る度にフランスの田舎の秋を想像する、そしてフランスといふ國に一度行つて見たいやうな氣もする。

秋の日の午後は静かだ、村の道を通る自分の影が長い。

秋、天高く馬肥ゆる秋といふけれどもやがては嚴寒の冬が来る、それだけに、秋はなんとなく冬らしい氣分のする時節である。

私は秋は好きだ、それは、なんとなく寂しい美しい感じがするからである。

嗚呼、私は叫びたい、我が人生も秋の如く、晴々しく、美しくあれと。

休暇中の一日

一丁 菅波 浩次

朝起きてみるとまだあたりは薄暗く、表を幾人かの人が、朝の静けさに下駄をならしながら通つて行く。やがて暗いとはりも何處にかきえて、東の空がだん／＼赤らんで来る。空は雲もなく澄みきつてゐる。今朝こそは、僕が父母と弟と相共に、旅行に出る朝だ。僕にとつては休暇初まつてより、一番楽しみに満ちたそして又心までも、明るくさつぱりとした朝だ。

家の者に送られて、元氣に家を出た。停車場にて汽車に乗ると、汽車は汽笛を朝の明るい空氣に高く高く響かせながら靜かに停車場を離れて行く。我等の心の

中には、今日行かんとする水上の景色や面白さが想像され、顔には喜びが一杯に満ちてゐる。弟と一しよに窓によりかかつて、あたりに展開される景色をながめてゐる間に、すでに我が埼玉縣を去り、群馬縣に入つて廣々たる關東平野をだん／＼と過ぎ、高崎に着いた。

それからは單調なる平野の景色は、次第に山のながめと變り、汽車は此れからは上りとなるわけである。右に赤城山が長くすそを引きその雄大なる姿をあらはし、何となくをしい氣持を持たせて、又左に榛名山が清く美しい姿態をコバルト色の空に、くつきりとうかべ、此れらを見つめてゐるうちに、澁川に着いてゐた。此處は伊香保其の他の温泉場に向ふんで、にぎやかであつた。僕は四萬へ母と一しよに來た時、此處でおりののであつた。そして其の時のことがい／＼うかんで、此處が何となく親しみあるが如く感じられた。出来ることなら、汽車よ

りおりてみたい、といふ氣持さへもおこつた。

此處を發すると山は線路にせまり汽車の行先をさへぎるやうにおもはれるが、巧に山と山との間を通り、黒煙をうしろに残して進んで行く。やがて川の邊に出た。此れがあの利根川の、上流であるとのことだ。此處からはしばらく此の川にそつて進み、川は右に或は左にとあらはれる。窓から見ると、此の流れが處々に變化の多い景色をつくつてゐる。靜かに山の間を、その青い清い水が流れてゐるかと思へば、處によつては大岩をも動かすやうな勢で流れ、強く岩にぶつかり白波を立ててゐる。此の川の沿岸には何人かの人が、面白さうに鮎をつつてゐる。だん／＼と進むにつれて、川は幅が狭くなり、我れ等のすぐそばの眼の下を流れ山はいよ／＼せまつて眼前にそびえ、まはり山又山にかこまれてゐる。そして汽車のはしる音は、／＼と周囲の山

にこだまする。時々山につきあたつては、まつくらなトンネルにはいる。此の群馬の山と利根川の上流である此の谷川の、合したながめは實によく、かけぢによくある山水の景に似てゐる。

少し進むと二段と景色のよい處に出た。兩岸の大岩はだをあらはし、附近の山には水青々として茂り、其の間を關東と越後の間より流れ出づる水は、眞青に此處を流れてゐる。そして背に上越の境に雪をかぶつて立つ高山をひかへてゐる。全く畫を見るやうな美しきながめである。後に聞けば諏訪峽といふのださうだ。道にそこをすぎると、温泉宿の美しく立並んでゐる處が、川の向ふに見えた。「ああ此れが水上だらう。」と思つて窓より乗出すと汽車は水上驛にとまつてゐた。僕等はすぐ自動車で宿に向つた。宿でも快くむかへてくれて、すぐに部屋へ案内してくれた。先づそこでゆつくりと、くつろいだ。そして關東の奥に、利根川

の奥の邊にわき出づる水上の温泉に入つて、十分に旅のつかれをやほらげゆつくりと休んだ。だん／＼と日の西に沈む頃、僕はあの溪流にそふ名勝を見物して歸りにぎやかに夕飯をたべた。そして宿の近所を夜少しさんぽし、何時もより早めに床についた。

しかし馴れない部屋が少し變だつた。そして何だか自分の町や家になつかしくなつた。僕は此の山の奥に來てはじめて家や町のなつかしさを、感じ得ることが出來た。明後日はループトンネル及び清水トンネルを越し新潟に行くのかと思ふと、／＼な事が頭にうかぶ。そんなことを一人で楽しんでゐるうち、何時かぐつすりと寝こんだ。

短歌

佐藤 露三

千代田の城に 日の皇子の初職ひるがへれるを寫眞により拜し奉りて
瑞枝さす松のみどりの大内山皇子をことほぐ初のぼり見ゆ

校長先生の無事旅行を終らるゝを祝ひて

一つきの満鮮北支たびをへてわれらの君はことなくかへらす

大村先生のもとに文かきてかしこきや すめらみかどのかみつつけに

つはものどもを見さす日近しふたゝびに赤城の雪のあざやかにひかるを見れば君をと思ふ

小林先生をしのびて

朝にけに君がすまひしかど行けばかきにみだるゝ黃菊白菊
小やみなき秋雨けさはあがるかな武甲の

峯の雲はきれけり

秋ふかし葉びる青菜の山かげにしとゞに露のぬれにけるかも

秋ふかみ柿の木の葉の散りつくしこすえに残る赤き玉の實

幾日ふる秋のあしたの空はすみくわりんのうれに月はま白し

秋さめの今日は幾日ぞ祭日のまたも音しで雨の降りきぬ

眼さむればはら／＼とけふも雨かなやことしの秋のいつまでか降る

わが鉢の葛の木の葉にみ山てるにしきの紅葉おもほゆるかな

日々に秋の稲田のいろづきて小鳥の聲のにぎはかなるも

八千草の黄ばみし庭のそこゝに蜘蛛の糸網さ霧かゝりて

學校創立紀念日に舊師土岐先生を迎へて

思ひびの學びの園の紀念日にむかし教へし君をむかへて

車まわしの完成を祝ひて

ひとめぐる車の道の玉石のなかにうかべる樂山の島

若葉てるわれらの庭のとゝのへし車まわしのなめらかなるも

まのあたり猛將島村少佐の話をきゝて

長城のかこみをやぶり旗あげし島村少佐はわれら先輩

敵よりの降服状すぐさきし島村少佐はいまの時宗

小林先生體育大會に來らるゝとの知らせに答へ

菊かほる明治の節に越さるゝと指をりかぞへその日待たなむ

おさなきのむかしにかへり體育會はしりとばめや君ともろとも

五甲 堀 口 明

やがて死ぬ蟬の翅きりてたはむるゝ幼き兒等の今日はにくきも
たよられし心地のすればかはゆくてとら

ずとらせじ我が庭の蟬

坊師蟬むせびなくねも秋風も悲しきこと
を聞かすものかな
我が胸は今悔いたむ言荒く責めたる友
の父逝きぬとに
かたをさせすをさせとぞおしふるにな
ぜさからひてあしおとをたつ

五甲 大木 義夫

夜としなれば星をふくみて澄みきはむ木
枯しの空冬づきにけり
冬近しひるを静もる池の面に山茶花の一
ひら散りて久しき
こまやかに透る日したしこの山の木立明
るく冬づきにけり
秋暮れてやがて冬なり來ん春の受験準備
に皆一途なる
友等皆受験生なりこ、日向ひるの休も文
よみつゝく
や、輕き疲れ覺えて就く床のぬくみした
しき夜頃となれり
宿題の終へてうら安し宵の庭邊に星かぞ

へ見る

五甲 風間 博

東門の銀杏を見て
懷しや雨の銀杏は年經りて我が顔面に露
をば落す
受験を思ひて
何事も障りなき身の今なれど行末難き我
如何せむ

下級生時代を振返つて

若き時共に學びし友の榮彌上り行く彌は
なれ行く
熊谷中學校の生徒

荒川ぞみなざる時は杖となり守らん學舎
命の限り
幾千里異郷の空に王たらば額にかざさん
櫻の花を

出で立たば驚となれかし荒川も秩父も臨
め大空の上
選 手

デスコスの行く先見えで宵の空月閃きぬ
益荒夫の顔

五乙 吉田 璋祿

ゆたかなる君が代祝ふ山里の神代ながら
の初穂まつりて
うちなびく稻穂刈干す里人の今日かりど
きに君が代いはふ

雨はれてうちつれゆかん茸がり秋風かほ
る松のはやしに
朝日さすなる子の上をむら雀こゑもとど
ろに露にぬれつつ

朝まだき羽風もさむく立つ鳴の門田の水
に有明の月
夕されば筑波根おろし吹き立てて鐘のひ
びきを草の枕に

五乙 鈴木 保夫

宵のやみ秋近ければ叢雲の影より出づる
冴えし月影
寂しさは暮行く秋の草叢に鳴く虫やみて
時雨おぞ降る

武蔵野の鳴く虫の音もたえざれば西風ぞ
吹く秋の夕暮
五乙 原口 次郎

うららかな牛一聲の静けさにお客一人の
利根の渡し場
かれすすき利根の川邊に友まてば小波た
たふる秋の夕暮

五丙 青木 正夫

空晴れて心しづけき日なりけり一人し
じみと梅の香を嗅ぐ
ゆらゆらと陽炎もえて川の面に流れ木拾
ふしづめのうた

幼き日我が蟬取りし櫻の木に今をさかり
と油蟬鳴き居り
秋風の立つ利根の邊の枯草に鳴き居る蟲
の聲悲しきも

人皆の楽しく語る芝の上にひとりながめ
し空の色哉
スパイクの跡の生々と残り居れりグラウ
ンドの土の黒き色かな

花を摘みてかざれる帽をほこらげに被り
て行く子あり心やはらぐ
あの子等は一年生かも新しき袴下ろして
花を摘みて居り

手紙をくれし友の面影なつかしむ昔は仲
悪き間なりしが

五丙 成澤 辰雄

吾れだきて泣きやみし子の目のふちに
ふれし泪あいらしきかな
五年振りに會ひたる友とかたりつつ何か
むかしの憶ひわくなり

井戸端のつるべの音に驚きてひそみし雀
とびたちてゆく
天井を傳ひて落つる雨もりのバケツを叩
く音の淋しさ

五丙 矢島 政雄

何氣なく心のままに小石投げ月をこわし
て後をうらむる
最早や冬黄葉になりし銀杏をば見るにつ
けても寒さ深まる

心持ち學の道に進まずば道をはずして悪
に入らむ
ユニホーム着ける若人雄々しけれ胸のマ
イクよ殊に榮あれ

母校をば去るにつけても思ふかな目覺む

る時は最早や終りと

五丙 川崎 愼仁

うごくとも見えぬ烟をいただきてさやか
に聳ゆ雪の淺間は
愛犬と峯にむかひてやすみたる石のそば
なる藪柑子の實

うき草の花より白き雲の峯影を宿せる霞
が浦に
三甲 茂木 秀雄

水打ちて掃き清めたる奥庭に赤き落葉の
二つ三つ敷く
三乙 高柳 守雄

ほそくくと時雨來れば留守居身のもの淋
しきに亡き母を思ふ
三丙 根岸 和夫

菊薫る武蔵の原の草分けて巨砲高なり胸
躍らすも
三丁 馬場 一衛

紅葉せる秩父の山を肅きつゝ音なく流る
秋の荒川
三丁 篠崎 覺

潮の音は遙に湧えて冷々と秋の夜長もい
や更けにけり

三丁 吉岡 近文

汽車の音遠のきゆきて残されし身の悲し
かり秋の夕道

三丁 山田 保夫

果もなき黄金の海に日は入りて暮六つ淋
し武蔵野の秋

二甲 山本 一雄

ひともの木立の影のうすさかなきり迫
りくる武蔵野の原

山かひの木立のうれをわたりつつふりせ
まりくるむら時雨かな

二甲 上杉 武雄

街路樹の落葉はげしくなりぬればふるさ
との秋の深きを思ふ

なすことの一つ／＼が煙のごと消えゆけ
とこそ思ふ日のあれ

二甲 宮本 藤義

水さむき刈田のあとのひろきかな日ぐれ
の風は音もなくゆく

秋たけてえさをあさりて空になくかけす
の聲のさびまさるかな

二甲 磯部 克

夕陽さすひさしにかゝる蜘蛛の巣のうそ
寒き風に揺れてありけり

二甲 新井 忠次

もの思ふ我にもまさり淋しげに青空に浮
く有明の月

二甲 關 茂夫

新聞の記事悲慘なり東北の友を思ひてな
みだするかも

二甲 中根 圭造

霧はれて踏切番の白旗のなほよく見ゆる
森の中かな

二甲 新田 勇

時雨ふるに義金を募る小學生ぬれて冷た
く立ちてをりけり

二甲 近江榮之助

遠き山薄紫にかすむ見ゆ今日久々の秋日
和なり

二甲 柴崎 松喜

良き夢を見たる朝なり氣も軽く人の床ま
でかたづけにけり

二乙 高野 光廣

櫻の葉散りて静けしうら庭に雞二匹えさ
をあさりぬ

二乙 安藤 勇

ゆきかへりテニスの毯のひゞく音ボプラ
の庭の秋ばれの空

二乙 富田 芳

授業終へて心せはしく歸る道顔につめた
くかゝるきり雨

二乙 瀧澤 國雄

今日とりし裏のさくろをわりし時なかの
赤きに心おどろく

二乙 島田 忠三

夕焼の名残とめて青空に火の見やぐら
の際立ちて見ゆ

二丙 森田 啓貴

きのことり有つたといへど誰もなく大き
なる山に山びこするも

二丙 鯨井 健策

縁側に腰うちかけてひる休み破れとびく
る秋空の庭

二丙 關根 靜夫

秋の夜の燈火の下に書をよむ親子のねむ
りすや／＼ときく

二丙 篠澤 貞夫

春蠶やすさを父と語りつつのぞみうすく
も秋蠶かな

二丙 田ヶ谷金四郎

やう／＼に蜻蛉とらへてふりかへる我が
弟の誇らしき顔

二丙 島田 秀雄

幾人もの命奪ひし暴風の今はいづこぞ今
日は晴れたる

二丙 加村 芳郎

祭見に歸る夜道はたゞ一人月なき空に花
火上るも

二丙 野口 武夫

駆け上り／＼して土手の上に立ち眺むれ
ば利根の川水

とほ／＼と光をうけて草の上を歩める犬

の姿淋しき

二丙 江原 兵三

百舌の來て朝日ひたさす裏山の孟宗蕨の
靜かなるかな

二丙 小林銀次郎

秋の山紅葉の道を踏分けてなほたどり行
く奥宮の道

二丁 瀧澤 昌夫

さら／＼と小川の水の清きかな大根の葉
の一葉浮べる

二丁 松本 茂夫

村里の土橋をわたる牛なきてさびしく秋
の日はたそがる

二丁 古澤 昌

土間廣く光とゞかぬ箱の陰こぼろぎのな
く我が家なるかな

二丁 小川 信雄

麥時の終へし今夜のうれしさに父はにこ
にこ酒のみにけり

二丁 荻野 悦良

コスモスの丈の高さになんとなしにわか

れし友を思ひ出すわれ

二丁 小林 正雄

日曜は朝から父と畑に出てともに楽しく
芋堀りにけり

二丁 井上 元

風ふけば稲穂波うつ秋なれど悲しく聞ゆ
農夫のなげき

二丁 加村 一雄

たそがれの煙たなびく村の道いねつみし
車こと／＼とゆく

二丁 岩田 秀夫

虫の音も淋しく聞ゆ待ちわびる父の歸り
のおそき秋の夜

× × ×

毛野の國の大演習を治しめすすめらみこ
とをおろがみにゆく(熊谷驛)

俳句

河住 純

扱き終へてむしろの下の落穂かな
落葉掃く箒目の跡に又一葉
茶のたぎる明るき影や冬障子
振袖の緋の輪飾りに觸れにけり
春淺し雀の渡る薄氷
水淺く春陽脊にふる小鮎かな
又銃して或は眠れり陽炎に
蕩舞ふや陽炎上る城の上
里方の呉れし種芋十ばかり
大皇子の初春を壽ぎて
誕れませる皇儲春光の治きに
五乙 田中 忠烈

秋
千々の虫夜毎に秋を深めけり
虫近く啼くや箒も入れぬ庭
競争で啼くや野の虫籠の虫

出たなりに並べて話す茸かな
山人の道案内や茸狩り
初きのこ峠の茶屋の誇りかな
親よりも子の多く取る茸狩り
せなの子を見付け出すや茸狩り
一休みした所にも茸かな
秋風や輕うなりたる小引出し
秋風や寝耳に響く砲の音
秋風やいよゝ高し不二の山
麥まきや馬の鞍とく星月夜
積み上げた稻に隠るゝ草やかな
落栗に兒は早起を覺えけり
千尋の谷萬丘の紅葉かな
五乙 小澤 允

秋
秋空や蜻蛉飛びかふ夕焼に
名月や寒さを思はず秋の空
秋晴や若人躍る運動會
十五夜や我一人ゆく夜の道
秋晴に遊びを誘はる遊覽地
秋晴に心引かるる遊覽地

遠山もはつきり見ゆる秋晴に
赤々と山をかざるは紅葉かな
秋の野に蜻蛉釣りする乙女かな
秋の野に可憐な乙女の子守歌
秋晴や河原松山山羊の聲
コスモスの花咲き亂る秋日和
五乙 鈴木 保夫

茶の花や陽炎もゆる山里に
蒸暑き葉影に鳴くか雨蛙
入道があらはれにけり夏の空
明月や雁がね渡る秋の宵
馬の尾がなびく田圃の夕間暮
なくなよといだく赤子に空の星
大雪や馬も草鞋で峠越し
秋晴や刈田にのこる案山子哉
忠實は笠も取らずに立つ案山子
雪の夜に藁打つ音もいと寒し
五乙 原口 治郎

暑き盆す西瓜一切れ野良仕事
夏の日や暑さに負けぬ蟬の聲
蟋蟀や寒氣催す夜長かな

秋深し机の上にも楓かな
赤蜻蛉赤城の山も霞みけり
夕焼に澁柿かちる子供かな
秋の日や荷車をつて歸りけり
春の日や思ひ出深し古學帽
せぜらぎに夕陽輝く山畑
五乙 中島 治男

かけぶとん今一枚の夜寒かな
秋風にふかれて早稲田色つけり
一葉落ちて秋たけなはにけり
つけ劍の先にとまりけり赤蜻蛉
つゝこめの聲高々に拂曉戰
赤とんぼ亂れて秋風立ちにけり
名月や鎮守の森の間より
晩秋の朝爽かに百舌鳥の聲
かけらふの燃えて目の經つ三四月
汽車の音近く聞えて雨近し
桑の葉の枯れ盡して秋終り
蟋蟀の聲しわがれし秋の夜
五丙 矢島 政雄

懸崖の黄菊は一つ瀧流れ

澁柿や田圃路からかいど迄
草肥ゆる所に多き肥料かな
山晴れて眞赤に咲くやしづつ柿
朝風にゆれては落ちる露の玉
町角に雪の笠着るポストかな
柿盗人叱れば早し不知の道
行きて見ぬ路にはつもる落葉かな
釣堀の水輪止まらぬ急がしさ
一廻り廻りて止すや盆踊り
入日見て明日知る秋の農夫かな
五丙 森田 貞二

秋
くつきりとボプラの枝や秋の空
コスモスに蜻蛉とまりぬ秋の夕
ひんやりと冷さ覺ゆる今朝の水
秋風に草食む牛や丘の上
冬
さく／＼と霜柱ふむ寒さかな
汲みおきし手桶にはりし水かな
春
櫻花窓より眺む春がすみ

船頭が舟流しゆく日和かな
夏
日まはりが南をむきし暑さかな
重たげに頭まげけり赤鶏頭
五丙 川崎 惺仁

さめざめと虞美人草に春のあめ
山寺の杉のしげりや蟬しぐれ
目白きて蜜吸ふ梅の日和かな
秋深し秩父の山はすみにけり
秋空をからす二匹がよぎりけり
五丙 青木 正夫

月影や南の庭の梅の花
渡り鳥赤城の山に残る雪
折りからの清き唄聲や朧月
麥踏みや乳飲みまでも混ざり居り
ひぐらしや三町先きの暗き森
夕日落つる利根の川面を鮎の行く
落鮎の腹光らせて宵の星
桔梗咲く道端の山の松の風
名月やす／＼きが原に浪しげし
笠一つ青田の面を泳ぎけり

秋雨の庭に錆びたる忘れ録

追蔭の糸瓜短し今朝の秋

四丙 關口 正二

冬晴れの障子に動く猫のかけ

雨過ぎぬ焚火の跡を黒くして

四丁 小池 誠次

稻積みし上にかゝしのせてあり

羽織着て秋の祭の中に居り

四丁 高橋 威

散る花に輕き眩暈や病みあがり

曇り日を咲き静もれる辛夷かな

廢園の鈍き日射や辛夷咲く

いや高き峯峰や汗拭ふ

夕焼小燒蟬靜まりて山暮るゝ

極雨晴れに微れし服の干してあり

三甲 印 東 勇

蟲の聲聞きつゝ浴びる野風呂かな

溜ばかり染め残されて秋の山

三甲 齋藤 春雄

座敷まで蜻蛉舞ひ入る小春かな

三甲 西内 良夫

三甲 吉田 幸昌
掃きたての庭にさくろの花一つ

三甲 根岸 武男

秋雨の夕暮さなし町の辻

三甲 小間 治貞

木枯の音さへ凍る夜寒かな

三甲 小林 喬

龍駕迎ふ武藏野晴れて菊薫る

三甲 萩原 喜作

枯野邊に一色哀れ秋の花

三甲 小柴木 英信

新しき足袋のなつかし秋の暮

三甲 石田 英男

柿一つ採り残されし里の夕

三甲 關本 照光

新緑の森に朱塗りの社見ゆ

三甲 小川 芳男

釣竿に夕陽は赤く映る秋

三乙 新井 進

月見草ほのかに見ゆる濱の夕

三乙 内野 甲二

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

1011

詩

感激

五甲 原 一郎

君は感激の人生を欲するか
それは何處にもある
誠の心のある處に。

君が心から忠實に求むるなら
最全を盡すなら
其處には感激がある。
自己に打ち克ち努むる所。

君が若し、美しい物語や
美しい思想や高い考に遇つた時
感激は満ちあふれ
涙は、はふり落ちる。

先づ身を起せ身に鞭打つて

學びのをの子

五甲 風 間 博

雪はやみぬ。宵の星一つ、まばたき出でぬ。

風伯をして、楢林の上、傳へしむ。

「明日の課業に勵め、若人！」
家に居て書よむ男子。ひとり樂しむ。

夜は更けぬ。豪風一聲たち出でぬ。

母をして明日の我子を思はしむ、

「風強し、雪は積りぬ。」されど

安らかにして我子をば、眠らしむ。

夜は明けぬ。旭日東天輝やき出でぬ。

父をして今日の我子を勵ましむ、

「起きよ。行け、出でよ。臥戸。」

つくりたる母の手際、男子をば喜ばせしむ。

日は昇りぬ。學びの男子たち出でぬ。

父母をして、楢林の下、祈らしむ。

然る後に心は立ち上る。

本を讀め、思考せよ、實行せよ

心は感激にふるへ、心は高く偉大になる。

矢車菊の花ほか二篇

五甲 松 崎 久

矢車菊の花

小瓶にさした

やぐるまぎくの花

ぢつと見つめてゐると

遠くで静かな雨の音がしてゐる

何んの氣なしに電燈をひねつたら

バツと點いた

お 矢車菊の花瓣も光つてゐる

机上の撫子

机の上のなでしこが

かすかに揺れてゐる

よく見ると

嬉しさに堪えぬやうな

ひとりであうなづいてゐるやうな

いや 私に話かけたいやうな

一〇四

あ、わかつたよ

私の胸の鼓動が撫子に移つてゐるんだ

撫子が私の鼓動に感じてゐるんだ

夜霧の郊外

人つ子一人ゐない

夜霧の郊外――

晝の疲勞が襲ふ

もの倦い電燈の光だけが

どの店のガラス戸からも

空しく流れ出ては

しらじらと夜霧に溶けこむ

(どこからか

ラヂオの謙讓な懐古曲が

冷ややかに響いてくる)

大きな體を冷く露して

夜霧の舗道は

ひとり思索を續けてゐる。

「恙なく着け。汝、學びの門。」

天に居て神々は、男子をば到らしむ。

時雨の哀

五乙 山口安太郎

永久無限の歲月は

あざなふ繩とくりかへす。

時雨の時期は又も來て

細き涙の雨が降る。

光まばゆき太陽を

光臨ろの太陰を

薄き白晝夜も晝も

空を覆うて雨が降る。

雄然と立つ劍山も

こんもり立てる麓山も

山の頂奪はれて

淋し我が家に雨が降る。

雨に射られて吹く小風

なわてに立てる木の枝を

さらさらさらと吹きながら

悲し我身に雨が降る。

悲しや我の父上は

黄泉の客となり行きて

其の身は深き林間に

埋もれた墓に雨が降る。

うぶぎ

五乙 秋笹善次郎

古びたる紅白のうぶぎ、ただ一つ押入の

隅に、ちりつみて、忘れしこと、

いにし日の影をとどめき。

かつての日それを着て、母の腕に眠りし

か、樂しき守唄、母の胸に我はききしか

我は人となりてあれど、過ぎし日我をは

ぐくみし、紅白のうぶぎは、古りて、あ

りし日を物語るのみ。

我は今人となりてあれど、その昔、

やさしき聲もて、眠れ坊やと 守唄うた

ひし母はなく、我は悲しき、色あせて、

朽ち残る紅白のうぶぎ眺むれば しのば

る母の面影

思ひいつる幼なかりし日。

淡い悲み

散つてしまつた花ならば、元の小枝にかへるまい、流れて行つた笹舟は、いくら呼んでもどるまい、遠き行脚の母様はいつになつたら歸るだろ、泣いたからとて過ぎたこと、悔は心にくすまい、ときつぱり心にちかつたわれながら、海邊さびしく、さまよへば、風のおともにも心が亂れ、すすり泣くよな波の音、うつる影さえしよんぼりと、砂の白さが胸にしむ。

小川

五乙 吉田 璋祿

流れ行く清き水よ
さら／＼と何處へ行くか
細き小川よ
はてしなく滄々と流る。

流れ行く清き水よ
口にて受ければ心朗らか

野邊の小川よ
常にすみて心も清らか。

利根の一日

五乙 原口 治郎

雀の聲が流れて来る
きよい朝の河原に
柔かい朝の光が
ねむりから覺めて
お、!!
うら、かな利根の朝

飛行機の音がする
クローバの草の上に
二三の赤蜻蛉が
銀翼連らねて
お、!!
長閑な利根の晝

夕陽が染める
す、きの原に

やがて一列の雁が
秋月の夜をかすめて
お、!!
美しき利根の夜

山彦

五丙 青木 正夫

破裂しさうな
胸一杯の悲しさを
もてあまし氣味に
さまよひ出た野道だつた。
行手の
魔物の様な森の上に
泣き出しさうな
星の光があつた。
突然
力一杯の大聲で
「失敗が何んだ。」と
森に奴鳴る。
「失敗が何んだ。ア、。。」と
山彦が答へる。

ほつとした氣持で
夕空を眺める。

戦車

三甲 塚田 忠太郎

俺は今朝戦車を見た
小學校の表の道に
五臺並んでゐた
砲の下に御紋章がついてゐた。
陛下の戦車だ
陛下が命令を
下されば
直に敵陣地に突撃するだらう。
俺は思つた、此の戦車が
沿海州に皇道を輝した事を。

野球

三甲 小暮 晨

揃ひのユニホーム
バレーボールに餘念のない選手
ボールがツートと舞ひ上る

秋空は雲一つない

淀んだ沼の様に底知れぬ深い空だ。
陽は燦爛と照つて居る
あの白のユニホームと
陽にやけた健康な人々の顔が今に
汗みどろになるのだ。

熊中川商試合の日!!

今井の一打に遂に三點獲得
應援の聲も感激に打震ふ
三壘打 三壘打
僕も何んだか他人事で
無くなつた様な心地して
涙が自然に溢れ出て來た。

月見草

三乙 塚田 恒男

黄色な月が彼方の野から出て
其の光を受けた月見草が
優しく、ほんのりと 靜かな風に揺らめく。

あゝ月見草の影もする
明るい月夜
露も、もう置き初めた、野の小道の傍の
草に。

郊外の路を遙か彼方に
友と共に歩みつゝ
月光を受けながら 歌を低唱する。
月見草よ
柔らかな花と其の色彩と
私はお前の様な心を抱く
遙か彼方の月を眺めて。

私の村

三乙 秋山 孝

汽車の窓から見た
私の村は小さい村。
廣々として緑の畑の中に
ちらほらと農家が散在する。

過ぎゆく沿線の川橋等は
皆私の思出の場所です。

所々の畑中に農夫が立つて
汽車の過ぐるのを見てゐます。
黒い顔を上上げて。

今汽車は小驛に止まる、
私の村の停車場は小さい停車場。
汽車から降りる人は二三人、
もう汽車は出發です。

いつ歸へつても同じ村です
そしていつも同じ自然です
私の村はいつも緑です。

驛の櫻は涼しい陰を地上に投げてゐる。

村の中はいつも静かです
時折雞の聲が聞えます。
道路が白く日に光つて
畑の彼方に廻つて消えてゐます。

希望

三乙 高柳 守雄

遠い彼方の丘の上
深い紫煙はたれこめり
夕べの鐘を聞くにつけ
おぼふた霧がとけたなら
神祕のもやが晴れたなら——と
日ねもす、夜すがら
憧憬の瞳は輝いてゐる。
日ましに白む霧のかけ
次第に現はる現實の姿
そこに眞の人生を見出すのだ。

色

三乙 大谷 雅二

わがもてる繪の具の数は
あまたあれど
殊に好めるは
清澄なるコバルトなり
乙女の夢の様な彼の色
われ常に朗かならむと欲し
憂ひもつとき
白き畫紙に

コバルトでもて
線をえがく

秋

三丙 金子 兜太

凋落の秋は来りぬ
戸邊を拍く、寂しき噺泣の
あの秋雨と共に。
草々にすだく虫の聲も、
あはれに深々と身にしむ秋が。

凋落の秋はまさに深まりぬ。
朝な朝なに立つ霧は
山の連なりそして萬物を包み
寂寥として
日輪出づる彼方に姿を没す。

凋落の秋は深まりぬ。
中天に輝く月が
夜毎に色染まり行く四界を照す時
秋は漸時に

又静かに深まり行く。

あはれ凋落の秋は
はなやけき緑の夏の面影消して
日毎に野を山を紅にして
やがて憂鬱と倦怠との
冬へと歩む。

暮れ行く農村

三丁 篠崎 覺

さや／＼と稻穂の鳴りて
そよ風の渡り
かすかなる鳥の聲失えぬ。
早少女のほほに宿りて
紅す夕陽の影。
静かにも
今し日は暮れなんとす。
夕げの煙立ちて
紫に色なしし村の家々。
黙々と家路をたどる農夫等の
肩なる緞のキラ／＼と輝く。

静かにも平和に
今し農村は暮れ行く。

秋(希望)

三丁 内田 和夫

高き青空の下
そこには青春の躍動す
若人の意氣面に溢れ
はちきれさうな身體を
軽らかと走る若人!!
おゝ!!
走れ／＼／＼／＼
何處までも永遠の彼方に
そして
希望の峰まで突き進め
そこに持つ輝きの神こそ
我等が希望を満さん
行け!行け!希望の丘に
理想の峯に!!

夏の原

三丁 新井 治男
遠く森の陰に
小さな赤瓦の洋館の
窓硝石がざらりと光つた。

暑熱と戦ひつゝ
大地も裂けよと振り上げた
鉄の刃先がざらりと光つた。

秋の夜

三丁 原 章二

藍色の秋の空を
スーッと星が飛ぶ
月は皎々と輝いて
静かなくさむらの中に
星の飛ぶ行方を
デ、と蟲が鳴く
ちつと見守つてゐる
小猫は目を光らせて
蟲のありかを
ちつとさがしてゐる

秋の山

三丁 石川 公通

秋風に吹かれ
山頂に立ちて
故郷を思へば
我が胸は遠く風に吹かれて
故郷の家に歸る。

秋風に吹かれ
山頂に立ちて
眼下を見れば
紅葉の木々の中に
快活なる登山者の群。

秋風に吹かれ
山頂に立ちて
遙かなる山を見れば
澄み渡る大空の中に
煙り吹く浅間の姿。

若者は叫ぶ

三丁 松崎 健一

吹け！吹け！吹け！
吹きつけよ、北風よ、我等が耕作地を、
我れはたがやし黙々としてたがやす
こちこちの土を 眞黒な土を
お前が我に暖かな春の光りを送つてくれ
るまで。

空が晴れ渡つた時
あれ果てた野に立上つて
若者は叫むだ、満身の闘志にもへつつ

病み疲れた、冬の光りは凍てついた、大
地を平行にされてゐる。

ざくり、ざくり、土の固りは次から次へ
ほりかへされて行く
若者の足もとへ！ 伏者の如く。

おう 我等は

土に生き、そして土に死ぬて行くのでは
ないか！

振へ！おう振へ！北風の如くに。
然り、苦の次に來たるものは？

努力の次に來るものは？
おう！樂だ、眞に暖かき光りだ。

川の流れもしやがれてしまつた。
山は瘦せ空は枯れてしまつた。
だけど若者の心臓は一人脈打ちてゐる！
叫んでゐる！ 大海の如くに！

聲高く！聲高く！聲高く！

聲高く我れは呼びかく、太陽よ！

あ、偉大なるかな
風は吹けども雲はとべども、彼等は永久
に大空を支配する事は出來ぬ。太陽は不
滅だ！永遠に

太陽こそ空の支配者なり。我魂は踊る其
の太陽に！

ざくり／＼固い土はたがやされ掘りかへ
されて行く新らたなる土地！はるかなる
希望！熱と汗の歟……おう！若者は叫む
だ、大空を仰ぎて。

橋の上に佇みて

三丁 安田 富久藏

淋しい静かな秋の夜
橋の欄干によりかかり
水の面を見つめれば
皎々と冴し月影は
圓く湖上に浮かびゐる

水にうつる家々の
燈火の光きら／＼と
くだけて長く尾を引き
波の大空を渡る虹の
衣を水で濯いだやう

流るる水の私語は
流れの底の藻の床に

夕 暮

三丁 大塚 一郎

夕焼に秋の一日は今や暮れんとす
静かなる雲の動き

鳥の鳴く聲

肌にしむる寒さ

秋の夕は無限の哀愁をそゝる。

輝ける黄金の田園

輝ける百姓の腫

それがあの美しき夕日に反射して……

静かに平和に我村は暮れて行く。

堤、さびたレールが月光に反射して

青白く光つてゐる

さびしき水の音

さびしき梟の鳴く聲

暗い鎮守の森に星が落ちて……

静かに平和に我村は
煌々たる月光の下に眠つてゐる

鎮守の森

三丁 戸田 光安

蜻蛉限りなく飛ぶ青空に

社の森浮びて聖氣漂はし

炊煙そのふもとを細く流れて

頂の森の枯枝鋭く矢を突く。

晚鴉の聲一つだに聞えず

雀の羽音何處へ消えたか

鎮守の森静かに黙止して

何一つ語らず廣い豊沃の野を見下す。

秋風めかしく川端の笹を動かせども

鎮守の森微動だに起さず

村の鎮守の趣を具へて

西天の空に溶け込んで行く。

魚 取 り

二甲 神島久仁男
網上げ網あげ 引き上げろ
重い網をば引きあげて
鯉が鮒かとのぞいたら
なうんだ 二匹蜻蛉の子
藻草かぶつた やごがゐた。

農家の夕

二甲 大熊 林造
馬小屋でカタコトと
羽目板をたたく音
蚊に喰はれてゐるらしい馬
私は急いで行つて見た
蒸し暑い空気にむせて
私が小屋を出る頃
蚊いぶしの煙が
納屋の隙からもれてゐた。

山道

二甲 松本 悦治
細い山道一人で通つた

蟲がコト／＼鳴いてゐる
初秋の夜
山ふところを
風が吹く毎に
葉裏が銀波の様に
揺れてゐる
細い山道一人で通つた。

お玉じやくし

二甲 小 菅 達
お玉じやくしは可愛いよ
静かな小川の木の蔭で
親もゐないに泣きもせず
一つところに集つて
チヨロ／＼浮いたり沈んだり
親が来るかと待つてゐる。

秋祭り

二甲 根岸 哲夫
秋の祭はうれしいな
鎮守様のお祭りだ

神樂の太鼓の音がする
黄ろい海の其の中を
子供が三人かけてゆく
のぼりを見ながら
かけてゆく

日やけ

二乙 加藤隆恵知
初秋の田舎道を
銀色のバスが走つて行く
埃が煙幕の様に白い
川端の洗濯女が
日やけた顔でふりむいた。

海

二乙 岩波 俊夫
自ら満ちて来る潮は
松青き入江にあふる
點々に見ゆる白帆は
さながら牧場の羊
吹き渡る朝風浴びて

白砂の磯邊をすぎゆく。

秋 風

二乙 近 江 茂
青々 高く浮雲二つ
スイ／＼と飛ぶ赤蜻蛉
もろこし畑の上をゆく
涼しい風もスイ／＼と
す・きの原の上をゆく。

感傷の秋

二乙 小 島 勇
庭の柿の葉が一枚
言もなくバサリと落ちた
人の世の運命と
思ひ合せて心淋しい。
先年來病氣の母は
一年中の秋の様に
さびしく逝くのではなからうか。
あの瘦せ細つた腕
僕は心に母を祈りつづける。

秋の夜

二丙 西田 貞夫
静寂の秋の夜
我一人秋の野道をとぼ／＼。
はるかに見える町の
街頭の灯がぼつり／＼。

寂寥たる秋夜
寝静まつた町中を
突然飛行機の爆音
赤と青との電燈
行過ぎた後に秋の夜長を
こぼろぎがころ／＼。

夕 暮

二丙 内田 藤司
軒ばたでとろ／＼
湯がまの火が燃えてゐる
遊び歸りの子供等が
あばよと庭を通つて行つた。

妹は母ちやんと
家の中にかげこんだ
母は裏の方でがた／＼と
油のにほひがぶんとした。

秋の月夜

二丙 富田耕四郎
何をさわぐか風の音
月の光が照らすとて
秋のさびしさ身にしてみて
あたりの木々につけるから

何がかなしか虫の聲
月の光が清いとて
秋のさびしさ身にしてみて
陰にかくれてむせぶから。

お 盆

二丁 根岸 英進
記憶すべき祭が一つ
お供へと燈明とお線香

来るものは秋と冬と
華やかな春も過ぎ
思ひ出の夏が再び去るのに。

年に一度黄泉の客が
こひしい我が家に
煙に送られてあそびに来る夜
人々の群はあちこち
迎へに行く提灯がゆら／＼。

とんぼ

二丁 瀧澤 昌夫

稻穂の上をすい／＼と
お線香とんぼが飛んでゐる
川にのぞんだ小柳に
黒いとんぼが羽やすめ
赤い夕日を眺めてる
君等の命は短いな
しづむ夕日がさびしかる。

燕

二丁 鹽谷健次郎

家の隣の子燕は
遠い南に行くそう
燕返しやとんぼ飛び
雨が降るのにづぶぬれで
羽根をならすと飛んでゐる
黒いマントに白襟巻き
旅の支度はもう出来た
雨止め雨止め雨が

故郷

二丁 山田 久

いつも学校のかへり道
休みにいつた故郷の
空をあほひで思ひ出す

思ひ出

二丁 松本 茂夫

思ひ出す去年の夏
青葉の蔭で友と語つた
あゝ友はもう来ぬ

短篇

或る詩人の部屋

五甲 松崎 久

雨が降り出してから未だそれ程経つてはゐなかつた。それなのに路はかなり泥濘つてゐた。私は低い下駄でびち／＼と足下に氣をつけながら泥濘の中を歩いて行つた。

そこは本通りを横に切れて、倉庫やコンクリートの建物に雜つて、雜貨店や乾物屋等が紛然と列んだ狭い通りで、傘をさした人達が裾を引き上げる様にして行き交ふてゐた。あたりは夕暮のやうにひどく薄暗かつた。

ふと泥濘の中を見ると眞新しい雪駄が行く。雪駄はこね返す泥濘の上を、まるで誰か歩いて行く様にすい／＼と行く。私は見失はない様に、後を尾け始めた。

楚な感じであつた。

私はそつと音のせぬやうに、遠慮勝ちに階段を登つて行つた。思つた通り突きあたりには磨り硝石の嵌つたドアが閉つてあつた。そして斜めに『貸間』と書いた紙が半分はげながら、外から吹込む冷たい風に吹かれてバタ／＼と鳴つてゐた。ドアを押すとわけなく開いて、そこに六疊ばかりの薄汚い部屋が私の前に現れた。

ふんと濕つた埃が私の鼻を打つた……雪駄と雪駄の歩いたであらうと思はれる濡れた跡も見當らない。では私は錯覺に陥つてゐたのであらうか？。周囲の壁には高く低く横に家具類の擦れた跡のやうに薄黒く跡がついてゐる。近寄つて見るとそれは鉛筆で一面に樂書がしてあるのだつた。下手な字で、それも非常に薄くなつてゐて、随分讀みにくい。讀めても文句が出鱈目の爲に意味が何んだか判然しない。中から何うにか纏つてゐるものを

拾ひ出してゐる。

遠くで誰かめいてゐる。

途方もない大きなものが、むく／＼腹れあがつて、心に不安な、捕へ所のない影をひろげる。

それはグ／＼と不気味にゆれて、汗ばんで生温い風にぼ／＼吹かれて、やつてくる。

顔も手足も無いノツペラぼうの胴體。押し戻すとべとりと凹んで、直ぐまたむく／＼腹れあがつて、のしか、つてくる。

ぎつしり

つめ込まれた街に押し出されて尖塔が傾いてゐる。

海の中は割れた氷でいつばいだ
氷は互に重なり合ひ
波にゆられて鳴りひびく

わたしは

一艘のランチに乗り

氷の間を地平線さして馳つてゆく。

あ、壊れた此の海街に

五月の風が

いま鏘然と吹き渡る。

ざつとこんな調子である。題のあるもの、また無いもの、尻切れのまゝ、十行二十行も跳んでゐるもの、クシヤ／＼に消してあるもの、何れを讀んでも意味のあるやうな、ないやうな代物ばかりだ。意味の分らないこと甚しい。

「馬鹿げた事を書いたものだ」と心でこれを書いたであらう無名の詩人に對して輕蔑の目をむけながらそれでも何時の間にか壁に沿ふて、それ等の樂書を読みつくしてしまつた。私も大部神經衰弱が嵩じて狂人じみた頭になつてきてゐるかもしれない。こんな樂書に興味を覺えるとは――誰も居ないかび臭い部屋で一人こん

な事を考へてゐるうちに何んだか不愉快になつて來たので、もう部屋を出ようとして、ふと屏の上の壁を見ると『詩人の部屋』と書いた額がすっかり茶色になつてあがつてゐた。

伊呂波

五丙 福島 博司

花は匂へど散りぬるを 我が世誰ぞ常ならむ うゐの奥山今日越えて 淺き夢見しゑひもせず

何時もの如く空海は、方丈の庵を出でて、露を踏んで山へ登り初めた。心地よい風は、四邊一面に漲つて、墨染の衣の裾を、はた／＼させた。谷間には、露が一杯に立ち込めて、山の頂が、恰も海に浮いてゐる島の如くに思はれた。黙々として歩を運んでゆく空海の足は、露でぬれてゐる。それでも一言も發せず只黙々として上つて行く空海である。自然の靈威に打たれて、畏敬の念で蓋れたのだ。

何も考へずに只足の向ふがまゝに、又一つは永年の習慣であらう。草履の音の音が四邊の山に吸ひ込まれて、云ひ知れぬ恐しさがある。天地の間に生きてゐるものは、空海已一人と思はれた。松籟の音もなく、それといつて禽獸の叫聲も聞えぬ。山路は未だ薄暗い。

この天地の間を、修業の爲に彷徨ふ自分ではあつたが、この不気味な沈黙にある自然を畏れないわけではなかつた。一歩一歩頂に近づくにつれて、瀧の音が静寂を破つて、聞えて來た。瀧の音が大きくなる頃には、谷間の霧も次第に、薄れてゆくのが見える。終に杉の森が見えだした。瀧の音は、一層強くなつて來る。路は次第にるやかになつて來るが巖が所々に突出てゐる。

空海は巖上に正坐し、瀧をにらんでじつと坐禪を組んでゐた。四邊の物は、目にも入らぬ。瀧は飛沫をあげて、天にも聞ゆるが如き響を立て、ゐる。まるで、

神が怒つてゐるやうだ。じつと見つめてゐると、己の身體が急に遙が下の方の谷底へ、突き落されるかの様に思はれて、思はずびくつとした。その暗は最早先の坐禪は崩れてゐた。又坐り直して坐禪を組んだ。心が動揺して仕様がなない。心に鞭打ち鞭打ち己を責めても、煩惱に苦められてゐる。いくら慾をとり去らうと思つても思へば思ふ程、俗界の事が、走馬燈の様に腦裏を駆け廻る。空海は、この煩惱の糸を絶たんと、毎日かうして坐禪を組んでゐるのだ。が一日しても二日しても、一月しても一年しても、果ては生涯か、つても、到底絶つ事が出來ない様に思はれた。さうして今日こそはと、大悟徹底を冀つて、此處へ來たのだつたが未だ悟る事は大變遠き未來の様に思はれたのだつた。空海は身の置き所も知らずもだへにもだへて一生懸命だつた。が煩惱の糸は次々と繰り出され、絶える様にも思はれなかつた。

其れから幾年かを、時は奪ひ去つた。山里にも、春が來た。花が咲く鳥が歌ふ土手には、可愛らしい草花が萌え出る。小供が嬉々として駆けて行つた。百姓が通る。その後から墨染の衣を着た一人の僧が歩いて來た。行方定めぬ旅僧である衣が風に孕む。口の中で何事がぶつ／＼つぶやいてゐるが、何だか分らぬ。小供は珍らしさうに後をおふ。僧は微笑みつゝも何かつぶやいてゐる。花の下に來た風も無いのにヒラ／＼と花瓣が散る。僧はじつと花の行方を見つめてゐた。今迄咲き誇つてゐた花である。その時だつた靜かにすぎ透る様な清らかな聲がもれた人々は立ち止つて僧を不思議さうに眺めてゐる。僧は「花は匂へど」とさも歎息したげに又歩を運んだ。人々は見えなくなると迄その後姿を見送つてゐた。又はらはらと散つた。人々の心には、今の僧の事が思ひ出された。

色はにほへど散りぬるを わがよたれぞ常ならむ うゐのおくやま今日こえてあさきゆめ見しゑひもせず

校報

學校記事

自昭和八年十一月十五日
至昭和九年十一月二十日

- 昭和八年
十一月廿二日 本日ヨリ三日間模範試驗ヲ行フ
廿七日 教練查閱 查閱官山田中佐殿及近衛工兵大隊長神山
大佐殿來校
十二月九日 本日ヨリ十四日マテ期末一齊考查
十五日 御親閱記念發火演習(荒川久下方面ニテ行フ)
廿三日 皇太子殿下御降誕 本朝六時卅九分御誕生遊ハサル。
午前八時四十分ヨリ朝禮場ニ於テ祝賀式舉行
昭和九年
一月一日 新年拜賀式舉行
八日 第三學期始業式 式後宮田先生富島先生ノ新任式ヲ行
フ
廿三日 本日ヨリ三日間模範試驗ヲ行フ。
廿七日 縣下中學校理科研究會ヲ本校ニ於テ開催
二月十一日 紀元節拜賀式舉行
十三日 廣島高師教授、辻幸三郎先生來校
十四日 五年生ハ本日ヨリ期末一齊考查
二十日 五年生修業式
廿三日 皇太子殿下御降誕祝賀式舉行
廿四日 第四時限ニ車廻シ起工式ヲ行ヒ荒川ヨリ石ヲ運搬ス
岡田校長先生勳六等拜受本日傳達式アリ縣廳ニ出張
四年生ハ本日ヨリ一齊考查
三月七日 第三十五回卒業式 知事代理上原學務部長、石川屬、
縣會議長高澤氏其ノ他來賓來校
八日 三年以下本日ヨリ期末一齊考查
十日 陸軍記念日 第三限ヨリ神谷工兵大佐殿ノ講話アリ
十九日 第三學期終業式 土岐先生、小林先生ノ告別式ヲ行フ
廿二日 本日ヨリ廿五日マテ入學考查施行
四月四日 入學式午前八時三十分ヨリ行ヒ第一學期始業式午後一
時ヨリ行フ、式後河住先生、三浦先生ノ新任式ヲ行フ
五日 朝禮ノ際新舊生徒ノ對面式ヲ行ヒ、更ニ齋藤先生吉野
先生柳田先生小島先生ノ新任式ヲ行フ。
十一日 本日ヨリ身體檢查ヲ開始ス
廿四日 一日遠足(大沼公園)
廿八日 五年生ハ今明日兵營見學、觀兵式拜觀

- 廿九日 天長節拜賀式舉行
五月七日 五年生、四年生本日ヨリ十二日マテ關西方面ニ修學旅
行
九日 鈴木學務課長來校視察セラル
十二日 三年生ハ江ノ島鎌倉方面ニ二年生ハ東京一年生ハ秩父方
面ニ修學旅行
十七日 滿洲事變奮闘ノ勇士本校第九回卒業生島村少佐殿來校
第五限六限講堂ニ於テ「皇軍ノ奮闘状況」トイフ題ニテ
講演セラル
廿日 東郷元帥ノ薨去ニ際シ其ノ高德ニ就イテ講話(學校長)
廿四日 午後一時ヨリ講堂ニ於テ文學博士河野省三先生ノ講演
アリ、演題「日本精神の發揚」
廿五日 故東郷元帥ノ國葬當日、午前十一時五十分ヨリ講堂ニ
於テ故元帥追憶ノ御訓話(學校長)
廿六日 發火演習中條泰村方面
十三日 縣下中學校長會議(本校會議室)
十八日 本日ヨリ第一學期臨時一齊考查
廿日 第四時限ニ車廻シ竣工式ヲ行フ
廿一日 本日ヨリ三日間模範試驗
廿二日 本日ヨリ第一學期々末一齊考查
七月九日 第一學期終業式
二十日 第二學期始業式
九月一日 岡田校長本日ヨリ約一ヶ月ノ豫定ニテ滿鮮北支方面視
察旅行ノ途ニ上ラル。七時〇一分熊谷驛發、職員多數
十月十七日 停車場ニテ見送ル
十月六日 飯沼知事閣下御來校
十月十日 第三十九回開校記念式舉行。式後土岐先生謝恩會ヲ行
フ
十月十三日 四年生五年生ハ菅谷方面ニテ一泊演習ヲ行フ
十月十八日 五、三、一、二年生ノ父兄會ヲ行フ
廿二日 御親閱豫行演習ノ爲メ大宮ニ行ク(五年生)
三十日 本日ヨリ臨時一齊考查廿七日終了
勅語奉讀式
第三限ヨリ武道大會
十一月三日 明治節拜賀式 第六回體育大會
六日 三年以下野外教練
十日 聖上陛下特別大演習地ニ行幸午後二時三十五分熊谷驛
ニテ奉迎申シ上グ
十三日 本日ヨリ模範試驗
十七日 五年生ハ高崎乘附練兵場ニ於テ 聖上陛下ノ御親閱拜
受、十六日十七日兩日野營勤務
十八日 聖上陛下御還幸 四年生ハ大宮ニ於テ三年以下ハ熊谷
驛ニテ奉送申シ上グ
職員現住所調 (イロハ順)
明石 有隣 熊谷市熊谷
秋谷 博愛 北足立郡田間宮村
今井 慎五郎 熊谷市錦町一、一六四

日本大學醫學部	八	松本憲三
日本大學豫科理科	八	石原隆之助
早稻田大學専門部	八	赤田隆之助
同	八	池田善照
同	八	江森善六
同	八	齊藤元佐
同	八	石原利武
同	六	古郡繁二
同	四年終了	原口類雄
同	七年	島山豐
慶應義塾大學經濟科	七年	高澤晉之助
同	七年	平野英一
同	七年	常見善策
同	七年	高橋一男
同	八年	松村義門
同	八年	根岸武郎
同	八年	小林政雄
同	八年	金子敏雄
同	八年	小管敏雄
東京藥學專門學校	八年	
東京高等實業學校	八年	
愛知藥學專門學校	八年	

部 報

圖書部部報

五甲 五十部 一雄

常に良き著述に親しむ者は、只獨り居れども寂しきことを覺えず、師を求めざれども日に月に學ぶ所あり。失意にも慰み、不平憂悶も之を忘る。吾は少年の滋味にして老年の娛樂なり。順境には心の飾もなり、逆境には庇護と慰安を與ふ。家に在れば心を樂しましめ、外に出でたる時も邪覺さはならず。夜の伴、旅の伴、僻地の伴」と羅馬の名士キケロの言ひたるも同じ心なり。

又人は良書に親しみて、まづ我が卑小なるを知るなり。次には或は他の識見の大なるに驚き、或は品性の高きに感じ、「嗚乎、同じく人といふ、高く、美しく、偉なること、かくの如きものあるか」と歎するなり。若し假初にも其の偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに私淑し、之に倣はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書の用極れるにちかしさいふべし。

以上坪内逍遙先生の言であります。實に書物の價值、讀書の効用を説き盡くして居ります。此の様に書籍は自己の發展進歩、心の満足慰安を與へるものであります。即ち時には往時の哲人傑士に遭遇し教を乞ふことも出来又共に共に相語ることも出来ます。又時には居乍らにして二千里外の名勝古蹟を尋ね、今を思ひ古を偲ぶことも出来ます。

遠く過去に溯りて古の英雄忠臣の忠勇義烈に悲憤の涙をそそぎ孝子に泣くことも出来ます。或は科學の庭に彷徨し、安心立命を求めて宗教の世界に入る等皆書物の効用であります。併し乍ら此等多方面の書物をすべて自己の所有とすることは經濟上不可能であります。又必要のないことです。此所に數多の書籍を集めた圖書館が必要となります。吾輩中國書部もかくして生れたものであります。故に諸君が充分利用せられてこそ初めて吾圖書部の意義が確立し、又使命が果されるわけであります。故に諸君の利用狀態を検討し、併せて諸君の利用を益々望む所以であります。

本年六月から十月迄のを示しませう。

學年	各部	倫理	文學	英語	科學	辭典	地理	歴史	雜部
一	年	〇	一	五	二				
二	年	〇	一	五	二				
三	年	一	一	〇	〇	一			
四	年	一	一	〇	〇	二			
五	年	三	二	一	五	一	八	四	九
合	計	三	三	一	五	一	四	一	三

此の表を仔細に檢すると倫理の貸出は僅かに三名、昨年は十一名で

した。程度が少し高い故もありませうが、今を時めく日本精神に就いては恰好の本がありまじし、又雑誌「日本精神」がありまじしから、十分研究せられんことを望みます。

文學は去年は五五三名今年には三二名、心の潤には文學は最上です。諸君に相當の満足な與へる小説短篇等ありますから猛讀を望みます。

英語は昨年より六名多い。外國雑誌が相當ありますから例へば、「Asa's Nature Magazine」「Popular Science」「The Saturday Evening Post」等、大いに利用を望みます。

科學此所でも二年生が零敗です。何故でせうか。特に二年生の自覺せられんことを望みます。

辭典地理に就いては何ら申し上げることもありません。

歴史此頃青年の意氣が消失したと等しく識者の歎く所です。大いに歴史就中偉人傳を讀破して多難な彼の生涯を克服したあの勇猛果敢な意氣努力に感じて奮ひたうではありませんか。

雜部新聞雜誌等格別言ふ所はありません。

以上簡單に各部の檢討を行つた積りです。

吾部新聞雜誌部は若も諸君のものである以上、互に注意しあつて立派に育てあげようではないか。

終りにいふ、御指導下さつた大和久先生佐藤先生並に諸先生をはじめ、眞面目に事務をこつて下さつた四年生諸君に厚く感謝致します。亦不幸にして八月に病に罹れた四乙坂田君に謹んで哀悼の意を表し、四年生の來年の活躍を期待して擲筆することにします。

野球部記事

我が部は昭和八年度夏季大會に、強敵栃木中學の爲に、敗戦の汚名を被るや、直に新メンバーを組織して猛練習を行ふ。

對不動岡中學

十月二十一日、縣下隨一の古き歴史に輝く不動岡中學と同校野球場にて、新チームの對戦を行ふ。この日小雨模様なれど、我が軍の意氣盛なり。

球(藤村)壘(高橋)二氏審判の下に不中先攻にて開始。第一回(不中)三者凡退。(熊中)西岡、新井の安打、森の中堅越三壘打に二點。第二回(不中)無爲。(熊中)宮崎、矢島、西岡の三安打に二點を加ふ。第三回(不中)無爲。第五回(不中)無爲。(熊中)三安打に更に二點。第六回(不中)振す。(熊中)一點を増す。第七回(不中)逆襲に出て一安打二敵失に一點を歸す。(熊中)無爲。第八回(不中)更に二安打に二點。(熊中)無爲。第九回(不中)最後の攻撃も我が軍の好守に得點無し。かくして我等は幸先よき勝利を祝し、不中の健闘をたたへつつ歸途につく。

(熊中)	打	安	得	機	盜	三
8矢島	5	2	1	0	0	0
5西岡	5	2	1	0	0	0
6新井	5	2	2	0	0	0
3森	3	2	1	0	0	0
1福田	3	0	1	0	1	0
7原	4	0	0	0	1	1
2鈴木	3	1	0	0	0	1
9宮崎	1	1	1	0	0	1
福島	1	0	0	0	0	1
4栗原	1	0	0	0	0	1
田村	1	0	0	0	0	1
計	34	10	7	0	1	3

三壘打 森

五月五日、我等は西野、福永雨先生に引率せられて、全關東中等野球場玉北郡豫選に本庄中學と同校球場にて戦ふ。

(熊中)第一回 矢島の安打、二敵失、森三振すれど福田の安打に三點。第三回 新井、森、福田、福島、栗原と連續に長短五安打し、五點。第六回 二安打に二點。更に(八回)三點。(九回)一點を加ふ。(本中)我が軍の猛打に對向して良く打ち、第一回一點。第三回長塚の本壘打に二點。第六回一點。第九回必死の攻撃に三點を取るも及ばず。

(本中)	打	安	得	機	盜	三
8田島	5	1	2	0	0	0
2千代田	4	1	1	1	0	0
3長塚	5	2	2	0	0	0
6大塚	4	1	0	0	0	0
1吉田	5	3	0	0	0	0
5須賀	5	0	1	0	1	1
4金子	4	0	0	0	0	2
3森	2	0	0	0	0	2
7中	4	0	1	0	0	1
計	28	8	7	1	1	5

(熊中)	打	安	得	機	盜	三
8矢島	7	2	3	0	1	0
2西岡	7	4	4	0	0	0
6新井	5	1	2	1	0	0
3森	6	3	1	0	1	1
1福田	6	3	0	0	1	0
5福島	6	2	2	0	2	2
4栗原	4	1	1	0	0	1
9宮崎	4	1	1	0	0	0
7原	4	2	0	2	0	0
計	49	19	14	3	5	4

本壘打 長塚
二壘打 森
西岡 新井

五月六日 大宮縣野球場にて、南關東の王座を占むる關東中學を迎へ堂々雄雄を決す。

(球)横澤(壘)星澤二氏審判の下に熊中先攻で開始。(熊中)我が軍は第一回早くも敵の出塁なくちき、得意の集注安打に二點、更に二回栗

原の安打に二點を得、意氣大いに奮へども、其の後敵投手の好調に得點するに至らず。(熊中)第四回まで森投手の剛球に手も足も出なかつたが、森投手の疲勞に乘じ、毎回得點して、遂に合計五點にて、我が熊中軍惜敗す。

對柏壁中學

六月二日 今日全關東中等野球場玉北郡豫選決勝の日である。澄渡つた大空、中堅メインスタンド高く翻動して風にひるがへる大日章旗、天地に正氣満ちる時、我等は熊中の榮譽を雙肩に、熱と意氣と團結と、多年の練磨とを以て、技と熱の新鋭、柏中と對した。

球(秋田)壘(横澤)三氏審判の下に行はる。先攻熊中第一回(熊中)矢島三壘暴投一壘生くるも、後援續かず。(柏中)二者凡退後小川二壘越安打を放つも、次打者三島邪飛にやむ。第二回(熊中)一死後福島、遊越安打、栗原三壘越安打せしも、後援續かず。(柏中)島海右翼越三壘打を放ち、關の右翼前安打に一點先取す。第三回(熊中)無爲。(柏中)鈴木、小川の安打に一點を加ふ。第四回 兩軍振振す。第五回(熊中)宮崎四球、原投網後、宮崎盜塁矢島中前安打、新井遊撃左を抜きて、宮崎、矢島生還。(柏中)無爲。第六回(熊中)矢島の安打に一點を加ふ。(柏中)振振す。第七回以後兩軍とも投手の好調に得點なく、我軍押ささる。

對關東中學(神宮球場)

八月二十三日 今日ぞ、我等他年宿望の一端を達して、神嚴な神宮外苑野球場に、必勝の意氣に燃えて、あくまでも、堂々と、戦ふいと名々の日である。肩字に決死の色みせて、戦前既に敵のものの概あり(球)安藤(壘)多勢、秋田三氏審判の下に行はる。

熊中先攻にて開始(熊中)最初我が軍敵投手の整球意の如くならざる中に、矢島の安打、福田の二壘打、二敵失も四點を挙げ我が軍の意氣

怪なり、然るに敵投手の調子出づるや殆んど機会を見出せなかつた。
 (關中)關中は立上りさま山鼻をくちかれながらも、長く戦ひ、我が兩
 投手を良く打ち六對四で、我を下した。
 本日の戦を見るに、我が軍は矢折れ、力盡きて、運命の趣く所に行
 つたのだ。残念ではあるが、非常に惜しい事ではあるが、我等は最善
 の力を出して戦つた事に自らを満足させ、又先輩諸兄にも御勘辨して
 もらひませう。

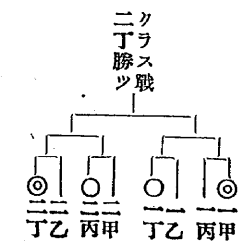
本年度野球部對校試合

十月(昭和八年)	本校7	3	不動岡中	勝
十一月	本校11	9	埼玉商業	勝
四月(昭和九年)	本校7A	6	柏壁中學	勝
	本校12	0	不動岡中學	勝
五月	本校4	3	埼玉商業	勝
	本校14	7	本庄中學	勝
六月	本校4	5	關東中學	勝
	本校9	8	豐岡實業	勝
	本校4	17A	藤岡中學	敗
七月	本校1	11	川越中學	敗
	本校13	12	川越商業	勝
	本校4	6	豐岡實業	敗
	本校2	18A	銚子商業	敗
八月	本校4	5	關東中學	敗
十一月	本校9A	2	埼玉商業	(新メンバーによる)
本年度野球クラブ戦				

本年は参加チーム十四、實に野球も普及したものだ。どのチームも
 技術の進歩してゐるのには一驚する。殊に決勝戦にのつた、同好會
 橋羅會は流練せられてゐた。

會	暮坂田沼木真橋田川
小石中柿青木高上市	8 2 4 6 9 1 3 5 8

得點	同好會 100 100 40 30 30 12A2
村田保美田邊井田野	5 4 6 7 3 2 9 1 8



守	備	率	失	策	守備率
矢島政雄	12	18	3	1	0.996
原育司	15	25	6	2	0.994
鈴木正道	15	20	3	2	0.992
宮崎利秀	15	18	4	2	0.991
森正巳	15	61	12	4	0.995
西岡廣	8	16	7	3	0.987
福田守雄	15	54	23	4	0.996
栗原利雄	15	21	60	4	0.997
新井博	15	18	115	10	0.993
福島昭	15	12	96	14	0.986

森正己 矢島政雄
 原育司

吾々五年が先に立ち、過去一年間を熊中の歴史を踏みつける機な
 事なく、どうにか過して来た。野球部の恩師小林先生は吾等が學園を
 去られてしまつた。先生に去られし後の吾等は、狼狽悲しみ爲す事を
 知らなかつた。然るに元氣なる福永先生を新に迎へて、意氣も返して
 努力の結果、あまり良き戦跡でもないが戦つてきたのだ。
 縣下大會に、或は神宮球場に、努力邁進したけれども、遂に花を咲
 かせる事は出来なかつた。
 然し來年度のチームたるべき者に、部員が多くなるのは吾々にさ
 つて、喜ぶべき事なのだ。

投手福田、君は何事も眞面目に腕の良さは練習にあるのだ。練習せ
 られよ。
 一壘西岡、君は病身だ毎日家で、研究してグラウンドに出たら、短時
 間でよい、一心に一球、眞心こめて練習せられよ。

二壘栗原、君は打撃は見込あると云はれたのだ、打撃を完全に、然
 し守備を怠つてはならない。
 三壘福島、君は守備は完全とはいへない、あさ一年あるのだ、守
 備法を獲得してくれ、打撃もあさ一歩だ、練習せられよ。

捕手鈴木、君も福島と同じだ、練習すれば上手になる、眞面目に練
 習に出られよ。
 他の今井、金井、宮崎、根岸、三田、君達は三年だ、守備に打撃に
 熱心に練習して、部の中堅となつてくれ、最後に言ひたい。

吾々は枯木に花を咲かせる事が出来なかつた。花！否、惜しまへつけ
 られなかつた。

野球部記事 新井博 秋篠善次郎

打	率	三	壘	本	壘	二	壘	安	打	出
打撃率	4.00	10	5	10	3	0	2	1	28	69
四死	3.71	12	6	6	3	0	1	5	27	75
三振	3.46	12	7	7	7	1	1	8	24	72
壘打	3.10	8	7	6	4	0	2	5	22	70
壘打	3.10	7	5	3	3	0	0	3	12	35
壘打	2.96	11	7	4	4	0	1	3	20	68
壘打	2.33	9	8	5	4	0	0	1	15	65
壘打	2.23	17	9	6	3	0	0	2	15	67
壘打	1.90	12	7	7	4	0	0	0	13	68
壘打	1.69	9	7	3	2	0	1	0	10	65

雷が花へは君達の肩にあるのだ。歴史ある昔の熊中野球部に返りし
てくれ、そして吾等に萬歳を叫びてくれ。
これが去り行く者の頼みだ。

甲子園第一次豫戦感想記

五年 矢島 政・雄

神宮に於ける様政杯争奪戦縣下豫選、對浦中決勝戦の時二壘へのス
チールなつた時自分は遂に退場の運命を持つた。それより悶悶として
全快を待ち野球の殿堂甲子園への出場権獲得を願うた。次に甲子園第
一次豫戦大宮球場での縣下大會を掲げよう。

第一回戦 對新進川商 七月二十七日

自分は未だ出場出来る運命を持つて居なかつた。未だ歩行にも充分
な足を持つて居なかつた。且つ本壘を死守すべき四岡捕手も病み出場
出来ずベストメンバーの揃はない試合は面白く進行しないのを知つて
居る。弱きチームは勝に乘ずると強くなる、弱きチームとは傳統なき
チームである。不中をコールドゲームで敗り我等に向ひ來つたのであ
る。四回三對零で勝ち五回五對四と肉迫され八回十二對八と離し九回
三點をゆるし十二對十一で勝つた。樂な試合ではあつたがシーソー
ゲーム其の物であつた。又それだけに嬉しかつた。次は明日への希望
を持ち甲子園への夢を描きつつ眠りについた。明ければ二十八日、此
の梅雨期にみた天候に對して珍らしい野球日和、今日の戦跡の如何に
より第二次豫戦、北關東大會への出場権を獲得し得るか否かの試合で
ある。

對豊實 二十八日

浦中、川中の熱戦の跡を受けて戦ひは開かれた。次第に進行し三回

四對零と敗れ四回五對四と迫る。身方は漸次壓迫さる。八回自分は出
場した。敗北しつつある心ある者自分は何かに不自由なりと雖も出場
し人一倍の事は出来なくとも一生懸命戦ふのが此れ人の至情ならざる
か。八回更に一點を奪取され六對四と敗れた。最後の縣下大會に豫
想外の敗北を喫した、來年の諸君石にかぎりついても仇敵を打つてく
れ。

神宮球場にて

五年 原 育 司

嗚呼、記念すべき八月二十二日よ、我等熊中野球部は、皇太子殿下
行啓記念優勝杯争奪縣東中等學校野球大會に出場出来る名譽を得てか
ら、約一ヶ月半毎日火の出る様な練習を重ね、我等若人は今日の日を
待つてゐたのだ。天は我等に天與を垂るゝかの如く、曇くもない絶好
の日和。今日こそこの關東中等野球界に花を咲かせん全部員決死の
覚悟あふれ、宿敵南關東の雄、甲子園に出場した、關東中學と顔を合
せた。

サイレンの音は、まだ目の覚めきれない神宮球場に、鳴りひびいた
愈試合開始午前九時、我等の最後の技術を發揮する時が來たのだ。熊
中先攻、そして一回に四點を得て、あの強豪關東中學の心膽を寒から
しめた。其の時の我等の氣持さいつたら、全く言葉に盡し難い。併し
二回から九回迄、幾度か機會を掴んだが遂に残念にも、得點すること
が出来なかつた。五對四、五對四、幾度繰りかへしても惜敗はやはり
惜敗だ。

再びサイレンは鳴り響いた。絶えぬ叫びをきながら涙を吞んで退
場した。その時の氣持を、思ひ出す毎に泣かざるを得ない。然し我等

はベストを盡した。勝負は時の運だ。二チーム共に勝つわけにはゆか
ない。勝つて喜ぶ裏には斷腸の思ひをなさればならぬ者がある。我等
はその悲痛なうめき聲を聞き殺して四年生以下の諸君にお願ひの言葉
を残さう。諸君よ、あの敗れた時の氣持を忘れるな。一生懸命に練習
すれば、諸君の憧れの的である甲子園の晴の檜舞臺で雄飛を決する日
も、近い將來にあらう。そして熊中の光輝ある歴史を全國に、轟かさ
れんことを祈る。
最後に私は野球部員として本校の爲あまりに盡すことの少なかつた
事をお詫しなげばならぬ。

最後の一年間を顧る

森 正 巳

中等學校野球部より今や去らんとして居る我等熊中野球部五年生さ
して最後の一年間を顧みて斯チームの祝福を祈らう。
春祭と共に涙の中に四人の五年生を送り出し、再び熊中野球部に長
年監督として信頼され敬れて居り又埼玉縣野球界の大恩人たる小林先
生を失ふ事である。今迄長い間親切に選手を指導なすつた先生を失ふ
事は部員に取つては何により心細く悲しんだ事であらう。然し先生の
都台の上の事故先生の幸福を祈りつゝ總てを諦らめて熊中から送られ
ばならなかつた。

小林先生の後任として監督となられた福永先生も小林先生同様に誠
に御熱心にやられ我々として再び輝かしい光を求めさせ希望に燃えて本
年の好成績を胸に抱いて猛練習を行はせて下さつた。又小林先生時
代より部長として居られた西野先生は小林先生なき後も御熱心に指
導して下さいましたので私等も何一つ不安なく楽しく好きな道に進む事が

出來た。

春の合宿練習に江原先輩のコーチを受けた我々は腕に相當の自信を
持ち目指す夏の大會遠しと意氣盛の時、幸にも神宮大會の豫選が本年
から五月に行はれる事である。我々も本年こそは晴れの神宮球場に熊
中の名を咲かせんと例年の一日置きの練習を毎日と改め否が應でも野球
選手の憧れの神宮を目指した。そして關根氏をコーチと頼み、縣下の
北部豫選で連勝してその元氣で全縣の代表豫選で福敵箱中を破り遂に
望みを達して埼玉代表として神宮に出場する事の出来る名譽の權利を
得た縣下豫選の決勝戦の前であつた。關根氏の御都合上小久保先輩と
コーチを變らなければならなかつた。それから神宮への出場の喜びと
來るべく夏の甲子園を目指して小久保先輩の熱心なる指導の下に六月
から七月下旬の炎天の中で猛練習を行つて居たが、我々に何により悲
しむべき事が起つた。それは頼みとする二人の選手の病の爲出場出来
ない事である。神宮大會豫選の時の元氣も又自信も失つた。今迄嬉し
い時は一緒に喜び又悲しい事は共に悲しみ、共に苦しんだ友達を失ふ
事はどれ位我々を失望させたであらう。

それも多くの先生方や先輩後援會應援團の人々に慰められ勵げま
されて大會に出場せねばならなかつた。嗚呼何人と云ふ不運であらう
何んの悪戯であらうと幾ら悲しんでも返らぬ二人を諦めて七月下旬の
大會に出場した。然し準決勝に於いて戦運なく豊岡實業の爲に遂に六
四で惜敗した。

多年の宿望甲子園への出場もとうとう中學生としてははかない夢で
あつた。その時こそ我等五年生は心の中で泣きに泣いた。そして來年
こそはと四年以下の選手を勵ました。
それでも我等には又一つの望みがある、それこそ晴れの神宮球場に
於いて全關東の縣代表チームと攝政杯争奪戦である。

八月十日より今村先輩をコーチとし又もや猛練習を續けて熊中の名を轟かさんとした。

十五日頃より早大阿部選手のコーチの下に尙一層烈しい練習となつた。我等五年としては最後の練習である。その烈しさを忍んで大會を待つた。

阿部さんの御熱心さと我々の得た自信で二十一日に晴れの大會に參加し、最初より強敵と望んで樂しみに組合せを見れば第一回戦には甲子園で大いに活躍した南關東の雄關東中學である。相手に取つては不足がなかつた。然し對關中にも大接戦の後五——四で遂に敗れた。あゝ我々の一番思ひ出になる中學野球生活も終りとなつた。何物も殘さず此の懐しい熊中から出るのは恥しい事であるが、後の事をよくくせす明年又明後年否何年後もの熊中野球部の祝福を祈らう。

水泳部報

宮本藤正

水泳部の機文が掲げられたのは七月初旬だつた。之に應ずる者三十八名、四年五名、三年八名、二年十名、一年十五名、監督鈴木先生、指導者は松本蔵一先生と定まる。

第一日
出發は七月二十三日早朝で上野驛より圓タクに分乗して靈岸島へ、それより菊丸にて北條へと向ふ。一同大喜び船中を見て廻つたり、船首に沸き返る白泡を或は押寄せ大浪を眺めたりして打興した。潮の香はひしひしと身に迫り實に爽快だ。僕等の氣持に引換えて此の頃から空は次第に險惡になる。左右の陸がぼろぼろと薄れて来る頃より海は次第に荒れて来た。今まで元氣に溢れて居た船中には次第に重苦しい氣分が漂ひ初めた。船酔が初つたのだ。元氣な僕等の仲間も残念ながら數人やられてしまつた。かくして三四時間もたつたと思ふ頃懐しい沖の島北條館山の港が見え、漸次飛行場、松林、ヨットと見えて來ると船中は急にどよめき立つ。空もいつしか、からりさ晴れ、一同すつかり元氣を回復した。輝く太陽の下に藍をたたえた海水を見ると無精に泳ぎたくなる、僕等の寄宿舍、高師水泳部寄宿舍に着いたのは十一時半、部屋、班其の他水泳練習上の各種の準備注意などがあつて、少憩の後其處から二百米さなない濱邊へ一つで隊伍を組んで出かけた。一年ぶりで海水につかる。何んとも云はれぬ懐しさが湧いて來る、一同は各級に分けられ軽い練習をして歸り、風呂に仰び／＼とつかつて疲を休める。夕飯が終れば皆思ひ／＼に海岸或は町へ散歩に出かける。かくして第一日を終つた。

或る一日
ふさ眼がさめた。未だ皆ぐつすりと寝込んで居る。僕は隣の人をそつと起こして濱へ出た。未だ夜はすつかり明けきらず東の空は潮や赤く染りだしたばかりで海の色はどんよりとして居た。その静けさの中を二、三の船が歸つて來る。昨夜漁に出かけたのだらう。馳けよつて覗くと舟底は草魚、鳥賊、比目魚など名も知らぬ魚で一杯だ。その中太陽は松林の間に顔を覗かす。鏡浦はきら／＼と煌く。沖の島の松の緑、鏡浦を圍む山の緑、遠くかすむ那古船方、奥まで清められた潮の香がほのかに漂ひ朝の空氣はあくまで清く胸の奥まで清められる。寄宿舍に歸つて見るさう皆起きてゐた。夜具をかたづけ約一時間勉強する。その中に腹の虫がうなりだす。時しもがらん／＼と鐘がなる。どつさ食堂へなだれこむ。食器の音、談笑の聲等で食堂内は忽ち和氣あつた。氣分がみなぎる。全く十日間も寢食を共にすると皆兄弟の様に

親しくなる。朝食後九時迄は自由行動だ。或る者は勉強、トランプ、碁、將棋等思ひ／＼の事をする。又或る者は濱へ散歩に行き地引網を見て來る者、或は早やボート漕ぎに行く者もある。九時松本先生の「出發用意」の號令がかかる。忽ち群一つになつて集合、人員點呼、そして濱へ向つて走る。砂濱で準備運動の後、今日行ふ泳ぎの型を先生が見せてくれる。僕等は砂原に横になつて型の練習をする。終つてタニンクを全員でわつし／＼とさかき上げ程よい所に立て、其處を中心にして其日の課目の猛練習を行ふ。自分の技が一步／＼と上達するのは實に愉快で堪らない。クロールで滑るやうに泳ぐ時の氣持、スプリングボードから眞青な水面へスローダイイング或はギャクダインが得意でさつと跳り込む時の愉快さは忘れられない。かくして身体が漸く冷える頃先生の「上れ」の號令で砂濱へ駆け上る。或る者は横に寝そべつて砂をあびる。目に映るものは唯だ青々とした空ばかりである。爆音高く飛行機を目をかくする時何んとも云はれぬ雄大さを味ふ。又或る者は倒立や轉回をやる、或は兩先生の音頭取りで歌を唄ひだす。皆元氣に満ち／＼である。其の中にいつか練習の時間も過ぎ再び人員點呼後寄宿舍に歸り清水に身体を濯めて、着物を着る間もなく贅食の鐘がなる。此の時の飯の味も忘れられない。午後の練習は二時からなのでそれ迄は皆思ひ／＼にヨットにボートに乗り、鏡浦を縦横に駆けめぐる。さつ／＼と帆にはらむ風、ざんざんたる浪、艇はぐつと傾き白波を蹴立てし／＼とあびて疾走する、他の艇と競争する事によつて興味は一層加はる。なんとも男性的でないか。午後は二時より四時迄猛練習が續けられる。そして一日の練習が終るのである。しかしかく其の天氣に恵まれたのは僅か二、三日に過ぎなかつた。曇つて波が高く練習の不可能な時はランニングしたり、波乗りなどした。練習後直ちに風呂に入り互に休をもみ合ひながら談笑するのも水泳生活の

一つのたのしみだ。風呂を出ると小豆や葛湯が僕等を待つてゐる。六時夕飯、食後八時半迄自由行動だ。僕は二、三の友達と一緒に町へ出かけた。電燈の光に華やかに輝く街は避暑客に賑はつてゐた。僕等は足の向くままに避暑地らしい土産を賣る店、射的場、釣堀と覗きながらぶら／＼と中へいつか濱へ出てしまつた。棧橋のあたりは少ししか電燈がないので薄暗い。棧橋の突端に立てば、はるか右手に那古船方さおぼしきあたりがぼろ／＼と明るく見え、正面の眞暗な海の彼方にピカ／＼と燈臺の光が明滅してゐる。左方飛行場、館山町の光が美しく海に映つてゐる。波はびち／＼と淺橋にあたり、時々夜光虫が美しく風はひえ／＼としてあたりは静かだ、之の情景に立つて誰か感慨無量の感に打たれない者があらうか。眞暗な濱づたひに波の音を聞きながら寄宿舍に向ふ。此の頃は皆殆んど歸つて土産を並べたり、トランプなどして打興してゐる。その中に八時半になつて人員點呼があり不寢番を除いては皆寢てしまふ。

不寢番
北條へ来て二回目と同じく北條に來てゐる崎師の先輩を訪れた。その話によると崎師の寄宿舍へ盗賊が入り貴重品を奪つたと、それで僕等は其の晩から不寢番を設けた。それは上級下級を組合せた二人で、一時間交代に盜難豫防、窓の開閉、及び毛布をかけてやつたりするものである。僕は三日目の十二時より一時迄の不寢番にあたつた。揺り起こされて呼子、懐中電燈をわたされた。僕は相手の一年生のK君と共に睡い目をこすり／＼寄宿舍の隅々を見廻つた。外は眞の闇だ。聞えるのは唯だだけである。毛布をかけてやつたり窓の開閉を調節したりする。あまり静かなので恐ろしい位だ。それから十五分毎に見廻つた。その間二人で碁目をやつたりキヤラメルをなめたりして時の過ぎるのを待つてゐた。突然「飯だ／＼」と云ふ叫聲、僕はハット胸を轟かせた。

此れはターニンガ壺のまはりで各級毎に行はれる。各々一度に三種目宛見てもらつて次と交代する。波の靜な時は真いが少し荒れて横泳してゐる頃から大波をかぶると鼻から水が入つたりして相當苦しい。しかし思ふやうに泳げた時の氣持よかつたらない。立泳の時などは既にへと／＼になつてゐる。足がうまく動かないなと思ふ間に口のあたりまで洗ひかかゝる。あはてて頑張る。やつさターニンガ壺へ来たかと思ふと直ぐ跳び込みだ。ドアーンと續きまたに跳込む。或は潜水さ次から次へとやる。やつさ終はる頃はすつかりへばつて手足が固くなつてしまふ。しかも進級の發表を聞く時を思ふと疲れも忘れて頑張らないでは居られない。

二十九日沖の島往復五哩遠泳決行、出發午前九時。濱には食料品、毛布等を積み込んだ三隻の船が用意されて居る。僕等も服襟を防ぐ爲に腹へハラマシンを塗り込む。用意がさとのつ一同三列縦隊、距離二米、間隔一米を置いて出發。空はかりと晴れ波もなく絶好の、コンディションである。一同元氣一杯にヨイコラ、エンヤコラと掛けをかけ

客の間を一同悠々と引き上げた。

十日間それは長いようで經つて見れば短いものだ。もう歸らなければならぬと思ふさ流石に名残りおしい。今日が最後かと思ふと思ふ

[illegible]

始まつたり互に鎗をけずつたが遂に一班の勝に歸した。最後、寶
璽が行はれた。水中を潜ぐつてサイダー、桃等を拾つたりしてとても
愉快だつた。かくして水泳大會は盛會裡に終はつた。そして名残りお
しい北條を後にしたのは一時であつた。

十日前まで少しも泳げなかつた者も凡て泳げる様になり一同良好な
成績を以つて此の愉快な十日間の合宿生活を無事に終つたのである。

[illegible]

二三

蹴球部記事

對校試合成績

月	日	相手校	場所	得点	勝敗
六月	三日	浦和中學	浦中	3	勝
六月	三日	埼玉師範	浦中	1	敗
六月	九日	足利中學	桐工	11	勝
六月	十日	浦和中學	桐工	1	敗
六月	三十日	松山中學	松中	0	敗
九月	二十日	埼玉商業	埼玉	2	勝
九月	二十四日	早稲田實業	埼玉	0	敗
九月	三十日	浦和中學	埼玉	3	勝
十月	七日	不動岡中學	浦高	2	勝
十月	七日	浦和中學	浦高	1	敗

第五回近縣中等學校蹴球大會記

理事 塚光治郎

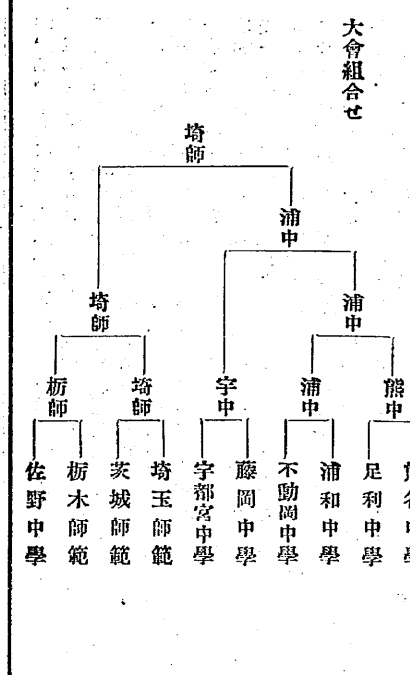
六月九日、時正に緑色着す初夏の頃、我が蹴球部は先年の惜敗を挽回し優勝の榮冠を熊谷の地に輝やかさん。新人軍は赤城の麓桐生高工の近縣蹴球大會に出場した。我等第一回戦に對する敵は足利中學である。爽快なるタイプに足中のマークを白く浮き出した彼、頭から脚先まで純白の我、其處に何とも云へない感じがあふれて居た。

九日午後二時二十分熊中先戦で開始された。
前半 熊中始めより敵を壓して居たが敵の剛健な体力に返されて熊中本陣を襲ふ足中の意氣旺盛にして遂に五分ゴールインさる、一點先取された熊中未だ調子そろはす亂れ勝であつた。大關笠間のパスによる逆襲も或は敵のバックスの好防に、或はゴールオーバーに得点をせず、十五分大關單身ヘナルテエリアからヘナルテエリア迄のドリブル物凄く得点するかと見えたがL、Fのクリアリングキックに止む。此の頃からハーフミッドの連絡良くなり敵陣を襲ふこと數度試合漸次白熱化する。闘志燃ゆる若人の意氣溢るるばかりであつた、二十六分笠間のシュートに一點を返して同点となり以つて前半終る。
後半 熊中腹痛を訴ふる者多かりしが其く頑張り打倒足中の意氣に燃え強みあるホリッド領みあるバックに敵を壓し、ロング、シュートパスに敵陣を襲ふ。三分、足中ゴール前の混戦にハーフセンター腰塚ブッシュして一點勝ち越す。戦は殆んど定まつた様であつた。
此の日新人荒井、鶴田、稻垣等は元氣に頑張つた事は特筆すべきである。

熊中	田關開田	井塚垣	荒島	西田	2	11	1
W. I. R. I. W.	H. H. H.	F. F. K.	I. K. K.	K. K.			
L. L. C. R. R.	L. C. R.	L. R. G.	G. C. G. F.	G. C. G. F.	1	14	5
呂澤山沼山	林田島	眞乘坊	村	田			
茂大丸小森	小白川						

マネヂヤー 石田昇平

えて午前八時浦中先戦で開始す。
一分浦中平柳、土橋へのパスを土橋ドリブル、センタリングが熊中ゴール前へ落ちしを腰塚ストブレ、クリアリングキックをみると見えだが浦中岩田之を取りシュートは見事ゴールを破り得点す。その後熊中あせり氣味であつた、熊中度々ゴール前に反則しゴール脅かされたがゴールキーパー西田奮闘し危機を脱す。
後半 熊中例の大關、笠間を中心とするパスに浦中陣を再三脅かすも無爲、七分浦中ヘナルテキックを得るもゴールを外れて無爲、十分熊中調子をそろへてバックの助けをかりホリッド躍進す。十五分大關笠間、鶴田と渡り鶴田のシュートに一點を返し同点となる。兩軍長く攻め長く防ぎしが得点なくそのまゝ終る。
抽籤にて敗れしは残念であるが仕方がない。



埼玉蹴球部主催、第一回近縣中等蹴球大會に我が熊中蹴球部は、合宿練習に獲得せる物凄く實力を以て必ず覇を唱ふべく出場した。
九月廿二日、剛雨後の埼玉グラウンドの午後には涼けよつてゐた。大体に於て熊中選手のコンドイション良く、主將は本日の仕合は勇氣を起して敵に當り、少々過失は在つても良いと告げた。今日の相手は東京の強剛早稲田實業である。非常に大きな体格で、技量が伯仲すれば破り難い恐が感ぜられた。時は過ぎ午後四時三十分、熊中對早稲田の戦いは早稲田のキックオフにて開始された。
最初より熊中敵のゴールを襲ひ、四十秒敵のゴールキーパー辛じて危機を逃れ、大きく熊中へボールを返すをL、H浅井良く之を捕へロングシュートして早くも一點を揚ぐ。之より熊中の意氣益々盛に、敵の本陣は常に混亂す。敵のバックも良く防ぎ常に本陣を襲ひつゝ、ありしも容易に得点出来ず。敵の心膽を寒からしめめた前半の十分以後、L、C、F笠間、R、I高柳のパスにて敵を攻め大關にパスすれば、大關亦敵を抜いて見事なセンタリングし、球は敵のゴールを掠めL、W開庭、得点せんとするも入らず。ゴール前は前半殆ど混亂し遂に終る。
五分の間は忽ち經、益々勇を起して後半に臨み早稲田を蹴散らした。敵も壓迫しつゝ十分、鮮かなセンタリングにて得点し二點をリードす。此頃より早稲田の全選手、學校の名譽を思ひ意氣を盛返し熊中に當るも、遺憾無く守られた熊中のバックは如何なる強敵さ難も陥れ難い。C、H腰塚の左右を固く守る浅井、稻垣の敏腕、ゴール近く守りを更に固める中島、荒井の兩フルバック、本陣を守りて得点を許さぬキーパー西田。早稲田の猛襲を忽ちにして破り十四分ゴール前の混亂の

際、L、I 森田敵の本陣を亦陥れる。後雨軍疲れ得點出來ず。其く敵の陣を突破して十五分以後、敵を攻むるも陥る能はず。遂に3—0にて熊中堂々と勝つ。開戦五時廿五分、初秋の夕陽は早訪つてゐた。廿三日、我等熊中健兒は傳統ある熊中の榮譽を擔ひつゝ、今日の準々決勝の爲に浦和へ向つた。今日の相手は常に近郷に覇を唱ふべく争ひ來りし強剛浦中である。今度こそは必ず浦中へ恨を晴らす様、里見先生からも戒められた。然し浦中の優れた技量は熊中の痛手である。容易に攻め込めない。我々は勇んで暗れの境師グラウンドへさ向ひ午後一時は次第に迫つて來た。本日は北風強く練習中も非常にボールが流された。時は來た。熊中の榮譽をかけて戦ふ此の一戦！熊中のキックオフにて開始さる。風益々強く浦中強風を利用して我に當り我が本陣は危ふくボールキックは益々多くなつた。四分浦中パスに依りゴールを襲ひ西田良く防ぐも甲斐も無く遂に得點さる。以後屢々逆襲するも強風の爲、直に亦本陣を襲はれ危機は多くなる。熊中は敵のゴールを襲ふ機會も無く常にボールはハーフラインより南方則ち熊中側にあつた。敵の美技、それは完全に敵を破り行くと云ふ浦中のホッパの強さだ。熊中が全力を盡して然も浦中を退けられず十分以後、熊中ゴール前の混亂に終始せしは大なる技量の差があるのだ。一點を奪はれし後バックよく防ぎ前半終る。

後半は熊中が風を利用して戦ふ時であると思ひて選手皆、勇氣百倍するも開始さるゝや強風は緩かなる風と變じ、二分頃は早止んだに近かつた。天命であらうか浦中への有利は前半後半を通じてある。三分左側よりパスにて攻め込み西田良く、迄シヤンブして防ぐも亦得點さる。熊中稍々意氣改り同等の仕合せした。八分亦左側より熊中を突き、ハーフ、フルバック忽ち抜かれ西田一人になりて其く抵抗するも遂に亦得點され三點のリードとしてしまつた。熊中の技量は持つてゐるだけ發揮出來ない。昨日の對早實の仕合せ浦中の名コーチヤー及び主將等は色々研究的態度で見、我が部の惡所を選び此の場所より當つて來たのだ。十五分以後熊中其く敵を猛撃し笠間必死の覺悟にてドリブルし敵を抜き敵の本陣を襲ふも、我等に機會與へられず笠間再び中意氣振ひて其く攻むるも遂に得點出來ず。悲しいタイムアップの笛は鳴つた。遂に浦中に負けた。残念だ。然し今一度の浦高の大會には必ずや浦中に對し必ずや強剛浦中を撃破する事を呉々も誓ふ。

第八回關東中等學校蹴球大會記

主將 大關房之助

九月三十日、吾等は先輩の築きし榮譽を取り返さんと此の大會へ出場す。第一回戦は不動岡中學と組む。吾等は第二回戦で予を交へる浦中をベストコンデションで迎へる爲スランパから脱し切れない調子で下中と戦ふ。嘗て熊中黄金時代なりし時此のグラウンドに凱歌を上げし血湧く。熊中先就で試合開始。

前半 五分五分の勝負であつたが熊中老功にゴールを狙ひ森田のブツシュに笠間のシートに簡単に二點を先取しリードしつゝ後半に入る後半 不中元氣を盛り返へ十分C、H 單身ドリブルに吾陣を襲ひゴールエリア邊からの見事なショットに一點返へす、十五分又もC、Hを中心巧なパスに吾陣を襲ひR、I、E、Hの混亂に球を得てシートして又一點返し同點となる。熊中キックオフ後調子出て來て輕く不中のバックスを抜きゴールに迫るもゴールを外れて止む、二十分不中ゴール前の混亂から大關球を得左上隅を狙ひシートすれば球は不中F、Bの

頭越にゴールインし再び熊中リードす、その後熊中數度不中のゴール前にチャンスを得れども無爲、タイムアップとなる。此の戦は不中元氣に熊中を苦しめたが老巧な熊中の技量に敵し難く遂に破れたと云つて良い。

第二回戦 十月七日、吾等は必ず宿敵浦中を破る決心にて當る、此の日前日來の秋雨にグラウンドは泥濘となり水溜り所々に出來て居た、驛員の過ちから當日埼玉體育協會の競技中止になりしを浦高主催の競技迄中止と發表せる驛多あり、笠間森田兩選手の遅刻となり新人高柳角田を出場さす名選手二名の缺員はチーム全体に悲壯な覺悟をさせた。

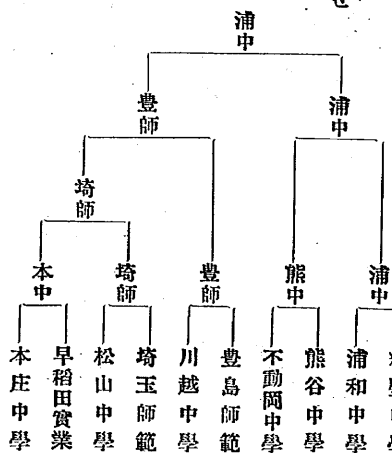
十時半、秋雨冷たき中に浦中先陣に開始ミッドフィールドの混戦稍々續く、十分熊中キックアンドラッシュ型良く中央の混戦を抜き浦中ゴール前に迫る浦中R、F 越場のミスに熊中一點先取浦中をリードす浦中度々熊中陣を壓するも熊中C、H 腰塚以下良く頑張りゴールに近づけず此の頃よりグラウンド非常に泥濘かり全くの泥試合と化し体當り時々起る、二十分浦中R、I、吉岡R、W 土橋二人パス良く熊中バックスを抜きゴール前に迫る吉岡のショットゴールアウトと思ひ熊中四田球を拾ひに出掛ようとした時R、W 土橋此の球を追ひゴール前に蹴るを熊中バックス此をクリヤせんとするも迂りてゴールインとなり浦中1—1と追附く、そのまゝ後半に入る。

後半、三分熊中空閑森田兩選手一汽車運れて來場し高柳角田に變る此に氣をゆるめてか五分浦中L、I 岩田の右コーナーへのローグパスをR、I 吉岡途中カットしゴール左隅へシュートなG、K セーブせんとするも迂りてゴールインとなり浦中リードす。十分、熊中浦中を壓して居たが笠間の前方へのパスなC、F 島田ゴールラインの上に此を取りセンタリングするをL、W 間庭シートレゴールインとなりレエフェエリー、ゴ

ールアウトせし球をし得點させず十五分、熊中R、I 笠間のゴール前へのパスをL、I 大關之を取り見事左隅にシートしゴールインするもレエフェエリー、オフサイドとミスジャッパして得點とせず、熊中軍悲憤抗慨涙を流して奮闘するも得點ならず遂に破る。

熊中は浦中に凡ての點劣らざる力量を有しながらミスジャッパの爲の破れたのだ、選手は涙を流して口惜がつたが仕方ない事だつた。

大會組合せ



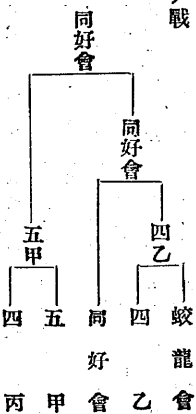
校内ア式蹴球大會記

主將 大關房之助

我が蹴球部は蹴球校内普及の爲め六月中旬クラス戦及びクラフ戦を

開催した。
次にその成績を報告しよう。

クラブ戦



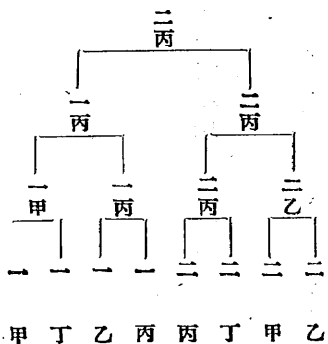
同好會	村本邊田田	井保山	村水庭
中宮渡黒内	今大秋	木香	
F.W.	H.B.	F.B.	G.K.
田川口田	田村井	堀岸	
角市原森吉	細田新	柄根	
五十部			
0	G.I.	1	
5	C.K.	6	
7	G.K.	9	
2	F.K.	4	
0	P.K.	1	

同好會は多くの真の選手を持ち技量も大變良、只元氣のないチームである事は惜しい、あれ丈の技量で一點きり得點出來ないのは頑張り不足して居たのではないかと思ふ、それに反し五甲は元氣のみのチームと云ふ事が出来る、殊にホワードは元氣に同好會を壓した事は稱讃すべきだ、個人としては同好會の木村、渡邊、岡庭、五甲森、田村は仲々いい技量を持つて居る。

戦評

校友會諸兄に

主將 大關房之助



本年度蹴球部成績は余り好ましいものではなかつた云ふも吾々としては自己のベストを盡した心算である。對校試合に十戦五敗の悪成績は強いチームと多く試合し弱いチームとの試合が少なかつた結果である、吾等は二流チームに落ちた熊中蹴球部を一流チームにレベルを上げたのだ、その苦しい立場として當然の結果なのである、一學期新チームで浦中講師と試合した時は未だ彼等は吾等を背二歳程にしか思つては居なかつたのだ。

然り吾々はその時は青二歳であつたに過ぎなかつたのだ、が桐生大會に浦中と一対一で抽籤負けとなつたのである。浦中は決勝に講師と延長戦に破る。彼等は熊中の長足の進歩を驚いたであらう。熊中スビ

リットを持つ吾々は次の大會こそ夏期合宿練習に文理大の名ウイング江崎氏をコーチとして動けなくなる迄(真にそれは事實である)練習したのである。そして埼玉蹴球団主催近畿大會に再び浦中講師を倒すべく出場したが不運大風の爲め再び苦杯を嘗めたのだつた。浦高主催関東大會こそ思つて出場はしたが又も審判のミスガヤツパに破れるに至つたのだつた。

四度浦中に敗れ(一度は練習不足の爲め一度は抽籤により一度は大風のため一度はミスガヤツパの爲めに)四度立ち上らうとする吾々の悲壯な面を見て呉れ、此度浦中と戦ふ時こそは決心する吾々を見て呉れ、名コーチ阿部氏の下に練習する彼等を、幾つも真きチームを有し理解ある人々を有する浦中に住む彼等を、素質ある幾多の下級生を持つ彼等を(彼等は小學校に入らない前から蹴球を知つて居るのだ)自力獨行只有るは先輩より受け継いだ熊中スピリットだ。それでも風せず猛進する吾等の練習ぶりを見て呉れ、先年秋山氏の云はれた「練習に泣いて試合に笑へ」と云はれた語守つて練習に泣いて居る吾等々来る年こそ立ち上らうとする吾等々を見て居て呉れ!

最後に蹴球部の選手及び部員を諸兄に紹介します。

五年 主將	大關房之助(LI)	マネチャー	石田 昇平
理事	腰塚光治郎(CH)	笠間 良一(CF)	
	中島民次郎(RF)		
四年 理事	西田 健二(GK)	淺井 進(LH)	
	森田 亮一(RI)	稻垣 光雄(CH)	
	荒井 幸藏(LF)	鶴田 千壽(LWRHL)	
	島田 茂治	茂木 豊	

本年の籠球部を追憶し後輩諸君に送る

鈴木 保夫
根岸 忠雄
鳥山 一雄

幾度か断念しようかと思ふ程激烈な練習も今は懐しい過去の思ひ出として追憶される頃、吾等は今先輩の激励の言葉をも無にして、余りに平凡な戦績を残して、短かつた部員生活から去らんとする。

此處に於て聊か拙文を以て自分等の感想を述べ後輩諸君に告げんと欲するものである。

淺間の嶺に未だ白雪が消えぬ頃、吉永さんを送り出し、心細かつたが新たに宮本、黒田、金子、金室の新鋭を迎へて二部新チームは互に勵まし合つた事も幾度ぞ。かくて連日の如く秩父連山に日が沈み、やがて遠き人家に燈火が見られるまで練習が續けられた。

一部に於ても一寸心細い感じはあつたが、新入生竹田を迎へ小川、

阿久澤も共に元氣で期待は充分かけられてゐた。その頃の陣容を述べ

(容陣部一)		野田	岸
R.F	内	竹	根
L.F	柴	小	金
C	阿久澤	水	黒
R.G			鈴
L.G			宮
(容陣部二)		岸	木
R.F	根	子	本
L.F	金	黒	室
C	鈴	宮	金
R.G			
L.G			

その頃の日記の一頁を寫して見よう。

五月十九日(土曜日) 快晴
もう初夏の太陽はコートを開きつめて、練習も今週からズボンでバ

ンツでやる事にした。開放された火曜日の放課後、遊ぶには氣候がよい、然し我等には先輩の残した遺業がある。其れを繼ぐ我等にはそんな余裕はないのだ。

未だ考査も無いので部員は殆んど練習に出て居る。機林もすっかり新緑化し、希望に燃ゆる色を見せて吾等の練習を、遺業を完成せよと勵まして居る様だ。吾々籠球部員は全く此の機林とは親しい仲だ。

コートもこの林の一部を借りてゐる、そして籠球部創立當時からいつその練習を見守つてゐる。幾人の先輩が勝利の喜びを傳へ、又敗残の悲しみを訴へた事であらう。我等は眞剣だ、先輩の魂がこの林に残つていつも我等を激勵するから。

一部二部に分れてバスの練習が始められる。鈴木と根岸がいつも一心同体となつて皆を指揮してゐるのが、丁度兄が弟を戒める様で部員は皆に「」しながら和氣藹々として熱心によつてゐる。

ブッシュ。アンダー……。ストップ。鈴木、鈴木の聲が「ランニング・シュー」ト。皆一齊に兩側に分れる。

阿久澤が大聲を張り上げて、愛嬌ある顔で走つて来る、バスされて

シュート……。リンクにはれがへつて見事にゴール。

「ナイス・シュート」皆が異口同音にはやす。皆好調だ。黒田の体をひねつた一種特色あるシュートがいつもゴールして、一局の賞讃的となつてゐた。鈴木、根岸、宮本、金子、金室、小川はもう全く型が一定した如くいつもゴール・インだ。自分は機に凭れて時のたつのも忘れて感心して見てゐた。

いつもの様に一通りの練習を終へた時、野球部だけがやはり同じ目的に向つて球を追つて居た。奥村先生がお出になつて、我等は「層引」又猛烈に練習を始める。やがて奥村先生の「御苦勞」の言葉がある頃、選手は皆眞黒な顔して聲も出ない、四邊は早や夕霧に包まれて測候所の塔がぼんやりと浮んでゐる。

以上は自分の日記の一頁であり、余りに個人的感じがあるが、當時の選手達の練習の様子を表現したものである。

第一學期は種々の關係から試合はなかなか出来なかつた。六月の初旬、練習試合を隣農に求めたのが蓋し本年度最初の對抗試合であつた。

幸運にも断然これを粉碎し、吾等は大いに氣を良くし又連日の練習に興味を覺えたのは勿論である。

對熊農戦々績(一部 本校 3224—4 熊農 續いて一部は熊商と干戈を交へて見事にこれを打破つた。

對熊商戦々績(本校 27—12 熊商) かくして吾々の遠征計畫も着々と進められ、初めて熊谷の地を離れ

熊商に遠征したのは、六月も差迫つた廿七日だつた。

諸先生に見送られ、奥村先生に引導されて闘志満々として出發したのに、歸途には一部、二部共に寂漠たる敗残の憂目に合はされ、余り

にも我等の自惚の強かつた事を感じさせられるさは、想像も及ばぬ戦績だつた。

對熊商戦々績(一部 本校 712—4117 熊商

スコアの示す如く二部は大敗であつた。従つて續いて行はれた一部の試合には大いに期待がかけられて居た。豫想通り前半は敵を壓倒して(F)内野一點(F)柴崎二點(C)小川断然頑張り五點(G)阿久澤一點、合計九點の收獲、然し敵もさる者七點を奪つてその差僅かに一

ゴールだ。此の調子で進んで行けば勝てるぞ。と激勵して試合は愈々後半に入つた。然し後半に於て熊商は陣容を立て直し、二部選手の櫻井君がフォワードに入り、櫻井君の活躍物すごく遂に一人で十點も奪

ひ爲に敵は俄然色めき出した。吾等選手も追撃に迫る重れたが、櫻井君にはばまれて得點僅かに三點。遂に我等は一部、二部共に大敗した

だが一部の戦敗は原因が熊商櫻井君の出現によつて擾亂された、後半の亂戦にある丈けに惜しんでも惜み切れなかつた。

熊商に一蹴されて、井戸の蛙が始めて外界に出た如く、熊商の長所、短所の研究も未だ半ばならずして、翌週の日曜日、川中の遠征に本校

コートで對抗した。外界に出た許りの蛙には蛞蝓へ強敵だ、況や縣下の強チム川中には全く對抗する丈けの技能は吾には備はつて居ないのだ。

對川中戦々績(一部 本校 157—359 川中

熊商も川中も確かに強敵であつた。其の技に於て、その作戦に於て我より一日の長ある事がその動作にひしひしと感ぜられた。勝利の榮冠の吾に輝かなかつたのも蓋し當然だつたのだ。

やがて學期末の考査が我等を苦しめ、それも僅か一週間で終ればし

う一學期も五日を残して終らうとしてゐる。

かくて短かつたが、變化のあつた一學期の戦績を顧みた時、その敗残の跡は我等に何と呼びかけたか。思ふに練習も未熟なのに縣下の強敵とその初めに於て戦つた事は、無謀も甚だしい吾等の自惚心に過ぎなかつたのだ。

やがて暑中休暇ともなれば我等の校友は、海に山に夫々の快樂を求めて旅行し、又來春の聖戦を前にして學に勤めてその休暇をば活さんとしてゐる。然し一學期の戦績を追憶した時、我等は旅行も控目にして今宿練習に技を練られねばならなかつた。

機林を友とし、偶々訪れる俄雨に慰安されてコートに躍る選手の場合生活は經驗無くしては知る事も出来ない忍耐のものであつた。瘦せる程猛烈な練習を終つて自由の身になつたのも束の間、我等は又一

個の生徒として登校するのだ。始業式の日脱衣場に部員が集まつた時計らずも皆の叫んだ言葉は「今度こそ死んだつて頑張りぞ」の悲壯な聲

悟を示すものだつた。

休暇中主將鈴木が病氣となり、合宿練習に出られなかつた事は大打撃だつた。然し十日間の合宿練習に依つて吾等選手の実力は數倍した事は確かだ。數倍した實力も休暇中わざ／＼御指導下さつた奥村先生を初め先輩鈴木さん、長野さんに負ふ所多大にして、我々三人此處に厚く感謝の意を表します。

かくて陣容に於ても幾分變化がありましたから左に記述します。

(一部陣容)		野田	岸
R.F	内	竹	根
L.F	小	柴	金
C	阿久澤	水	黒
R.G			鈴
L.G			宮
(二部陣容)		岸	木
R.F	根	子	本
L.F	金	黒	室
C	鈴	宮	金
R.G			
L.G			

今となつて見れば、唯不中に大勝し、續いて浦高主催の關東大會に出場し第一回戦に見事府立五中を打破り、第三回戦に府立一商と戦つて輕くあしはれた事等が走馬燈の如く、吾が胸裏を掠めて行く、然し縣下大會の前哨戦として戦つた對本中の一戦だけは今考へても諦め切れぬ一戦だつた。確かに作戦が悪かつた。敗因は、一も二もなくそれだ。

此の日試合釐定は三時だつたが本中チームの本校に着いたのは四時だつた。従つて我選手は本中との試合を断念して隣縣農大一戦を交へたつかりつゝ居た、反りて本中チームを見るに闘志満々として、元氣で全身が漲つてゐる。時間が遅れたので休息も與へられず、直ぐ三部の試合が行はれた。敵は皆長軀なる体格の持主だ。

前半。セクター・タツプに於て常に不利な我軍は壁頭から苦戦だ、然しG宮本、金室よく動いて敵にシュートの機を與へず、五分に到るも兩軍得點なし。三分黒田フアールされてリン。スローに得たがゴーレルセす。此の頃より我軍少し疲勞の色を見せ、六分遂に敵L笠原見事なランニング・シュートで得點す。敵益々好調となり六分半敵G橋本のロンク・シュート又ゴーレルにて差四點となる。我軍の疲勞甚だしく八分遂にタイムを取る。チーム・ワークを取り、陣容に變化なしG黒田今日に限つて揮ひず、十分R下根岸機を見て見事なシュート、ゴーレルにて我軍の元氣を盛り返す。續いて根岸のロンク・シュート見事に治まる。此の間に敵は橋本、中原各々得點して又差を作る。十五分黒田のローグ・シュートを金室ホロとして得點し前半終る。4 12

後半。常にチャンスに恵まれ黒田も調子をもとして二分きれいなセクター・ホームエーションによつて先づ二點。三分根岸フアールして敵

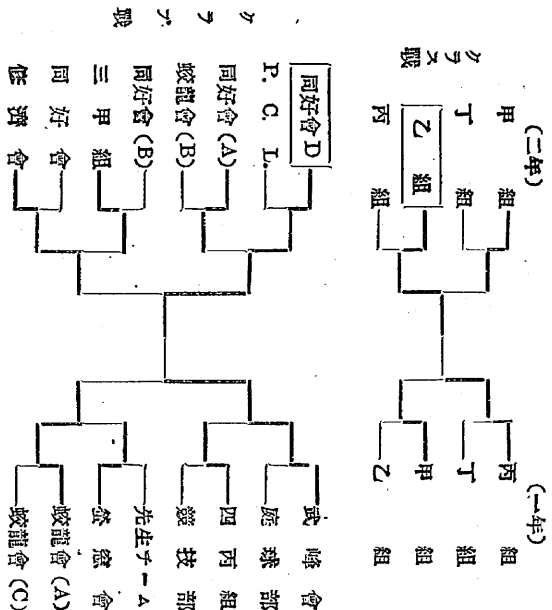
R F に一點を奪はる、三分半再び根岸フアールして敵 R G 一點を加ふ敵常に我軍の好守にはまされて得點の機なし、我軍斷然面目を一新しくて五分根岸敵の L G を見事に抜いてゴール。金室のホリ又功を奉してワンゴールす。後半は大いにその技能を發揮して敵を壓倒したが、前半の打撃をどうする事も出来なかつた。十四分敵 L G ロング。シュートしてゴール、萬事窮す。遂に 17—20 にて戦ひ終る。

一部。前半。4—4 の同點のまゝ後半に入る。

後半。九分に到るも 3—2 にて我軍リードしてその差僅かに一點折しも雨さへ加はれて兩軍共にパス確實ならず、泥まみれの亂戦又亂戦。九分三十秒敵 H ーフ。ライン邊より獨りドリブルと轉びながらシュートした球ゴールす。チャンスとは云ふものか。7—8 にて一部も惜敗す。

遂に來た！我等の最後を飾る縣下大會が。
然し運命の神さのかくまでも皮肉なるものか、其の壁頭に於て一敗の憂目に合はされた本中と相對し、又しても破られるさは……。何さ云つて先輩に答へよう、何と云つて後輩諸君に傳へよう。半年の努力それは何の目的にやつたのだ。火の出る様な合宿練習。それも皆來るべき縣下大會に備へてではなからうか。然し今となつて悲憤慷慨して何にならう、我等は遂に五年間の努力を、勿論ベストを盡して戰つたが此の一戦に於て殆んど水泡に歸して了つた。
後輩諸君、是非我等の過ぎし轍を見て、諸君の戒まなしてくれ、そして部長は皆互に親しみ合つて、親しい中に長幼の序は明らかにして、先輩鈴木さんの残して行つた籠球部三ヶ年計畫は諸君の腕で完成してくれ。
終りに臨み種々御後援下さつた横田先生、田中先生に厚く感謝致し

マネーヂャー 鳥山一雄



木村弘

昭和九年度理事及び助手左の如し。

理事	五年	木村弘、石關保	四年	小川輝夫
助手	五年	枋堀久雄、新井利雄、木村弘、石關保、酒井光司、渡邊		

英雄、大澤雅一
笠原延雄、齋藤照夫、新井潔、竹内吉五郎、小貝芳郎、

富田健次郎、青木孝之、野中丁一、杉田藤作、小川輝夫
長島英一

三年 小此木英信、黒澤縣一、大澤昌夫、島崎春次、土田榮司、
坂田正一、高野茂、藤野勇、浦島平吉

一級以上本校柔道部生徒左の如し。

初夏も漸く過ັນする六月三十日吾等は第一回の對抗試合を群馬縣太田中學をむかへて華先よき試合を行つた。負けてはならぬ試合で有る、勝つて一年間をだれでもいけない、最初の試合である、太田良く前半の頑ばりに對して本校良く、後半に食ひさめ遂に高點、紅白共に勝負なしに迄漕ぎつめた。

高點 太田中學 本校 紅白太田 本校

七月月中旬に行はれたる各學年對組戰優勝組左の如し。

五年乙組 四年甲組 三年甲組 二年甲組

大澤 正敏 柿澤 富雄 小此木英信 小林 敬吉

木村 弘 森田 亮一 黑澤 縣一 新井 忠次

石山 善亮 齋藤 昭夫 大澤 昌夫 近江榮之助

飯野 正也 中島 武男 板根 茂 小松原源助

鯨井 重衛 笠原 延雄 小間 治貞 關口 正良

九月廿九日(土曜日)東京高等師範に於て行はれたる第四回全國中等學校柔道優勝大會に出場す。吾等の最初の大會、氣は已に敵を呑むの概あるも第三回戰の田村中學は東北の雄々人もゆるし吾もゆるしたる者、本校選手良く戰ひたるも不得意させる寢技にせめられ遂に四對〇のスコアを以て惨敗の憂き目を見たのである。

第一回戰不戰一勝

第二回戰 木更津中學

小 鯨 〇 沼 井 本校

中 島 × 小 川

打 木 × 木 村

白 井 〇 石 邊

山 口 × 渡 邊

白 井 〇 木 村

以上廿九日以下三十日

本 校 田村中學

重 田 〇 木 村

鈴 木 × 渡 邊

三對三 勝負なし

重 田 × 木 村

鈴 木 × 渡 邊

敗れたりさ。雖も本校選手は意氣の力を目のあたり見せられた。それは尊い経験で有ると思つた。結構意氣の強い學校が勝つて行く。意氣だ、意氣だ。

十月三十日(火曜日)午前十時より多數來賓各位の御出席を得盛んなる裡に武道大會を舉行した。

第一組 高點者 野中 丁一 第二組 竹内吉五郎

[illegible]

(9) (X)伊佐山
(13) (X)酒井
(14) (X)小石
(15) (X)石木
(16) (O)笠原
(10) (O)杉野
(11) (X)新堀井
(12) (X)大鯨
(13) (X)澤井

外來者對一本勝負
(O)本校 石増澤
(O)本校 木巢村

以上武道會
猶十一月四日昇段審議會を通過せる先輩教諭左の如し。

初段 教諭 田中一郎
二段 先輩 長谷川敏雄
同 同 馬村孝治
同 同 大谷菊雄
參段 同 清水林次郎
同 同 相澤達三

先年卒業生宮倉勇義參段が埼玉縣選手權大會に優勝し伊佐山正次武
段が講道館月並試合に於て參段に列せられるは柔道部の爲海に喜
ぶべき事である。

十一月十一日(日曜日)吾等の縣下大會は浦和武徳殿に於て開かれた
この日天あく迄清く首途を祝福するかの如く有つた。又本年度より
一部制が設けられ三年以下の生徒の参加を見るに至つたのである。
以下級生の指導にあつた吾等は下級生の實力縣下第一を信じて居た。
併るになんぞ二部に於ては川中不中に敗れ、一部に於ては本大會の優
勝組柏壁中學に代表三回に至つて敗るゝとは思はざりし戦蹟、汚點を
本紙にのこすとは、併し口惜しいなら口惜がれ下級生よ、將來ある身
だ。この日出場校十三校、これを四組に分けて相當法に由り各組の勝

者を決勝へ送る。第一部は甲組にて松中、柏中、杉農あり。第二部内
組にて川中、不中、浦商有り、時の状況左の如し。

第一部
本校 坂田 松中 本校 坂田 杉農
大澤 小中 上 藤 大澤 小中 上 藤 大澤 小中 上 藤
藤 野 柴 崎 小 野 南 柴 崎 小 野 南 柴 崎 小 野 南 柴 崎
土 田 野 柴 崎 小 野 南 柴 崎 小 野 南 柴 崎 小 野 南 柴 崎
島 崎 野 南 柴 崎 小 野 南 柴 崎 小 野 南 柴 崎 小 野 南 柴 崎
小 崎 野 南 柴 崎 小 野 南 柴 崎 小 野 南 柴 崎 小 野 南 柴 崎
5 對 0

この意氣この元氣で最後の柏中を對す。

代表第一回戦 坂田 飯島
代表第二回戦 坂田 飯島
代表第三回戦 坂田 飯島
坂田 飯島 坂田 飯島 坂田 飯島 坂田 飯島 坂田 飯島 坂田 飯島
2 對 3

第二部

理事 菅 間 壽 一
理事 森 田 貞 二

嗚呼！多難なりし一九三四年！それは非常時日本を背景に困苦と
躍る血潮で、不安と希望に汗みどろに成つて奮闘せる年なりき。
願ふれば未だ櫻のつぼみ開き日、吾が庭球部に多彩を加へられし、
清水、高橋、飯塚の先輩諸兄をお送りした。残されし私達。先輩の無
言の中に築き上げて呉れた榮ある歴史を見つめた時、言ひ知れぬ寂し
さを感じる。微力なる私達に果して此の光榮ある歴史を守つて行く事
が出来たらうか。不安と焦燥は雨潮の如く襲ひかゝる。何くそ！私
達もきつさる！さの意氣込みで、奮然部員は一致協力固き誓ひの
下に猛練習を始めた。

合宿練習の夢も破られて、吾等は遂に榮冠を獲得すべきスポーツマ
ンの活躍の秋が来た。戦の秋は来た。更生の吾部！今年こそ！吾
等は母校の爲めに、雄々しく縣下第一をモットーに縣下大會に出場し
た。一年間の努力こそ、ここに始めて表れるのだ。吾等は戦つた。奮
闘した。然し何たる不幸であらう。遂に榮冠を獲得する事の出来な
かつた事よ！吾等は等しく、母校！幾多の先輩！九百の熊中健兒
の爲めに泣いた事か！

過去一年の戦跡を顧る時私達の未だ、無力だつた事を感じる。
部員諸君！来るシーズンこそ、君達の活躍する絶好のチャンスだ
その秋こそ實に吾部の双肩にかゝる時だ。君達の若さと意氣と實力と
を以て更に、吾部勝利の爲めに、名譽の爲めに、健全なる努力を積
まれ、そして早く其の凱歌を奏して下れ。新しき春！一致協力！
一路進まれん事を希望する。
左に本年度吾部の戦跡を記す。

本校 小川 川中 本校 小川 川中
石 關 森 山 石 關 森 山
木 村 山 田 木 村 山 田
渡 邊 仁 平 渡 邊 仁 平
酒 井 野 上 酒 井 野 上
笠 原 石 原 笠 原 石 原
長 島 大河内 長 島 大河内
代表第一回戦 石 關 野 上
代表第二回戦 石 關 野 上
1 對 2

本校 小川 川中 本校 小川 川中
石 關 森 山 石 關 森 山
木 村 山 田 木 村 山 田
渡 邊 仁 平 渡 邊 仁 平
酒 井 野 上 酒 井 野 上
笠 原 石 原 笠 原 石 原
長 島 大河内 長 島 大河内
5 對 0

2 對 3

庭球部々報

昨年あの成績の柔道部を受け繼いだ吾等の戦跡は餘りにも情ない有
様で有る、薄暗き塙師の道場に決勝で浦中の早怯なる振舞により遂に
優勝旗を逸した時、來年こそは「つかりたのむ」と云はれた自分等は
深く先輩諸兄にわけばならない、と同時に本年あれ程力戦した一部
の部員よ、來年こそは必ずしたのむ！結構勝たれば駄目だ。勝て。

△五月二十日 於縣體育協會コート 第三回縣下クラブ對抗選手権大會 一回戰 (本校) 2 — 1 (縣體育協會クラブ) 二回戰 (本校) 1 — 2 (松山クラブ) △六月 於熊谷堤外コート (本校) 3 — 0 (熊谷クラブB) △七月二十日 於熊谷堤外コート (本校) 1 — 0 (熊谷クラブB) △七月二十八日 於本校コート (本校) 1 — 1 (熊谷郵便局) 日没の爲め試合中止となる。 △八月一日 於江古田丸菱コート 大塚學友會主催全國中等庭球選手権大會 一回戰 本校(菅間) 3 — 4 池田 長師 本校(前田) 3 — 4 (金井前工) △九月二十九日 對本中 於本中 (本校) 4 — 0 (本中) (本校) 1 — 2 (不中)		△九月二十四日 於本庄曙クラブコート △九月三十日 於本校 (本校) 0 — 3 (熊農) △十月一日 於本校 (本校) 0 — 1 (熊商)	
副前田 4 4 副長 本 4 4 主 菅 間 4 4 主 橋 本 4 4 主 茂 水 4 4 主 清 見 4 4 副前田 4 4 副長 本 4 4 主 菅 間 4 4 主 橋 本 4 4 主 茂 水 4 4 主 清 見 4 4	副前田 4 4 副長 本 4 4 主 菅 間 4 4 主 橋 本 4 4 主 茂 水 4 4 主 清 見 4 4 副前田 4 4 副長 本 4 4 主 菅 間 4 4 主 橋 本 4 4 主 茂 水 4 4 主 清 見 4 4	副前田 4 4 副長 本 4 4 主 菅 間 4 4 主 橋 本 4 4 主 茂 水 4 4 主 清 見 4 4 副前田 4 4 副長 本 4 4 主 菅 間 4 4 主 橋 本 4 4 主 茂 水 4 4 主 清 見 4 4	副前田 4 4 副長 本 4 4 主 菅 間 4 4 主 橋 本 4 4 主 茂 水 4 4 主 清 見 4 4 副前田 4 4 副長 本 4 4 主 菅 間 4 4 主 橋 本 4 4 主 茂 水 4 4 主 清 見 4 4

本校菅間 3 — 2 (遠藤 柴崎松申)
二回戦
本校菅間 2 — 3 (風間 秩農)
校内クラブ戦々跡

(野球部)

(野球部) — (同好會 A) — (同好會 B) — (以下畧す)
(同好會 A) — (學友會 A)

最後に部員氏名を記す(○印は正選手)
(五年) ○菅間、○前田、○鯉井、○長谷川、○清水、○森田
(四年) ○納見、篠塚
(三年) ○横瀬、○茂木、○長島、○關本、西内、戸田、大谷、小久保、吉田
(二年)(一年)略す。

以上—九、十一

原口通

競技部

スポーツの目的は、唯單に勝利のみに抱置したものでなくして、倒れて後止むの意氣を以つて自分の最善をつくす。そのフアイシテンカスピリットを有したものである。これはあらゆるスポーツを代表せる文字である。
しかし、一步深く入つて考へるに、自己の最善をつくすために、

能ふる限りの力さ、出来るだけの技術をのびすことである。それには何か目的がなければ至難なことである。その目的とは何ぞや、それは勝利である。勝利を目的とする、それはスポーツ精神からはずれた、いやしむべき目的物ではないかと思ふ者が或はあるかもしれない。しかし、それは無考への者か或は眞のスポーツ精神を解さない者である修養の期間にある吾々は、眞のスポーツ精神を、或は健全なる身体を等々に兼ね備へたる人間たらんとして全力をつくすのだ。そして勝利は、自己の力量を他の者より一層多くてのびとし、他の者より多く苦しんで技術を練つた者が得る。即ち最善の努力をつくして、眞のスポーツ精神に一番近づいた者が、その勝利の榮を得るものである。

スポーツは天才を磨くにあらずして、天才を作り出す一番手近の、そして一番得るところのある修養機關である。スポーツマンたる者、一時もその雰圍氣内より出でざることゝを圖れ。

吾々は、昨年の意氣を持ち續けやうと、寒風の下に早くも練習を開始した。

第一回本年度の吾等の活躍の殿堂上長瀬運動場に舉行せられたる、中等學校陸上競技大會に出場した。その戦跡を顧るに、吾等の練習未だその域に達せざるを徒らに歎くのみであつた。僕はその時、俺は大馬鹿者だと思つた。自分の最善がつくせない、何さいふ馬鹿だと自分を罵つて見た。しかし追ひつかない。

沈みきつて、熊谷にもどつた。この時の他の選手の胸中はどうなであつたらう。僕はあらためて皆に聞きたい。どんなであつたぞ。

長瀬の不振をとれどもどすべき練習は續けられた。六月中旬、不動岡中學に遠征、對校競技の火蓋は切られた。その戦跡を略述すれば

一部

米 1. 不 中

書いてみれば、百、四百の兩種目に零敗を契したことさ、チームの最も重大なる要素のチームワークを缺いてゐたことによると思ふ。チームワークはいかなる競技に於ても最も必要なるものであることを忘れてはならない。

苦しみの夏が來た。しかし不幸にして僕は母の病にあひ、人手少き家の仕事に追ひまはされて、八月の中を棒にふつてしまつた。他の諸君の一丸となつての練習に一度でよいから加はりたかつた。

初秋より、去年の如き意氣と熱とを持しての練習は始められた。この間我等の團將高澤君が病の爲に休學となつたる大不幸に逢つた。しかし、その落膽もつかの間、秋も半さなりて、我等が懐れの的、縣下中等學校陸上競技大會に雄躍して出場したのである。時しも十月十四日、トラックコンデション良好、館中健兒大いに奮闘、戦跡左の如し

第一部		第二部	
四百米	三着 松島、五十九秒七	二百米	五着 高橋
一里	三着 松島、松岡、栗田、松本	四百米	高橋
走中跳	一着 松本、五米五十九	五着	中島
走中跳	六着 世川、十米九十六	四着	齋藤
丸投	十五	四着	齋藤
以上得點	十五	二米八十五	

かくして、本年度の選手生活も終りを告げた。たゞ、縣下大會の戦

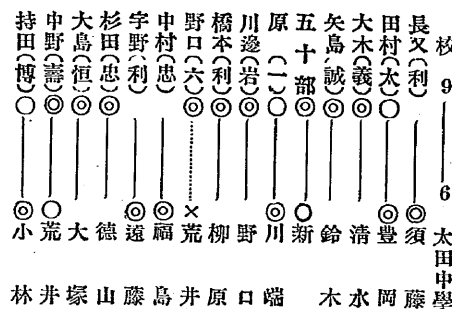
一百米	二百米	四百米	千五百米	砲丸投	圓盤投	槍投	三段跳	走中跳	走高跳	棒高跳	本年度卒業生保持最高記錄
橘(四)	橘(四)	島(三)	本(四)	口(五)	島(四)	口(五)	藤(四)	藤(四)	藤(四)	藤(四)	
一一秒七	二四秒二	五九秒七	四分五五秒	一〇米五四	二五米四〇	四〇米	一一米五四	五米七七	一米六五	二米八五	

劍	高澤	原口
道	三走圓砲槍	
	段高盤丸	
	跳跳投投投	
部	一六三 一六三 一六三	四二米六五 一六三〇

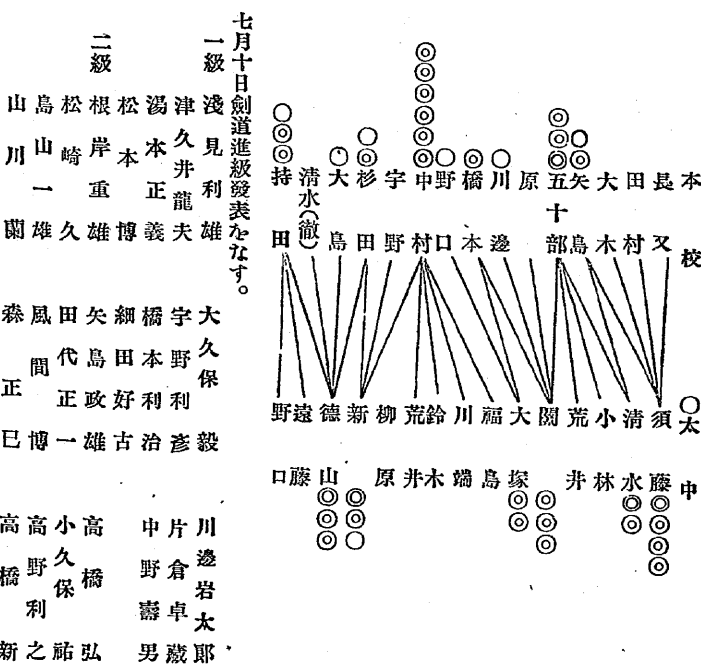
四月十日	本年度剣道部委員を定む。	委員
五年	長又利喜三	
同	矢島誠三郎	
四年	野口六郎	
四月十二日	本年度剣道助手を命ず。	
五甲	長又利喜三	原一
	矢島誠三郎	大木義夫
	中村忠	橋本利治
	川邊岩太郎	宇野利彦
	五十部一雄	
	大島恒男	
	中野壽男	
	塚田大	
四年	杉田忠喜	江森午太郎
	吉田義雄	柘植宏明
	茂木馨	夏目純彦
	持田博	齊藤義雄
	池田嶺雄	
	野口六郎	
	清水徹男	
	田中進	
	四月十二日より花に先がけて、本年度来るべき幾多の試合に、輝かしき歴史を持つ我が剣道部の實力を發揮する爲毎日放課後特別練習を	

なす事とす、部員は勿論、部員外の者も出場を歓迎す。
四月十五日 武徳會支部初段の受験をなし合格したる本校部員は次の如し。

長又利喜三 田村太郎 中村忠
大木義雄 矢島誠三郎 原一
五十部一雄 大島恒男 持田博
杉田忠喜 野口六郎 博
六月三十日 太田中學剣道部本校道場に於て、試合をなし、其の成績次の如く三本勝負組合で勝ち紅白試合で負く。



紅白勝負



三級

野口六郎	齋藤義雄	江森午太郎
稻垣光雄	高橋廣雄	原口義雄
内田榮一	清水茂雄	關中義雄
原治郎	石川宏明	茂田敬正
新井次郎	石植雄	荒井敬正
清水徹男	高澤德衛	川崎慎仁
井澤長次	加松長章	青木良輔
小川利夫	小加松治	小田島養一
瀧澤修吉	堀井口長	清水重治
石田好平	酒井喜八郎	向井俊次
關谷錦治	田中忠烈	中田貫一
栗原次郎	紀陸貞雄	塚田丁一
前田久次	菅間正一	高柳輝真
清水允男	柴崎恒平	新井博雄
小澤久	近藤昌比	森田貞二
吉田璋祿	荒井幸藏	高橋一雄
村岡賢二	小島孫一	高橋康太
笠原祥二	石崎森一	笠間貞一
夏田純彦	寺崎次郎	黒田健次
坂本雄直	丹羽德次	櫻田健二
浅井政直	吉田義雄	室田健二
小林一郎	吉田義雄	室田健二

關永啓介	中居弘	塚田恒男
田村榮介	青木繁夫	中村一男
篠崎角三	高杉新平	池田登雄
納見三郎	加藤春夫	柴田治三
多比羅雄	平野利夫	島田眞三
高柳守雄	茂木秀夫	大島眞三
青木武雄	外五十七名	
小林忠雄	外五十八名	
六級 木村榮	外五十八名	
七級 木村榮	外五十八名	
優勝クラス 五甲 四 三 二 一		
八月二十四日より一週間毎日午前九時より十一時迄本校道場に於て暑中稽古を行ふ。		
出場者長又理事外 名、先輩、梅澤、加藤、栗原、吉田、志村、富岡、神沼、柿沼、吉田干、笠原、吉田規、江袋、淺見、小林等十四名。酷暑を物ともせず、毎日熱心に練習をなす。		
三十日最終日には、全員の紅白勝負及び有志の三本勝負組合をなし終つて道場に於て茶話會を催した。此の日の組合成績は		

昭和八年度熊谷中學校々友會收支決算書

収入の部		支出の部		備考	
本年度決算高	本年度豫算高	本年度決算高	本年度豫算高		
四、八八二・五〇〇	四、六七五・〇〇〇	二〇七・五〇〇	二〇七・五〇〇	備	會費延九千七百六拾五人
二一〇・〇〇〇	二〇六・〇〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	考	一人金五拾錢
五〇・〇〇〇	五〇・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇		入會金貳百拾人分 一人金壹圓
九・四五〇	一〇・〇〇〇	一・七一一〇	一・七一一〇		職員寄附金
二一・七一〇	二〇・〇〇〇	五・〇〇〇	五・〇〇〇		臨時寄附金
七五七・三一〇	七三〇・〇〇〇	二七・三一〇	二七・三一〇		利子
五、九三〇・九七〇	五、六九六・〇〇〇	二四〇・五二〇	二四〇・五二〇		雜收入
					前年度ヨリ繰越
本年度決算高	本年度豫算高	比増	比減		
五六八・三七〇	六〇一・四〇〇		三三・〇三〇	文藝部費	
一四〇・一一〇	一七三・七〇〇		三三・五九〇	講演部費	
三九三・三七〇	三八八・一〇〇	一一・二七〇		劍道部費	
二八二・一五〇	二八二・二〇〇		〇・五〇	柔道部費	
一六四・六九〇	一八〇・〇〇〇		一五・三一〇	武道共通費	
九一八・九三〇	九二〇・八〇〇		一・八七〇	野球部費	
四六九・九一〇	四七〇・六〇〇		六・九〇	庭球部費	

本年度決算高	本年度豫算高	比増	比減	備考
三六七・九九〇	三六八・六〇〇		六・六一〇	蹴球部費
三一〇・八二〇	三一二・五〇〇		一・六八〇	競技部費
一六五・二三〇	一六七・七〇〇		二・四七〇	籠球部費
七八・九七〇	八一・八〇〇		二・八三〇	水泳部費
一八五・〇〇〇	一九〇・〇〇〇		五・〇〇〇	園藝部費
六・七〇〇	一〇〇・〇〇〇		九三・三〇〇	記念館修理費
一五七・三九〇	一八〇・〇〇〇		二二・六一〇	体育大會費
七二・〇〇〇	一〇〇・〇〇〇		二八・〇〇〇	卒業式費
二四五・〇〇〇	一〇〇・〇〇〇	一四五・〇〇〇		謝恩金
一〇一・九一〇	一〇〇・〇〇〇	一・九一〇		派遣費
一七三・九〇〇	二五〇・〇〇〇		七六・一〇〇	雜費
四六二・〇六〇	七二八・六〇〇		二六六・五四〇	豫備費
計五、二七〇・五〇〇	五、六九六・〇〇〇	一五八・一八〇	五八三・六八〇	
差引 金六百六拾圓四拾七錢也				次年度へ繰越

兵營見學

行

兵營見學記

五甲 五十部一雄

東京兵器支廠。裏門より入る先づ左手は一段と低く一種の凹地であり縁の圓い丘を圍んでゐる。黄緑の地に種々茶黒の線が入り亂れてカムフラジされてゐる。洞穴火藥庫ださうだ。相當廣大の様である。足許にはレールが二本赤く錆びついて居る。一朝有事の際には多量の兵器を短時間に敏速に運搬配布の爲赤羽驛に通じて居るさうだ。亦門がある。左手にボツカリと大きな口を開いたコンクリートの出口が地下から出てゐる。これは門眼後の巡察者の出入口ださうだ。其の門に續いて赤い練瓦の

事

愈々營内に入らうとした直前、一中隊位の兵隊が整列して居るのが目に入つた。案内の兵隊さんがあれは今夜滿洲へ出立つのだと敬へて呉れた。今では滿洲は大分治安が維持されて來たとは云へ、未だ未だである。さうか御國の爲に東洋平和の爲に、吾世界平和の爲に盡されんことを。兄等よさらば、さらばよ。斯ういふ感じに支配されて營内に入る。

營内に一歩足を踏み入れるや否や一種嚴肅の氣に襲はれたのである。それは規律正しいことである。敬禮に於ても、號令に於ても、其の他あらゆる動作に於ける彼等の態度である。寧ろ嚴格過ぎる位であつて我々には到底耐へ得られずして神經衰弱にでも落ち入るのではないかと思はれた。併し兵隊さんは皆愉快である。何故だらうか、それは眞の自由はルーズな生活に在るのでなくて守るべき規律を守つてこそ初めて得られるのではないからうか。又傳習録附録に弘治五年、陽明先生二十一歳在越。舉浙江鄉試。九年春會試下第。同舍有以不第爲恥者。先生慰之曰世以不第爲恥。吾以不第爲勤心爲恥。識者服之。とある。目標を一步上におくのだらう。目前に捉はれず

塀が取りめぐらされて、一つの倉庫を成して其の中には火藥のない砲彈が一杯詰まつて居ることだ。延長距離は一里以上もあるとのことだ。それから凡て建物はその格納品の性質に依り整理整頓せられ又整備上非常によく研究されて一つの無駄もなく如何なる空地をも利用し其の配置通路等巧妙な極めて居るが併し、斯くしても今は兵器の増加並びに新兵の製造等種々な理由からして狹隘を告げてゐるさうな事である。皇軍の軍備充實上速にその擴張の斷行を願ふのである。次に瞥見した兵器(時間の都合上さうしたのであるが)の名稱を二三擧げて此處の見學記を終らう。九三式探照燈、高射砲各種新舊兩タング、各種自動車、大小聽音機等。次に

參考兵器館。此處には昔からの兵器の變遷即ち各戰役の分捕品、幕末渡來の兵器、我が兵器等が時代順に陳列されてゐるもので、軍隊でもその方面を特に研究する兵隊さんでなくては、に目的に向つて、理想に向つて、一路邁進するのだらう。

兵營見學感想

五乙 淺見 利雄

「歩調トレッツ! 頭一右ッ!」兵門を入らうとした吾々の耳を、驚かしたのには、練兵場を歩む二人の兵士の、萩野先生に對する敬禮の、力強く迫力あることだつた。僕はその瞬間、キリッとした緊張する心と、身体中に高鳴る血潮と、發熱たる活動力の旺盛するのを覺えた。お、これこそ軍人情神の根源だ、と僕は思つた。規則正しい、元氣旺盛な軍隊生活の緊張は、號令に依つて保たれてゐると言つても過言では無い。如何なる場所に於ても、腹の底から出る大きな聲の號令は、時には却つて不調和に、可笑しく感ずる事さへあつたが、彼等の横溢せる元氣は、そんな不調和な空氣は超越して居た。そしてそこには、單に若人の意氣、全世界を敵にして物さめせぬといふ日本軍人の意氣のみが燃えてゐた。僕は初めて號令とは如何な

許可なくして往々に出入することば出來ないのであつたが我々は特に許されて見學する。又その上此處でも仔細に研究するには少くとも三四日を要するのであるが、今日は僅々一時間で見學するのであるから敏速に行動をとつて貰ひたいさ、案内の中佐殿が注意して呉れた。此の建物は木造二階建てで小さいがこれも軍隊式に見ての場所が利用せられて一見してその何物たるかが判る様に整頓されて居つた。ヘルリ來朝當時の大筒から明治初期中期の兵器には特に我々は驚異の眼を見張つた。併し、昔のものがだらう云つて馬鹿にしたものでなくて、非常に細心の努力が拂はれて居つて往々今のものよりも勝れたものがあるのだと絶えず研究して、我が兵器の進歩改善を圖つてゐるとの事である。二階には各國の小銃、小銃彈、各種兵器の進歩發明等興味深いものがあつた。又壁に各戰役の模寫圖が戰爭發達の経路を隨力から智力に、個人から團體に、平面から立體に、局部から全國的に示して居る。又元寇の役圖は如何に當時の我が國防が貧弱であつたかを示すにつけて、現今の國勢隆々たるを考へると眞に感慨の深きものがある。最後に一寸工兵隊に就いて述べよう。

るものか、又如何なるべきものかを知り、その偉大なる威力に感服し、心から號令の練習の必要を痛感した。若しも學校内に、是の號令に依る緊張を、移し得たならば、必ずや皆の心に、より強く校訓の精神が植え付けられるであらう

射撃から歸つた吾々は、各中隊毎に分けられ總ての事が吾々の所謂軍隊式に行はれ、炊事、食事が済むと、兵舎にも夕闇が忍んで來る。そして休息の時間となる。(八時三十分迄)

僕も折角軍隊へ來たのだから、軍隊の風呂位は浴びてみたいと思つて風呂場へ飛び込んだ。實に驚いた。そのやかましいことには、よくもあんなに五月蠅く出來たものだ、と驚嘆させられた。廣くも無い風呂には、全く芋洗の如く裸の人間が、押し合ひ、へし合ひして騒いでゐるその中へ平氣で、あとから飛び込んで行くのだから、呆れざるを得ない。そして總ての裸体兵士達は、力一杯の大聲で、思ひ／＼の歌を歌つてゐるのだ。軍歌、流行歌、歌謡曲、小唄俗歌等から、都々逸、浪花節、淨瑠璃、長唄等々に實に歌のカケルだ。それはあの軍人らしいところの一寸も無い、全くの若人の集團と言

つた感じだ。思ひつきり心を開放して、無邪氣に、怒鳴り騒いでゐるのだ。僕は身体も緑々洗はすに、風呂から出て了つた。

僕はこれ迄何の兵士も、歌等歌つてゐるのを見なかつたので、兵隊は歌を知らないのぢやあるまいか、と思つてゐた。歌を知つてゐると、心の朗らかな時とか、飽きた時とかには、全く何の氣も無く、ふと口の上から出るものである。それにも拘らず遂に風呂場以外の場所では、唯の一人も歌を口づさむ者を見なかつたのは、普通の事のやうではあるが、非常に感心させられた。嘗て吾々が學校から、教室で歌を歌つてはならぬ等と、注意されたのなどは、これと比較すると、うたがたに堪えない。如何に流行唄でも斯く處を得れば、そんなに悪くはないと思ふ。總て、軍隊の規律正しいと言ふことは、各動作が夫々、その處を得てゐるといふ事に盡きる。とも言へるのぢやないかと思ふ。そしてこの事は吾々の最も學ぶべき點である。といふ事は再言する要もあるまいと思ふ。

僕は風呂場から出て、一人舎庭に立つた。外は恰も満月で、荘々として、夢の國へ誘ひ込むやうな春の月は、朧の中にやんわりとした光

を投げてゐた。宵暗の中に幽寂なる自然は、兵舎に無限の詩情を醸し出させてゐる。誰でもこの景に接する者は、古代の香高い名畫、名彫刻に對したやうな、崇峻なる夢想境に誘ひ込まれるやうな氣持になるに違ひ無い。何處からとも無く響く天來の妙音の中に、月は一刻千金の春宵を、凝つて見守つてゐる。ふと氣がつくと、あちらこちらの舎庭に、凝として動かぬ人影らしきものが、黒く、ボンヤリと、月の光に浮んで見えてゐる。彼等もこの詩境と應となつて、恍惚としてゐるのであらう。或は懐しい故郷の事でも、あれこれ、思ひ耽つてゐるかも知れぬ。

眼を轉じて後方を振り返る。すつと向ふの酒保の附近に電氣で明るく、そこからラヂオや蓄音機の音がにぎやかに流れて来る。友達も兵士達もそこに分るゝらしい。僕の足は、何の氣も無く、酒保の方へさ向つて行つた。賑やかな談笑の聲が聞えて来る。親しい友と肩を組んで騒いでゐるのや、まるで子供のやうに逐ひつこゝをしてゐるのや、全く其處は幼稚園の遊戯場の様である。他愛も無い歡樂の中に誰しも楽しんでゐる。今日の重任を無事に済した喜びだ。僕は

嘗て一回も軍隊生活に、こんな空氣を想像した事は無かつた。どうしてあんなに樂しさに、偷んで居られるのだらう？ 軍隊とは規則づくめで、一瞬も氣の休まる時の無い處で居た。軍隊とは無暗に上官が威張る處で、殺伐たる空氣のみが流れてゐる處と聞いて居た。それ故僕は軍隊を、寒風吹荒ぶ冬枯の情景を聯想させる様な處と思つてゐた。而るに、この暢やかさは？ この詩趣豊かな情景は？

僕の心の奥で「それは自由だ。」と、叫んでゐるやうな氣がする。自由、それは軍律嚴しい軍隊生活とは余りにかけ離れてゐるやうに思へる併し眞當にこの軍隊生活に踏込んで、凝つとこの空氣を味はふ時、そこに誰しも眞の自由の姿を見出さざるを得ないと思ふ。この語こそ最も軍隊生活を適切に表現してゐると思ふ。僕等は「日本軍は何故強いのか？」と訪ねられると直ちに「大和魂を持つてゐるから。」と答へる。然らば大和魂とは何か？

僕はこの軍隊生活の眞の自由の中に、彼の大和魂とはこれぢやないか、と思ふものを見たやうな氣がする。或はそれが、大和魂そのものかも知れぬ。より嚴格な軍律の下にあつて、より

大きな自由の喜びに満ちる精神、それは眞に尊い精神だ。昔の武士魂に似通ふものがある。

僕は日本軍の強さの是にその原因はあると思つた。そして思つた。

吾々だつて日本人だ。大和魂は持つてゐるんだ。如何なる苦しみにも堪えやう。否向つて行かう。眞の自由を獲得せんが爲に。」と。

兵營見學及觀兵式所感

五丙 田中 等

四月二十八日、我等五年生は赤羽の兵器支廠を見學しました。此處で最初に見學し且最も感銘の深かつたのは参考兵器庫であつた。此處には明治維新頃からの種々な兵器が納めてあつて兵器を製造する方面に關係する人々には、是非一度は充分に調べなくてはならぬ所ださうです。「古きを尋ねて新しきを知る」と云ふことは非常に重要な事で、此の古い兵器が無くては新鋭な現在の兵器は到底生れ出ないものである。即ち、丸でその原理を示したに過ぎない様な大砲も、現在迄が數萬米も彼方の敵艦を撃沈する巨砲の

生みの親であるを考へられて、その幼稚さを嘲る心など少しも起らず却つて、それが爲に尊敬心をさへ抱いて之を見學し、又その裏面にかくれた非常な努力に心から敬服しました。階下の見學を終へて階上へ上つた時に最初に眼をひかれたのは一幅の繪畫で、凄惨な元寇の役の一場面を描いた物であつた。そこには數多くの死骸が累々として無念の形相も物盡く鮮血に塗れて倒れて居て、或物にはその妻子と思はれる者が泣き乍ら佇んで居り、又或者は無情な鳥に奪ひ亡骸を啄ばれて居て、此の世からなる地獄の光景を呈して居た。彼等は、その戰國精神に於ては敵よりも遙かに優れて居たが、兵器の優秀に於てはとて及ばなかつた。若し彼等に敵と同等の或はそれ以上の武器があつたならば、敵を倒して決して上陸させなかつたであらう。否、逆に敵地に上陸したのであらう。兵器の善悪は一國の運命に關係する所が極めて大きい。是に於て畏れ多くも明治大帝を天皇に戴き一致結束した日本國民の努力は燦然と輝いて精銳日本軍をつくり上げて、平和の今日さへ不斷の努力を拂つてその發明改善に勵み、純日本品として、世界に誇る優秀兵器を造り得る様になつたのであ

る。我等は感激の念に満ちて兵器支廠を去つた。我々が非常なる好奇心と一沫の不安を抱いて射撃場に向つたのは午後零時半頃であつた。色々注意があつて愈々射撃が始まつた。申々中々なかつたが四發目にどうしたはずみか九點に中つた、どうしてこんなに真い點に中つたかはよく解らないが要するに射撃は熟練が最も必要なのだと思ふ。熟練を積んで何事も無意識の中に良く出来る様になつたらば、此の時こそ射撃は旨く申るのであらうと思つた。

射撃を終へて兵營へ向つた。話には色々聞いたけれど實際はどんな物だらうかと興味を以て見た兵營は外觀は平凡な木造建築で見栄えのしないものだつたが兵士達に就ては相當に興味を感じた。彼等は極めて質素であつた。之は以前から「軍隊の飯」などについて色々聞いて居たが、豫期以上のものであつた。殊に感じたのは彼等の敏速な事であつた。何をするにも積極的敏捷であつた。此の平常の訓練が戰時實現されて神速自在な行動が出来るのであらう。

.....x.....x.....
翌くれば二十九日、代々木原頭には春霞が棚

引いてゐる。午前八時五十分、その霞の中より御園薄は肅々進んで来られました。玉座に御着き遊ばされてから直ちに御園兵に移りました。今迄あまり遠くを拜することの出来なかつた龍顔は私達の前方百五十米許りの點にはつきりと拜せられたのであります。嗚呼、その時の心のとよめきは、全く一生の間尊い思ひ出となるであらう。

野外演習

野外演習の記

北軍 上杉 公男
南軍 井上 梅作

天候にわざはひされてのび／＼になつて居つた我々四五年生の野外演習は、今日好天氣に恵まれ愈々本日より決行する事になった。

五年中隊長以下 一七名
四年同 一五五名
自轉車隊 一名
七時五十分ここに編成終り、校長先生及び萩

あう。天皇旗は燦然と朝日に輝き、畏れ多くも陛下は各隊に御答禮を賜はつて居られるのだ各皇族方を始め、外國の使臣に至る迄皆禮装して陛下の御後に續かれ御行列は次第に再び彼方の霞の中へ行かれました。軍國日本の臣民と生れて無上の光榮に浴した我等は唯感激に満ちてその御後を見送つたのであります。

野先生からの御注意のあつて後、我々熊中學生大隊は一路武蔵嵐山を指して旅次行軍を行ふ。途中吉岡村及び下福田成安寺にて一寸休憩し十一時四十分菅谷村南端嵐山重忠公の館跡に到着した。この間七軒近くの強行軍があつたにもかかはらず、我が熊中學生大隊は終りになるにしたがつて元氣益々旺盛、遂にこの強行軍に堪えて、意氣揚々とここに到着したのは實に喜ばしい事である。

た。この世界的英雄重忠公の御姿を館跡たる、の地に立て永久に公の徳を偲ぶ爲であらう。鳥帽子姿の公が、じつと東方をにらんでゐる所は血あり、涙ありし、ありし日の公の面影が偲ばれて、我々は感慨無量であつた。この關東武士の余裔を承けし我々熊中學生は奮勵努力以て世界的英雄嵐山重忠公をばつかしめぬ立派な人にならう。我々は暫し感涙にむせんで名殘惜しくここを立ち去つたのであつた。

ここを出て嵐山へ急いだ。途中幾多の急峻な坂道を攀ちつゝ、その溪谷に近づく、前方は切立つたやうな絶壁、そしてそこには轟々水音が響いてゐるのであつた。見れば天にも轟けと物凄い水音をたてて、水晶のやうに澄んだ山水は、砕けて雪をもあざむかんばかりに玉に散る。ああ何と壯觀な眺めだらう。暫し水邊に佇んで歸る事を忘れる。實に武蔵嵐山の其の名にそむかず風光絶佳な地である。

○時五十分頃には全部松月樓前に到着し、ここに於て一時間休憩食である。

一時五十分食食終り、松月樓前に集合し、今晩に於ける演習準備の爲、ここ嵐山を出て、南軍(五年)は鐵形小學校、北軍(四年)は菅谷小學

校へ向ふ。

南軍にしたがつて

北軍と別れた我々は、縣道に出てくどい道を通つて鐵形小學校に到着した。時に二時十分。ここに整列し、直ちに前方古木蔭着たる八幡神社に行き、各小隊は整列し、ここに十五分間休憩。この間各々解散し、飯盒炊事の米を準備し皆思ひ思ひに別れて休んだ。

すぐ側には都幾川の流が轟々と響き杉の大木は天をおほつて葉蔭暗く、俄かに涼しさを覺えるが如き境内である。各人は今宵の食事の準備の爲流のはたで笑ひさざめてゐる。

かうして米も準備され、炭も起され、やがて炊事も終り、四時頃には愈々食事にとりかかるこげたのもあらう、やはらかいのもあらう、今日こそ自分で炊いた御飯を自分で食べる、實に何とも言はれぬうまさなたへだ食事し終り、五時、各小隊は整列し、夕闇迫る八幡神社境内に武裝いかめしく時の到るのを待つて居つた。ここに於て大隊長より南軍想定が發表された。

一、熊谷一菅谷道ヲ前進セル敵ハ本日午後四時菅谷附近ニ達シ爾後前進ノ模様ナシ
二、大隊ハ都幾川以南ノ地區ニ停止シ敵情地

形ヲ偵察中ニシテ第一中隊ハ前哨中隊トシテ鐵形中央無名寺附近ニ位置シアリ

三、其ノ他ハ略ス 以上
南軍前哨中隊命令(十月十日午後五時)於鐵形内解

一、敵ハ菅谷村六軒以北ノ地區ニ停止シアルモノヲ如シ

二、第一中隊ハ前哨トナリ鐵形中央無名寺ニ位置シ、都幾川以南ノ地區ヲ警戒セントス

三、第一小隊ハ小哨トナリ鐵形北端四叉路附近ニ位置シ大蔵一軒手堂方向ニ對シ警戒ス

四、第二小隊長ハ斥候各一組ヲ以テ大蔵上唐子及ヒ千手堂一六軒方向ノ敵情ヲ偵察午後八時迄ニ報告スヘシ

五、其ノ他略ス
かくして夕闇の益々迫る時、悉く戦備は終り午後六時第二小隊の第一斥候は出發す。第一小隊も任地に行き暗さは益々加はり、演習気分は愈々濃厚なる。

記事係は歩哨の位置を知る爲六時過ぎに出發し、神社の右、橋の側なる、第一下士哨を訪れ次第第三下士哨のところに行く。分隊長の指揮に

より下士哨の任務は完全に行はれてゐた。眞黒な中を靴音のみこつ／＼と聞えるのも物々しい

時折自轉車が来ると誰か?と誰何する。第三下士哨は墓地から約六百米位の地に位置し前方から来る敵は完全に沮止し得る絶好の地である。第二下士哨は第三下士哨の右の方約三百米位のところにあつた。八時から巡察を案内して

記事係は單身北軍の歩哨線に入る。南軍の通行人を誰何するのひきかへて、北軍では下士哨は全々誰何なごせぬのに記事係は驚ろあてがはすれた様だつた。そこで彼等に充分元氣にやつて行くやう注意を與へ、小哨の位置まで到着した。流石に小哨の守備は完全だつた。然し乍ら

記事係と解つてか、銃前哨も誰何をしようとしなかつたが、少くとも我が小哨の位置へ味方以外の方が入らんとするならば、必ずこれを誰何すべきであると思ふ。

かうして北軍の視察を終つて歸る頃になれば戦期愈々熱し、あらしの前の静けさ言はうか無氣味な様な静寂さが續いた。

九時四十分敵襲があるらしいとの南軍の斥候の知り得た状況により、各小隊は銃を執つて境内に整列し、且つ何時敵襲に際しても應じられ

るやう用意周到に期待してゐた。

十分二十分遂に敵襲は来ず、時正に午後十時南軍は前後を警戒しつゝ北軍に對して夜襲を決行すべく、八幡神社をあとにしたのであつた。

菅谷小學校附近に達し、南軍は必勝の觀念を以て、第三小隊は小學校前より、第一、二小隊は後方鐵道線路方向より、突撃せんとした。然るに北軍の兵數は極めて僅かにて、これに對抗する事は到底不可能と知つてか、ここにこの状況は中止となつたのであつた。

斯くの如き結果であつたので正規なら南軍は正に大勝利だつと思ふ。この以前に於て、北軍の夜襲隊は道に迷つたのか、遂に不成功に終つたのだらう。

ここに十一時二十分、全軍は菅谷小學校に約三十分許休憩後、さきの南軍即ち五年生を先頭に、十一時五十分菅谷小學校をあとにした。

途中二回休憩し、暗中进行する。三時三十分余天氣旺盛、荒川堤防に達したのは草木も燃る翌朝午前三時であつた。

河原から吹いて来る夜風は頗る打つて、寒さは愈々増し、荒川大橋西方河原松山に向つて、今朝の拂曉戦に備ふべく、前進し、三時五十分

五年全部は松山に到着した。ここに四十分開休憩し、四時二十分各小隊は整列し、次の如き任務に就く

第一小隊 前方松林ノ右端ノ線ニテ防禦ス
第二小隊 同左端ノ線ニテ防禦ス
第三小隊 援隊トナツテ、演習開始後左方堤防ニ沿ヒテ側面ヨリ射撃スヘシ

五時頃西軍（五年を西軍、四年を東軍と稱す）は散解し終り、待つて居た。

北軍に從ひて

一時四十五分嵐山出發後、南軍と別れた北軍兵士一同、疲れも見せずに、一路菅谷小學校へ急ぐ。其の距離約四軒。

三時菅谷小學校に到着、小憩の後飯盒炊爨の注意要點の指導を受け、各々炊事の用意をするやがて準備も出来て、夕食も出来上り校舎の側面に皆しがんで食へる。

はや日は没して夕闇迫り、薄霧が校庭に立ちこめる。食事も終つて、六時愈々一同整列先生より一同に想定が言ひ渡される。

一、敵ノ線形以南ノ地區ニ停止シアルモノノ如シ

二、前哨中隊ハ菅谷村六軒附近ニ位置シ、千手堂ノ上唐子方向ニ對シ警戒中ナリ

三、其ノ他略ス

南軍に對抗して北軍も亦南軍と略々同様の命令が發せられて、演習の幕は切つて落された。

命令終りて直ちに歩哨配備に移る。續々と歩哨の交代されるにつれて益々緊張する。午後七時半早くも戦期熟す。

歩哨線を見廻ると北軍の歩哨は皆充實されて始めてとしては好成績であると思はれた。

午後八時北軍第二小隊は整列して中隊長吉野先生の指揮の下に敵軍の夜襲に出發す。文字通りの靜肅を以て進み又怪しき光、燈、怪しき物音にも直ちに伏すか又は道路の側面に身をかくして敵よりの發見を避けた。

一時間半ばかりの後敵歩哨線前に到着し、これより路側の草上を行進して足音を消す。皆沈黙して前の人について行く。歩哨線ありと感ずき直ちに右迴せしめて歩哨の位置を廻り敵陣地へ進む。併し夜襲隊の敵陣に着く前に南軍はもはや時間の關係上遂に北軍攻撃に出發してつた。そこで北軍夜襲隊はこれに追ひつかんとして線形より菅谷まで連續驅足を遂に南軍の一部隊に追つた。

午後十一時敵襲との知らせに北軍防禦隊は校

門校側に整列して今や遅しと待ちかまへる。然るに南軍は急に背後より「わー」と攻め入つた爲遂北軍の敗戦に終る。

十一時二十五分小憩の後夜食分配が行はれる分配後再び小憩の後一同整列南軍出發後一時間にして北軍はこれの追撃に向ふ。吉野先生より今夜ノ襲撃ニヨリ勝利ヲ得タル我軍ハ能谷地方ニ前進、荒川ニ於テ敵ヲ撃滅セントス 第一小隊前衛尖兵、尖兵長ハ小隊長ガコレヲナス 直チニ出發セヨ

との命令に接す。時正に十二時四十分かくして音もなく光もない、全く此の世さと思はれない林の間を元氣に追撃して途中三度小憩し遂に四時荒川南岸に到着す。やがて大橋を渡りて北堤防より河原に下り次第に陣地構成に取掛る。

次第に夜のとりは消えて東方が明るくなりかかつた頃静けさを破つて第一弾は響く。東軍西軍の準備は完全に終り、東軍は既に前方に追つたらしく時々薄黒き影が動くのが見える。

突然左方堤防上より赤き火を吐く。西軍第三小隊の射撃である。其の銃聲は靜かな河原松山にこだまし、硝煙は堤防上にたなびき、拂曉戦

の火蓋は切られたのである。

時に中隊長の射撃開始の號令に西軍は元氣を得てここに猛烈に射撃を開始する。東軍も最初堤防上よりの攻撃に面くらつて急に主力をむけかけるや直ちに西軍の右翼からの射撃を加へられて、更に抗戦しつゝ、東軍の左翼は伸び又伸び愈々三百米位に達した。このさき西軍は右翼から猛烈な射撃を加へる。

朝まだき河原の空は俄然緊張味を帯び、忽ちにして河原は戦場と化したのであつた。突撃の喊聲は各所に起り、ここに休戦フラッシュは劉亮と響き渡り遂に拂曉戦は終りを告げたのであつた

硝煙は河原松山をもうくさ這ひ紛紛たる中を東軍西軍は堤防上に到り、揚々と歸校の途に就いた。昨夜の疲れはどこかへ飛んで、新手の兵の如き我が熊中大隊は秩序整然と校門に入つたのは時正に十月十一日午前六時半であつた。全軍は校庭に整列し萩野先生より次の如き講評があつた。

一、行軍中、休憩少く歩度を長くしたため諸君は相當疲れたと思ふ。諸君は將來生存競争に打勝つ爲不斷から心掛け、これに對して完全な準備をしてせりからなければなら

らない。

二、陣中勤務には上級下級の別なく、又幹部となつたものは、自己の職責を全うすること。

三、歸りの行軍には今一步と言ふところに氣をつける事

四、敵を確實に見つけて射撃する事

五、この演習に於て、士氣極めて旺盛故障もなく終つた事は喜ばしい。一二の意氣を以て運動に勉強に精出したならば、諸君の成績向上のみならず學校の盛華も上る事と思ふ。

ここに萩野先生からの御講評は終り、次に校長先生より本演習喜びの御言葉をいただき、午前七時我々四五年生の演習は終つたのである。

体育大會

第六回體育大會記事

五甲 五十部一雄

第六回體育大會に就いて簡単に述べよう。

由來我が熊谷中學は關東武士の傳統たる實質剛健の氣風をモットーとし、凡ての方面に冠たるものがあつた。然るに數年前この氣風を示すべき秋の運動會を以て一種の享樂的機關とし、遊蕩的氣分に溢れ、廢物的な歌を歌ひ、實に見るに忍びざるものがあつた。田夫野人は或はこれを見て喜んだかも知れない。併し乍ら識者はこれを實質剛健の氣風果して那邊にありやとしたのである。この秋の運動會こそ我が校の一大弊風であつた。幸にも昨年度の五年生は斷乎たる決心を以てこの弊風を除去し未だ嘗て見られざる立派な第一回體育大會なるものが呱呱の聲をあげたのである。

以上は昭和五年度の校友會々報の所載する所である。以來或はユニホームに或は諸設備に年

と共に改革され向上し來つたのである。されば此の先輩諸兄の遺された美風を向上し永く保つのが我等五年生の義務ではなからうか。此處に於て我々は凡て事を成すは一致團結に在るとなし、精神上の統制即ち我等の校訓たる實質剛健と吾等の信條たる「清く明るく正しく」をモットーとして一歩邁進したのである。

十一月三日。全くの日本晴。見よ！メーナムスト高く紺碧の空に翩翻と翻る日章旗を！それを飾つて四方に下る歴史深き萬國旗を！グラウンドにくつきり浮いて居るホワイトトラトン！何と素晴らしい光景ではないか。

明治節祝賀の式もすが／＼しく愈々大會の幕は切つて落された。

さて今大會の經過を記して我等の印象深き大會として思ひ出多き熊中生活に別れを告げよう。先づ校歌合唱天も地も破れよと許り、一年の五十米競争を最初に競技は着々として進行した召集係判定係進行係の指揮宜しきを得て豫定時刻より早く進み、其の間判定記録賞狀擴聲器係

一六八

の連結よくとれて迅速正確に觀る者をして驚嘆せしめた。遠い希臘の昔を偲ばせる様な一種獨特のホスターに刺戟せられてか續々と觀衆は押しかけ接待係整理係は愈々忙しい。其の間器械救護時計係の活躍が目覚ましい。今年は拜借テスト來賓兒童競争等幾多新種目が加へられて非常に愉快だつた。就中午後四時の模擬戦は素晴らしかつた。今陸軍で攻勢法研究中なる滿洲國境に於けるソグエツトのトーチカ要塞攻撃である。擴聲器を通じて國境方面の防備愈々大なるものを説き實況放送に移つたのである。攻撃軍はひた押しに押し敵前數千メートルの所に至るや突如後方からの煙幕射撃に掩護されて一隊の工兵が彼の爆彈三勇士に劣らず鐵カブトも稜々しく爆彈筒を握り込んで鐵網破壊に突進したのである。地に匍ふ八式煙幕空には爆音勇ましく彼我模倣飛行機の大亂戦。鐵網破壊さるるや今を退しと待つた味方の歩兵の突入。手投彈の應酬。我軍の突入また突入。敵もさること乍ら逆襲につぐ逆襲。凄惨の氣天地に漲り斯くて我が軍の大勝利に終つたのである。其の間擴聲器係の實況放送宜しきを得て宛ら現實の北滿に於けるが如く觀衆をして恍惚たらしめたのである。斯く

て今大會も大過なく終へたのである。

登山

奥秩父登山記

四丁 井上 宇市

七月二十八日、曇時々晴

午前八時半頃我々熊中生二十餘名は田中、齋藤兩先生及三名の先輩と共に三峰口驛に下車した。前日迄の憂鬱な空も幾分解れ始めて雲の割目より眞夏の輝しい光が照つてゐた。落合迄乗合で約三十分かつた。落合は秩父往還より中津川方面への分岐點で相等賑やかな所である。我々の休んだ處は部落の外れで附近には水力發電所の大鐵管が通つてゐた。九時四十分出發トロツコ軌道に沿ふた路を二時間程歩くと、川又と云ふ小さな部落へ出る。十數軒の山家の中に一軒、不調和に立つてゐる白ベッキの文化住宅は帝大農學部の所有であるさうだ。部落の外れの茶屋らしい家で休み、その家の

裏に湧いてゐる冷い水を十分水筒に満し暫くして一時三十分頃出發する。入川と云ふ澤にかかる小さな川又橋を渡つて少し行くに愈々山路になる。風土記稿に「川又あたりよりは漸々道もせまくなり稀なれば茅など生ひ茂りて小徑なり云々」とある通り、林道をそれると急に小徑となり、木立が暗い程茂つた中を急な登りとなる。二十分許登つた後少し休む。重くなつたリュックサックを背負つて登り初める。疲れは實にひどく十分も登ると目が眩みそうになつてしまふ。三十分程、苦しい登りを續けた後水の本と云ふ處に出た。名の如く清水が流れてゐる。木立の爲に日光がすつかり遮られて寒くに涼しい。あたりはひっそりとして遠くに鳴く小鳥の聲と清水の音がかりが聞える。寒くなつたので出發、既に三時をすぎたが豫定の樺小屋迄は未だ三時間近くも歩かねばならぬかと思ふさうさ心細くなつた。

一六九

登りは今迄より少しはよいが、疲れの方は甚しく十分行つては休み、二十分行つては休み我々數名は遙に後れてしまつた。次第に附近が暗くなり始める頃暗らしくはない突出峰を通る。熊笹が一面に生えてゐる平を歩いて行くと、先頭にゐた者が「小屋迄四分」と書かれた指導標を見つけたので皆歡聲を擧げる。熊笹の中の小徑を辿つて五分程下ると、樺小屋の側に出る。その時は既に七時に近く小屋の中では先着の人々の夕食をたく生木の煙が満ちてゐた。我々も直に夕食の仕度をする爲米を洗ひに下の方にある水場に行く。水量は極く僅かである爲、中々思ふ様にゆかない。生木の枝は容易に燃え付かないで食事が八時過になつてしまつた。その小屋へ入つたのは我々一行だけであつたが小屋の側では遅くなつて着いた一組の人達が天幕を張つてゐた。その晩は蚤にも攻められず極めてよく眠られた。

二十九日、晴後曇
夜明になるにつれて、寒くて目を覺した人達が騒いでゐる爲三時頃目を覺してしまふ。すぐに起出て米を洗ひに外へ出るさ、セーラーを二枚着るにも拘らず非常に寒い。月が出てゐる

ると見え少し明るい。清水は非常に冷たかつたがどうやら米を洗ふ事も出来、小屋へ歸つて飯盒をかける。五時頃食事を済ましてから小屋を片附けた後直に出發。六時一寸過ぎであつた。前日通つた平迄上つて少し行く尾根へ上る。右手の木立の間より連山がはつきり見える。體も山には馴れたと見え、昨日程の疲勞を感じない。尾根を外れて少し行つてだるま坂を通つて暫くすると再び尾根に登る。尾根の突端で少し休んでから出發する。廣い尾根の上の路は少さい上下はあるが割合に樂である。左手に豆焼澤の深い谷を見ながらすすんで行く。直に孫四郎峠に着いた。孫四郎峠は荒川小屋からの徑が、秩父往還に合する所である。雁阪峠迄一時間と書かれた標識を見て、勇躍して出發。尾根の中腹を廻りながら進んで行く。一時間程して雁阪峠らしく見えた所が、本當に雁阪峠だったので皆大に喜んだ。

峠に上ると、峠の位置が國境線にある故眺望が素晴しく好い。秩父側は黒木立に覆はれてゐるが甲州側は明るい草原が遙く迄續いてゐる。何時見ても好い富士があたりの山から一層抜出て登えてゐる。近くの大菩薩、小金津、一二頭

等の山々は山脈をなして目の下に見えた。此の峠は古來有名な峠であつたそうで、凡河内躬恒が「秋風に山とび越て来る雁の羽むけに消ゆる峰の白雪。」と詠んだのは此の峠さ云はれてゐる。又風土記稿にも「鉢形城全盛の頃は此往來難所なれども兩國の通路ひきもたへず賑ひて云々」さあるから昔は相等往來があつたと見える。我々の今迄通つて来た路は秩父往還と云ひ、甲州川浦村へ通する往來である。

其處で一時間近く休んで附近の水場を探しに行つて見たが一向それらしいものはなく、樺小屋で出發前通つて来た水筒の水で一日中我慢せねばならなかつた。

此處より國境線を歩くのである。數年前警務署で路の修理をした爲に大變歩きよい路となつたが、それ以前は極めてひどい路であつたのである。

十時十五分出發。上り一方で直に雁阪山の頂上につく。一寸した空地の中央に三等三角點が一つ立つてゐた。下り一方で二十分もすると鞍部らしい處に着く。そこで食事をすする。附近にて光薙を見附けたと云ふ者があつた。食事後後少し休んでから出發して東破不の登りにかかる。

170
る。胸を突く様な處を這つて上らねばならぬ處も數ヶ所あつたが案外に早く東破不の頂上につく。

頂上は多くの岩が露出してゐる上に假松や石楠等の灌木がからまり全く高山性を呈してゐた。西破不迄は大した上下もないが灌木が密集してゐる上に路が多くの岩で作られてゐるので歩きづらかつた。三等三角點と標高が彫り込まれてゐる石の並んでゐる頂上附近は一面に石楠花が叢生しても少し早く来ればさぞ美しかつたであらうと思はれた。小さな薙屋の崩れた所の上を通つて少し行くさぐさ下りになる。この下り路も累々たる花崗岩の上に假松が枝を伸してゐて附近がめだつて高山狀を呈してゐた。四十分程で下りが終ると稍廣い笹平に出る。平の真中あたりには、内部がひどく荒廢した破不小屋が立つてゐた。明るい笹平の中に腰を下して休んでゐると下の方より霧がすん／＼と登つて来て次第に山を覆ひ始めたので、直に出發して木賊山にかかる。自分は此の山の登りは、長くて辛いさ云ふ事を知つてゐたが登るにつれて如何に長いかと云ふことが判つた。笹平を出發してより一時間近くたつて、漸く中腹にある花崗岩

の崩壊してゐる平に出たが、まだ頂上は見上る程高い。そこからは高度が高かつた爲かすぐに呼吸が劇しくなつて、二十米を登らぬ中に休まねばならぬ。而も水は途中で全部飲んでしまひ渴と疲勞の爲に全く困難した。頂上近くは傾斜もひどくなり破不の登りの時と同様這つて上つた所もあつた。併し頂上の三角點についた時は非常に嬉しく今迄の辛さはなくなつてしまつた。頂上は百米許平が續く。下り初めて少し行くと甲州側に物凄く大きな岩角を危くよける。棧道がかつたり大きな岩角を危くよけたりして三十分の後に甲武信小屋に着いた。すぐに水場に出掛ける。甲州側へ二丁程急峻な小徑を下ると富士川の源流の釜澤と云ふ澤へ出る。樺小屋の水に比べれば水量も多い。思ふまま渴を醫し水筒にも充分満して小屋に歸つた。夕飯は未だ明るい中に終つてしまつたので翌日の飯も炊いておく。八時半頃皆が寝る支度をしてゐる時に小屋番が栃本より歸つて来る。今日栃本を出發したのださうだ。我々の二日の行程を一日で歩いてしまふのであるからその足の早いのに驚いた。

此の小屋は樺小屋より遙に高度が高いが、一

晩中焚火をしてゐた上に、泊つた人数が定員の二倍近くあつたので實に暖く寝られた。

三十日 曇後雨

四時半頃目を覺す。天氣はさ外へ出て見ると昨日程よくない。六時前には食事を済まして小屋番に路の様子を聞いて六時半頃出發。十五分程急傾斜を登ると甲武信岳の頂上に出た。甲州側も信州側も霧の爲眺望は殆どない。之から登る三寶山を見ることが出来た許だつた。霧さへなれば實に見事な眺望が得られるのださうだ。甲武信岳より十文字峠迄の今日通る路は今年の六月開いたばかりの路で割合にひどい路だつた甲武信岳を離れるとすぐに下りになり小突起一つ越して又登る三寶山の三角臺のある平に出た。

この山は標高二四八三米で、武州第一の高峰である事は勿論男體山(二四八四米)に次で關東地方に於て、第二位を占めるものである。陸地測量部で國師岳(二)と命名した一等三角點がある。

三角臺に上つてみると直に近くの三寶岩が目に入る。その向ふには、甲武信岳が割合に小さい山形を霧の中に薄ぼんやりと見せてゐる。臺

を下りて、三寶岩に通する小徑を辿ると澤山の花崗岩の岩塊よりなる雄大な三寶岩の側に出る。岩上に攀登つて岩下を眺めれば、幾丈の斷崖となつて崖を寒からしめる。岩の附近には、持つて歸れば其の儘盆裁に成りそうな頗る美事な枝振の五葉松が澤山あつた。再び三角臺の下に歸り、三十分近く休んでから三寶山を去る。路は直に薄暗い程茂つた杉の原生林に入る。幾千年埋もれたとも知れぬ枯葉と苔が何すなく地上を覆ひ非常に足當りがよい。暫く下つて大きな岩が、三つ並んだ所から上りになる。其處より武信白岩山迄上り一方であるが、武信白岩山より再び下りになる。路は益々ひどくなり、棧道によつてすら危ふげな處もあつた。大山近くで又登りとなり、木の一本もない大山の頂上へ十時十分に着いた。この山も、標高二二九〇米もあり、その上春梁山脈である爲風當りがひどいさ見え、立木は一本も見えず、露出した岩頭の上には、數株かの灌木があるのみであつた。その中へくもも混つて未だ赤い小さな實を多くつけてゐた。食事後出發する。直に急激な下りとなつて再び原生林に入る。スプラインポル

ドの上を歩く様な氣持で三十分ばかり歩くと十

文字峠へ突然出た。何と云つても暗い峠だ。附近は全都黒木立に覆れてゐる爲日光は全然見えずは出来なかつた。食事して少し休んでゐると寒くなつたので、誰云ふともなく焚火を始めるもう部落は近いのであるから皆緊張を弛めて安心する。路は次第に下り始め相當急な路をシグザグに下る。此の坂が八丁坂と云ふのだそうだ坂が終つた處の右手の潤澤の一寸登つた處に少しであるが清水が流れてゐたので皆それで咽を潤した。その潤澤に沿つて下りて行くさ右手にも水量の多い澤が現れる。やがて右手から流れて来る大きな澤を橋で渡ると、今迄の木立はすっかりなくなつて明るい開放的な原に出る。戰場(又は千之ヶ原と云つて八丁續くかその間馬が三四匹放牧されてゐるのを見た。

路の附近は點々と白樺があつて實に美しい。戰場原に飽いた頃、梓山の人家が見られ、部落の中を通る路を十分程歩いて千曲川の支流である梓川を渡つた後川岸にある白木屋旅館に着いたのは三時頃であつた。前の梓川で足を洗つた後二階へ通される。荷を片附けたりしてゐる中に雨が降り出す。送中で降られなかつた事を喜んだが同時に明日の天氣が心配になつた。

夕方になるに従ひ千米以上の高所にある梓山は夏のシャツ一枚では寒くなり、セーターを出す。寝る時蚊帳を吊らなかつたが蚊は一匹も出なかつた様だ。併し蚤の猛襲にあつて容易に睡れなかつた。

三十一日 曇小雨

昨日危ぶまれた天氣もどうやら大した雨に成りそうもなかつたから朝食後早速出發、七時頃であつた。高天原と云ふ高原を横手に見て歩いて行く。戰場ヶ原を外れると路は次第に上りとなり林道より分岐して山道に入るさ急にひざい路となる。餘程長い間修理したこともないらしくて草は胸の近くまで茂つて十分と歩かぬ中にズボンがすっかり濡れてしまふ。併し草は澤山生えてはゐるが木立は秩父側の山程茂つてゐないからそれ程に暗い氣持はせぬ。頂上迄約一里半の間大した登りもなく案外に早く頂上につく(九時頃)。この山は三國山と云ひ、上、信、武三國の國境にある。路は此處より一層悪い路となり至る處に露出してゐる岩頭と大きな倒木が雨の爲に濡れてゐてすべり易く頗る我々を悩めた。尾根を外れる迄に指導標が二ヶ所にあつたが何れも餘程前に立てたもののようで字が判讀

し難い程薄れてゐた。尾根を外れると下りが續く三國山より二時間足らず來ると下方に澤の音が聞え出す。澤へ下りかける手前にて休み食事をす。出發すると直にひどい下りとなる。幾回となく急斜面にて足を這らしながら三十分程で澤についた。其處は荒川の源流である中津川と信濃澤との合流點で中津川の側には水量の多い一丈許の見事な瀧が懸つてゐる。河原にて休んで再び食事をす。出發は十二時半であつた。路は河原を通つたり河原を外れて山林中に入つたり時々澤にかかる危ふげな丸木橋を渡つたりして行くが路が割合によい上皆の調子が揃つてゐるからずんずん歩つて三時間も歩くと、中津川の部落に入り幸島と云ふ家へ着いたのは三時四十分頃であつた。この家はこの部落を開いた幸島覺龍入道の後裔であつて大瀧村金山の鑛山を開いた平賀源内も長く滞在してゐたのだそう。十時頃就床。蚊帳はなかつた。

八月一日 曇

最後の日ださ安心した爲か六時頃起床。朝食後七時四十分出發、山が兩側よりせまつて溪谷をなしてゐる中津川に沿つて上つたり下つたりして二時程歩くと中双里に出た。中双里から新

に修理したと云ふ平らな縣道を暫く歩つたが未完成の所は河原を歩いた。路は數回丸木橋で川を横切るがその丸木橋は何も直徑數寸の木が二三本並で括つてゐるだけで激流は橋の上を流つてゐるので渡るのに全く膽を冷した。

十二時驟雨と云ふ部落に出る。其處から路は益々平坦となつて興味が起らない。皆歸心知矢で實に急ぐ。一時間六杆以上の速さで忽ち中に濱平、瀧澤、十ヶ木、鴨平等の諸部落を通つて二時十分頃落合に着く。

三時頃には三峰口驛に着いて四時十五分發の電車に乗る事が出来た。かくて我々は五日間の旅を無事に愉快に終了事が出来たのである。

修學旅行

修學旅行の一節(佐久平野)

五丙 奥川 弼

山國らしい静かな物質の聲を後ろに我々の列車はアプト式電氣機關車に引かれてトンネルに入つた。其の數二十六、最長のものは二千數百米、所要時間二分數十秒を要するものさへある。右手には三國山脈の諸峰が雲の如くに聳え左手は稍々開けてトンネルのあいまには眺望捨て難きものがある。谷間より峯へ峯より峯へミ輸路に沿つて走つて居る仲仙道は、或時は峯を

流れる水河の如く細く白く、あんな所にと思ふくらゐ高峻な所を通つて居るのも見える。「輕井澤」詩的な音調のある驛夫の聲に窓外を見れば、今までの峻嶒さは何所へか去り廣々とした佐久の平野が、遙に西南の涯まで延びてゐる。後には霧に包まれた三國山脈の連峯を貫ひ、目前には淺間三筋の煙が緩やかに微風に送られ、東の空に溶け込んで居る。避暑地で有名な輕井澤である。何となく詩的な俗界を超越した様な感じの起る町だ。車は音もなくすべり出る。此の邊に來ると闊葉樹は殆ど見られず唐松の如き針葉樹が多い。それが廣々とした原野

の中に、すらり／＼と何本も何本も高く生えて居る様は、見なれぬ吾々の目を引いた。其の間に見える、別荘らしい白壁の家も繪に見るやうである。機關車はもとの蒸氣機關にかへつて居る。沿線の眺めは、淺間の煙と共に非常に長閑だ。あの俗語で有名な春掛を過ぎる頃には淺間山は早や明瞭にそれと判る位近い。驛の傍の路を親馬が一匹引かれて行く、その後から仔馬がよろ／＼と親馬に離れまいさしながらも路草を喰ひながらついて行く。空は春鶯にかすんで雲が煙か判らない一塊の白いものが、淺間の上空に掛つて居る。信濃追分さ古びた橋柱に書かれた。黒い文字が妙に自分の旅情を唆つた。此所は淺間の登山口である。淺間山が長い裾を原野の涯に引いてゐるのが見える。優美な山、長閑な山淺間山は優美と言ふよりは寧ろ長閑な山と云つた方が適して居るだらう。長閑な春の日、目ざしの暖かな縁側でぼんやりと、煙草の環を作つてゐる人と云つた感じである。其所には何所にも遭難なごさ云ふ語は見られない、詩の様な山である。

車は淺間山の煙を右に見ながら更に西へ／＼

さ進む。途中御代田を過ぎ小諸に至る。小諸は昔は城下町であつたと云ふが、今は人口數千の小さな町である。車窓より受ける感じは何となく、廢都と云つた感がある。左手に石垣の崩れた城趾が見える、平和な町だ。自分の心頭にふさ藤村の「小諸なる古城のはとり。」と云ふあの詩が浮んだ。全くあの詩に見る通り、寂びれた世に取り殘された様な町である。自分はこの詩を口吟みながら、榮古盛衰の如何に烈じかかと思つた。夏草や兵どもの夢の跡、崩れた垣の個々の石は何を語らんとしてるのか、埋れた壕の水は何を思つて居るのか、石も語らず水も云はず、唯草のみがわがもの顔に繁つて居る。嗚呼英雄の夢よ。永久に平和であれ。千曲川の水は一昔も今も變りなきが如く、さらさらと、岸の石を洗つて居る。何所か遠くの方から哀しい草笛が聞えてくるやうだ。淺間の煙を後に見つゝ、車は更に西へ西へ進行する。

にある血天井を見學した。所謂血天井なるものは慶長五年島居元忠が伏見城内で自刃した時に敷いて居た板の間の板で張られてゐる。當時石田三成の攻撃を得て止むなく自決した勇士等の怨靈が今も尚天井の血痕に宿つてゐるかの如く見る者をして言ひしれぬ無氣味な感を懷かしめるのであつた。そして美音であるべき鶯張の廊下のきしりも猶も怨靈の發する怨嗟の如く不快に聞へた。

方廣寺の大梵鐘及び方廣寺前の耳塚は共に感慨を醸し、去る事得はずの感があつた。

清水寺の本堂は南に面し東山三十六峯を背景

關西旅行の一日（京都）

の廻廊は左甚五郎の作と言はれる鶯張で、歩々鶯音を發する。鶯張と言ふものは現在作らうとして作つても中々出来得ないさうである。三百間の長きに渡る廻廊は歩する者をして悉く感嘆の讃詞を投げしめた。案内者の言ふ所に依ればその庭園は著名な林泉ださうだが、その道の專問家でない自分達にはさ程感心したものと云はれなかつた。

仙洞御所、京都御所共にその建物のどこにも華やかさいふ感じはなく奥ゆかしい、神々しい極みであつた。建禮門の前に整列してうや／＼しく舊皇居を拜した時は思はず襟を正し、敬虔の念にうたれた。

五月九日午前京都發。京阪電車の氣持よいスピードと音響に乗つて僕等は今大阪平野を走つてゐる。緑の布を一面に敷いたやうな平野の果には、關東の峙つた雄々しい山々と趣が違つて、なだらかな曲線にかこまれた優美な山脈が新緑の氣を呼吸してゐる。小鳥の聲でも聞えそふな春の日だ。不意に四邊が賑になつたと思つたら大阪市内に電車は滑り込んだ。

大阪天満橋に僕等は着いて市内を大阪城に向つて行進した。電車、自動車、荷車、自轉車、人馬等は縦横に走り、高層なビルデングは一帯に林立し、流石大阪は我國屈指の大都市であるさ云ふことを偲はせる。同じ關西でありながら大阪は京都のやうに優美で親みを覺ゆる所でもなく又奈良のやうに古典的で懷古的でもない。進歩的で雄大な新氣に富んでゐるのは實に大阪の生命である。

大阪城見学。深い堀を眺めながら僕等は大阪城の城門を潜つた。目の前の苔藻す城壁の偉大さには驚異の目を見はつた、秀吉の雄志を語る遺品の一つである高さ八米横十一米の大石がよ

一七五

浅町から別れをつけて奈良に向つた。

奈良の印象

五乙 鳥山 一雄

築きなされたので其後幾多の變遷あり天正十一年豊臣秀吉に城を築いてから施政の中心地として豪商等も大いに集つて繁榮した、今では東京より水運の便よく川は縦横に市内を流れ、小蒸氣船の頻繁さは目の廻るやうで東京の八百八町と八百八橋とは面白き對照と考へられた。商業港だけあつて我國南半の經濟、工業、交通の首腦部だけに、銀行、問屋等經濟金融市場多く煙突林立の壯觀を呈してゐる。宏壯建築櫛比の中を自動車で走ると愉快であつた。

樂港見學、市内見學後樂港に着いた横三十米もある長大な棧橋を渡つて港内を見渡すと、夥しい船帆、商船、軍艦等で灣内は一杯だ、モーターボートや小蒸氣船がその間を右往左往していきがしく縫つてゐる、世界の國々を相手に、支那、朝鮮、臺灣方面との取引がわけても盛んださうだ。僕等は幸にも巡洋艦大井を見學することが出来た、甲板上の軍艦旗は潮風にはためいてゐる。僕は大きく呼吸して潮風を腹の底に積み込んだ、色々の爲になる話を聞き、又實際見て大いに日本海軍の威力を感じ國威の發揚を祈つて樂港見學を終つた。

此くして四時たらずの短い大阪見學を終え、

五月九日京都三條を出發して、大阪を廻り奈良に着いたのは六時十二分、日没時も差迫つた頃だつた。猿澤池畔の龜佐旅館に旅装をといて自由行動を得たのは、それから二時間の後である。

夜の奈良。知識の薄かつた自分は、池畔の電燈の水面に映するを見て、又柳をながむと春風に頬を打たれて、自然までが奈良に於ては優雅に出来てゐるのだと、強く感ずるに過ぎなかつた。

明けて十日、四時起床、出發は七時半であつた。ナンバー・シックスのマークをつけた若い案内人に導かれ、輕い仕度で堂々市中見物に出かけた。

大御堂を過ぎ、第一の鳥居をくぐれば最早、此處は春日神社の境内である。この附近より神鹿のなれなれしく寄るのに出會ひ、思ひの外人になれて居るので、一層の可憐さが感ぜられ

た。淺茅を原を過ぎれば、若菜摘みの歌ある飛火野である。此の邊は禁獵、禁伐を嚴守せられて考櫛櫛著とし、下は一面の芝草である。遠近に寝そべり、戯れて居る數多の神鹿も奈良ならでは見られぬ風景である。

神鹿。神護景雲二年正月、春日四所明神の一座である武甕槌命が、本社勸請のとき常陸國鹿島明神から鹿に御して、奈良に來り給ふと傳へられるもので、爾來神鹿として飼養され、古來厚く保護が加へられて、徳川時代には誤つてこれを殺した者さへ極刑に處せられたのであつた。現在神鹿の數は約一千頭に近く、朝野菜を食べさせて鹿苑から出し、夕方笛を吹いて集め、野菜を與へて鹿苑に入れる。鹿苑は屋根も無く粗末なものであるが鹿は決して、病氣に罹らないから大丈夫であるとの話であつた。又毎年秋には、この鹿苑に於て雄壯な角切りが行はれるとの事であつた。これが所謂市中で賣つて居る所の鹿の角細工を成るのである。

春日神社。官幣大社である。祭神は天兒屋根命・經津主命・武甕槌命・比賣命の御四座、和銅二年藤原不比等の創祀したもので、神護景雲二年初めて社殿を造營した。當社は元藤原氏の氏

寺たる興福寺の守護神として建てたもので、藤

原氏一門の崇敬殊に篤く、古來朝廷でも深く御尊崇があつて、伊勢大廟に次ぐ大社として歴々天皇の行幸があり、祭典の儀式も亦頗る莊嚴な極めたものであつた。社境は春日山の麓で興福寺、東大寺の境内と併せ、奈良公園として殆んど市の四分の一を占めて居る。

本殿。南門即ち本殿前の樓門を入ると、第一殿から第四殿まで四社相並んだ所謂「春日造の本殿」がある。丹塗の藤原式の優美な建築で、四邊の深緑と頗る良く調和して居る。最初の建物は焼け、今のは江戸時代に再建されたものである。南門と廻廊とは藤原氏末期のもので貴重な當代建築の遺物である。

釣燈籠。春日神社に參拜すると先づ燈籠の非常に多いのを感じる。これは神社に願をかけ、それが叶つた者が一基づつ奉納したとの事で、現今では其の數、石燈籠が約二千基、釣燈籠は千餘基合せて三千基とは想像も及ばぬ程である。毎年節分の夜は之等の燈籠に全部火がともされるところであつた。その景は聞くに壯麗さと思はせる。釣燈籠中殊に目立つて大きいのがあつたので開いて見ると、淺野長矩侯の獻納に拘

るものであるとの事であつた。

寄木。春日神社には寄木が多くあつたが、中でも神鹿の北側にある七種の寄木(柞、藤、椿、南天、陸英、櫻、楓が一所に寄生したもの)は珍らしく吾等の好奇心を唆つた。

春日神社を出て樹木鬱蒼たる境内の細路を過ぎて春日山を右手に見ながら嫩草山の麓に出た。嫩草山。全山に一樹を残して、青毛氈を敷いた様に芝草が一杯に生えてゐる。優雅な柔かな曲線は吾等に關西と云ふ強い印象を與へるのに充分である。遠望する奈良を胸裏に描きながら一息に頂上に登る。頂上に達すれば、さすがに三笠山と云ふ感じを起させる。スキーヤーが涎を出しさうなスロープが笠三つを表はすのであらう。蓋し嫩草山より遙か露に包まれて薄く、浮んだ様な奈良を眺めた時、吾が胸中にありし日のそして今は空しく舊都奈良を描き出すのは容易である。

奈良市。今の奈良市のある所は、奈良朝時代の京東班田の跡で、神社、佛閣が多く四時大宮人が櫻がさして逍遙した郊外の地であつた。平城京遷都後、都心なる京の地は荒野となつたが却つて此の郊外の地は神社、佛閣を中心として

次第に門前町が發達したのが今の奈良である。由來奈良は其の沿革から見ても歴史の都である古都のさびれたる跡は山頂からは、霞んだ盛時の一條通りが一條の帯の如く、延々と南北に走つて居るのが眺められて、舊都奈良の印象益々深きを覺えた。

一氣に山を駆け下りて手向山八幡宮に參拜する。手向山八幡宮。縣社である。祭神は應神天皇で聖武天皇が東大寺大佛殿御建立の御願を立てさせられた時、宇佐八幡宮の神慮を問ひ奉り、其の加護によつて大工事が完成したので、天平勝寶元年宇佐の神靈を此處に勧請し、大佛殿の守護神とせられたものである。

鐘樓。春を名に負ふ二月堂、三月堂又春を象徵する嫩草山、そして吾等の旅行も春だ等と考へながら鐘樓に入る。現在の鐘樓は鎌倉時代の再建で、構造は一種特異の風を示し、天竺、唐樣和様の三手法を打つて一丸となしたものだ云ふ。梵鐘も「鐘の響は日本」を折目をつづられた丈あつて、自分が突いても餘韻が一里四方に届きさうだ、流石胸のすく様な氣持のよい響を持つて居る。

東大寺裏の大佛池に疲れを休め愈々大佛殿に入る。誰しも云ふ如く自分もさうさう大佛を餘り大きい物だと思ふ事が出来なかつた。人間が小さい穴を潜つたりして、まるで狐につままれに大佛殿を一週して外へ出て了つた。ふりかへると竹竿で蓮の花の所へ帽子を持つて行つたが、帽子丈けが人形の帽子の様に見えて蓮の花は少しも大きくならなかつた。

東大寺。聖武天皇の御願に依つて建立された我國無雙の大伽藍で、「咲く花の匂ふが如く」盛んであつた天平時代の文化を表徴すべき一大記念塔であり、又今日奈良名蹟の最大中心となして居る。華嚴宗の總本山で、奈良時代に於ける當時の規模は頗る廣大にして境域の如きも一里四方に及んだが今は漸く六萬坪餘に過ぎない。

大佛殿。東大寺の金堂で、天平勝寶三年創立の最初の建物は治承、永祿の劫火に焼け、現在の堂は元祿年間公慶上人の勧進再建に係るものである。初めの建物に比べると約其の三分の一に過ぎないが、それでも猶ほ現時世界に於ける木造建築物の最大なものである。

大佛像。金堂内に傲然とかまへたる毘盧舍那佛の座像は、鑄像として世界最大なものであ

る。聖武天皇の御本願で、天平十七年から天平勝寶元年まで三箇年の春秋を費し、八度の改鑄を行つて完成されたものである。造立以後幾度の火災に遭つたが佛体は儼存し、唯佛頭が治承永祿の再度の火災に墜落したので、その度毎に改修が加へられた。

南大門。天平勝寶四年の創建で、應和二年の大嵐に倒れたのを正治元年に天平時代の古材を用ひて再建したものが現存してゐる。左右の仁王像は運慶、湛慶の作で、現存仁王像中最大で最も有名なものである。今は唯奈良の盛時を徒らに追憶させて、彼自身は全身に裂症を覺えて佛の守護も出来かゝれるらしく、でも紙の飛塵を浴びながら態度だけは嚴然として猶が入つても何とも云はぬ。此の邊に來るさ誰もが大佛の大きかつた事を感ずるらしく、振り歸り振り歸り今更ながら驚歎に餘り有るが如き顔をして首をひれる。大佛座像カンパレードの兩側の賣店で客を呼ぶ聲も聞き流して歩を速び、博物館に入る。此處で種々古品の陳列を見たが餘り興味も湧かず、金は千年たつても錆びぬさ云ふ事を實地に見た丈けだつた。

五重の塔で有名な興福寺は、博物館から程な

き所に大佛殿よりは遙に小綺麗としてやはり榮枯勢衰を物語つて居る。

興福寺。法相宗の大本山で、皇極天皇四年藤原鎌足が蘇我入鹿調伏祈願の爲めに山城に一寺を建てたのが初めである。後藤原不比等が今の地に伽藍を造營して藤原氏の氏寺とした。以來藤原一門の崇高殊に厚く、中世以降に於ては干戈を執つて延暦寺に對峙し「南都の僧兵」と呼ばれて居た。往古は寺境甚だ廣大にして七堂伽藍も並び備はつて居つたのであつたが、元慶二年以後幾度の火災に遭つて伽藍を失ひ、屢次再建せられたが享保二年の火災以後は遂に再興を見る事なく、今日では僅に數堂を残すのみである。

五重塔。初めの塔は天平二年光明皇后の創建なされたもので、今のものは應永三十三年の再建で天平創建の面影を充分留めてゐる。猿澤池畔の柳の間からかま見られる塔は此の五重塔なのだ。奈良の名所見物も四時間たらずで終らせ、後袖を引かれる思ひで猿澤の池に出た。

夜の眺めさも又朝の眺めさも趣を異にして、晝の眺めも「名所に反して」相當なものである。

中食をすませて旅館の高欄に凭れて、見た奈良を追憶する頃、奈良の景色を一變させる煙る

様な春雨が猿澤の池の面に輪を描いて居た。新緑の濃い柳の若葉を透して、ぼーっと消えさうな五重の塔を眺めながら唯漠然とこれから行く伊勢、二見の事などが頭に浮んだ。

伊勢神宮參拜記

五甲 高柳 輝雄

五十鈴川の上神路山の麓に神さびた一角の淨地がある。此處ぞ皇祖天照皇大神宮の大崩地宇治山田市である。山田市に鎮座します神の社は外宮、内宮のお二方の神にあらせらる。

最初我等一行は十日の午後四時頃山田驛の南一軒高倉山の麓に鎮座します外宮豊受大神宮に參拜す。豊受大神は伊弉諾尊の御子神和久産靈日神の御子にして天孫降臨の際に神鏡と共に豊受大神の御簾を供へて降したまひ丹波國與謝郡なる比沼の眞名井に鎮座あらせられその後大神の御托宣によりて今の地に遷し奉まつり天慶五年始めで外宮の號起り内宮と併稱せられる様になつたのであると記されてある。

兩側が緑木を以てつや／＼しく映えてゐる參道を隊伍をそろへて誰しも敬虔の念を以て參拜

をする。手荷物を道の側に置き御手洗所にて身体を清淨にする。拜殿の前の小廣地に整列し謹んで最敬禮し敬意を表する。本殿の造りは内宮外宮共に同じで建築の様式は神明造であり太古の遺式を良く傳へ簡素の内にも神々しさを備へ思はず敬虔の念にうたれしめる。拜殿のすつと外で拜したのであるから鮮明に拜觀出来なかつたが屋根は茅葺になつてなり堅魚木は外宮は九本内宮は十本となつてゐる。神社全體の建築用材はすべて檜の白木造である。神事はまづ外宮を先にし兩陛下、皇子殿下の行幸啓なされる時でも必ず豊受神宮に詣でさせられるのが慣例である。我等もその慣例に習つて豊受神宮を參拜しより以上の敬虔と謹の心を以て内宮に參拜せんとしたのである。

翌日十一日午後山田驛の東南六軒神路山の麓を流る五十鈴川の右岸にまします伊勢内宮に參拜す。五十鈴川の清淨なる流にて目をすゞぎ參拜をする。此の日天運にも春雨がし／＼と降り續いてゐた。

内宮の御神體は三種の神器の一なる八咫の鏡である。天孫瓊々杵尊御降臨の際大神御親ら授けさせ給ひ、歷代の天皇之れを奉安し給ひ、崇

神天皇の六年神威を汚さんことを恐れて大和の笠縫邑に神鏡を移し給ひ、皇女豐鍬入姫の命をして之れを奉齋せしめ、宮中にをかせられては別に新鏡を鑄造して奉安し給ひしが、八十年の後垂仁天皇の御代天皇皇女倭姫命にお命じになられて新らしく鎮座の地を求めしめ、遂に現今の伊勢宇治五十鈴川の上に定められたのであると記されてゐる。今日の皇大神宮の起りなのであらう。

斯く神宮は皇祖を奉祀せる大廟なるが故に皇室におかせられては勿論の事國民崇敬の中心であり、何事でも國家に大事のある時には第一に當社に奉告し天皇の即位大婚の大禮の親告をなされるのも又やんごとなきことである。又神樂殿があつて舞を奏する。我等も神樂殿に於て巫女の端麗なる姿にて舞ふ倭舞に合せて樂人の奏する琴笙箏篳の音にうつとりとして天樂を聞いてゐる様である。皆恍惚としてせき音一つ聞えなかつた。

伊勢神宮參拜を終て見るべきものは復古館、神宮皇學館等である。之れを見る事の出来ぬのは残念だつた。後神宮前にて記念寫眞を取る。

日和山の眺望

五甲 風間 博

驛を出ると小雨がぼつ／＼降つて雨側に並んでゐる土産屋を困らせてゐる。皆、店を引きこめて軒下で唄が客を呼んでゐる。僕等はこの時さばかり長い間お伴をさせて来た蝙蝠を擧げて歩き出した。併しそれ程でもなさうな雨だ。少し行くとしきりに音楽が聞えてきて鳥羽音頭みたいなものを唄つてゐる。何だらうと思つてみるとケープルの乗場で蓄音機をかけてゐるのである。これには驚いた。乗客を得るためにレコードをかけて人を呼ぶとは全く驚いた。此處はすなはち日和山の登山口である。

僕等はこゝのあさましい様子を打捨て、更に數町進み、其處から登り始めた。しつとり濡れた細い粘土の路の兩側には嫩葉がすく／＼と氣持よく伸びて、手をひろげて這ひ出してゐるやうだ。傘がこれに觸れるたびに露がはら／＼と落ちて大變に涼しいが襟等へ入るのにはぞつとする。

先頭から一番後の者まで路の曲つたとほり長

くつゝいたのが見えたと思ふまゝ頂上についた。僅かに二町しかないのぼり路である。私はこんな低い山がどうして有名なだらう、さあやしんでみたが何しろ體が疲れてゐたので文句どころではなく、幸とばかり、休憩の命令とともにあづまやに腰を下した。

の如く、濱をさほる汽船は巨獸の如く吠えて行く。濱を通る小舟は一條の舟路を残してすぎ、沖を行く汽船は一抹の煙を残す。晴れた日には知多、渥美の兩半島や富士山、伊次山それから日本アルプスなども見る事が出来るさうである。それが今日は一望千里の觀を味ふことができない。然もその眺は晴天の日に於けるよりも一層詩に近い趣をもつて眼前に展げられてゐる務の景である。

私は日和山の價值が比類なき眺望にあることを感じた時に、一種尊敬の念をもつてケープルの方を見た。

二見ヶ浦

五甲 堀口 明

有名な二見ヶ浦の日の出をおがむべく下駄をつ／＼かけて、海岸通を二町行くと、夫婦岩のところに出た。此の海岸は山の直ちに海に迫つてゐるところで、至るところ断崖絶壁がみうけられる。殊に夫婦岩のあたりの岸は、屏風のやうな岩がうす氣味悪く黙々として立つてゐて、たとへ浮世に如何なる變亂があらうとも、一切俗

あとからと眼前をすぎる。沖を行く小舟は畫圖

塵を斥けて、未來永劫に偕老同穴の契を深からしめてゐるやうである。

遙か水の天と連るあたり、先程まで「あれは水平線だらうか。」と疑はれた一直線は、漸く造化の神の巧な筆になる鳥羽の山々であることがわかつた。

海面は全く静である。一寸見ると湖かとも疑はれる、それ程静かである。この細い絲遊のやうな波を紅色にして昇天する日の出の壯麗さ、美しさ、思へば胸が躍るではないか。

夫婦岩は此の青毛氈の上に、又如何にも靜かにすわつてゐる。朝の挨拶を交はしてゐるやうにも見える。又睦まじく朝餉の膳に向つてゐるやうにも見える。そこに、自ら我が國民性の美しさ、表はれてゐる。

明るくなるにつれて、薄く曇つてゐるこまがわかつた。如何にも惜しい。何時又二見ヶ浦の日の出をおがむことが出来るだらう。いはゞ、朝顔の露に異ならないこの命が、どうして保證できようか。

然し、人間の持つ強い執着心、こわれた茶碗をどうかしてつぎあはせよう、あいなだのみにいぢくりまはしてゐる強い執着心が、雲を透

してまで見ようとして、稍黄色味が／＼つてゐるやうに見える雲をぞつとみつめた。

もう五時だ。さうさう見られない。なんと言つてよいか、泣きたいやうな残念さがあとからあとからこみあげてきて、頭のまはりに群れて飛んでゐる蠅さへ此の上もなく憎らしい。親の死目にあはされなかつたやうな、遺孀ない、孤獨の悲しみを誰がさせるんだ。若し打つて手應へのある奴ならば満身の怨をたゞきつけてやりたい。

怨の向け處がないから、自分の此のちつぽけな胸の中に藏つて置かなければならぬだらうか

出發——宇治山田着

四甲 設樂 義徳

五月七日午後七時五十五分發列車で多くの先生方に見送られて出發した。

上野驛で折良く全く空いた電車がホームへ入つて来た、それで東京驛に来て、地下道をくゞつて第一ホームへ行く。最早鳥羽行の汽車には何處かの團體が一杯だ。

面喰つてゐる中、田中先生から我々の鳥羽行

準備はこの列車が出てから來ると聞きほつとした。

成程我々は十分後れて十時十分出發した。夜の東京を見たり、或は、ネオンサインが何時までも續くと思ふ中、横濱へ来た。

トンネルを二つ／＼つて大船へ着く頃、大部分はこくり／＼眠り始めたが、自分一人嬉しさの餘が眠れない。

國附津より機關車が前後に附いた、箱根越えを始める、谷谷トンネルと河を繰返し／＼越えて二時頃沼津に着いた。

静岡近い所だつたらうか、汽車は海岸よりの處を走つてゐる。何處かの電燈會社の光が、東の空が白みか、つた、しじまの中に河に映じてゐる。

白々と夜が明けてきた。ひやりとした、五月八日の、空氣の下に濱名湖が果しなく擴がつてゐる。

それから續く、平野、平野、平野、その平野の中の熱田驛で下車した。

官幣大社熱田神宮へ向ふ。物賣る店が、列んでゐる所から、神宮第一の、鳥居を潜ると、兩側は蒼蒼たる、老樹で、實に神々しい感に打た

れた。

白い御旗の御前で、一同肅然と、級長の號令下に心からなる、最敬禮をして退いた。

歸りに御札を受けたり、スタンプを押したり二十分ばかり居て、街へ行つた。

次いで、バスで名古屋城に向つた。城は市の北部にあつて、慶長十五年の築城の由、加藤清正造營の、天主閣は、高さ四十八米の五層樓、屋上にある黄金の饅頭は勿論だが其の型の上から我が國代表的なものである。

門の開かれるのは、八時三十分なので、次の豫定上、城の附近で分れて、四十分間自由行動を許された。其の間、名古屋市内を色々見學しながら驛に到着した。

又鳥羽列車で宇治山田への人となつた。桑名あたりに来た頃、關東との風土の差違がひどく目にうつる。細い川、畑は、一面に菜の花に連なる麥畑を見てゐる中、前の晩よく眠らなかつた精が、眠気がし、うさ／＼となる。

龜山も、うつすら通つた様な気がしてゐたがたゞ汽車は、威勢よく、車輪を響かせてゐる。いよいよ午後二時十五分、神都、宇治山田に着いた。

二見ヶ浦の旅館の人が一同の鞆や洋傘を、持つて行つてくれた。隊伍を整へ外宮へ。

皇大神宮参拜

四乙 松本 棟吉

青空の下眼前の山は繁りに繁つて眼も醒めるばかり。この山の周圍にも樹木が天を衝いて競ひ合つて居る間に、垣々たる参道が走る。細かな砂利で敷き詰められた上には、紙片一つ落ちて居ない。何千年の歴史を語る老杉の中を、掃除人がちらほら掃除して居るのがうらやましい氣もした。愈々近づいた。昨夜を車中で明した疲れも見えない様に歩んでゐる。ざつ／＼。

自ら歩調がさ／＼のふ。一步一步。何んとも云へない感激が胸に響く。さうして行く間すれちがふ参拜者が絶えない。やがて大前に着いた。神前に立つて参拜した時は何んとも形容する言葉もなかつた。参拜を終へて、電車で十五分、神宮寶物を初め、各時代の服裝、器具、文書、繪畫等を陳列した復古館、農業、水産、牧畜、工藝等に關する器具、標本、標型、統計等を陳列した農業館を見學した。

二見ヶ浦より奈良着まで

四乙 青木 昇一

皇太神宮参拜の時の感激のまゝ、夕方二見の

旅館に着いた。裏の一目の中に海が眺められる海に面した松の茂つた庭で部屋が割當てられた我等の組は二階の一番廣い晴々とした部屋だ。

間もなくお茶が運ばれたもの、餘にも腹が空いてゐて夕飯が待遠しくてならなかつた。草臥も一時に出て来た。すつかり満腹してゆつたりした心と身体で海岸や町を散歩した。此の晩ほど愉快にしてほがらかに寝た事は嘗てなかつた翌朝五時に目が覺めると多年の望の夫婦岩の日の出を見に行つた。併し目の前に寶物を見て想像が大きすぎたと思つた。昨日の出頃の海の眺めは氣分がからかすばらしいものだ。旅館に歸つて朝飯を取り、二見の驛から電車で山田へ山田から一路奈良へ向つた。奈良の電車はまるで二等車に乗つてゐる様で、第一電車のレールの幅が廣く快速力なのにすつかり驚いてしまつた。途中幾つものトンネルを通り山々を後にし又平地へ來たと思ふ中、奈良驛へ着いた。

奈良

四丙 柴崎 堆

午前十時五分奈良驛に着き、驛前で鞆と洋傘

を預けて身輕になりいそ／＼と奈良見學を始め

た。先づ奈良で猿澤池へ行く。

猿澤池は眞黒で下駄が浮いてゐたのはいまだつたものゝ、案内人の言ふ如く歴史として、垂柳一本だに見落せぬものを賞めるべきだらう。

池水に映つてゐる興福寺の五重塔は非常に大きく、そのすぐ北の東金堂の西にある「花の松」といふ松が亦大きなもので、その横の横がりは二十二間、高さが十六間ださか。

そこから金堂を歩るきながら眺めて、白藤の瀧の近くで辨當を食べた。次に春日神社へ向つた。

行々二千に餘ると云ふ石燈籠を見、着いては廻廊に一千に餘る釣燈籠を見、仰ぎ見る社殿は春日造さか。更に本殿の直ぐ傍、寄木といふ柞藤、椿、南天、陸英、櫻、楓の七種が集つて根本が一本の形をしてゐるものを見た。

神鹿が變らず可憐な姿を動かしてゐる間を行く中藏草山麓となる。三月堂、二月堂となり、そして東大寺、鐘樓に入つて日本一質がよいと云はれる鐘の餘韻を聞いたりした。

大佛殿は廻りにある建物が皆高壯な物ばかり

そこから眼前に神路山を望み、内宮に向ひ、五十鈴川に架した宇治橋を渡つて神苑に入り、一の鳥居に入る。五十鈴川べりに手洗場がある續いて二の鳥居を潜り、やがて石階を上り、御神前で額づいた時は眞に感慨無量だつた。此の奥底から自ら出た神の赤子の誠意こそ神代より他國に見られない我が神國の神國たる所である建物はすべて白木の儘であるのが誠に神代のも偲ばれる。それより神樂殿で御神樂を奉納した實に嚴肅な唯々冷汗の出る様な、それでゐて和やかな優美なものであつた。

歸りの参道で、皇室の宗廟として、國民尊崇の中心たる、すくなくとも生涯一度は必ず神宮に参拜せねばならぬ皇太神宮へ無事参拜し得、皇室の御繁榮と國運の隆昌を祈願し、祖先以來の厚恩を謝した事をしみ／＼とつゞましく喜んだ。

だし、大佛は更に其中に安置されてゐる爲さう大きくは思はれなかつた。しかし大佛頭上の螺髪の数が九百六十六個とか、大佛の左右兩側の蓮葉の直径を竿ではかつて見たりして、始めて大佛は大きいと理論上知る。それ位一切が大きいのだ。

出て二十分餘休んでから、自動車で大軌電車の驛前で鞆と洋傘を取つて、再び自動車で省線奈良驛に往き、午後二時四十五分驛を出發した。

關西修學旅行

(奈良—大阪)

四丙 塚本 武雄

法隆寺驛下車。

ブラットホームを出ようとした時、五年生が整然と大阪方面より來るのに會つた。

麥畑の中を縫ふた道の彼方に、縁に包まれた五重の塔が見えてゐる。附近の家々は、故郷とは違つた一種の茶室めいた趣を呈してゐる。何かあたりが明るく、優しい氣さへする。

突當りが法隆寺だ。聖德太子、用明天皇の勅命を受けさせられ、推古天皇の十五年に完成し

たと言ふが、奈良の諸建築が屢々兵火にかゝつてゐるのに、此處だけ當時の面影を傳へる。世界最古のものなる事も神祕だ。佛教史上、藝術史上飛鳥時代を代表する最も貴重な遺物たる事も尤だ。

世にいふ法隆寺を指す西院と、聖德太子の斑鳩宮跡を寺とした古上宮王院即ち東院に分れてゐる。西院の建築様式は百濟様七堂伽藍と名づけるもので、中央に金堂、五重塔、背後に大講堂、正面に中門、左右に鐘樓と經藏、繞らすに百二十間の廻廊でし、四方に各一門を開く。その外には、北面に上御堂、南面に大門、西面に西圓堂、三經堂、東西に聖靈院、食堂、細殿がある。

特に金堂は推古時代建築の精髓を誇るもので五間四面板には四佛淨土を描いた有名な國寶たる壁畫がある。

東院は太子御入寂の遺跡たる夢殿を中央にし其の前面に禮堂、後方に舍利殿と繪殿とが取り圍んで居る。

すつかり昔の世の人となつて寺を出た。汽車は夕べの空を裂いて、開けた四面の景色を送り迎へ、賑やかな方へ進む。

關西旅行（大阪着より京都着まで）

四丁 宮本 藤正

大阪天王寺驛へ着いたのは指折れば五月九日その六時二三分だつた。豫定の稲田屋旅館に向ふ。途中天王寺公園をよぎる暮色のこめた花壇、噴水、芝生、博物館等美しく眺められた。公園を出て新世界を通つた。淺草にも劣らない明るさと賑やかさだ。出たその通もショーウィンドが輝いて市電、自動車が目まぐるしい。

夜は自由見學なのでA君B君と夕飯もそこそこ旅館を出て大阪の銀座心齋橋筋を通り、白、茶色の明朝、モダンな地下鐵に乗つた。東京のより良いやうな氣さへした。大阪驛、阪急百貨店を見て道頓堀を通つて旅館に歸つたのが九時半だつた。又三人で程近い錢湯へ行つた。實は僕は生まれて初めて錢湯へ行つたのだ。歸つて部屋窓から、疲のや、薄らいた頬を夜風に氣持よくなでさせながら外を眺める。下が川で向ひのネオンサインの赤青が流れに逆うつて綺麗だつた。

翌朝三人でボートに乗つて前の川を清々しい朝の氣を切つて何回も上つたり下つたりした。四五十分して一同は大阪城へ向つた。天主閣が聳え立つてゐるのを見た時我等の胸は高鳴つた。四五十米さと思はれる廣い堀を渡り第四師團の衛兵の居る門を入ると流石は大阪城、壯大なる石垣がめぐらしてあつた。城中には第四師團の兵營等が並んでゐた。途中金水の側へ来る

と秀吉の勢を今に見せるかのやうな横十米縦五六米位の石が石垣の中にあつたりした。天主閣の真下に來た。大きい、全く大きい。天主閣の人が蟻の如く見える位だ。最上層の壁に金の虎が刻つてあるのが實に壯麗だ。内部は壁が明耶な色でぬられ、ビルディングのやうな作り、それに上までエレベーターが通じてゐるし、全くモダンであり且つ雄大なのに驚かされた。各部屋部屋には當時の鏡、冑、刀、書畫等の参考品が陳列してあつた。頂上は五六十疊の五階からは大阪市はまる見えだ。ビルディングや室屋の間々の林立する煙突から煙を出し始めた所であつた。全く煙の都と云ふにふさはしく、遠くはどこまでもぼんやりと煙つてゐた。淀川が銀色の帯をうねらし、中之島公園の緑がさへく

さ見える。すぐ下には見學者が蟻のやうだ。降りて再びつくづくさ仰ぎ見、石垣の銃眼を見ると大阪落城等の想ひが湧き上る。

其處を出て造幣局に行き、銅貨の出来るのを見た。厚い銅板が打延ばされ丸い形に打抜かれ悪いのを除き、表裏に刻印し、洗つて此處に銅貨が誕生する。巧みさに全く驚いた。造幣局を出て天満橋驛に行く。

桃 山

四乙 井田 和夫

十日午後〇時三十分大阪天満橋驛を出發し、伏見桃山驛に着き、驛前休憩所に荷物を預けて直に桃山御陵に向つた。

路の両側は杉松が神々しく茂つて襟を正さしめる。暫く雨がぱつぱつ降つて來た。用心の爲傘だけは誰も持つて來はしたものの、さうさばしなないで、ザク／＼と砂利の上を肅然と歩いて行く。御陵の御前へ着いた。期せずして皆脱帽、整列した。誰もがじつと動かない。中隊長淺井君の號令が森に木霊した。僕は神威に打たれてじつと頭をさげた。無我の境へ這入つた

京 都

四丙 笠原 祥

三時五五分京阪電車は七條驛に入つた。憧れの京都にいよいよついた。先づ三十三間堂に向つた。後白河帝の勅頭で觀世音菩薩を安置したまうた所。六十六間、間数は三十三。綺麗ではないが重々しい昔を語る堂である。豊國神社は

縁に包まれて爽快な氣を興へてゐた。徳川時代には衰へたが、明治に至り今の盛衰となつた由更に方廣寺に至り例の『國家安康君臣豐樂』の小さな文字を見て感慨無量だつた。親鸞上人埋骨の西大谷前を通り、行くことしばし青葉の上に朱塗の堂塔が聳えてゐる。石段を上り舞臺へ行けば、京の街々、楓樹が輝つてゐる。三重の塔赤間の背景で記念撮影をした。西門を下つて行けば清水焼の商店が並んでゐる。見學しつゝ、五時頃三條大橋近くの賑やかな伏見屋に着いた。夕方から町を散歩した。小雨と降る京の夜の景が特に京らしく思はれた。今日が旅行の最後かと思へば惜しくもあり又家の事も思はれる。

十一日も明けた。六時起床。午前自由行動だ。友達三人と自動車でインクラインに行つた。五百米の急坂に敷設してある。鐵軌の上を、一船が下りて來た。靜かな小砂利の大道を行く中堂々たる白壁の南禅寺に出た。臨濟宗南禅寺派の大本山で、弘安中の龜山上皇が離宮を寺とした大明國師を請じて開山となし給ふたのが其の草創である。それより本尊は見返りの阿彌陀如来で有名な永觀堂に入つた。山を出て桓武天皇をお祭り申した平安神宮についた。朱塗の大鳥

居。廣い公園。應天門を入れば廣い庭の彼方に青瓦朱柱の大徳殿が金銅の鴉尾を燦然とさせてゐる。白木造の本殿は東山の緑翠を背にして浮き立つてゐる。この頃から雨もひどくなり出した。

午後は雨の中を京都御所を拜し、金閣寺に來た。縁に包まれた金閣鹿苑寺は美しい廣い池に緑翠の山と共に露盤に金色の鳳凰を飾つた寶形造の三層樓が相映してゐる。足利の壯觀を偲ばしてゐる。嵐山へ足を延ばした。山の緑、川の碧、相映じて風光は頗る美しい。渡月橋は工事中であつた。引き返へして西本願寺、東本願寺と見てゐる。東本願寺は眞宗大谷派の總本山で、徳川氏の後援を受けて榮えただけであつた。琵琶湖の水に至る所に引き火災の用心がしてあるさうだ。

平等院を訪ひて

四丁 明石 道雄

僕は午前の自由行動を心ゆくまで楽しもうと平等院を訪れた。

都を可成り離れたと思ふ頃、右手に見える宇治の流れに平行して、一面の茶園が眸に映じ去る。

車を下るや否や、その境内の様子に先づ心を奪はれた。友もその優美さに打たれて嘆賞の獨語を漏してゐた。北側の道を少し進むと、南面に立つ樓の雅麗さ、友に指示された立札には、鳳凰堂と墨痕美はしく、過去の歴史を暗示してゐた。

此れが現在に到る迄、數多き兵火にも遭はずにきたあの本堂の鳳凰堂であるが、更に懇ろに眼を配ると、漸次その優雅典麗さが、身に迫るのが感ぜられてきた。

往昔、行宮、離宮などの用を経た後、藤原道長の山莊となつてゐたといふが、寺となつたのは、其子、關白頼通の時代その事。藤原時代の美術工藝の粹を現はすこの建築には、確かに人を魅せしめる力が潜んでゐる。

堂の足下から、一湖の池が廣く延びて、恰も堂を浮ぼしめてゐるが如くして、淡瑠璃色に淀んでゐる。それに堂がその全貌を、朱塗りの床柱から岸近くまでさかさまに寫し、一幅の名畫を聯想せしめるに足ると思はれた。

此の頃は雨があがつて、微雨に霞む鳳凰堂のより幽雅な風趣は捕へられなくなつたが、惜しかった。

露を帯びた左右の亭々たる樹木は、頂に相並ぶ鳳凰の金色、柱の朱と、屋根の何ともいへないそりさ映えて、非常に調和的を示し、確かに國寶的價值がその間に窺はれた。

私達は暫くして思ひ出した様に歩き出した。鐘樓に入り釣鐘に刻まれた彫刻を見たりしてゐたが、再び獨りで鳳凰堂に還つた。

この様に優美な風景に近接した私達は四日間の旅愁が根絶したやうに覺え、去り難き名残を捨てて、再び車上の人となつた。

比叡山

四甲 江森午太郎

午前中自由行動を許された我々は、十餘名で比叡山へ出掛けた。絲の様な小雨が滴々とした中を、比叡の麓に着いた。雲をあびて叡山は眼前咫尺に高く横つてゐる。生れて始めて見且つ、始めて乗つたケーブルカーは、氣持よく上へ上へと登る時、思はず快哉を叫んだ。雨側

の樹々の緑の滴らんばかりなのに歴史を追憶しながら、登りに登る。時々露の聲がする。あたりは益々漢々として来る。三十分位で頂に達した。

僧兵の昔其の儘に根本中堂は、佛靜より大聲も出さなかつた。此れより坂本迄下りるのだ。さ小雨の中を進んだ。駈けるが如く斷崖絶壁の畔や、鳴り響く瀧を見下し行く道は、雨の爲に滑り膝で目も眩むばかり。途中の五六の寺を過ぎ、時間に遅れては一大事と、夢中になつて下りて行く。坂本迄何分位か、りますか。一時間位かゝるとす。との返事にきよつとして、これではならぬと、助け合ひ校歌も勇しく露の聲を聞きながら、足を早めに早めて、十一時頃坂本に無事着いた。

溪流の響を前に皇族下乗の立札も、神さびた日吉の社を渡り三井寺にも時間の都合で登らずに歸つた。雨雲の中を山に入つて山も見ず、高きに登つて低きを見えずして、馳せ登り馳せ下りたのも、考へれば一興か。

善光寺—歸校

四甲 白根 一郎

見學によつて更に深められた京への憧れで胸が一杯になり、汽車の音迄恨めしく夕開迫る六時八分京都の町を離れた。車内は一杯で座席もなく、人息とトンネルを通る度に入つて来る煙の爲で蒸しかへる苦しさである。石山に到る頃薄暗い中にぼんやり琵琶湖が望み見られ、湛へた水に兩岸の灯がちら／＼揺れてゐた。

其の後は只家より漏る燈火が線を描いて後方に飛びさるだけだつた。岐阜、太田で乗替へ更に多治見で最後の乗替を終へると安心と晝の疲で床に新聞紙を延き其の上で眠り始める人も多い。修學旅行最後の夜は斯うして白々さ明けると、朝霧の中にコバルト色をした日本アルプスがそ／＼立ち、冷氣が身に沁み込んでくる。雄大な山や谷間に滲き上る霧の上を走つてゐる。谷底の家を珍しがつてゐるさ川中島も過ぎ、長野に着いた。

驛前で辨當を済し直に善光寺に向つて、廣いプラタナスの植はつたアスファルトの通りを幾組かの参拜団に出會ひながら刈萱堂の前に來た。石堂丸と刈萱堂心銅像を見正面に古くなつた御堂が小さく建つてゐる。苦むした墓も床しいものゝ町中な爲め氣分が出ないのは残念だ。

忍町地方見學記

四丙 小野寺正治

五月八日、關西旅行不參加の約七十名の四、五年生は河住先生引率の下に、忍町地方の足袋製造工業見學を行つた。

朝禮後四年徒歩隊先頭で東門から出發し仲仙道と別れて、砂塵が自動車の通る度に舞ひ上る行田街道を汗ばんで進む。持田村の神社で休息してから、あたりの様子に變化があつて飽きもせず忍町に入つた。

熊谷の東方たつた二里のこの忍町ではあるがアスファルトの中央道を一寸入るさうミシンの音があの家の家から響いてゐるのを聞く。と農家相手の商家の多い熊谷とは大變違つた感じがした。十一時近く公會堂に着き階上ホールで麥湯の接待を受けて辨當を済まし、色々足袋製造の參考資料を見せてもらつた。素人であると言ふよりか男である我々として裁縫の事は妙にむづかしと思はれた。やがて足袋製造組合事務所の方から行田足袋に付いて大體次のやうな話があつた。

行田足袋の起りは約三百年の昔に溯られる。當時は足袋と言つても附近の山や森で捕れる動物の革で作つたものだつた。普通の足袋は一般の人には禁ぜられてゐ、武士階級の人も儀式に用ふる位なものだつたから製造業も振るはなかつた。阿部豊後守が忍城主となつてから、領内の産業開發の爲足袋製造を奨励し、殊に下級藩士の家庭内職として奨励し、且つ一般にも足袋が使用され出してゐたし加ふるに附近に綿染の産が多く製造業各々多大の苦心をばらつたのでだん／＼盛んになつた。明治初年にはもう年産額三百萬足に及んだ。同二十五年頃ミシンが入り製造業者自身すら機械縫は弱いてミシン使用の製品を排斥するさう風な過程を経て現在の如き年産六千萬足に發達した。販路は主に東京附近から東北、北海道に延びてゐて、昨今關西方面にも進出し始めた。近時著るしく洋服着用品が多くなり足袋の需用は今後長くはない此に對して今から足袋工場内に洋服部を設けてある次第である。目下は工賃は一足二錢五厘で同業者数は組合員だけで五十數人、下請工等を合せて約五千人の者が此の仕事に従事してゐる云云。

鎌倉紀行

三丁 中村 一男

吾々三年生は、五月十二日、伺、奥村、福永

小澤、萩野の諸先生に率られて、熊谷發五時十五分の汽車で鎌倉に向つて出發した……東京横須賀間の電車は仲々早かつた。これを北鎌倉驛で下りて、先づ第一に、臨濟宗、鎌倉五山の第二圓覺寺派の大本山、圓覺寺を訪れた。

此の寺は北鎌倉驛の直ぐ近くに在る大きな寺だ。我々は先づ正面の道路を進んで行つた。道路の片側、末だ山門にかけぬ所の所に、水の濁つた紫色をした池が靜かに横たはつて、周囲の緑なす大木や、池畔の青草が、じつ／＼其の自然の姿を水にうつしてゐた。靜寂そのものの中を進んで行くと、行手をさへぎつて、附近の老杉と丈を競ふ巨大な山門が現れた。大きな圓柱高い天井、厚い藁屋根、皆高く聳えて鎌倉第一印象として、莊嚴さを僕の頭に刻みつけて呉れた。考杉の梢さ、山門の破風さを見比べながらやがて此處を過ぎて、木々に啼く小鳥の聲に耳を傾け、廣大なる境内に目を見張りつゝ、木の下蔭の道を辿つて、硝子戸の洒落た本堂の御前で止つた。自由行動十數分の中に、父永、弘安の勇將時宗の墓所、又時宗が坐禪を組んだといふ禪宗建築物最古の特別保護建築物である舍利殿、相當高い石段を登つて、國寶の銅鐘等、遠

一八八

休なので街を見學し新兵衛地蔵尊へ參拜した。此處は運好く御開帳で大勢善男善女が鈴打ち鳴しての御歌歌、飾りたてた舞臺、息のつまる程の線香の煙に包まれた地蔵尊、すぐ後の遊園地はそこら一面の人出だつた。約三、四十分遊んでから大澤足袋製造工場に行く。二階建ての木造建築で一階は足袋二階では洋服部を作つてゐた。先づ足袋から見學、動力で動くミシンを繰る女工達の迅速な活動の中に裁断から仕上げまで十三の分業作業で八分間一足の割で出來上つて行く。階下を一巡し二階に昇ると甘臺位のミシンを使用し、分業で子供服を作つてゐた。工場監督の方に御禮を述べて公會堂で再び休息をし行田の者や自轉車隊は解散し我々は行田驛から電車で歸路についた。

右手に往く時通つた行田街道が白く木の間越しに隠してゐるのを見ながら三時前熊谷に着いた。

やうやく鎌倉宮に到着參拜した。社殿の後方、一寸した石段を登つて、不忠不義なる尊氏、直義兄弟が畏れ多くも、皇子護良親王を押し込め其の上弑し奉つた御窟をのぞいて、在りし日の大塔宮を偲び奉り、悲憤慷慨大地も踏みくだきたい感のうちに此處を去つて、次の目的地である江ノ島に向つた。

江の島旅行記

三甲 小此木英信

旅だ！と思つただけでも神經の端造もくつろいだ様な氣がする。久しく見失はれて居た私の本當の姿が見出される様な快しさを懷しさが喚びさまされて来る。

私達の乗つて居る電車はぎ／＼と平和な昔を立てながら曲りくねつたレールの上を走つて行く。海だ！海だ！誰か叫んだ。皆一齊に窓に顔を集めて喜びの聲を擧げた。

赤土の肌の出た小さな山と山との間にルリ色の海がちりと見えて居るその景色もやがて立並ぶ家屋に奪はれて了つた……

初めて見た海、柔らかな、春の太陽にほつか

一八九

りさ浮んだ江の島、遠く霞んで見えるのが稻村ヶ崎、手前には大きな美しい別荘がバツクの緑に調和よく、點々として居る。

私達は夢の様な景色にうつとりとしながら、江の島への長い木橋を渡り始めた。山の中で育てられた私達は、海の雄大な雄々しい景色を見た時、何とも言へぬ魅力を感じた。

ざざ……と大きな懐い音を立てて猛り狂った戦士の様に黒く、鏡の様なめらかな砂の上を突撃して行つたかと思ふと、さあ……と小さな神のさゝやきの様に砂濱をよじ登つて行く。その先端がちよつと濡れない砂に附く、又る……と妙な音を立てながら戻つて行く。同時に第二の波が押し寄せる何度か……同じ事をくり返して居る。私達は面白さにしばらく立止つて見入つた。

長い橋も終えて何時の間にやら江の島に着いた。兩側の大きな立派な料理屋の間をよいしよ……と登つて行く圓りの貝屋、料理屋達の客を呼ぶ聲も波の音と調和して、歌の様ななごやかなリズムとなつて鹽の香深い空気をふるはせて聞えて来る。

やつと頂上に着いた。自分の登つて来た道を

戦捷の勇者の様に、ふり返つて見た時、私の何時も見たのは小さな自分の町だつた。それが今日は雄大な海の上の細い線の様な美しい長い橋だつた。

紀行文車中で

三乙 秋山 孝

小樽雨の中を列車はひた走りに走つてゐる。移り行く窓外は雨にしよんぼり濡れた葉の若葉で埋められてゐる。

車内は和やかな雰囲気包まれて、嬉しさが満ち充ちてゐる。時々甲高い笑い聲が、あちこちで爆発する。

今迄は緊張さうな顔で縛られてゐたのが急にゆるめられて、籠より放たれた小鳥の様に、皆生々と顔中嬉びを一杯にしてはしやぎ廻つてゐる。今日は旅行だ」といふ考が唯急に無暗に嬉しく、のび……と何の風托も無い氣持を越させるのだらう。だ、理由なく騒いで見たいといふ氣持がツンツンと頭を上げて来る。此の喜びに浸つてゐる車内は他客なく、我等獨專の形である。

もう窓外はいつものまにか田圃となつてゐた。掘返された黒い土まの苗間があるのが遙かにズツと續いてゐる。その廣々とした田圃よりスガ……しい朝の氣分が我等の心の奥底迄しみ込んで来る。

時々……電信……村……木立等が視野を横切つて行く。何時の間にか小雨は止んで、空は矢張り重く、灰色に垂れてゐた。

汽車は我等とその嬉しさを載せてどんよりと曇つた空の下を……關東平野を南東へ……南東へ……と急いでゐた。

(其二)

東京驛で乗り替へ鎌倉に向ふ。

電車は帝都の高層を走つてゐる。下は見えない限りに家に埋められ……ビルデング……瓦屋根……トタン屋根……看板……等。その間を縫ふて大路、小路は縦横に走つてゐる。灰色の空を寫したぬれた補道の上を蛇の目が、洋傘が、往來する。家や道の洪水である。それが後へ後へと流れ去つて行く。少時くして左の窓に御淺が見えた。青々とした木々を水面に寫して其の名残りを僅かに留めて、苔むしてゐる様に深い緑色の水がじつと動かすよとどんでゐた。やがて

家の洪水が切れた。そして横濱も過ぎて滑線に又細や低い山々が視界を覆ひ始めた。車内は人が少くなつた。

昔は汽車の時を打つて變つて、靜かに窓外の景色を眺めてゐる。時々切り立つた崖や山が過ぎる。中に岩窟の様なものがあつて墓石の様なものが見えた。少し乗車が長いのであくびが出る様になつた。

今迄氣が附かなかつたが、何所から乗つたのか自分の向ひ側に腰を下した、中年の男の人が心地良さうに眠つて居た。白河は早や過ぎて仙臺か? 今にも落ちさうに帽子がズルズルと滑つて、鼻の上に僅かに安全を保ち續けてゐる。コツリ……と舟を漕ぐ度毎に益々危険状態に陥つて来る。どんな夢を見てゐるだらうか電車は震動が心地よいリズムとなつて、夢の中に流れ込んで居るだらう。

堅い窓を手を痛々して明けた。沿線は若葉茂りスガ……しい午前の風が開放された窓の下に送られて来る。青空が顔を覗き始めた。始めて初夏の朝の爽やかさの中に、目指しが車内に窓より照り始めて来た。曲するに従つて窓の形をした日當りが床の上を靜かにゆれて移動してゆ

く。

ガタン……ガツタ……とポイントの所たら、大きくゆれた。もう轢内に入つたらしい。前の人が目覚めた。兩手をグーツと伸ばして新鮮なる空氣を固く引つかむやうにして……のどの奥迄見える様なあくびを一つした。眠さうな眼を私の方にチラリと投げて、帽子を被り直した。

スーッと速力が急ににぶくなつた。

ガタン……ホームに着いたらしい。人々は立つて荷物の荷物に手をかけた。

東京への修學旅行

出發

二甲 鈴木 正男

びしょ……とつめたく雨が降つてゐる。あゝ駄目だ。心の底から吐き出した。今日まで待ちに待つた楽しい旅行もこれでぶつつぶれた。さと思ふと餘計に残念でくやしい。

しかし風雨にかゝはらず旅行を行ふのだ。母は勝手時々「がた……と靜かに音をさせて、辨當を作つてゐる。僕も起きた。戸を明けて見

る氣になれないのでたいぼんやりしてゐた。其の中二十分もたつと次第に雨も止んで来て、しまひにはすっかり止んでしまつた。びよつとしまひに天氣になるかなあ」と思つた。だん……と安心して来た。急に仕度をし始めた。かばんに色々の物を入れた。六時頃家を出た。母がいつまでもいづまでも見送つてゐた。驛に来て見ると二三十人の者が集つてゐた。皆喜びに満ちた顔をしてキラメクをしやぶつたり、話したりしてゐた。間もなく六時二十分には全員が集合した。驛前に整列して、先生が人員を檢べられた大きな轟と共に列車は到着した。我等は胸をわく……とせながら車中の人となつた。間もなく汽車はホームを離れた。しつとせりとしめつてゐる青い麥畑の中を汽車は矢の様に走る。つめたい風が窓から這入つて来て寒い。窓から外を眺めると、青い田圃の中に眞赤なれんげ畑があり左にはきら……光つてゐる水田があつて實にきれいだ。れんげ畑の傍を通る時青くさい、しつとりとした匂がして来た。水田はきら……と冷たく光つて見えた。そして其の中には眞白な白さが片足をあげ水田の中で細長い眞白な首をまげて魚をとつてゐるのを見た。急に冷しく感

じた。汽車が林の中へさしがり、と車内が真青になつた。ぼつと林を脱け出ると再び廣々とした青い田圃だ。天候も熊谷驛を出発した時に比べて次第によくなつて来た。浦和、わらび、川口を通つて赤羽に近づいた頃には青田は一變して眼前に見る物は只家と煙突のみである。そして非常に工業都市らしくなり、又熊谷を餘程離れた様な気がして来た。そして遙かに東京の青白い空を眺めた時には僕の胸はどつて来た。

科學博物館

二甲 新井 忠治

飛行機型に形どられた科學博物館内に入る。初めが理工學部陳列場で、もう先に入つた友達とは、園内に横たはる機械に驚異の眼を見張りながら、少年技師を氣どつて、盛に色々な機械を實驗してゐる騒しい音が何やらやかましく、しやべつてゐる中から聞える。機械は自由に實驗出来るのだ。僕は「此は面白ぞ」と胸をどきどきさせながら、入つて見ると、何だか説明の紙があるが、何やらさつぱり判りかねる機械が、澤山目にさまる。僕は物理や化學を少しきり教

はつてゐないのだから、そんな機械がどんなもので、どんな役目をするなどは、判る筈はない。僕は其の時思つた。若し物理や化學を教つてから見學したら、どんなに面白からうか。こんな事を思ひながら、なほも歩を進める。前の未知の機械に較べて、自動車のエンジン、飛行機の模型、プロペラの作り方、及び其の種類、カルガンピアノの構造、精密な汽車の模型、色々なレンズや其の屈折圖、紫外線寫眞と普通寫眞の比較とその寫眞機、電話の通する迄の順路等あげればまだあるが、此等を見て非常に感ずる所あり、且又非常に科學に對する知識が、豊かになつた様に思つた。

次は動物學部陳列場である。雷鳥の羽毛が冬は白色に夏は褐色に變るのを、不思議に思ひながら、進んで行く。薄暗くなつてゐる室に入つた。見ると硝子越しに狐や小鳥、そして栗鼠等を中心に、其の邊りの森林の状態をパノラマ式にみせたものや、アシカの雌雄を中心にして寒地の生物の生態を現したものと、岩上に止まつてゐるはげわしや、トナカイの生態等、悉く僕が森に、或は寒帯地方の海岸に、或は山間にあつて、實際にまの邊り見てゐる様な感じになり、

あまりによく出来てゐるので、暫く立ち退くことが出来なかつた。急いで次を見ると、足のすばねけて長いあのキリン、見ただけでぞつとするガラガラ蛇、等を見て其の室を出た。マシモスの牙の大きいのに驚きながら、歩を進める。あるわ、あるわ、其處は獸の世界だ。硝子越しにヘッが覗らめつけてゐるのを見た時、身振ひを感じた。此等の動物の動いてゐるのは、動物園で見られると思つて、あつさり見終つた。次に植物、地學部陳列場を見初めた。此處には少さいのは苔類より、色々列べてあり、高山植物には目を引かれる處があつた。普通には見られぬ珍草等、見すにすまず事が出来なかつた。

地學部を見る頃はもう見學時間の二時間に迫りつゝあつたので僕の趣味の礦物等は、良く見る事が出来なかつたので、残念であつた。それで特急と言ひたい程の速さで、地學、天文學、氣象學、海洋學部等を見て、地下へ下り、恐しい様な動物骨格陳列場の白骨の匂に氣持が悪くなり、地下出口の太陽と地球と月との關係を示した面白い回轉盤を動かし、幾度か日蝕が見られる處があつたが、皆海上であつた。何時かの日蝕の話と思ひ出して面白く感じてすぐ外へ出た。

宮 城

二丙 一和多壽雄

東洋一と稱せられたる、大東京驛より吐き出されたる、我等總勢二百名は、都人士を尻目にかき、自動車、電車何物ぞと許りの勢を示して丸の内ビル街のアスファルトの上を、ポプラの木の間を通過する。

ビルディングや、洋風の建物の間を通過すれば、廣い芝生の生えてゐる所に出る。

此所はまあどうであらうか、交通頻繁な丸の内街に比して。

前を仰ぎ見れば、大内山青松の中に、眞鍮葺と思はれる御居根が拜せられる。

玉砂利を敷きつめられた所を、サクサクと踏みしめて進むと、二重橋前廣場に達する。

老若男女、學生、サラリーマン等、あらゆる階級の人々か、遙かに皇居を拜してゐる。

高い石垣、緑の松、御藻の水、唯々有難く、神々しい許りである。

此の御奥に、大君御在しますかと思へば、知らず／＼に、頭の下るのを感じた。

「最敬禮」と吉野先生の合圖を以て、我々は敬禮をした。彼の西行法師の「かたじけなきに涙こぼる」と詠んだ心さ、今の我々の心さは同じであらう。

「直れ」の號令を以て頭を上げた。皆の顔色には、大君の御爲に盡さばやといふ赤心が、あり／＼と、現はれてゐる。

里見先生の首頭で萬歳三唱をした。其の熱誠なる聲は大内山に反響した。

報知新聞社

二乙 關根福之助

僕は始めて新聞社の内部を見る機会を得た。

宮城前の廣場から報知新聞社に着いたのは、午後の一時頃であつた。先生が社の人と話をする爲に入つて行かれると、皆も後について、どや／＼と入つたので入口の段に一杯になつてしまつた。見苦しいなあと思ひながら、段に立つて居ると、話だきまつたのか、皆が階段を上つて行くので後をついて行つた。

エレベーターを中心に螺旋狀に廻つてゐる階段らしかつた。同じ様な場所をぐる／＼廻つて

ある様で、なんだか目がまはりそうだった。窓から下を見ると、自動車や人々が、恐しい様な速さで動いてゐる。さう／＼上まで行つて、眞暗な活動寫眞が寫つてゐる室に通された。僕は椅子の角にぶつかりながら、前にある椅子に腰掛る。急に疲れたが、水が飲みたくてしやうがなかつた。

活動は始めは戦争の所であつたが、後には松岡全權の演説があつたがあまり面白くなかつた。次に報知新聞社の内部の様子の映畫を寫した、これで實物は見られないのかさ、すこし悲觀したが、これは非常に面白かつた。映畫が終つてこれから實際に見てくれると云ふので、非常に嬉しかつた。

僕等の組へつた案内人は、圓顔のやさしそうな人だつた。始め寫眞室へ行つた。ここは新聞のあらゆる寫眞を掌る所だ。入つて行くと、左の方に大きな黒い箱があつて、そこから薄紫のちよつと見ても、眼がぼんやりする様な強い光線が出て、その前に四角な板が吊るされてあつた。勿論、僕には何をやるものかわからない。左の方には、二十人許の人が働いてゐて、壁の方には引出があつた。

動物園ごころく

大東京の自動車、電車、人の波、建物等々に僕等田舎者は視覚も聴覚もすっかり疲れてゐたが、動物園に来ると急に四邊の静かさを感ぜたさうして心が落付き、此處で始めて楽しい旅行気分を味ふ事が出来さうに思はれた。

「わあ」と言ふ歓聲と共に僕等は動物園へ、なだれ込んだ。物凄く雑踏の中から開放されて、轉ぶやうに檻に向つて駆け出した。

最初に目についたのは、アフリカの平原に住んでゐる、あの美しい縞馬である。體中に波形の縞を走らせたその鮮やかさ、なんと言ふ美しさであらう。縞馬の檻を離れて蒙古牛が退屈さうに檻の中を歩いてゐる傍を過ぎるさ、彼方に鹿の一群が仲よく遊びたはむれて居るのが見える空を見上げると太陽は雲におほはれて姿を隠し青葉蒼葉に包まれた別世界の如き動物園に一抹の淋しさを感ぜしめる。(二乙木村茂)

◎

「オライオンが居るぞー」後の方でI君の大きな聲が聞えた。其の聲にふと前方を見ると――百獸の王ラレオンが檻の中央部に悠々と

不要の部分が切り取られる。

さ、直に傍にゐた人が、それを持つて、輪轉機へ行くと、直に機械掛の人が取附ける。それから運轉する。機械の音があまり廣くない室内に響いて、頭がぼんやりする位だった。輪轉機は實に便利なので、刷るのから、疊むのまで全部この機械一つでしてくれる。すつすつと、きちんと折り疊まれた新聞紙が出てくる。掛の人は、それを取つてローラ式の臺にのせると、新聞紙は次の荷づくりをする所へ送られる。そこから全國へ發送されるのだ。

それから販賣部を見た。こゝは編輯部と同じ様に、人々がペンを動かしてゐた。

次に一番先に上つたらしい階段を又上つて、屋上に行つた。下を見ると、有樂町の驛があつて、省線がひつきりなしに通つてゐる。前には東京日々新聞社があつて、見える限り西洋建築が立ち並んでゐる。向ふの方に小く廣告風船が上つてゐた。東京の空を見て、僕は急に神田にある兄さんと思ひ出した。こゝで寫眞をさつてもらひ、小さな本をもちつて、報知新聞社を去つた。

そこから下へおりて、編輯部へ行つた。そこには多くの人が上衣を脱いで、せつ／＼とペンを動かしてゐた。その間を給士がはしりまはつてゐた。

その間を這つて、薄暗い廊下を通り、活字を組立てる處へ行つた。高さが僕の二倍もある箱の中へ、活字がきちんと入れられてゐる。その間を手に小さな箱を持った人――顔や手や衣服は、鉛になにかで、黒くなつてゐる――が、見向きもしないで、活字を組合せてゐる。

こゝで紙型の基になる活字を作り、機械に入れて紙型を作る。作つた紙型を、鉛板を作る室へ送る。こゝに入ると、む／＼と、熱氣と鉛の匂ひがしてくる。室の片側に鉛板を作る機械が三箇と、他の側に鉛板の縁を切る機械が二三箇据ゑられてあつた。鉛板を作る機械は、半圓形をした鐵の板が鉛を溶かす機械に被る様に出來てゐて、紙型を取附けて、鉛を流しこむさ――此の時は非常に煙が出て、熱と氣鉛の匂ひが襲つてくる――五分たつたかないうちに、鉛板が出来上つてしまふ。

それを次の人に渡すさ、その人が縁を切りさる機械にかけて、がちゃ／＼やつてゐるうちに

寝てゐる。さすがに百獸の王と言はれるだけあつて觀覽人に會釋の一つも與へない。

ふと前方の立札を見ると――「此の獅子はエナオピア産にして、長くもエナオピア皇帝の御下賜による。」と記されてあつた。そうして再び其の獅子を見た時――今度はエナオピアからの親善使節の様に思はれた。そうして將來のエナオピア王國の發展を親愛なる獅子の前に祈つた。(二丁大久保忠)

◎

今度は羊の所へ行くと、一見黒人らしい外國人が、羊に紙をやつては何やら言つてゐる。呼んでゐるらしい。唯「面白いなあ」位な氣持で後についていつて見ると、金魚の居る部屋に來たよく耳を傾けて聴いてゐると、金魚を指していふ言葉の中に「ゴールドフィッシュ」といふ發音が聞えた。英語らしい。少しばかり英語をやつてゐる僕等は、ろくに分りはしないがとて興味を持つて、外國人を見る度に後をつけて行くのだった。まだ一語位分りせんものだ。と思つたから、更につけていつたがとう／＼だめだつた。

大分願がくるつてしまつたが、今度はすぐ手

前の小鳥の部屋に飛び込んだ。數多の小鳥達、盛に何やらベチャ／＼しやべつてゐる。これは一寸大きいな」と思つたら九官鳥だ。二三人の友達も「今日は、ばか！」等、いろいろ言葉をかけると、首をかしげて聞き入る様子だ。僕等が向側へ行つてしまつたらいきなり「お竹さん！」と、脱い聲で叫んだのがゐる。はつと思つて飛んで行つたら、知らん顔をして大きな目玉をさも不思議さうに見張つてゐる。

後で友達から「やつぱりあの鳥だ」と言はれ、漢文で教へられた「智の説」を思ひ出し、習慣といふものの偉大なるを一層強く感ぜた。(二丁葦塚公平)

色々の動物の聲を耳にしなが、靜かな向うの網壁にかこまれて、木越にさして來る、初夏のうす日を受けて、長閑に遊ぶ鹿や山羊の世界を見た。實に鹿はおとなしい。今迄の動物中で此の鹿の小屋が一番親しみさ、平和なやさしさを感じさせた。緑の光線を肩に遊んでゐる鹿は、繪の如く美しく、あの有名な朱塗の五重の塔や、古い昔の名残を止むる建物が見えがくれする、奈良の都を想像させた。又山羊も靜かな動

◎

僕は白い巨大な建物の前に立つてゐた。園内には中學生のカーキ色の服で彩られ、その間に白い鳥の翼やコンクリートの建物がちちついてゐる。夕方近くの薄い陽はかすかに雲間に瞬いて園内の樹々の緑や異様な建物に僅かに影を作つてゐる。巨大な建物、それは象室である。暗い中に二つの大きな灰色の動物が動いてゐる。古くから觀覽に供されてゐるせいか鐵柵の傍に四五人居るのみだ。象の足元には二三の藁の束が無難作に置いてゐる。象は食いたくもない藁を長い鼻に巻いて上へ抛り投げて又受取り、僅か見物人を喜ばせてゐる。僕は「巨大な哀れな動物よ。」と叫ばずには居られなかつた。この狭い暗い室で人間に愛嬌をふりまかればならぬ。

早く父母の國、アフリカか印度へ歸りたいであらう。原始の大森林、滔々たる大河、果て知れぬ大草原、お、其處には彼等の自由な天地があるのだ。僕は田舎に巡業に來たサーカス團の象を想ひ出した。やはり彼も寒い北風の吹く寒い日にあの哀愁の眼でジシタの音を聴いてゐた。お、お前は柵を破つて逃げて行きたくはないが、ばさり／＼彼は重い足で藁の上を二三歩動いた(二甲佐藤一夫)

◎

多くの動物は殆んど眠さうな顔をしてゐるが愛嬌者の猿だけは周りで見てゐる僕等に盛んに愛嬌を振りまいて「キヤッ／＼」と楽しさうに遊んでゐる。猿はやはり動物園の人氣物のナンバワンだ。

天氣があまり好くないのにもかゝらず、見物人は相當な數に達してゐる。中にも田舎のらしい人達が「孔雀が羽を擴げやしなかんべいか?」と云ひながら一所懸命見つめてゐるが、彼は中々羽を擴げない。折角遠い田舎から來て見てゐるのだから美しい羽を擴げて見せてやればよいのにと思ひながら見てゐたが、彼はあの重い尾をひきずりながら、すまして奥の方へは

いつてしまつた。田舎の人達も失望して洋傘をかついで、他の面白い動物を見に行き出した。丘を越えて行くとき大きな檻がある。のぞいて見ると居た／＼あの小さい胸に長い首のノッポのキリンが、頭に小さい角をちよこんで歩いてゐる。二匹仲よく氣高い姿でならんで歩いてゐる。彼等はまだ來たばかりであるから見物人が一杯だ。お婆さんまでまがつた腰を伸ばしてキリンを見上げてゐる。長太郎、隆子さんは又よく名づけたものだと思ひながら又歩き出した。(二乙里見明)

◎

緑草の間の道を上つて、沙漠の旅行者駝駱の小屋を通過して、狼や狸或は狐や犬の小屋を見たら、狐や狸の顔をつく／＼眺めてゐるさ、ぶつと吹き出したくなる。再び坂を下りて、傍にゐる鵜を見た。何處かの紳士がごちやうを、種の中へ流し込んだ。鵜は待つてましたと許りに、水中に流れ込んだごちやうを追つて、躍込み巧に潜水して捕へた。其の手は實に鮮かである。歩み移して狂暴なる群々の檻に近寄つた。眞紅な鼻、毒々しい青さのみにくい顔、鋭い齒、ぞつとするやうな恐しい其の體、嫌な動物だな

あと思ひつゝ、その檻を離れ、いろ／＼の動物の鳴き聲を聞きながら河馬室に入つた。二乙木村茂

◎

「ほら／＼浮いた。浮いた」と、前の人が言つた。僕が其の人の肩越しにせいのびをして見た。見るから不恰好な河馬の顔が眼に入つた。非常に大きな口、其の口の傍にあるだぶ／＼した肉、でめきんの様に飛び出た眼、皆河馬でなくては持つてゐない不恰好な特色である。ぢきに河馬は水中に其の影を没した。後はざわ／＼ゆるる水だけである。

「坊や河馬が浮きますよ、ほらあそこに渦巻があるでせう、すぐに見えますよ」と、僕の傍の女の人が言ひながら指さした。其の人の背には可愛い男の子がゐた。其の方向を見るさぐる／＼と渦を巻いてゐる。その渦がだん／＼緩やかになつてきた。少し前の所へ河馬の鼻の穴がびよ／＼と出てき、しゅうと息を吐いた。それから大きな／＼口、飛び出た眼、まるで御體裁の様に附いてゐる體に以合ひ小な耳、太い首が水中から形を表はしたかと思ふさ、ぐる／＼と巨體を半廻轉させて、僕等の方に向つてぶつ

と大きな口を開けた。口の中の牙は大きく、長い、人間の齒なんかで比べてものにならない。

僕等に「どうか此の口の中に食べ物を入れて下さいませんか。」と言はないばかりにしてゐる。誰も何もくれなかつたら、猶口を大きく開けて、「どうかそんなにじれつたがらせないで早く、どうか。」と言はんばかりである。それでも誰も與へなかつたらすう／＼と水の中に入つてしまつた。

室中には熱帯植物やさ／＼のものがあつた。左端の方に他の方の河馬の香が出た、そしてだんだん尻の方もちよ／＼上つてきた。これは面白いぞ何をするのかと思つてゐるさ、ばしや／＼びちびちと土色が、つた黄黒色の河馬の糞が周囲一面に跳上つた。あれ、うんこが。誰か、黄色い悲鳴を上げた。室中の者は皆がや／＼騒ぎ始めた。其んな事には一向頓着しない河馬は、さつ／＼さつ／＼水の中に逃げる様に入つて了つた。後はざわ／＼した水が揺れてなり、岸には水がばしや／＼／＼ぶつかつてゐる。(二丙鈴木豊明)

旅行は終つて

二丙 石川 喜重

比處は不逞の池水に圍まれた辨天様の境内である。

今から一時間後には上野驛に集合すべき豫定で自由行動を許されて散解した。

僕は唯獨り歩を水邊に移した。もう之れで今日の楽しい旅行も終るのだと思ふと何だか大變淋しくなつて、今迄の總ての樂しみが一時に何者かに掠め取られた氣がする。

科學博物館で見たボタン一つで動く自動車のエンザンや、ばつと明るく見えた顯微鏡や、眼も覺める様な高山植物や、龍宮を想はせる色樣々の魚の群泳ぐ水鉢が幻の様に眼の前に寫つて來る。

急に僕の体が暑くなつたのを感じた。何處から吹き來るとも知れぬ夕風が水邊のあやめの葉を揺がせながら僕の暑くなつた頬を慰める様に冷やしてくる。何だか一層淋しくなつた氣がする。

國防博覽會館の塔高く聳え立つた姿を水に寫して何さし言ひ盡し難き美觀を保つてゐる。之れが晴天だつたなら如何に美しからうさ、今更

曇つてゐる空を怨めしく感ぜずには居られなかつた。やがて長い參道を出て市内電車の今通過したばかりのアスファルトの道路をす早く横切つて、石段を靴音寂しく登つて行つた。

漸く登り着いた時は四方に夕陽の漸くさし迫つた頃であつた。此の丘は上野の山だ。上野の街が一目に見える。今しがた人の眼を集中させた東方のネオンサインが眠つた光を投じて今消えた。

此の時僕の心は何時か十二年前の震災當時に還つて行つた。寫眞で見る彼の上野の山の避難民が、今にも叫び出しそ／＼な避難民が、焼け落ちようとしてゐる各自の家を無残にも見過さなければならぬ苦しさうな顔が、頭の片隅にはつきり／＼寫つて、やがて消えた。まもなく山を下りた。もう上野驛は眼前に見える。此の時もう楽しい旅行も終るのだと心に再び強く叫んだ。間もなく上野驛に到着した。驛に入れば、來た時に見た様子さ、今歸りつゝある淋しい眼さで見た様子は、其れには餘りにも大差があつた。今迄影を潜めて居たネオンサインも暮色迫りし上野驛の四方から眠い光を投じて何事か人々に告げて居た。

やがて集合豫定時刻は来た。皆は驛に並んで人員捜査を行ひ、異状無しとの報あるや一方から一列に並んだ組が順々に改札口に吸ひ込まれて行く。間もなく僕も改札口を出た。そしてプラットホームを汽車に向つて走つて行つた。いやに靴音が高く響く。まもなく皆車上の人となつた。

僕はそつと窓を開けて外を覗いて見たり、プラットホームを一つ隔て、一臺の機関車が蒸気の音を高く低く鳴らして、温つぽい空気を一層濕らして居た。

僕の隣に居た友がしきりに腕時計を覗んで居たが、僕の方を振り返つて「發車する迄にはまだ八分有る。まだるつくさいな」と歎息の聲を擧げた。噫、あと八分と聽いて僕の胸は一時に鼓動し始めた。噫淋しい。もう直ぐ發車するのだと思ふと。

然し此の八分間は僕にとつて最も樂しかった時だ。何故ならば、何とも言ひ表はせぬ懐しの有る上野驛に唯の一分でも、いや一秒でも長く留る事が出来るから。

やがて寂しい汽笛が鳴り響いて、汽車は徐徐にレールの上を滑り始めた。僕は上野驛を見つ

めた。汽車は急にスピードを出した様だ、風が僕の頬を横なぐりに打つ。ばつと信號の青い光が消えて、四方が急に暗くなつた。汽車は驛ヶ谷驛に向つて暗黒の野を速進する。

僕は「もうこれで今日の楽しい旅行も全く終つた」と車中で心に強く／＼叫んだのだつた。

旅行の歸途

二丙 高橋 忠衛

大きな憧憬と希望とを持つて待つてゐた帝都の一日の楽しい修學旅行も、最早終つて吾々は歸途を急いで車上の人となつた。今日一日の事を思ひ出せばすべてが僕の眼には珍らしく思へた。科學博物館、宮城前の萬歳、新聞社の偉大な輪轉機、動物園、それらの事が車上の僕の眼に次々と現はれては去つた。

汽車は日暮里あたりを勢よく走りつゝ、あつたふと車外を眺めれば今や天地等しく黒い幕に掩はれて居つた。その黒い物の間に今日見た何物よりも僕の心、眼をひきつけたものがあつた。それは外でもない帝都を明るくする電燈なのだ。電燈、電燈がどうして僕の心、眼をひいたのだ

らうか。その美しさがどんな美しきだつたか、僕はその説明の言葉を持たない。が唯々電燈を見たその瞬間「あゝ美しい」と自然に感じたのだ。今までそんなに美しいと思はなかつた電燈をどうしてそんなに美しく感じたのだらう。汽車の進行につれて、黒い中に次々と浮き出して見えるが故に美しかつたのだらうか。疲れた眼や心を打つたからだらうか。しかしそれは事實私の心そして眼に美しく感じられたのだ。あゝあの美しい晴夜の電燈よ、いつまでも美しく光り輝き僕に君を説明する言葉を與へよ。

人々は一日の旅の勞れにくつたりとなつて騒ぐ者はない。暗くなる武蔵野を汽車が轟々走り行く。なつかしい我等の家を指して。

影森見學の記

一甲 森 三郎

修學旅行は十二日といふ聲を聞いてすぐ長瀬が思ひ出された。それくらゐに小學校の時から幾度か長瀬には行つてゐたがそれは修學の旅行ではなかつた、ただ美しい景色だなあと思ふ位で都會人のけげげしい姿に驚き、高い金銭を

出してつまらない土産物を買つて歸るのが例であつた。

目の前を風のやうに走り去るトロツコの響。一時間百八十トンの石灰石を運ぶといふ銅鐵ベルトの前で監督の説明を聞きながら、これが本當の修學旅行だと思つた。音響、黒煙、爆發の光景を考へたりして急な坂を石灰の爲にすべりながら上つたり下りたりしてやつと山の頂上に着いた。そこからは前の山の白い石灰岩の斷崖が目で見える所であつた。皆は辨當を食ひ始めたが、僕はじつと山の上を見つめてゐた。暫く立つとサイレンがウーッとなり出した、僕は、はつと思つて皆の方を見ると、友も箸をおいてじつと山の一角を見つめてゐる。と、山の上の旗桿にするすると赤い危險信號が上つた。

やがてガンガンと鐘がなり出し、木の葉がざわ／＼と音を立ててゐる。物凄く沈黙の中に時は立つて行く、第二の旗桿にも赤い旗が上つた。いよいよ爆發が近づいたのだ。山の上のレールは取り去られ人の姿も見えない。緊張緊張。さ山の中腹からばつと黒煙が立ち上つたと思ふまじドーンといふ耳も破れるばかりの音響がしたと見るまに大石が岩かどに衝突しながらガラ／＼

と非常な勢で落下し、その後から粉々になつた石が一つの黒塊となつて落ち行き、下についたと思ふと濃々と黒煙が立ちこめ何も見えなくなつてしまつた。流れるやうに煙がうすくなつてその切れ目に赤い危險信號がちらちらと見え隠れてゐた。

秩父荒川沿岸及び武

甲山石灰採掘所

一甲 鳥塚 一男

午前六時五十八分、電車にて上熊谷驛を發した。寄居をこへると秩父連山は眼前にせまつて山に入れば電車は山麓をうねり／＼と風光繪の如き荒川沿岸を走る事しほにして長瀬に着くこゝには有名な縣社寶登山神社あり、こゝをこへれば間もなく荒川の鐵橋にかゝる、こゝと音を立てながら流岩をかむ川を眼下に見る。こゝらあたり兩岸岩にて絶壁を作り見るから物凄くである。

友達と話をしながら、ふと外を見ると四方に山々をめぐらせる秩父盆地にう入つてゐた。先きほどまですぐ目の前にあつた山々はすう／＼

と遠のいてもうあたりは一面に桑島である。もう秩父町もすぎ目的地なる影森に着く、停車場の前に整列、甲組を先頭に驛の人の案内によつていよいよ武甲山石灰採掘所見學に出かけるまがりくねつた道をしばし行くと、ゆくての二つの山の谷間をへてはるかに天をつくかと思はれる雄大な武甲山の英姿が眼に映じた、岩はだをあらはしたその急峻なる大絶壁實に筆舌に盡し難い光景である。

こゝ／＼と山をあつす機械の響き岩をくだき山を征服する文明の利器、何にせよ感心しないもの、ないこの大石灰採掘所の様子。間もなく安全地帯にてダイナマイト石灰採掘を見る事になつた。

安全地帯にて眺むれば工場の上にひら／＼翻る赤旗、サイレンのうなり……。すると静かな山の空氣を破つてどど／＼とさ萬雷一時に落つるが如き響がしてがう／＼と岩はくづれ山はなり、すごい／＼地球の最後になつたかと思はれる物凄く光景だ、どど／＼／＼／＼僕等は我を忘ればうせんとしてその光景にじつとみされてゐた。

影森の石灰採掘

一甲 關口勝次郎

「ガッゴッ！すまじい音。僕は思はず耳を澄ました。ガチャンゴトン、何となく物々しい音が山頂から聞えて来る。

僕等一年生はつかれた忘れて上った。工場について見ると思はず鼻をつまんだ。強きガスのにおひが鼻を衝く。石灰岩があたりにもこちらにも處さらばずちらばつてゐる。絶壁のそばには何十貫ともあらう大岩がころがつてゐる。それ等の石灰岩をトロツコで運んでは洞穴の様な機械の中におちまける。其の時石灰岩がくだけてこなになりあたりにちこめる粉々たる臭が僕等の鼻を衝くのだ。其處等にちらばつてゐる岩も、機械小屋も、くだけた岩を下へ送るみぞの様なものも、亦働く人々の肩、ぼうし、顔が皆うす白い。殊に機械小屋の屋根は汗ばんだ顔につく粉のやうにべつと白く粉がはりついてゐる。そして其等の物は皆古ぼけた色を出してゐる。

そこで當會社重役が監督人らしい人が来て僕等に工場、會社に關する事を一々のべられた。

その一言一句は僕等一同をたい驚かせた。それから今度は絶壁の爆發を見る事になつた。しかし此處で見物するのは危いといふので、向ふに見えるこの山より低い山で見る事にした。僕等はいそぎ足で向ふの山に登つた。中腹まで来るさつかれが一時に出て「ハーハー」息が苦しい足もろくに運べない。しかしあくまで爆發を見るさういふ氣からさうさうちやうど工事をしてゐる山が真正面に見える所まで来た時だつた。僕は思はず其の壮大を感じた。びやうぶの如く立つてゐる絶壁は、あたりの山を壓して實に忘れ難い壯觀さだ。

數十分の後、鐵のやぐらの上にスルスルと小さい旗が上つた。僕等はもう始まるかも知れぬさか喜びの聲をほり上げてまつてゐた。又數分の後、今度は先の倍位ありさうな旗がスルスルとやぐらに上つた。僕等はもうこれが合圖ですぐ爆發が見られるのだと思つてなほもさんちやうして絶壁を見つめた。しかしまだ爆發の現場には人が小さく動いてゐる。何をしてゐるのだらう。ぐつぐつさせるない。さ僕等の心は喜びの絶頂に達して一度しづかになつた。一たび、拍手をするやら、キヤーキヤーさわぐ者やら木

1100

に登つて行く者やら、實にぎやかといふよりはむしろうるさかつた。

突然「ヒューッ」といふサイレンの響き。いよいよ始まるなと心に思つた僕は一せいに絶壁をにらんだ。折しも前面の絶壁に濛々たる黒煙、あたりをおほふ様にしてまき起つた。と同時に百雷の如き爆音が四方の山にびびり反響してそれは實にものすごかつた。すると黒煙の中から雨あられと落つる大つぶ小つぶの岩石が、瀧の様に長くひいて地上に落ちた。と第二の爆發が右手の方から第三、第四とまたくまに爆發して右から左へさうつて行く、そして終に第八回の爆發を最後に、そのすごき雄大さを僕等に見せて石灰岩爆發は終へたのだ。

僕等は爆發する瞬間の雄壯さをしつかり心にきざみつけて下山したのだつた。

石灰採掘所より影森

驛へ

一甲 堤 慎吾

「はあー、あゝたびれた。」
さ、言ひながら立ち止まつた。殆ど絶壁のや

うな坂をええええ登る。汗がぢり／＼にしみ出て来る。

「おい、まだ頂上ではないのか。」

さ後から新井君が聲をかけた。僕はする／＼にるのをやうやく止めて、後を振り返つた。すると片手に帽子を下げて登つて来る者、危く根に提つてゐるのを防いだ者等、皆汗をふき／＼「はあーはあー」言つて上つて来る。頭の上で「また急な坂がある。」

さ、さきやうな聲を發した者が居る。見上げると飯田君が立ち止まつて上を眺めてゐる。暫く上つて行く／＼と石段があつた。やれ／＼助

かつたと思つて腰を下ろした。あたりは點々山脚が咲き亂れてゐる。歸りのみやげにするのだらう、其の脚端を手折つて居る者があつた再び腰を上げて石段を上り始めた。さ、急に前方が明るくなつた。「はつ」と思つて頭を上げた頂上だ。やうやく頂上へ着いたのだ。皆が思ひ思ひに上衣をぬいだり、辨當を食べたりして、休息して居る。僕も休まうと歩いて行く／＼急に前の岩が切り立つてゐる。びつくりしてこは／＼下を覗く／＼と絶壁だ。否、絶壁よりくぼんで居る。

辨當を食べようとして岩に腰かけた。ふと横の方を見る／＼と監督らしい人がお辨當を食べて居る。其の人に

「石灰岩の山は何處ですか。」

さ問ふと

「あそこです。」

さ指さした所を一見した。驚いた。頂はあくまでも高く雪にそびえ、石灰の部分に絶壁だ。雄大さ言はうか、豪壯さ言はうか、實に筆舌に盡されない。僕は又其の人に

「爆發は何の邊でしますか。」
さ聞いた
「あの真中一帯が爆發するでせう。」
さ、言つた。

やがて辨當を食へ終つて爆發を今か、今かと待つ。する／＼と赤旗が上つた。「さあ爆發だ。」さ皆がさわいだ。暫く時が経つた。さむく／＼と真黒いものが持ち上つた。「どつかあん。」さ大きな音が聞えた。爆發だ。見る間に「がら／＼／＼／＼。」さ大きな石の塊が崩れだした。黒い煙が未だ消え去らぬ中に又、破裂「ざら／＼／＼／＼。」と崩れ出した更に續いて二發、三發と爆發だ。折から雲間か

ら顔を出した太陽が黒煙に掩れて、あたりは薄暗き物凄光景となつた。

「やあ凄／＼萬歳／＼。」

歡聲が四方に湧き起つた。今まで暗かつた世界だつたのが黒煙消えて又光明の世界となつた「さあこれからこの山のお宮へ参拜し、下山します。」

とおつしやつた先生の聲に驚かされて立ち上つた。皆も名残おしさに立ち上つて出かけた間もなく参拜した。いよ／＼下山だ。ばら／＼／＼。走る／＼實に矢の様に走る。却つてらくすきて危険だ。暫く走つてやうやつと下へ着いた。僕等は整列して驛へさ向つた。

豪壯な雄大な武甲山は早くも夕もやが／＼つて来た。見上げればもう頂上には雲がか／＼つて「ぼうつ。」として居る。太陽も少し西にかたよつて来た。

あゝ、武甲山よ、さらば。

秩父方面、武甲山

一乙 内島 三郎

今日は照りも曇りもしない恰かも、旅行日和

1101

の感が空氣一杯あふれてゐる。秩父の歴史を思ふと、秩父國造の置かれたのは、成務天皇の御代である。秩父郡の一大中心地は、大宮町である。明治十二年頃は、大宮卿さよんでゐた、その後大宮町といつたのだ、今はあれほど、山中でも發達してゐる、それは、昔上方地方に交通の便があつた爲であらう。地理の方より見ると、原矢村より銅が出て、影森の武甲山より石炭岩が出、秩父セメント、淺野セメントの原料になる。

あの高い武甲山に登つた、なんといつても、標高千三百米である、その上に天空にそびえてゐる武甲山である、僕等がエンヤエンヤといひながら上つた武甲山である。僕等の登つた上は八百尺もあり、その所に登つて白煙を濺々立立てて、切岩機で穴をほり、その切岩機は四十九餘りの機械よりなつてゐる。その穴の中にダイナマイトを入れ、電氣シカケで爆發させる。僕等はその前の山に登つて、その壯觀な有様を見る「ソレ」赤旗が上つたぞと、その時の僕の心は波打つ様に自分の心が「パツパツ」さうつり變る。その瞬間ダイナマイトが爆發して、滾々たる黒煙が上ると、ドカン！と大きい音が初夏の空氣をふるはしてひびき渡る。その時僕等二

百名は萬歳を叫ぶ。その時一大絶壁に轟々と音を立てて下りてくる有様は恰も戦争の様です。その時直徑一米五〇位の大石は落ちてくる。今でもその五月十二日の武甲山の爆發の時、僕等二百名が萬歳を叫んだ事があり／＼と目の中にうつるのです。

新緑香る長瀬

一乙 松永 綠郎

影森の石灰採掘所を見學した我等一行は、五人の先生に率かれて、一路新緑香る長瀬へ向つた。

上長瀬で下車して、しばらく歩いていよいよ長瀬についた。實に多くの團體や家族でにぎはしい。さすがに長瀬である。先生より御注意があつて、自由行動をさつてもよいといふことになつた。我等は籠から降された鳥のやうに喜び勇んで、目の前を悠々と流れる荒川の邊りに行つた。

皆に残りの辨當や、玉子、或はお煎などを出して、楽しく愉快さうに食べながら、岩の上にもたがって、此の偉大な長瀬の自然美に見とれ

てゐる。私も岩の上に馬乗りになつて、古武士氣取りであたりの景色を見廻した。眼下には荒川の奔流が岩に激して、しぶきさなつて散り、下流へ下流へと流れてゐる。眼前には何十丈とも知れぬ断崖絶壁が雄然として、我等の心魄を塞むからしめるやうに、又歴史を語り顔のやうに、空高くそびえてゐる。其の上には、鬱鬱たる新緑が覆ましまいに五月の空に匂ひ茂つてゐる。下を見るとき、遊覧船が通つてゐる。「う二そう三そう……」たくさん通つてゐる。船上の客は、前の絶壁が恐ろしいためか、こはそな顔をして乗つてゐる。遙かの向の方には三峰山が雄姿を見せてゐる。又五月の鯉がはつちつと泳いでゐる。薄くぼかされた青空からオレンジ色の春光の中には、乙女の髪のような微風が甘い囁きのやうに往來する。實に長瀬の春はのどかがある。

此所は、多くの茶店がある。此の茶店のことで思つた。今まで奇勝の地として知られたのが世が進むにつれて、鐵道、家屋等が出來てくるさ、或は長瀬の自然美と釣合はなくなるのではなからうか！と。

こんなことを連想しながら時を過してゐた時

「集合」といふ先生の聲がした。夢からさめたやうに、立上つた僕は皆さしよに集合所に行つた。

長瀬が何時までも奇勝の地として、有名であるやうに新りながら。

秩父旅行記

一乙 柿原 宏平

五月十二日、僕は第五班に加はつて、秩父旅行に出かけた。午前七時五十八分熊谷發。石原を通過すると、もう一面に茂つた稲や桑で見える限り背々としてゐる。武川、永田を過ぎると、こんもりとした林がずつと續いてゐて中にちら／＼と山鳩が見える。小前田を越すと秩父の山々が遠く霞んで見え、右側の谷に小さな發電所がある。寄居を通ると、山々がはつきり見えて來た。山の頂にぼうつと霞んで見えるのは、霧だらうと思つてゐたら、友達が炭焼きの煙だぞと教へてくれた。波久禮で荒川に合つた。斷崖には様々な形をした岩が並び、砂の間を玉の様な美しい水が流れてゐる。奥へ行くと吊橋がかつてゐた。樋口で荒川の上流に又出會つた。前

よりも流が強い。黒谷、大野原を通つて秩父に着いた。驛が思つたより小さい。九時半豫定より後れて影森に着いた。驛を出て姑く進むと武甲山が見え出した。頂上は霧に被はれてゐて見分がつかぬが、實に雄大だ。近よつて見ると、石灰は採掘してゐる場所には赤はだで何となくいたましい様な氣もして來る。

「此の山は貴方達が登つて來た所から、此處までが五百米、これから上が八百米あります。横は百七十間もあつて全部石灰岩から成つてゐます。こちらを秩父セメントあちを淺野セメントが採掘してゐますが、一日に千噸づつ採掘して四千年かかるから殆ど無盡蔵と言つてよろしい程です。此の切岩機であの崖に條をつけてダイナマイトを入れて爆發させます。」説明者の聲に聞き入りながら、し／＼と此の斷崖を見つめた。

「ダイナマイトの爆發時間が迫つて危いから、早く降りて隣の山に移つて下さい。」とせかされ、僕は雨に洗はれてすべる道を、ふみしめ／＼麓に降りて來た。實に危い友さぶかつたり木にぶつかりたりしてやつと無事に麓へ着い

た。やれ／＼と思ふ間も無く又山に登る。暑い。汗だく／＼でやつと頂上について上着を脱ぐさすうと涼しい風が吹いてほつとした。まつこさしはし事務所の竿に赤旗が／＼と上つた。皆がわあ／＼と言つて總立ちになつた。然しなか／＼爆發し／＼さうもない。物事は急速に「早くやれ。皆が大きな聲で怒鳴つた。其の中に百雷のような響きと一語に、崖がぐわ／＼と崩れ落ちた。續いて二發三發、岩の落ちた所は白い煙が／＼と立ちこめてゐる。やがて山を下つて二十七番寺で休息し長瀬に向つた。

長瀬には色々な化石があるさうだ。電車から下りた許なのにもう賣つてゐる店が目についた。弟への土産に貝の化石を買ふ。岩を上つたり下りたりして川縁に來ると、向側は断崖絶壁、下は澄み切つた水が靜に流れてゐる。崖を廻つて遊覧船が一艘二艘こちらへ向つて來る。實に美しい景色だ。こゝで辨當を開く。齊藤先生が寫眞をさつて下さる。しばらくして寶登山に向つた。こゝの茶屋には定つて柿羊羹と栗羊羹を賣つてゐる。

さつき迄あれ程暑いであつた皆が、拜殿の前へ

参列すると静になつた。しいんとした境内には小鳥の鳴く音が聞える。参拜をすませる参拜客で自由行動を許された。家への土産に半匁と置物を買つて電車に乗った。途中で雨が降り出した。油紙を持つて来てよかつた。家へ歸つて土産を見せたら、上手に御金を使つたれ。」と母に賞められた。

修學旅行

一乙 堀口 忠

爽やかな緑の色、緑の空、今日。待ちに待つた今日がやつと訪れて来た。うれしくとつゞく秩父連山はもはや煙つてぼんやりしてゐる。今日は影森に遠足をするのだと思ふと胸がわくわくしてたまらない。何時にもなく長く驛に待つてゐてやつと電車が彼方の若葉の中から現はれて来た。間もなく電車はプラットホームに着いた、中はなか／＼にぎやかである、私は欣喜奮躍で電車に飛び乗つた、電車は警笛一聲懐かしき我が驛を出發した。「ガタンガタン。」といふ音は何か我等の心を浮きた、せる様な感じがする、鐵橋から見た荒川は何ともいへぬ勢好さ

を示してゐる。電車は若葉のトンネルの中には入つた。窓越しに觀た景色は只若葉の世界のみである、さ急に明るくなつた、窓越しに外を觀るに近頃完成したばかりの開墾地である、未開の山野を思ふまゝに切開いて設計した地である、うれしくとつゞく青葉がその苦心をこの一つの麥に表はしてゐる。廻り燈籠の様な景色を眺めてゐる内に大野原驛に着いた、附近は大分町らしくなつた。こゝを出發して間もなく秩父驛に着いた。まづ目に着いたのは秩父セメントの鐵筋コンクリートの建築物である、幾棟も／＼ある雄大な姿が天空にそびえて、三本の煙突からは盛に黒煙をはいてあたりの氣は薄黒くなつてゐる。次に目に着いたのは前に在る巒嵒とした神々しい森である、これは昔の知夫國造を祀つた國幣小社秩父神社である、その後の森には神木が天を支へる柱の様に立つてゐる、秩父を出發して山國の景色をうつとりして眺めてゐる内驛夫の「影森／＼。」といふ呼聲に幼い時父につれて來た事を想ひ出した。懐しさに氣を取られてゐるうちに友達の下車する音を聽いて目的地なるを想ひ出していそいで下車した。何處を觀ても懐しさがこみ上げてくる、前に悠然

三峰登山

じじやくとして天をついてゐる武甲山の横形も見なれぬ私には一層興味がわいて感いよ／＼深きをおぼへた。石灰岩探掘や長瀬赤壁等の参考を頭に秘めて我等は川畔を去つて長瀬の市を通つて參道へさしかゝつた。何處迄つゞくかと思ふ長い松並木の參道を我等一同は通つてゐた。見渡す限りもうせんを敷きつめた様に咲いてゐる、どんよりと曇つた空からは今にも雨が降りさうである。前の／＼もりした森の中から「ドンドン／＼。」といふ力のこもつた大の音が聞えて來る、寶登山神社はもう目前にせまつてゐる、折々鶴のかん高い鳴き聲がきこえてくる一の鳥居をくゞつて暫らく行くところには茶屋がたぐさんある「いらつしやい、よつてらつしやい。」にぎやかによんでゐる聲に聞き入りながら二の鳥居をくゞつた目の前の石段を上つて社前に立つた。あたりに静かな空氣がたゞよつてゐる、神々しさに自然と頭が下つた、前の動物舎からは鶴や、あひるのたはむれてゐる聲がきこえてくる、鉛色の空からはいつか雨が降つてきた。そして暫くして／＼をじした。

一丙 清水 英隆

前夜から山の地圖を開いて道案内を調べる、明日のコースを夢見ながら床に就いた。目を覺して見るさもう太陽は出て長い日和、僕達四人は元氣一ぱい晴れた朝に迎へられて出發した。寄居から秩父線電車窓外の景色は山の氣分で一ぱいだ。あの高い山に登つて、此所等も見下すことが出来るだらうか、その時には愉快でたまらないだらう。

荒川の流れを見るのは始めてではないが、今朝は又特別美しい、長瀬にも近づいた、都會人を招いて下車する人が大ぜいだ、僕等は尙此から山を目ざして奥へ奥へさ走つた。さあ山だ、三峰口へ到着した。

山の驛としては案外立派である、此も都會人の影響であらう、驛前の自動車に乗つて先程見えた様な白い橋を渡つた。

自動車より下りる大きな鳥居が有つて其所を過ぎると次第に下り荒川の本流と思はれる川に出る、其の川に朱塗で昔の繪のやうな感のす

る橋が有る。

其の道を行くと左に一丁目と書いてある石碑がある、その邊から杉の大木が並んでゐるので日影で、じめ／＼して居る、右は千俣の谷すす／＼流れるのも面白い。

朝は晴れて居たのに山は曇つてしまつた山の天氣は解らないものだ、蒸し暑い空氣がただよつて居る、草木も皆濕氣を帯びて緑色をしてゐる、春に返つたやうな感が何となくした。

曇が又晴れて太陽が照り出した、上着も脱いで又登る、そのうちにシャツが汗ばんで來るのを感じた。

杉の根を階段にして登つて行く茶店があるもう休みたいやうな氣がした。

登つたと思ふと少し下り坂になつて來た、前を見たと瀧が落ちて居る、僕はその美しい雄大さに感から走りよつた、先程の様な朱塗の橋を渡り瀧壺の所へ行つた、すると急に涼しくなつて、今迄の暑さは、何處へか飛んで終つた、一休したので元氣を回復し又上に向つた、何時の間にか石になつた山道は前よりも急のやうに感じた。

道の曲つた處で山道掃除をするお爺さんが箒

をかついで下つて來た處だつたキヤラメル函を捨てようと思つたが、すまない氣がした。

別荘の様な家の前を通り少し行くと、左に沙法嶽の青々として見える處に出た、其處を通り過ぎてまだ／＼石の上を全身を前にかけて歩いた。道は常に左右に曲りながら登るのである、僕達は太木の大木を切株に腰を下して東方を眺めながら山のうねりばかりで人家は殆ど見えない、もう／＼した道は乾いた、水蒸氣が白く登つて行く様に見える、休むと涼し過ぎるほどであるが歩き出すとすぐ暑くなつてしまふ。

それから又歩を上へ運ぶ最後は直直な坂になつて居る、赤い門が見えかゝつた、私は元氣百倍して坂を駆け上つた。

その瞬間つかれも忘れて思はず、萬歳を叫んだ。

旅行の一節

一丁 志村 忠夫

「ドドン」

と天地もさける様な爆發の音、僕等は其の爆發を今が今までまつてゐたので、思はずしらずに

大きな聲で

「うわー 萬歳」

と叫んでしまった。中にはふざけて「萬歳」
と叫んでゐるものもある。僕はダイナマイトで
爆発させるのは始めてであるので、たゞ茫然と
して自分の口から出た言葉さへなにを云つた
のかわからなかつた。

僕等の登つてゐる山は、武甲山の北の山であ
る。山の上の草は雨水に濡つて、生々してゐる
僕は其の生々した草を見て夢からさめた様な氣
がした。そばに突出てゐる岩に腰をかけて、休
まうとすると、又皆が大きな聲でさつきよりも
少しふざけた聲で

「わーわー」

と威嚇を上げた。そしてその聲のきれない中に
「ドドン」「ガガン」「ガン」

とひつきりなしに爆発する音が三發きこへた。
僕は又のぼせてしまつた。そして二回目の爆発
の時には聲を上げるのを忘れてしまつた。第三
回目の爆発は前よりも大きく

「ドドドドン」

となつた。その大きな音は僕等の耳に「ズン」と
響いた。皆が竝立になつた頃は、爆発した場所

から大小の石灰岩が地響を立て、下に落ちた。
石灰岩が下に落ちると同時に土や砂が二十メー
ルもまひ上つた。讀本にあつた凄々と言ふのを
事物で、しかも自分の此の目で見たのだ。僕は
今までの出来事を茫然としながらも手帳へ書取
つた。今日の旅行はご縁しく又さつぱりした旅
行はない。

ダイナマイトの威力

一丁 櫻井 郁治

我々一年生は影森驛で電車を捨て、影森村の
一部を通り抜け、セメント運搬線傳ひに武甲山
の麓に到着した。我々がセメントの原料たる石
灰岩の運搬に氣を取られて居る中に、先生方
は、石灰岩採掘の見學を交渉する爲に、事務所
の中に這入つて行かれた。高麗の事務所の中
で先生方が帽子を取つて、挨拶されて居るのが見
えた。暫らくして、先生方が出て來られて、夫
々一組宛主任の先生から色々の注意があつた。
初愈々登山だ、運搬機械の傍を通つて、登り始
めたが前日來の降雨の爲石灰岩の上に生えてゐ
るけが濡れてゐて、つる／＼滑るので、却々

骨である。色々機械を云ひ何んと云ひ唯々目
に入る物皆その規模の大きさに感歎する外はな
かつた。無言のまゝ暫く進むと、目前に絶壁が立
つて、其の上に小屋が在つて其處から太い鐵管
が出てゐて、物凄い音がして來た。それは其の
中を石灰岩の粉末が上から非常な勢で「落下」
してゐるのだ。我々は暫く茫然としてそれに見
されてゐた。そして不圖下の方に目を移すと其
處には小川のせ／＼が有り、傍の崖から清水
がこん／＼と湧き出てゐて、柄杓があつて、工
夫等が如何にも美味さうに飲んでゐた。驛で、

山の中腹まで來ると道は愈々上り坂になり我々
は息を「ハア／＼」はすませ乍ら、やつこの事ト
タン造りの大きな家のある處まで辿り着いた。
傍らには相繼ぎず運搬機械が「ガタ／＼」と音を
立てゐる。家の中を覗くと思ひもかけない六
疊敷位もあるかと思はれる大きなモーターが三
つ四つあつて「ガタ／＼」「ゴト／＼」と凄まじい
速度で廻轉してゐた。更に其處を通り過ぎて暫
らく行くと、大小様々の石塊が、一杯轉つてゐ
て、トロツコの線路が四方八方に引かれてゐる
平な地へ出た。そして我々の眼前には屏風のや
うに切立つた、何百尺もあるか分らない様な絶

壁が迫つてゐる。其處で方々を眺めてゐると、
間もなく採掘所の監督らしい人が軍隊用の靴に
グートルを巻き、烏打帽子をかぶつた人が片手
に登山のピッケルを持ち笠を被つた他の男
と一緒にやつて來た。そして地中にある鐵管の
所へ來て、管をつなげて、ネジをひねると、蒸
氣の様なのが「ヒュー／＼」と音を立てゝゐた
それは地中の壓搾空氣を出すのだと言ふこと
である。それからダイナマイトに依る爆破作業に
關して色々有益な話をして呉れた、話による

「ダイナマイトが三々目もあれば諸君の二百人
位は役に殺せる」と云ふのを聞いて、我々はダ
イナマイトの威力の強大さに唯々驚歎する外は
なかつた。併し其處は危險區域の爲少し離れた
向ひの山から見學する事にして、再び隣の山へ
登り始めた。けれども我々は既に可成り疲れて
ゐて、随分苦痛を覺へたが、それでも一刻も早
く爆発を見んものと、勇氣を揮ひ、草臥れた足
を引張り／＼漸くの思ひで山頂に達した。其處
で吻として我に歸り四周の小山を眼下に見下し
て、お辨當を食べながら休息してゐるさ一人の
工夫がやつて來た。皆が「まだ爆発しないのか
い？」と聞くと、あゝもう直ぐだよと云つた。

驛で展望臺の上に赤い旗が上つた。すると間も
なくバチ／＼と云ふ音がしたと思ふとそれ
に續いて「ドン／＼」と云ふ凄まじい爆音と共に
粉碎された石灰岩が落下し出した。それから五
六回も爆破作業が行はれたが、我々は面のあた
りにダイナマイトの爆破力の偉大さを見て驚異
の目を見張るばかりであつた。

修學旅行

一丁 堀口 彪

武甲山まわ、何といふ豪壯な姿で又武士らし
い名でせう。智仁勇三徳を持つたようなおちつ
きのある武甲山、そして大空にそそり立つてゐ
る姿はいまだに忘れられない。

私達が行つた時は、武甲山の廻りに薄もやが
かゝつてゐて一層高く見えた。

秩父の町の眞南にあり、海拔一三六六米の大
石灰岩山、これを掘りつくすには一日に千越づ
ゝ掘つても、四千年もかゝるさのこと、眞に秩
父の町の守り神であらう。この秩父町の守り神
である所の、武甲山を

私達中學一年生は見學しました。こゝ／＼と

山谷に響く音は、武甲山が日に／＼消滅される
音だらう。先づ見たのは石灰岩を貨物列車が運
ぶ様でありました。私は武甲山に來て二つの發
見をした。

一つはこんな山奥によく鐵道がひけたこと。

一つは武甲山の爆発を見て人間の知能の發達し
てゐることです。こんどは爆発の現場を見に行
きました。登る時傾が急でな／＼登れない。

こゝ／＼と機械の音がする間を私達ははつ／＼
と息をはき、胸おどらせながら登つて行つた。

登る時岡本君と登りつこの競走をしたがついに
私が勝つてしまつた。やう／＼のことで爆発の
所まで來た。驚いたのは前は一大絶壁でそのあ
たりは大きな石が猪が寝てゐるやうに横たはつ
てゐる。その間をトロツコの線路が四方八方に
通じてゐる。そこで技師の話があつて、爆発を
見るにはこゝではあふないから向ふの山で見て
下さいとのことで向ふの山に向つた。行く途中
あふない事もあつたが私達は心がおどつてゐる
ので平氣であつた。

やう／＼のこゝで山にたどりつき今か／＼と
爆発の方を見てゐた。すると赤い旗がする／＼
と空に上つて、少したつと天もくだける程の反

響がして爆発した。その時の壯観は筆にはつくされません。私達はたゞ感嘆の聲を上げるばかりでした。

旅行の一節

一丁 須賀 友市

影森驛で下車するさ、吾等二百名は、様々の空想に胸をおどらせながら、影森の町の中を通つて進む、暫くして線路傳ひに出る。線路をだん／＼沿うて進むと、武甲山の上から下へ送る石灰岩が、トタン板の上へ乗つて下りて来る。其の音がものすごい音を我等の耳に響かせて居る。僕は山の傾斜の急なこゝ、その音に先づ膽をつぶした。暫く行くとコンクリートの建物があつて、その下に電車が来て居て、石灰岩を入れて居た。其の際の山道を汗をたらしながらゆる／＼と登つて行く。右に曲り、左に折れたりして、段々登つて行く中に、もう／＼につかれてしまつて、一歩も歩けない程であつたやう／＼のこゝで爆発させる下へ来た。

七、八百尺もあらうと思はれる石灰の山、工夫の叫ぶ聲。機械のけげしい音。皆の驚歎の聲

それは／＼何んとも形容し難い光景である。武甲山の主任だと云ふ人が、いろ／＼と爲になるこゝを力説した。そして「これから爆発をお見せしますから、向ふのX山へ行つて下さい。こゝでは危険ですから。」と。

僕等は案内の人と一緒に山を降りる。ぐず／＼して居るさ死んでしまふさ、誰か驚かした。恐しさに大急で山を降りて、X山へ登つた。武甲山に秩父セメント會社と、浅野セメント會社と浅野セメント會社の探掘の跡が見える。案内の人に様々の質問をしながら爆発を待つ。

暫らくして、赤旗が、する／＼と一箇所へ上り、五、六分位たつた時に、亦もう一箇所上つて、サイレンの音が全山をこだまして響いた。工夫達は皆、山の頂に逃げて行く。二三分もたつた時だつたらう。轟然たる音響と同時に、さあつさ、砂の様なものが落ちて来る。蒙々たる白煙が山の一面を包んでしまふ。案内の人の話によれば、砂の様なものが、差渡し四、五尺もある石灰岩であるさ。續いて、／＼／＼三回破裂した。僕は心の中で萬歳を叫んだ。あのダイナマイトの威力、探掘しきるのに四千年もかゝるといふ武甲山。見るもの、聞くもの、

一つさして珍らしくないものはない。次の爆発を待つまでに、案内の人より詳しい話を伺つたやがて次の爆発も済んだ。

もう山を下りるのだ。僕「さようなら、いろ／＼と有難う御座いました。」と御禮をいって、山を下り始めた。僕は新しい智識を得た喜を、胸一杯に浮べながら、だん／＼影森驛へ近づいて行つた。

影森まで

一丁 原 壽一

五月十二日いよいよ我等の待ちに待つた旅行の日はおさすれた。

喜び勇んで床を出た、しき／＼と聽ゆる雨の音「ああ雨が僕は思はす一人つぶやいた。

それと同時に今までの喜も一時に消え失せ窓にもたれて雨を見つめた。

外を見ながら考へた「そうだ今にやむだらうさにかく用意しておこう」と……

服を着て居るさ小泉君が迎ひに来てくれたので「おう雨はまだ降つて居るか」ときき嬉しう事にも「もう雨は降つて居ない」と答へた。

支度も急いでしたので速く出来たので二人はつれ立ちて若葉の香一杯にはほふ細道を上熊谷驛へ向つた。

堤へ出た時は櫻のやはらかい葉の間より、淡い光が射込んで居た。

「今日は良い天気になるぞ」と言ふさ「どうだかなあ」と頼りない返事をした。

上熊谷驛の所のお宮まで来るさ甲組の小澤君と須賀君とがシートを巻いてゐた小學時代の友だちなので「おう」と聲をかけると二人も「おう」と答へた笑ひながら。

時が刻々ささるにつれて近所はともさばがしくなつた。

其のうちに先生方も來られたので僕は第一は人の人数を調べた。

何分かつてゐると電車が見えた。皆は一段とはしやいでゐる。

電車はプラットホームへ停車した、かれてより電車等の乗り降りには順序正しくするのだと先生より注意を受けてゐたが其の時は忘れてしまひ先を争ひ乗車したが後で先生の教へを守れば良かったさ後悔した。

石原附近に來た始終見てゐる所も美しく見え

た。幾つかの驛を通過し永田驛の手前にて畑の向ふの蘆薈根の下に紫色の藤花が咲いてゐた美しさは旅行の思い出の一つである。

林の中程を通る時などはあの若葉の萌え出たばかりの草木の間に點々山鷹が突亂れた様は言ふに言はれぬ光景である。

又面白く思つたのは、黒谷驛を出た田圃の中に棒の先に黒い物がぶら下つてゐた。横川君に聞いたら烏ださうだ。どうしてあんな事をするか「さき／＼それはしらない」と言ふ。

東側の窓に荒川の上流が見えた岩の下に白波がくだけちつてゐる音も聞ゆる様だ。

秩父驛へ止つた時先づ目に着いたのはセメント會社だつたコンクリートの煙突からも／＼と黒煙を吐いてゐた。

さすがにセメント會社だけに工場は皆セメントだつた。

電車はいつのまにか秩父を出た。僕は折々皆の饒舌に耳をかたむけてゐる間に影森に着いた。

修學旅行

一丁 今井 市仲

武甲山。嗚呼何さ云ふ勇しい名でしょう。一本も木のない、あの眞直に立つた絶壁、高々誇らしげに、聳えてゐる姿は、實に勇ましい限りです。此の勇しい、そして雄大な豪壯な、武甲山は、今我等が眼前に聳えてゐるではありませんか。白雲黒雲に包まれ掩はれ、高々と誇らしげに聳えてゐる武甲山。今我等が征服しようとしてゐるのだ。着々さ時計は進んで「いよいよ」登山だ。甲組、乙組の順に險しき爲傾斜を「ぎい／＼がらん／＼」との音に力づけら

れて登る。汗は水を流すが如く、エベレスト山の如き峻山だ。力つき果てんさす。しかし我等は其の様な弱虫ではなかつた。「二く」我は無我夢中である。汗はごうくと瀧の如く、山は断崖絶壁の如くである。やうくにして武甲山に登つた。

我等は汗だくくとなつてゐた。其處の人が言つたのたよるさ、中腹よりも百尺下つた所だつた。私は「參つた。」と心で思つた。其處で始めて、壓搾空氣の威力を知つた。其の人の話によると、武甲山のセメントの原料は尙、四千年も有るさ云ふことだつた。

今度は武甲山のダイナマイト崩しだ。我等は向ひの山に登つた。「鳴手腹が十二時だ。」と方々で聲がきこへて來た。するさ「おれなんか一時だ。」と云ふ茶目も居る。僕は朝飯を食べてこぬせいか、辨當とサイダー一本平らげた。赤旗が上つた。「もくく」と煙が上つたが早い、天地山河を震はせる萬雷の響。實に其の様痛快さ云はうか壯觀さはいうか。

かくして楽しい一日はすんだ。

長 瀬

影森の石灰山に登るさ、足が棒の如くつかれてた、其の上又長瀬へ降りて行く。二列は横隊で川をめぐり歩いて行く時である。友達が僕に話をしかけたが、僕は話も聞かされず無言で公園まで着いた。空は薄ぼんやりと日が今にも雲に隠れる様である。友達と共に、猿を見に行くと誰かからかつてゐた、するさ猿がおこり出し籠をゆすり暴れ出した、見て居た一同は大聲で「アハ、」と爆笑した。先生の聲が微かに僕等の耳元に響いた、僕は一齊に川の岸に集つた。

あたりの光景は何といつてよいかわからない位であつた。僕は一人心中で「お母さんは山や川が好きさおつしやつたが此所へつれて來たらどんなに喜ぶだらう」と思つた、こんな事を思ひながら凸凹した岩石の上をびく／＼しながら歩き、又小石を持つては川に投げ込んだ、其の時丁度上から小舟に乗つた女の人達が聲限りに何とかわめいてゐる。水は清し、景色もよし、向岸を見れば城壁の様な断崖絶壁であらう！何と壯麗な事だらう、埼玉縣にも長瀬といふ名に知れ

僕等の旅行

た所が在るのかと思ふさ何となく愉快であつた。其の中又三十分立つたさみえて先生が叫である僕も騒いで行かうと思つてもさすがの岩石なので仲々歩けない。

集ると同時に町中を歩く事になつた、先生はそこで僕等に注意した「これから町中を歩くから禮儀よく歩いて行け」と。其れから言ひつけを守りきちんと並んで行つた。

そこから東に向ひ寶登山に参拜したのである神社は躰躰祭で大した人である。境内に行つて孔雀を見た、真中の孔雀だが羽を翳げた時の壯觀も一入であつた。又傍に行くと國語に「鶴が鰯を食べました」とある様に、鶴が首を長くしてえさを見つけてゐる。其れから二列で神社に参拜した。神主は僕等の頭を被つてくれた、其の時頭を下げた其の神々しさは譬へようがなかつた。其の時不思議に汗が出てゐたのが急に引込で寒くなつてしまつた。其の儘長瀬の驛に着いた。どこかの團隊がさくら音頭のレコードをかけて賑かにおどつてゐた。

一丁 湯本 誠

五月十二日は待ちに待つた楽しい僕等の旅行でありました。朝四時二十分に床を出て身支度も忙しく、調へていると生憎雨が降つて來ました。僕は此れでは旅行は延びるだらうと、がっかりしてしまひました。其の内何時の間に止んだので喜んで居ると又驟雨がすこし降つて來た。僕は此の位な模様なら、旅行もきつと出來るだらうと思ひ、支度して家を出ました。途中で又降つて來たので行けるか行けぬかと、氣がもめてむさ／＼して、思はずすべつて自轉車から落ちてしまひました。行田の或自轉車を預けて歩いて驛に行きました。まだ時間があるの

で遊んでゐるさ、二年生が來た、一年生が來た時の立つに隨つて乗合の人達が多くなつた。其の中には小林、坂野、鈴木君などが居た。時間が來たので切符を買ひ電車に乗つた。間もなく熊谷驛に着いて下車した、櫻堤を通過つて鎌倉驛に行きました。七時三十分に入員検査をして七時四十七分發の秩父電鐵の秩父方面行に乗りこんだ、雨の爲に中止かと思つた旅行もさいはひに出かけられて、僕等一同の喜びは大へん

だつた。皆と愉快に話をしながら近づく山を見たり、變る景色をあかすながめた。此れが秩父山脈だと思ひながら見ると、山脚處から此處彼處に咲亂れて居る、此の邊林が多く僕等の忘れぬ寄居の驛に着いた。驛で野邊君と神田君が乗り込んだ、電車が荒川沿岸にだん／＼近よつて進みとう／＼絶壁の上を通りました。眼下に激しい流の荒川が石を呑み岩を呑んで吹雪を散らしてゐます。川が岩がと眺める中にだん／＼荒川と離れてしまひました。誰だか橋だ／＼と言つたので眺めると荒川の鐵橋を渡つて居るには驚きました。そこから向を見るさ武甲山が白雲に包まれ幽に見えてゐますので、近くに行くに隨つてはつきり見えるだらうと思つて居るさ、

だんだんさえて行くには驚きました。影森に行き一區米位行くと、武甲山の麓に着きます。だんだん探掘してゐる所へのぼつて行き、そこで壓搾空氣で岩に穴をほるのを見て、附近の山に登り、ダイナマイト爆發を見ました。その光景はまつたく豪壯で言語につくしがたく岩の破片がどつと飛び出たかと思ふ瞬間、萬雷のごとき爆音がします。此れを見るさ胸はどき／＼と足はすくむ程でした。驛に歸り、長瀬に行き断

編輯後記

◆本年度の本誌には、御親臨、奉送迎に關する記事、皇太子殿下御誕生奉祝記念事業の一としての車廻竣工に關する記事と、尙、三十年余本校に勤続せられて今春御勇退なすつた土岐照治先生の謝恩會記事と——その三つの特別記事が掲載された。今更こゝに述べるまでもなく、いづれも我等熊中生にとつて忘却することの出来ないことばかりで、その意味に於ても本誌は諸君の手もとに永久に保存されるだけの價值があると思ふ。

◆今秋初頭新京に於ける中學校長會議に御出席のため御渡瀨になつた校長先生の御旅行談が十月九日本校講堂に於てなされたのを、講演部委員諸君によつて速記されたものが「滿鮮北支視察旅行」であつて、校長先生に原稿のお目通しを煩はせたりして、出來得るかぎり完全を期したつもりであるが、しかし省畧された個所の多少あることについて校長先生並びに讀者諸君の御諒承をお願いしたい。尙會報部として速記者の川邊、高橋、青木三君のお骨折を感謝する次第である。

◆深い御造詣の一端も偲ばれる大和久先生の御寄稿に、啓發されることゝ多々あることは、いはずもがな、折にふれての數多いお口ずさびの

中から抜かれた佐藤先生の短歌、河住先生の俳句も本誌を飾るにふさはしく、こゝに改めて御寄稿下さつた三先生にお禮を申したい。

◆「帝美だより」の長谷川宏君は、一年生以外の諸君は知つてゐるはずだが、今春三月本校を卒業して帝國美術學校に入學した方——さうして會報部とは特に深いお馴染の仲だ。さういふのが、昨年度の「我等」の表紙の繪は同君に無理なお願ひなしてかいてもらったもの、それからまた諸君の記憶に新なるものがあると思ふが、同誌には凡そ本校の「我等」としては珍しく長い評論物「關西に於ける古典美術について」が同君によつて執筆されてゐる。さうして今回の「帝美だより」は「關西に於ける古典美術について」と併讀されることによつて、この先輩の保持してゐる最近の傾向が鮮明されることゝ信ずる。敢て諸君の熟讀をまつ所以である。尙卒業生諸君の「我等」への通信は部としてこの上なく嬉しいもので、その意味に於て、ぜひ「我等」を憶ひ出していただいて時には御寄稿を賜はりたい。

◆文藝欄で注目すべき現象は詩がふえたといふことである。特に三年生に多かつた。それから二年生の短歌にはなかに／＼すなほないものがあつたかと思ふ。尙五年生から短篇が二つ出た。これらの諸君の今後の活躍を期待してやまない。

◆野球部が今夏神宮球場で舉行された關東中

等學校野球大會に縣下を代表して出場した記念として、同球場で撮影した寫眞を口繪に載せたその他の口繪の寫眞についてはすでに解説する要もあるまい。ちなみに車廻の寫眞は例の横田先生の御撮影にかゝはるものである。

◆行事欄の記事は年々同じやうに見えて、しかもこれを熟讀するさ、そこにいひ知れぬ獨特のものが感ぜられるのである。それらの點十分御注意を願ひたい。

◆表紙は五年生の田中忠烈、布施督太郎、堀口明、長又利喜三の諸君が、大久保先生の御指導のもとに協力して描いてくれた。記念すべき車廻が採入れられてゐることは一見直ちに明白であらう。これらの諸君の盡力の程多大であつて、お禮の言葉もないくらゐである。

◆體裁に於て昨年度に比して特に違つてゐる點は、紙を厚いのに變へたことである。そのため、本誌は見違へる位部厚なものとなつた。

◆本年度の會報部委員は井上梅作、淺見利雄、上杉公男の三人である。(係)

昭和九年十二月二十日印刷 (非賣品)

昭和九年十二月二十三日發行

埼玉縣立熊谷中學校校友會

編輯部 熊谷市大字熊谷八十二番地

印刷部 熊谷市中村平三郎

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

印刷部 熊谷市三九六番地

禮類
豐和
12 曲
2 封
4 備
3 報
1 報
2 報
3 報
4 報
5 報
6 報
7 報
8 報
9 報
10 報
11 報
12 報
13 報
14 報
15 報
16 報
17 報
18 報
19 報
20 報
21 報
22 報
23 報
24 報
25 報
26 報
27 報
28 報
29 報
30 報
31 報
32 報
33 報
34 報
35 報
36 報
37 報
38 報
39 報
40 報
41 報
42 報
43 報
44 報
45 報
46 報
47 報
48 報
49 報
50 報
51 報
52 報
53 報
54 報
55 報
56 報
57 報
58 報
59 報
60 報
61 報
62 報
63 報
64 報
65 報
66 報
67 報
68 報
69 報
70 報
71 報
72 報
73 報
74 報
75 報
76 報
77 報
78 報
79 報
80 報
81 報
82 報
83 報
84 報
85 報
86 報
87 報
88 報
89 報
90 報
91 報
92 報
93 報
94 報
95 報
96 報
97 報
98 報
99 報
100 報

張家山

4-15-1944

埼玉県立図書館



3 1 0 4 1 5 1 3